観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話　（291）2488―9　振替東京3―3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話（231）1990　振替京都1－113

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目16-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

大衆能は8月14日

能楽協会名古屋支部主催

63年度演能日程

能楽協会名古屋支部主催による昭和六十三年度の演能日程、および内容は次のとおりである。なお薪能は、恒例の八月の第一土曜日である八月六日に挙行。大衆能は八月十四日（日）に行われる。

・熱田まつり奉納能
六月五日（日）宝生流能「忠度」観世流能「杜若」ほか狂言、舞囃子、仕舞

・名古屋薪能
八月六日（土）観世流能「経正」「紅葉狩」宝生流能「源氏供養」

・大衆能
八月十四日（日）能三番、狂言一番

・歳末助け合い義捐能
十二月四日（日）観世流能「海士」「籠太鼓」金剛流能「黒塚」宝生流能未定

なお今夏も七月末から八月十日まで名古屋城夏まつりが催されるので演能の申込みが受付けられる。

また愛知県芸術祭の公演は新城で開催される予定。

昭和62年度芸術祭賞「野村四郎の会」が受賞

文化庁芸術祭執行委員会（安達健二委員長）は、さる十二月一日総会を開催、昭和六十二年度の芸術賞を決め、文部大臣に推薦、能楽界からは「野村四郎の会」が受賞と決定した。

芸術祭参加は「演劇」「音楽」「舞踊」「演芸」の四部門、百三十件で、その中から二十六件が選ばれた。なお能楽界からは五公演が参加した。

「野村四郎の会」は、第七回公演「求塚」の成果による受賞で、受賞理由は「シテ野村四郎は、能・求塚の精神・技術両面にわたる高度の理解によって古典芸術の内面性を十分に表現、森茂好のワキ、観世元信の太鼓、関根祥六ほかの地謡をはじめ共演者も作品の世界に深くかわった優れた演技、演奏を示した」と述べられている。

授賞式は一月二十二日、国立教育会館で行われる。

能楽協会名古屋支部の謡初式

能楽協会名古屋支部は、一月三日午前十一時から恒例の新年謡初会を熱田神宮能楽殿で挙行、支部所属楽師約五十人が参集。内藤泰二支部長の発声で〝四海波〟を謡い、昭和六十三年の新春を祝った。

ひきつづいて楽屋で内藤支部長から、六十二年の支部演能の概要と協力を感謝するあいさつとともに熱田神宮能楽殿運営委員長の長谷晴男権宮司が六十二年度地域文化功労者として文部大臣賞を受賞されたことを報告。名古屋支部として祝意を表した。

長谷運営委員長から「今回の受賞は協会名古屋支部の方々のご支援の賜ものであり、今後とも精いっぱい能楽殿のことでお世話をする所存である」とお礼のあいさつが述べられた。

さらに旧ろう舞台の改修、洗面所の改築の報告、また今後見所のイスの改良などの課題が提起された。

支部新会員として、シテ方瀬戸三津子、大鼓方河村真之介の両氏の紹介、野村企画委員長から、昭和六十三年度主催の演能予定について報告。また特に名古屋市制百年を迎えてのプレ行事について説明があり、また〝大衆能〟の名称についても今後の検討課題として提案された。

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮能楽殿）

〔63年1月〕
15日（祝）名古屋清韻会能　（来場歓迎）
30日（土）青陽会定式能　（有料）
〔2月〕
7日（日）宝生会定式能　（有料）
11日（祝）花田清謡会　（来場歓迎）
14日（日）観世会定式能　（有料）
21日（日）九皐会定期能　（有料）
27日（土）壺泉会能　（有料）
28日（日）春鼓会　（来場歓迎）
〔3月〕
6日（日）大蔵狂言会　（来場歓迎）
21日（振休）正風会　（来場歓迎）
27日（日）壺泉会　（来場歓迎）
〔4月〕
3（日）名古屋梅猫会追善会　（有料）
10日（日）観世会定式能　（有料）
16日（土）青陽会定式能　（有料）
17日（日）邦陽会　（来場歓迎）
23日（土）初陽会　（来場歓迎）
24日（日）久田観正会　（有料）
29日（祭）幸友会春の会　（来場歓迎）
〔5月〕
3日（祝）豊水会　（来場歓迎）
5日（祝）巽会　（来場歓迎）
15日（日）やるまい会　（有料）
21日（土）観世九皐会　（有料）
22日（日）名古屋観衛会　（来場歓迎）
（演能変更の節はご了解下さい）

年　新　賀　謹

熱田神宮能楽殿運営委員会

委員長　熱田神宮権宮司　長谷晴男
委員　熱田神宮総務部長　岡地幸男
同　熱田神宮財務部長　竹内正憲
同　岡谷不動産株式会社取締役支配人　松井清
同　月見ケ丘開発株式会社社長　高橋半次郎
同　シテ方　観世流　殿島修二
同　太鼓方　観世流　鬼頭喜太郎
同　狂言方　和泉流　井上松次郎
同　ワキ方　高安流　西村欽也
同　シテ方　宝生流　内藤泰二
同　シテ方　観世流　梅田邦久
同　小鼓方　幸清流　福井啓次郎
同　笛方　藤田流　藤田六郎兵衛
同　大鼓方　大倉流　筧鉱一

演能案内

名古屋清韻会能

昭和六十三年一月十五日（祭）十時始
熱田神宮能楽殿

能組

楽謡

葛城　平岩昌子　高木あき子　地謡　岩田今枝　船橋浅野　松田鈴木　掉本尾中木　正子　芳澄　奈芳　美圭子　知子子子子子　柴田　坪内　御田牧　古井山　武野　青木山野　なみ子　孝子　紀代子　佐季子　と　照江　よ子子

仕舞

杜若　若キリ　藪寿津
玉之段　国立幸子
葵上　馬場英子
遊行柳　榊原富貴子
鉄輪　木村美津子　地謡　渡辺節子　佐藤アヤ子　殿島修二　近藤幸江子　高田みね子

弱法師　石黒操子　山田富美　地謡　毛利田岩田緒方　富田部　眼部野　阿部森　絹子　貞枝子　菊己子　扶陽子　林タマ子　島　志津　伊藤　吉田喜久子　広瀬春子　中垣文子　嘉子　こう　清子　水谷田　富田谷　（クリ・サシ・クセを省く）

連吟　平岩明　石崎博一　佐久間美親　北原良一郎　高田武雄　山田欣也　福間克彦　冨士道周明　浮員鋼一　伊藤晏義

阿漕

鉢木

能羽衣

玉鬘　鈴木原博明　増谷千夫　加藤和二郎　高橋宗司　小川昭　松野貞三　盾三

舞囃子

高砂　冨士道周明　笠鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
俊成忠度　奥村久枝　笠鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
野守　東美智子　笠鉱一　柳原冨司忠　助川竜一　森本重一
守部　賢子　西村欽也　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

和合之舞　殿島修二　大槻秀夫　地謡　伊藤敏子　鬼頭貴代子　御牧紀代　古井　殿島　佐季　博子　紀代子　後見

巻絹　小川記句子　笠鉱一　福井啓次郎　助川竜一　森本重一
小袖曽我　長島みつ子　吉田定男　後藤孝一郎　森本重一
富士太鼓　御牧紀代　吉田定男　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
百萬　伊藤敏子　吉田定男　後藤孝一郎　助川竜夫　森本重一

仕舞

田村　佐久間美親
笠之段　福間克彦
東北　古井佐季
鐘之段　高田みね子　地謡　殿島　水藤　赤松　斉藤　山本　修二　元三　信隆　正人　禎友
通小町　殿島潤里子
善知鳥　渡辺節子
難波　山田欣也　笠鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　森本重一
宮島　鬼頭貴代子　吉田定男　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
合掌留
野
松虫　桑原信夫　笠鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
藤戸　殿島博子　吉田定男　後藤孝一郎　森本重一
天鼓　池田忠三　笠鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
砧　佐藤アヤ子　吉田定男　福井啓次郎　森本重一

番外仕舞

梅　大槻秀夫
附祝言　地謡　山本　斉藤　泉　信隆　正人　赤松　泰孝　禎友
氷室　大槻文蔵

（終演　五時半頃の予定）

〔御来場歓迎〕

主催　名古屋清韻会
補導　大槻秀夫

春雅日記 ㊽

龍

えと文　二井栄逸

ものみな新たに清々しい。正月はすべてが新しくなる。

この世にあるものは、すべてが新しい生命を持ち、生まれかわるという古い信仰に基いて、生まれたこの考え方は、たしかに暮しの節目としてうけつがれている。

しかし、いま、ことに若い世代に正月ばなれの気配が色濃い。それは、正月の演出の方法や形象を、工業化時代、情報化時代の新しい演出と、コミュニケーションの方法の創出が必要ではないかと思う。

さて、今年のえとは辰。十二支中、唯一の想像上の動物である。

人間が生み出した産物の中で最も深遠性と象徴性に富むこの龍は、絵画、彫刻、工芸の分野で重要なテーマとしてつかわれてきた。

そして、強さと、幸せと、人々の憧憬を集めて龍はたしかに我々の生活の中に生きている。

龍の起源発想は色々ある。

上代の人々が雲の変化を見つめていて、何か異様な物体を想像してえがいたのが龍であったという説。

西欧のドラゴンが、その頭を獅子から駱駝に変え、たてがみらしきものを残し、羽がなくなった代りに、自由に天空をかける神通力を身につけ、西方の悪名をすててシルクロードを通り日本に入ってきたという説。

中国との交易が盛んであった時代に、中国人が持ちこんだという説。

龍にまつわる神話や伝説は世界各地に登場する。

海彦山彦として伝えられる兄弟の神話を題材としてつくられた能に「玉井」という脇能がある。木花開耶姫の息子の海幸彦と山幸彦の物語りである。弟の山幸彦が、ある時、兄の海幸彦にお互いの道具の交換を提案し、山幸彦は兄の釣針を借り海へゆくが、釣針をなくしてしまう。

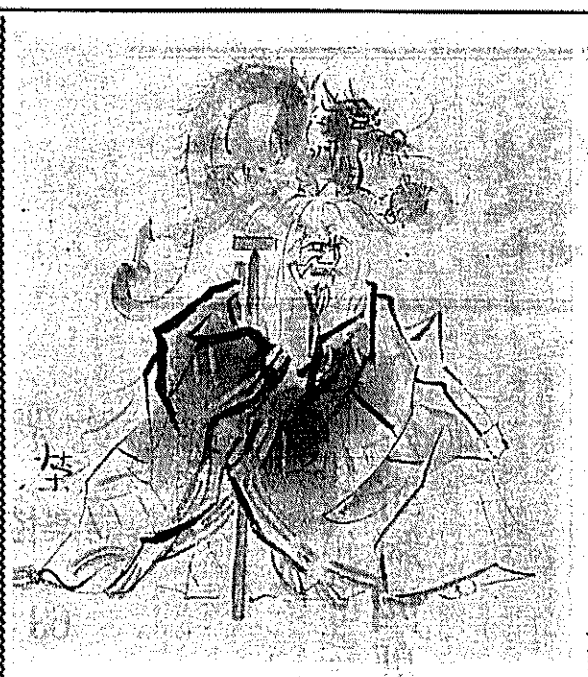
嘆いていた山幸彦は塩推の神の助けで、ワタツミの国の海神（龍神）の娘と結婚し、釣針を取り戻す。そして故郷に帰る時海神に二つの珠をもらう

帰った山幸彦は兄に戦を挑まれるが、珠のおかげで兄に勝つという話。

この海神（シテ）は、鼻瘤悪尉、袷狩衣、白頭、鹿杖を持ち、銀の大龍を頂き一種怪異の相をそなえて登場する。

大体、龍の姿は、角は鹿頭は駝、眼は鬼、鼻は獅子、うなじは蛇、爪は鷹、掌は虎、耳は牛に似る。その要領で新しい昭和の龍をかいてもらいたい。

（63・1・1　志摩にて）



能画入り詩画集「神々の庭（続）」

津市・丹羽征夫氏が出版

津市在住の能面作家・丹羽征夫氏は、このほど前回の詩集「神々の庭」につづいて、詩画集「神々の庭（続）」を自費出版した。

この詩画集には、能画家・二井栄逸氏の能面の挿画二十点が詩をいっそう引き立たせている。

詩は五十六年以来、同人の「三重詩人」に発表したものを中心に三十二篇。「秘夜」「旭野翁記（くまのさっき）」「風土記」の三部、能面解説と詩註がつけられている。

丹羽氏は、少年時代から詩を書き始め、四十五歳ごろから能面の世界に入り、能面の大家・長沢氏春氏に師事して修業。現在、作詩活動とともに津市内で能面教室を開いている。

詩画集は、B5判、百十頁、一冊二千五百円。送料三百円。申込みは津市大谷町三〇七、丹羽征夫方（電話〇五九二―二八―〇六〇五）または松阪市久保町一八八五―一、光出版印刷（電話〇五九八―二九―一二三四）

〔おことわり〕年賀広告の掲載つきましては紙面の都合上、掲載は順不同ですのでご理解賜りますようお願いいたします。

独能語　清らかな雪の世界

金剛流を代表する佳品

です。

雪女の説話は古くからあり、民話劇として芝居や人形にも扱われているようですが、能の

謹賀新年

名古屋観世会
観世元正
清和
芳宏
芳伸

社団法人鎮仙会
観世雅雪
観世鎮之丞
観世栄夫
観世暁夫

大槻清韻会
大槻秀夫
大槻文蔵
大阪市東区上町二番地

名古屋橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

洗心会　奥村富久子
〒605　京都市左京区永観堂西町二〇
電話〇五（七七一）〇七六七番

松和会　中村和男
各務原市那加桜町2丁目15番地
電話（〇五八三）㉜二七九四番

正風会　衣斐正宣

財団法人梅若研能会
橋香会　梅若万三郎

幽誣会　片山九郎右衛門

藤井久雄
徳三
楽人
完治
神戸市中央区熊内町二―一―二〇
電話（二二一）五一四四番

梅猶会
猶諷会　梅若盛義

山本観衛会　山本勝一
〒540　大阪市東区徳井町一丁目二〇
電話〇六（九四二）四〇七〇番

名古屋淡交会　橋岡慈観
稲沢市稲島町一ノ宮六瀬戸方
電話（〇五八七）㉜三二八八番

名古屋観世九皐会
観世喜之
有賀滋子
加藤保彦
青木武弘
高木美智子
吉田妙
高橋暸一
宮本正彦

鳳鳴会　武田志房

幽花会　片山慶次郎
〒603　京都市北区小山下花ノ木町二一
電話四九二―五三〇二番

武田誣楽会
武田小兵衛
武田欣司
武田邦弘

邦謡会　梅田邦久
須部甫
清沢一
今沢政
本田美和
熟
名古屋市昭和区台町二丁目十六―五
電話（〇五二）（八四一）四六三三番

井上嘉久
（〒603）京都市北区紫野下鳥田町六

財団法人鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太
〒248　鎌倉市長谷三―五―十三
電話（〇四六七）㉒五五五七

名古屋観生会
野村四郎
東京都杉並区永福四―三〇―一〇
電話（〇三）三二一―五一二九
名古屋稽古場
名古屋市千種区日和町四ノ一〇
小嶋方　電話七五一―一八八〇番

初陽会　武田宗和

大垣浦声会
稽古場　大垣市竹島町善念寺
住所　京都市左京区下鴨芝本町五八
浦田保利

山本眞賀
豊中市本町六丁目一〇―六

名古屋修諷会
梅若修一

能楽講座
能と狂言に親しむ会
梅田邦久
藤田六郎兵衛

観能独語

清らかな雪の世界
金剛流を代表する佳品

われわれ素人が「雪」と聞いて直ぐ思い出すのが地唄の「雪」。歌麿描くとでもいいたいような仇っぽい武原はんの舞姿です。能では「雪」といえば、「あゝ降ったる雪かな」の「鉢木」でしょう。この佐野源左衛門尉常世の感慨深き一言から始まる人情劇は、雪景色を背景にした四番目ものの傑作ですが、このほかに雪そのものを主人公にした「雪」という純三番目ものの佳品があります。金剛流にしかない珍しい一曲で、わずか三十分足らずの小品ですから、大曲とか名曲とか騒ぎ立てるほどのものではありませんが、雪をテーマにした能としては、この一曲にとどめをさします。小さいだけに、〝珠玉のような〟という形容がピタリと来るほどの魅力があります。

十二月六日の能楽協会名古屋支部主催の歳末助け合い協賛能に各流一曲、地元の代表選手が芸を競いましたが、その中で金剛流は牧野元子が出演、この「雪」を舞いました。他流の選手ほど知られてはいませんが、素直な舞いぶりに好感がもてました。この曲は小なりといえども流儀にとっては大切なお家の芸、他流試合や立合能でも金剛を代表して、いささかもヒケをとらぬ作品です。演者もその点を自覚してか一生懸命の力演でした。女流でありながら、女っ気のないところも気に入りました。

元来日本の芝居は雪が大好きです。「忠臣蔵」の討入りをはじめ、梅川忠兵衛の「新口村」三千歳直次郎の「入谷の朝顔」踊りでは「鷺娘」など数えあげればきりがありません。狂言でも「木六駄」が有名です。伝統芸能ばかりではありません。大衆演劇、現代劇でも終幕は雪が降らないと、幕がしまらないといった感さえあります。前衛演劇界の大もの蜷川幸雄が御園座の「近松心中物語」（再演）で舞台から観客席まで劇場いっぱい雪を降らせ、観衆のドギモを抜きました。こうなると、役者より雪が主役ということになりかねません。その蜷川の意図通り、雪を主人公にした能が「雪」です。

雪女の説話は古くからあり、民話劇として芝居や人形にも扱われているようですが、能の「雪」のシテは雪女ではありません。女の形を借りた雪の精です。無機的な雪そのものです。純粋無垢、一切の人間的俗臭を消し去り、語りもの的、歴史的文芸的などの背景は一切なし。源氏、伊勢、平家などの古典に拠りかかる一般の三番目ものとは全く違います。あっけないほどきれいなものです。小面、白の長絹を着たシテが序の舞（廻雪の舞）を舞うだけで「梢にかかるや雪の花は、また消え消えとぞなりにける」と、とけて消えてしまいます。その間三十分足らずで十分満足、それ以上ながびくと、能の純度、透明感がもちきれなくなるかも知れません。

当日は「雪」の前に喜多流「頼政」（長田隈）がありました。これはまさに名曲というに値する修羅物の大曲です。構合戦の豪快、絢爛たる語りと型に見所を魅了するところです。ただ敗軍の老将が自害する悲哀感が少かった。いずれにしても、妄執の固まりのような「頼政」のあとに「雪」を見て、心が洗われる思いがしました。

63年度 宝生会定式能 予定番組

昭和六十三年度の名古屋宝生会定式能は二月七日を初回として四回公演が行われる。

・第一回　二月七日（日）
番組④面掲載

・第二回　六月十九日（日）
鵜　佐藤　耕司
高野物狂　佐野　萌
葵上　宝生　英照
梓ノ出

・第三回　九月十八日（日）
饗老　稲川　寿一
三山　高橋　章
邯鄲　玉井　博祐

・第四回　十一月二十日（日）
橋井廉　衣斐　正宣
歌占　倉本　雅
三輪　辰巳　孝

毎回能のほか狂言、仕舞。
正会員（年間四回分）一万五千円。臨時会員（各回ごと）五千円。学生（各回ごと）二千円。

63年度 名古屋観世九皐会定例能会

・初回　二月二十一日（日）
午前十一時始番組④面掲載

・第二回　五月二十一日（土）
午後一時始
能頼政　政　観世喜之
素謡千手　小林　喜久
小島　芳雄
宵木　武弘

能羽衣　高木美智子
和合ノ舞

・第三回　七月三日（日）
午後一時始
素謡花筐　五木田三郎
五木田武計
ワキ　佐々木勝輝
能阿漕　観世喜之
中所　宜夫
能山姥　高橋　瞭一

・納会　九月十七日（土）
午後一時始
素謡半蔀　佐々木勝輝
高橋　瞭一
高木美智子
中所　宜夫
能小督　加藤　保彦
能遊行柳　観世喜之
青柳ノ舞
ほかに各回とも狂言、仕舞を予定。
会費全自由席一万六千円（四回分一名）

名古屋橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

竹翠会　若松宏守
〒662 西宮市平松町四—九
電話（〇七九八）二三—〇六〇一

誠交会　奥善助
東京都世田谷区三軒茶屋二—一〇—二二
電話（〇三）四二二—二六三七番

松音会
泉泰孝
東京都杉並区宮前四—一九—四
電話〇三（三三二）八二八〇番

下田雄三
大阪市東区高麗橋詰五三

雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会
一宮竹石諷会
岐阜花諷会
下呂雄諷会
萩原雄諷会
高山雄諷会
倭文之屋社中

毎日文化センター
謡曲教室
風韻会
殿島修二

一謡会　河村鉦二
叶石会　河村総一郎
河村大
名古屋市昭和区前山町一丁目二三　〒466
電話（七六一）四八八二

水雲会
水藤元三

洗心会　奥村富久子
〒606 京都市左京区永観堂西町二〇
電話〇七五（七七一）〇七六七番

春嘗会　梅若善高
豊中市新千里南町三丁目18—12
電話（〇六）八三一—七八五四

大西智久
〒560 豊中市北桜塚2—10—3

笙月会　中川雅章
長浜市地福寺町八ノ二九
電話（〇七四二）〇六三〇番

久田観正会
大倉流小鼓松月会　久田徹二
都諷会　前野舜一郎
松韶会　松山幸親
〒462 名古屋市北区東水切町四ノ四三
電話（〇五二）九八一—三六四三番

上田観正会能楽堂
社団法人　観正会
上田観正会
上田貴弘
上田拓司
神戸市長田区大塚町二丁目一ノ一四
電話（〇七八）六九一—五四四九番

芳韻会　稲生芳雄
半田市船入町三十一
電話〇五六九（21）〇八一五

加賀敏彦
名古屋市守山区森孝新田字乙98の44
電話（〇五二）（七七一）八九四五番

瑞恵会　熊沢恵美子
名古屋市名東区平和ケ丘3—76
日車マンション四〇四

中日文化センター
謡曲・仕舞教室　名古屋（栄）岐阜・四日市
翠謡会
生駒里翠
名古屋市名東区社ガ丘3ノ1503
電話（〇五二）七〇三—五七一七番

松和会　中村和男
各務原市那加桜町2丁目15番地
電話（〇五八三）（32）二七九四番

重陽会　菊池重郷
犬山市犬山字相生五九—一六
電話（〇五六八）（61）四五〇一番

緑名会　田中武
〒488 尾張旭市城山町三ツ池六一九八
電話（〇五六一五）（3）三三〇四番

幸謡会　近藤幸江
岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話（〇五六四）（24）二五二九

観修会　祖父江修一
多治見市日ノ出町2丁目
電話（〇五七二）（22）三六五六

清諷会　今村嘉勇
岩倉市東新町下境52—401
電話（〇五八七）（37）七二三八

宝生英雄
宝生英照

名古屋巽会
辰巳孝

内藤泰二
雙雲会（たいうんかい）

倉本雅
神戸市東灘区田中町一—13—26
本山アーバンライフ四〇一号
電話〇七八（四四一）五四六五番

正風会
衣斐正宜

衣斐正宜後援会
〒466 名古屋市昭和区御器所3—23—19
御器所パークマンション8.2号

〒460 名古屋市中村区名駅三—二六—二六
平松昌彦方
電話（〇五二）五八六—一一二〇番

宝生流
嘉宝会
鬼頭嘉男
名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

吉田俊彦

竹腰勝一

司宝会
佐藤耕司
名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田構住宅〒三一〇 電話（〇五二）七三七二

金剛巌
金剛永謹

廣田後援会
廣田陛一
廣田幸稔

菊扇会
後援会
廣田泰三
泰能

信玄袋

―竜と謡曲、六二年回顧―

室町時代に興った能楽謡曲が如何に江戸時代を通じて盛んに行われ、今日また如何に行われつつあるかは事新しく言うまでもない。さてその能楽謡曲が上下一般に行われた結果として、それが歌舞音曲の上に及ぼした影響は実に夥〈おびただ〉しい云々（園文学者・石田元季氏。「四の緒」〈大正四年九月号〉発表。同氏「劇・近世文学論考」に掲載。同著は能楽の研究発表〈主として名古屋〉多く貴重。名古屋在住。故人）。

むかし竜の絵を好ける人（注中国、葉公子高）には、真の竜顕われて姿見せるとぞ。好むに信あれば、物に感応ある事なきにあらず云々（横井也有・鶉衣・香木記）。

× × ×

新年おめでとうございます。

さて干支は辰（竜）、戊辰の年。明治から百二十年たつ。

竜を取り上げた文芸・絵画は何かと案ずるに、まず「西遊記」に登場する白馬即竜が想い浮かぶ。三蔵法師を背に長旅の使命を果し、霊鷲山・雷音寺（仏の在所）の大門の柱に居を構え、仏法を守護する美しく荘厳な光景である。次は「華厳縁起絵巻」の海上の竜である。明恵上人につながる。能では春日竜神・竜虎など。竜神がツレに出る曲はどの位（現行）あろうか。

「下界の竜神あらわれたり」（竹生島）。春日竜神は「すわ八大竜王よ（中略）仏の会座に出来して御法を聴聞する」以下鮮烈・鮮麗な文章また舞台、「所は春日野の／月の三笠の雲に上り」「竜女は南方に飛び去り／竜神は云々」とある。張良は「今より後は守護神となるべし」と。

皆様は正月どの曲の一と節をお謡いになったでしょうか。

× × ×

六二年回顧。

名古屋はここ数年前と少し変った様子であることに気付かれるでしょう。古典と普及と新運動と。「能・狂言に親しむ会」のほか新運動には「若き能楽師・狂言師の会」、「能舞台を使う広い新企画」（筆者名付く）など。後者にはモダンダンス（上演すみ）・小演劇・落語にも誘いがかけられている。新展開か分派か分明でない。ただ脚下照顧の四字を望したい。企画者もよい相談相手を持っているでしょうが。

他方、主体の〈熱田〉の演能は、女性能は活き活き、学生能続けられ、祝賀・追善能も多かった。なかでも福井五郎氏追善能（小鼓方幸清流）は大能、数名来演の東京勢（近藤乾之助・砧、一調一管江口は謡大坪十喜雄・笛藤田六郎兵衛・小福井良久ほか）がいつもの宝生流とちがう精彩を放つ。また金春・金剛・喜多三流の能が名古屋の能を実に豊かにし、そして下掛り三流の特色を昨年はたっぷり味わせてくれた。受賞もあり。

それに伊勢・岐阜はじめ東海三県の演能行事も忘れてはなるまい。

あわせて鬼頭八郎・柴田初太郎両氏の他界は名古屋能界の変り目をつくづくと感じさせた。

× × ×

能は葵上・花筐（観世元正）・大江山（同元昭）・清経（同清和）・国栖（同鎮之丞）・西行桜・天鼓（同喜之）・松風（片山九郎右衛門）・善知鳥（同慶次郎）・羽衣（野村四郎）・一調山姥（謡宝生英雄・太鼓郎諸氏）たびたび。（野村広一）世元信）・花筐（金春晃実）・一角仙人（本田光洋）・葵上（金剛永謹）・清経（喜多六平太）と来演の一番・二番が佳演であるのも得難い。

狂言は大江山（元昭）のアイ（茂山千五郎・正義）。茂山正義・真吾・あきら三氏の活躍目ざましく、月見座頭（茂山忠三郎）は満喫の舞台。和泉元秀氏は稀曲二番（角水聟・鬼丸）に挑戦。

× × ×

名古屋勢は道成寺（長田驍、三十年も遠い喜多流同曲の上演）、大原御幸の法皇（内藤泰二）。実盛（梅田邦久）と巻絹（久田徹二）のよい評判は聞いた。狂言は雁礫・簸屑（井上松次郎）。松次郎氏と野村又三郎氏の絶ない二番の比較おもしろく、入間川・萩大名（又）・二千石（井上礼之助）も秀。

みられなかった数番は許されたい。

× × ×

放送（NHK）は、船弁慶（元昭、照明は適当でない）・松風（関根祥六）・葵上（桜間道雄、再）・竹生島（金剛巌、いずれもテレビ能）の四番が佳。謡曲は桧垣（友枝喜久夫、ほかに一調砧進帳あり）。

× × ×

東西の一端は三宇亜氏追善能（信玄袋六一・九月号関連）・善竹弥五郎氏追善狂言会・老女物（観世鉄之丞〈二回〉・大坪十喜雄・桜間金太郎〈月日未詳〉・田村信一郎〈剛〉・片山慶次郎）。（野村広一）

63年1月・2月放送予定

〔1月〕　NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
17日（日）宝生流「海人」大坪十喜雄
24日（日）観世流「求塚」片山九郎右衛門
31日（日）金剛流「田村」「鞍馬天狗」豊嶋謙三

◆NHK教育テレビ（午前9時～10時）
1月15日（祝）狂言「彦市ばなし」（作・木下順二）茂山千之丞、茂山千五郎、山本東次郎

〔2月〕　NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
7日（日）観世流「安宅」観世鉄之丞
14日（日）観世流「絵馬」「花月」藤波重和
21日（日）宝生流「定家」松本恵雄
28日（日）喜多流「鉢木」栗谷菊生

〔テレビ〕2月11日（祝）午前9時　教育テレビ
一調「勧進帳」友枝喜久夫、安福建雄
一管「獅子」藤田大五郎
能「二人静」（再）観世流　梅若恭行
（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

◆極月の舞台から◆

「第19回歳末助け合い運動協賛能」

去し、ワキとの掛合から初同の、へ地に落ち身は消えて、と立って塚を出ると、舞クセから序ノ舞。音無く踏む拍子は雪中の心得。[illegible]

謹賀新年

豊嶋能の会
豊嶋春の会
豊嶋三千春

金剛流景雲会
国際能楽研究会（I・N・I）
インターナショナル能インスティテュート
（日本・カナダ・アメリカ・ニュージーランド・ドイツ・フランス・台湾）
新居能面の会
宇高通成後援会
宇高通成
〒606 京都市左京区高野泉町四〇
TEL(075)七〇一―〇七九三
名古屋事務所　前嶋英安方
TEL(052)八五二―二三二四

金剛流
松野恭憲
松野洋樹
〒616 京都市右京区鳴滝泉殿町一八―三
TEL(075)(四六二)二一四八番

金剛流
周星会・名古屋
周星会・岐阜
吉川周子
名古屋市千種区西崎町三―六
電話(052)七六一―二二五七

金春信高
金春安明
〒167 東京都杉並区南荻窪3―17―16
電話〇三(三三一)二五七一番

金春欣三
東京都杉並区成田東四丁目35―20
電話〇三(三一一五)七三八二番

本才
田光洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三(三八六)二六四一番

喜多流　山本才
名古屋市千種区北千種3―3―10
千種東住宅30号
電話〇五二―七一二―一五七四番

森田光春
京都市東山区八坂上町三七六

谷口正喜

大蔵会
大蔵狂言会
大蔵彌太郎

栄能楽舞台

春敲会
金春晃実
廣瀬瑞弘
〒467 名古屋市瑞穂区東栄町三―二四
電話〇五二―八四一―四七四五

名古屋金春会
林鉄郎
近藤修彦
渡部道三

伊勢金春会
中村富次
伊勢市宮町一―一四―一七
電話(0596)(23)二四五六番

社団法人能楽協会理事長
喜多流十六世宗家
喜多六平太

大阪喜多会
和調会
和島富太郎
〒665 宝塚市宝梅一丁目12―1
電(0797)(71)八六三〇

二井栄逸
松阪市殿町1412の3
電(0598)二三―〇二一六

長田驍後援会
〒514-22 津市高野尾町三三五―四六
電話(059)(36)〇六九七番

高安会
西村欽也
高安勝久
飯富雅介
杉江元

福王茂十郎
〒662 西宮市名次町六番十二号
電話(0798)(73)〇七七二

宝生閑
欣哉
〒176 東京都練馬区小竹町一―五〇―五
電話 〇三(九七二)七二三〇
〇三(九五五)四七九五

瞳好会
森茂好
森常好
〒151 東京都渋谷区代々木四―三八―二
電話(〇三)370―4609

京都・高安流
岡次郎右衛門
向日市上植野町地田一ノ五四
電話(075)九三四―二四〇六

豊嶋十郎
〒271 松戸市下矢切五五―五
電話(〇四七三)(62)一九八二

谷田宗二朗
〒603 京都市北区衣笠街道町31―7
電話(075)(491)[illegible]

高安流岡同門会
清水康利
高坂晴宣
森本蔵弘
北田三郎
塩野耕三
村山湖舟
中川久弘
伊藤利蔵
清水雅信
谷口昭三

九州高安流同人会
飯富徹
飯富良人
大山要二郎
山崎悛輔
横田富生

龍吟会
藤田六郎兵衛
名古屋市西区幅下二丁目一〇番九号
電話(〇五二)五七一―五七六三

寛三男
森本重一

◆極月の舞台から◆
「第19回歳末助け合い運動協賛能」

竹尾邦太郎

「巻絹」　シテ敏二。緋大口に白水衣、面は黒っぽい十寸髪で鄙びた風情があり、神楽で左右に腰を振るところなどは細女（うづめ）の岩戸の舞を思い出させて古風なエロティシズムがあった。幣を扇に替えて急ノ舞を舞上げ、へ神がかりするこそと再び扇を幣に替えると心気益々昂進してキリまで、その憑依の様相狂おしく、それだけにワキに対面して、へ神は上らせ、と大きく幣を後ろに投げ捨てた後の、憑き物が落ちた空白感のようなものが感じられた。ツレ瞬一。梅の香を（鼻うごめかして）嗅ぎすぎたのではなかろうか。ワキ元。ツレを咎める語気にも自信を感じさせ成長著しい。なお、シテが縄を解き、ワキに向ってひょ・い・、という感じで捨てたが、何かワキを小馬鹿にしたようで不審。地謡はふらつき落着かなかった。（1時間4分）

「二人大名」　シテ大名甲を信行、乙は高義。緊張した好舞台だった。真剣な鶏の蹴合いに思いがけない見せ物を見せつけられた、といった通行人礼之助の吃驚したような眼差しが利き更に興をそそられて身ぐるみ剝ぐと、起き上り小法師の真似をさせる辺りも円転滑脱。都に上る二人連れの大名が、都に流行る遊女（起き上り小法師の転ぶに掛けた）との逢瀬を思って次第に無心に興じ出すところもむしろ微笑ましく、立場で逆転しつ、ワキとの掛合から初同の、へ地に落ち身は消えて、と立って塚を出ると、舞クセから序ノ舞。音無く踏む拍子は雪中の心得。正先近くで袖を被くところがあったがふわりとゆかず、さらっとした軽い雪ではなく、湿った重い雪の感じがした。切地の終りに再び塚に入り、下居の後に直ぐ立つとワキ止向いて詰め、囃子の残り留。（45分）

「名取川」　得度したばかりの僧がその僧名を忘れぬように歌謡に托して帰郷するという。我々の日常茶飯にも、ふと意識を外らされた時に、工夫を凝らして覚えていた事を忘れてしまうあれである。しかしあまり事に拘泥すると却って不安になるその心理状態を、シテ友彦は細心に演じたが、曲名が先にあって後からストーリーを仕立て上げた節のあるこの曲、熱演ではあったが一筋縄ではゆかず、もう一つピンとこなかった。アドは松次郎。（29分）

「是界」　自省述懐のクセを抜き、迷妄を掘り切り一気にロンギになるため、急き込み武者震いする様がシテ正宜・ツレ耕司によく見えた。ワキ欽也、紫の水衣の気品。

後シテは一ノ松で一旦停るがそのまま常座で名宜った。イロエ（立廻）はゆっくりと正先から一ノ松に抜け、羽団扇カザシ勾欄に寄って下界を眺め、更に高くカザシてワキを見込むと右手に持ち替え、サシて亦ずかりずかりと常座に戻って拍子二つ左袖巻いて中正輿を見てまた二つ踏み、袖を払うと急調でワキに迫って轍に取りつき、ワキは数珠でその手を叩いた。無言の闘争の充実した力が素晴しい。働キはさしたること無く、シテは切地、へ飛行の翅も、と跳び上りざま安座して直ぐ立つと二ノ松に往き、へまた飛び来り、と再びワキに急迫するが威光に畏れ、左袖巻いて平伏し、立ってずんずん幕に向かうと三ノ松で一つ踏み、小さく廻って二つ踏んでトメた。技のキレの小気味よい、堂々としたというよりむしろ軽快な天狗だった。（1時間4分・12月6日）

三宅襄氏をしのぶ
23回忌追善会

昭和初期から三十年代まで能楽界に大きな足跡を遺した能楽研究家・三宅襄氏の二十三回忌追善会が旧ろう十五日、東京・宝生能楽堂で、能「経政・烏手」（シテ友枝喜久夫）半能「海人・八講」（シテ金剛巌）狂言「柑子」（大蔵弥太郎、茂山千五郎）仕舞など、各流宗家はじめ多彩な出演で催された。

三宅氏は明治三十年生まれ、能楽機関誌「謡曲界」の編集、朝日新聞、報知、新愛知などの能評を執筆、能楽協会の設立に貢献、後進の養成に尽力、能界の復興、発展に尽くした功績で昭和三十六年紫綬褒章受章、四十年十二月四日逝去された。

主な編著作に「能楽謡曲芸談集」「能楽全書改訂改修」「能楽入門」「能の演出研究」「能」「能グラフ」などがある。

森田光春　京都市東山区八坂上町三七六

幸圓次郎　〒164 東京都中野区中央四—四七—一一 電話（三八一）九四一三番

幸義太郎　〒116 東京都中野区丸山二—二四 都営丸山アパート一号三二〇号 電話（三三七）五六七二番

野中正和　〒174 東京都板橋区宮本町五七—一 第一宮本寮 電話（五五八）八四二七番

幸友会
福井啓次郎
福井良久
福井良治
柳原冨司忠

飯島佐之六　〒920 金沢市香林坊2—8—8

桂会
後藤孝一郎

瀬尾乃武　〒171 東京都豊島区西池袋1—30—10—305

大倉正之助　〒161 東京都新宿区下落合二—一四—一五ノC

大倉源次郎　〒564 大阪府吹田市江坂町五—一七—二

谷口正喜　京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

亀井俊一
忠雄
保雄
実

覚鉱一

吉田定男

前川光隆
前川光長

名古屋稽古場　京都市右京区御室芝橋町一の六 名古屋市東区葵一—25—1 ニッシンビル六階六〇二号室 電話九三五—一〇一〇番

助川竜夫

名古屋和泉会
大垣狂言の会
和泉元秀

名古屋和泉会
狂言共同社

大蔵会
大蔵狂言会
大蔵彌太郎
基嗣
基義　〒215 川崎市麻生区岡上四三八—一 電話〇四四（九八七）一一八七番

茂山千五郎
茂山正義
茂山真吾
茂山千三郎　京都市上京区中筋通り石薬師上ル

茂山忠三郎　〒606 京都市左京区北白川大堂町47—1 電話〇七五（七〇一）二〇一一番

狂言やるまい会
野村又三郎　〒460 名古屋市中区正木二丁目16—25 電話（三三一）七五五三番

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎　丸栄スカイル10階

演能写真
ウシマド写真工房　〒602 京都市上京区北野上七軒 電話〇三（四六二）一三四一番

ビデオ撮影
西川企画　名古屋営業所 名古屋市西区名駅2—20—3 輪の内荘 小椋方 電話（〇五二）五七一—五八一六　〒500 岐阜市北野町20—2 電話〇五八二㊸九八六九番

栄能楽舞台　名古屋市中区栄五—四—一二 電話（二六二）一一八三番

楽諷庵舞台
加納保一　名古屋市昭和区滝川町四七—八三 電話（八三二）七〇〇一番

葵心庵舞台　尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二 若杉ビル（旭市役所南） 電話〇五六一五⑨二三四六番 能舞台 電話〇五六一五④〇六九八

彰諷閣舞台　名古屋市天白区植田西二—八〇二—二 電話（〇五二）八〇五—三三〇一 連絡先 名古屋市緑区鳴海町有松裏40—9 電話（〇五二）六二一—四二三八

能楽の友社
同人一同

礼	欠	賀	年
観世元昭	泉嘉夫	佐野由於	長世会 鬼頭喜太郎

青陽会定式能（第132期 第1回）

昭和六十三年一月三十日（土）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能　組

仕舞
難波　加賀敏彦
胡蝶　玉木孝男　地謡　今沢美和　前野郁子　近藤幸江　生駒里翠

能
清沢一政　小島一英　飯富雅介　杉江元　高安勝久　河村真之介　柳原冨司忠

間
佐藤友彦

後見
今沢美和　中川雅章　地謡　生駒里翠　前野郁子　玉木孝男　今村嘉勇　須部瞭一　梅田邦久　加賀敏彦

仕舞
高砂　今沢美和
二人静　近藤幸江　前野郁子　地謡　今村嘉勇　須部瞭一　祖父江修一　高橋保彦
車僧　生駒里翠

能
久田徹二　高安勝久　飯富雅介　後藤孝一郎　鬼頭英二　池田希世茂

間
井上松次郎

後見
前野郁子　梅田邦久　地謡　玉木孝男　近藤幸江　馬場信至　高橋一雅　須部瞭一　松山幸親　中川清沢　市政

狂言
井上礼之助　佐藤友彦

仕舞
因幡堂　井上礼之助　佐藤友彦

能
老松　梅田邦久　中川雅章　地謡　本田勲　小島一英　久田徹二　加藤保彦

附祝言
主催　青陽会
事務所　名古屋市熱田区神宮一―一―一
熱田神宮能楽殿内
電話〇五二―六八二―一七五一番

名古屋宝生会定式能（第132期 第1回）

昭和六十三年二月七日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

番組

能
加茂物狂　竹内澄子　飯富雅介　後藤孝一郎　河村総一郎　森本重一

後見
内藤泰二　辰巳孝　地謡　小柳寿　西村梅子　前田瀬　山本幸子　倉本郁子　玉井博枝　葛原正　足立岬　戸田知子　佐藤衣　辰巳斐　正宣　喜孝男

仕舞
嵐山　稲川寿一
羽衣　吉田俊彦　地謡　佐藤衣　辰巳斐　正宣　喜孝男
網ノ段　馬場富四夫

狂言
大平十喜雄
大和舞　西村杉江　高安勝久　吉田定男　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛

間
井上松次郎

後見
竹内澄子　倉本雅　地謡　高田真六治　加賀山憲　松尾純造　竹中登　佐藤耕司　馬場富四夫　鬼頭巳　嘉孝男

狂言
柑子　佐藤友彦　井上礼之助

間
大野弘之

後見
玉井博枝　戸田和　地謡　平子　榎並　門原　稲美　文男　関口精吾　馬場富四夫　辰巳　利光　稲川寿一　衣斐孝　正宣

附祝言
主催　名古屋宝生会
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤方　電話八三二―三四四九

花田清謳会大会

二月十一日（祝）午前九時始
熱田神宮能楽殿

番外連吟　鉢木　上田照子　花田清造
仕舞　高砂　辻岡勝洋
東北　砂　水谷共宏
放下僧　小歌　山路敬一郎

名古屋観世会定式能

二月十四日（日）十二時始
熱田神宮能楽殿

能組

能
前ツレ　小島一英
天女　梅田邦久
龍神　武田邦弘
観世元昭

社　飯富雅介　西村欽也　杉江元　笠鉱一　大倉源次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛

大仏供養　子方　木平ひさ子　立衆　林いそ子　ツレ　宮崎いさ子　落合茂　石橋恵子

熊野　ツレ　大津澄子　田中光子　藤田清博　森りき

小督　ツレ　桜井さかえ　林登志子　川原林蓮　山本義治

仕舞
経清　正キリ　石橋恵子　経クセ　佐野最子　松風　林いそ子　菊慈童　宮崎いさ子

素謡
巴　川辺まさ子　水谷共宏

半蔀　野崎孝子　杉山伸子

玄象　師長　今村つや子　姫　阿竹登代子　長谷川邦彦　阿竹辰夫

能
羽衣　川村ちえ子　西村欽也　河村大　柳原冨司忠　鬼頭好信　鹿取希世

素謡
弱法師　桑原寿子　伊藤勇

舞囃子
芦刈　奥田ちえ　河村大　柳原冨司忠　森本重一

胡蝶　楠井みつ子　河村真之介　後藤孝一郎　鬼頭好信　森本重一

海士　小林良子　河村大　柳原冨司忠　鬼頭好信　森本重一

五段　ツレ　佐野最子　トモ　松山栄　辻岡勝洋　山路敬一郎

素謡
景清　川馬場礼子　河村真之介　後藤孝一郎　森本重一

舞囃子
桜融　一見敏子　河村真之介　後藤孝一郎　鬼頭好信　鹿取希世

五段

仕舞
女采　小牧大助　上野典子　大塚幸二

番外舞囃子
鶴亀　花田清造　河村真之介　後藤孝一郎　鬼頭好信　鹿取希世

（終了予定　午後五時半頃）

〔御来場歓迎〕
主催　花田清謳会　花田清造

名古屋観世会定期能（初会）

二月廿一日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

番組

能
文蔵　佐藤友彦

後見
井上裕久　杉浦元三郎　地謡　松山幸親　本田勲　須部徳三　加賀甫四郎　敏野　藤井完治

狂言
野村又三郎　野村信行

後見
井上礼之助

仕舞
箙　杉浦元三郎
采女　女キリ　片山九郎右衛門　地謡　今村嘉勇　井上裕久　中藤完治　野村四郎　藤井雅章
春日龍神　野村四郎

能
観世元正

女　福王茂十郎　山本清　垣田重喜　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

間
井上松次郎　大野弘之

後見
小島一英　藤井徳三　地謡　清沢一政　高橋瞭一　祖父江修一　武田邦弘　杉浦元三郎　片山九郎右衛門　中川雅章　梅田邦久

（終了　五時頃）

附祝言
主催　名古屋観世会

名古屋観世九皐会定期能（初会）

二月廿一日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

素謡
田村　青木武弘　加藤保彦

能
弱法師　駒瀬直也　飯富雅介　吉田定男　後藤孝一郎　森本重一

間
井上礼之助

狂言

素袍落　井上松次郎　佐藤友彦　大野弘之

舞囃子
葛城　吉田妙　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭好信　森本重一

大和舞

能
熊野　中所宜夫　観世寿之　西村欽也　杉江元　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

読経ノ伝　村雨留

附祝言
主催事務所　名古屋観世九皐会
名古屋市南区元塩町一―一―一七（加藤保彦方）
TEL　〇五二（六一一）三六五九

観世流の能として二百年ぶりに復曲された「三山」（みつやま）が今夏六月二十二日（水）熱田神宮能楽殿で初めて上演される。

夫両氏による解説が行われる。〔昼の部〕午後一時半開演
解説・観世栄夫
能「三山」シテ観世鎮之丞、ツ

鼓・大倉源次郎、大鼓・河村大
後見・武田欣司、青木道喜
地謡・梅田邦久、橋本雅夫、橋本職道、片山清司、河村和重、祖

入場料三千五百円（全自由席）
市内各プレイガイドにて発売。
お問い合わせは、名古屋市西区幅下二―一〇―九、藤田六郎兵衛

壺泉会能
二月二十七日（土）午後二時始
熱田神宮能楽殿

エンゲージリング
山田宝石
貴金属・時計・装飾品
名古屋・本山駅
電 762—2434代表

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋 0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

◈演能カレンダー◈

（熱田神宮能楽殿）

〔2月〕
14日（日）観世会定式能（有料）
21日（日）九皐会定期能（有料）
27日（土）壺泉会能（有料）
28日（日）春蔵会（来場歓迎）
〔3月〕
6日（日）大蔵狂言会（来場歓迎）
21日（振休）正風会（来場歓迎）
27日（日）壺泉会大会（来場歓迎）
〔4月〕
3日（日）名古屋梅雅会追善会（有料）
10日（日）観世会定式能（有料）
16日（土）青陽会定式能（有料）
17日（日）邦陽会（来場歓迎）
23日（土）初陽会（来場歓迎）
24日（日）久田観正会（来場歓迎）
29日（祭）幸友会春の会（来場歓迎）
〔5月〕
3日（祝）豊水会（来場歓迎）
4日（休）朔瑞会（来場歓迎）
5日（祝）巽会（来場歓迎）
7日（土）長生会追善能（有料）
15日（日）やるまい会（有料）
21日（土）観世九皐会（有料）
22日（日）名古屋観衛会（来場歓迎）
29日（日）清鎮会能（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

62年度名古屋市芸術賞
宝生流 内藤泰二氏
芸術特賞を受賞

名古屋市は一月二十八日、昭和六十二年度の市芸術賞の受賞者を発表、芸術特賞に能楽師・内藤泰二氏（七〇）＝宝生流シテ方＝と演劇家・若尾正也氏（七三）が選ばれた。

また奨励賞には戯曲作家・北村想、声楽家・菅沼綾子さん、舞台美術・土井信策氏、人形劇団むすび座が受賞した。

名古屋市芸術賞は昭和五十年度から設けられ、今回で十二回目、能楽界からは、これまで芸術特賞に狂言方・井上松次郎氏、野村又三郎氏、奨励賞に狂言方・佐藤友彦氏、笛方・藤田六郎兵衛氏が受賞している。

授賞式は二月十五日午後四時から中区の名古屋不二パークホテルで行われ、特賞には副賞五十万円、奨励賞には副賞二十万円が贈られる。

内藤泰二氏は、六歳から宝生流を学び、十歳で初舞台。昭和二十三年に名古屋宝生会を創設。定式能を開催、市民の能楽鑑賞の場を定着させ、霊雲会を主宰して門弟を育成。風格ある円熟した演技は高く評価される。また社団法人能楽協会名古屋支部長としても能楽の活性化を進め新しい視点に立った活動による功績は大きい。重要無形文化財総合指定・日本能楽会会員、名古屋市昭和区山里町一三五ノ二。

6月に名古屋初公演
観世流能「三山」
能・狂言に親しむ会主催

観世流の能として二百年ぶりに復曲された「三山」（みつやま）が今夏六月二十二日（水）熱田神宮能楽殿で初めて上演される。

この能は、江戸時代すでに、素謡のための調章と節付が観世流でもおよそ確定していたといわれ、宝生流、金剛流などでは現行曲となっている。観世流では、昭和六十年十二月十三日、東京・宝生能楽堂での鉄仙会定期能で復曲初演された。

名古屋初公演は、能・狂言に親しむ会（梅田邦久氏、藤田六郎兵衛氏主宰）の主催で、昼の部、夜の部の二回上演される。

公演では、観世鉄之丞、観世栄夫両氏による解説が行われる。

（昼の部）午後一時半開演
解説・観世栄夫
能「三山」シテ観世鉄之丞、ツレ片山清司、ワキ西村欽也、アイ野村又三郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓柳原富司忠、大鼓・河村総一郎。
後見・観世暁夫、武田欣司
地謡・梅田邦久、橋本雅夫、橋本礒道、青木道喜、河村和重、清沢一政

（夜の部）午後六時半開演
解説・観世鉄之丞
能「三山」シテ観世栄夫、ツレ観世暁夫、ワキ西村欽也、アイ野村又三郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・河村大
後見・武田欣司、青木道喜
地謡・梅田邦久、橋本雅夫、橋本礒道、片山清司、河村和重、祖父江修一

大阪文化祭賞
茂山千五郎氏　茂山忠三郎氏　香川靖嗣氏

大阪府・大阪市・府教育委員会・市教育委員会による大阪文化祭賞の六十二年度の「能・狂言」部門で、狂言方大蔵流・茂山千五郎氏、茂山忠三郎氏が金賞、喜多流・香川靖嗣氏が本賞を受賞。一月十三日大阪天満橋の大阪キャッスルホテルで贈呈式が行われた。

茂山千五郎、茂山忠三郎両氏は十一月十八日、大槻能楽堂の「茂山忠三郎の会」での「靭猿」（大名・千五郎、猿曳・忠三郎）の演技。香川靖嗣氏は、十一月二十一日、大阪能楽会館での申楽大和座スペシャル公演の「松風」のシテの演技に対しての受賞である。

能「葵上」狂言「佐渡狐」
3月21日 美濃加茂市文化会館で

美濃加茂市教育委員会の主催による第三十八回「市民の劇場」は、きたる三月二十一日（振替え休日）美濃加茂市文化会館ホールで「能と狂言」を上演する。

同文化会館は建設当時より能舞台の設備が整えられていたが、能の上演は今回がはじめてである。

公演は能「葵上」狂言「佐渡狐」

舞囃子「唐船」で、橋岡慈観、奥善助の諸氏が来演する。

出演は次のとおり。

舞囃子「唐船」シテ橋岡慈観、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・筧鉱一、太鼓・助川竜夫、地謡・下田雄三、中川雅章、谷本正鉦、中村和男、瀬戸三津子

狂言「佐渡狐」シテ奏者・野村又三郎、アド佐渡の百姓・野村信行、アド越後の百姓・大矢高義

能「葵上」シテ奥善助、ツレ清水寛二、ワキ西村欽也、ワキツレ飯富雅介、アイ野村信行
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・筧鉱一、太鼓・助川竜夫
後見・谷本正鉦、松田憲二、地謡・橋岡慈観、下田雄三、若松健史、中川雅章、祖父江修一、中村和男、加賀敏彦、河合正次

入場料＝前売千五百円（自由席）当日券千八百円、十二時三十分開場、午後一時開演。

前売所は美濃加茂市文化会館（〇五七四㉕一一〇八）市役所案内所（〇五七四㉕二一一一）ほか問い合わせは美濃加茂市文化会館（〇五七四㉕一一〇八番）

入場料三千五百円（全自由席）市内各プレイガイドにて発売。お問い合わせは、名古屋市西区幅下二—一〇—九、藤田六郎兵衛方、電話〇五二—五七一—五七六三

63年度 中日名匠鑑賞能
4月30日 愛知文化講堂で

中日新聞本社主催、文化庁後援の「中日名匠鑑賞能」の六十三年度演能は、四月三十日（土）愛知県文化講堂で観世流三番と狂言一番で上演される。

演目は次のとおり。（番組三月号掲載）

能「景清」松門之出、小返　観世元正
能「二人静」立出之一声　観世元昭、観世清和
狂言「萩大名」　野村万作
能「紅葉狩」替之型、替装束　梅若紀彰

午後一時開演。

〔当日券三千円〕
事務所　名古屋市熱田区神宮一—一—一
熱田神宮能楽殿内
電話（〇五二）六八二—一七五一番

能楽　俊成忠度　放下僧小歌　山路敬一郎
トモ　堀和子
ツレ　谷内信恵
西田良子　田中一子

大社　天女　梅田邦久
龍神　武田邦弘
観世元昭
西村欽也　飯富雅介
杉江元　筧鉱一
大倉源次郎　助川龍夫
藤田六郎兵衛

壺泉会能
二月二十七日（土）午後二時始
熱田神宮能楽殿
主催事務所　名古屋観世九皐会
457　名古屋市南区元塩町一—一—一七（加藤保彦方）
TEL　〇五二（六一一）三六五九

謡演　文化の祭典「能」
南山大学文学部人類学科助教授　ペトロ　クネヒト

仕舞　船弁慶　泉泰孝　地謡　三島元三　水藤清三　朝山憲　殿島修二　山本正人

狂言　二人袴　野村又三郎　佐藤友彦　大矢高義　野村信行　後見　井上礼之助

能　葵　祖父江修一　近藤幸江　泉嘉夫
上　中村弥三郎　河村総一郎　鬼頭嘉太郎　柳原富司忠　藤田六郎兵衛
空之祈　山本清
問　井上礼之助　松山幸親　三島憲　清沢一政　笠田稔　今村嘉勇　泉泰孝　鶴克彦　久田徹二
後見　山本正人　朝山清
地謡
（終了　予定午後五時）

附祝言
主催　壺泉会
〒466　名古屋市昭和区山里町一〇三
電話（〇五二）八三二—三一八五　泉嘉夫方

〔入場料〕一般券四千円、学生券二千円
取扱所　市内プレイガイド、壺泉会事務所（〇五二—八三二—三一八五）熱田神宮能楽殿（〇五二—六八二—一七五一）
後援　朝日新聞社

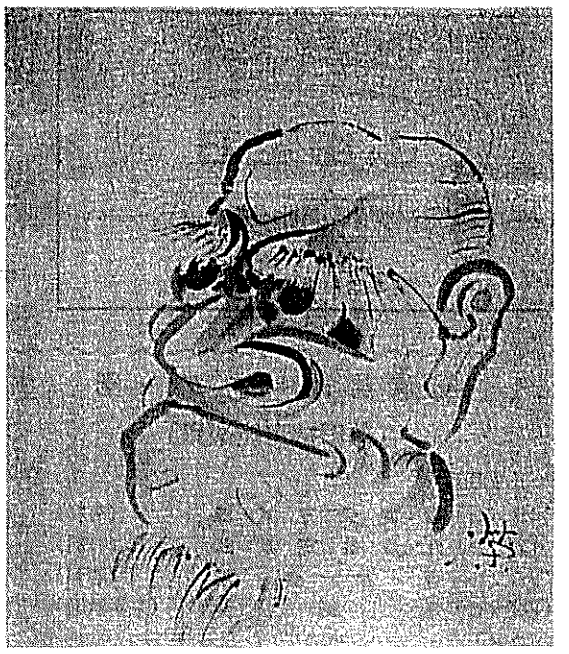
春敲能
二月二十八日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

能　花月　金覓晶子　飯富雅介
竹内孝成
竹内喜代香
能　蝉丸　高安勝久　飯富雅介　杉江元
ほか素謡、舞囃子、連吟、仕舞など
主催　春敲会
〔御来聴歓迎〕
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤泰二方　電話八三二—三四四九

青雅日記 ⑲

霧氷

えと文　二井栄逸



三年前の頃だったか、友人が八ケ岳に別荘をつくった。一昨年の十月末頃、一泊どまりで来てくれとのことであった。車は門の前まで着けることが出来るし、暖房も各室に完備してあるから是非にと誘われたが、日程というしがらみにしばられて行くことが出来ず、折角の好意を無にしてしまった。

八ケ岳は、赤岳（二八九九米）を最高峰として、硫黄岳、横岳、権現岳等、八峰が連らなり、山腹斜面がひろいため高山植物に富んだ素晴らしい山だという。

お花畑は素晴らしいに違いないが、私は、霧氷（むひょう）をもう一度見たくてたまらなかった。

若い頃、御在所で霧氷を見たことがあったので、こないだもスケッチブックをひっぱり出して、霧氷の風景をかき、絵のお稽古の人達の手本にした。

まだ明けきらぬ薄青い空の色は四種位の絵具を混色にすると夜明けの山の空がほのぼのと描出される。

霧氷は、寒気のみなぎった山の中で霧が樹枝などに付着して生ずる白色不透明の氷層のことをいう。

八ケ岳では、さぞかし朝日にキラキラと輝く幻想的な霧氷の白い森が見られたのであろうに。

霧氷が出来るのには条件があって、前の日に雪が降るか、或いは暖かく湿度が高かったときで、夜の冷え込みがマイナス十五度を越えることが必要であるという。

しかし、そのような条件は毎日も続く理ではないから、八ケ岳にいつでも翌朝必ず白い森が必ず見られたかどうかは分らない。

朝日を受けると霧氷は、キラキラと輝きながら氷の雨をふらし、白い森は夢のように消えてゆく。私はそのような清浄な氷の夢幻の世界に憧憬を感じる。

宗家の舞台が四谷にあった頃、今をときめく友枝喜久夫師が、氷室の白頭を舞われたことがあった。若い頃から一入芸熱心であった師は、毎夜のように舞台で氷室を舞われたことを思い出す。

氷室（ひむろ）というのは、氷を夏まで貯蔵しておくため特別に装置した山中の室で、古代には、陰暦六月一日その氷を禁中に献じたという。

能の氷室は脇能で、後シテの氷室の神体は白頭になると、面はこべしみか、白べしみ（特に新しく打った面）にかわり、著附、半切狩衣等白づくめになる。万象ことごとく硬てこおるばかりの大地に厳然とした一象徴として立ち現われる。

冷徹清澄の気がみなぎる中に、師は豪放な氷室の神体として舞台をのし歩いているようであった。なんとなく奇怪な怪物が示威運動的に妖雰を振りまいて歩いているように見えてくる、私達も全力をふりしぼって謡う。

薄暗い見所からは、いつも唯一人端然と正座してするどい眼光を舞台に向けられている師（故第十五世家元）の姿が霧氷の中の影絵のように浮かんでくるのであった。

（63・1・31記）

故 梅若猶義師 17回忌追善能

4月3日　熱田能楽殿

能楽界の興隆と伸展に大きな足跡をのこした故梅若猶義師の十七回忌追善能が、今春四月三日(日)熱田神宮能楽殿で催される。主催梅若盛義師。後援名古屋機猶会。

演目は、能「俊寛」（梅若盛義）狂言「無布施経」（井上松次郎）能「求塚」（岡田朝鼓）能「海士」懐中之舞（梅若修一）・（番組③面掲載）

なお東京では、四月二十三日(土)観世能楽堂で公演。

能「敦盛」二段之舞（梅若盛彦）能「大原御幸」（梅若善高）能「道成寺」（岡田晃一）狂言「無布施経」（善竹圭五郎）を上演する。

カナダ冬季五輪に 能、狂言公演

二月十四日からカナダのカルガリーで催される冬季オリンピックおよび北方圏市長会議に宝生流能楽団が公演、二月十五日に出発する。

団員は宝生流から本間英孝（代表）三川淳雄、渡辺容之助、金森孝介、藪俊彦、高橋右任、辰巳孝門、島村明宏、ワキ方・苗加登久治、囃子方は吉野晴夫、福井啓次郎、覚鉱一、鬼頭喜太郎の諸氏で中部地方からも参加、狂言方・石田幸雄、小川七作の十五名。

演目は能「羽衣」狂言「柿山伏」

カナダのエドモントン市、ヴァンクーバー市、アメリカのシャトルで七回公演される。帰国は二月二十六日の予定。

◆睦月の舞台から◆「青陽会定式能・第32期第一回」

竹尾邦太郎

青陽会には曽て番組に先立ち研究能と称する一番があり、文字通り若手練成の勉強の場となっていた。またお手本に東西から師筋の職分が本番組に出勤するのが例でもあった。能を舞う機会の少ない若手にとって、それは晴れの舞台であり、実に真摯なものであった。

近年はブームとも言える現象で能能の回数は空前。東西職分の来演も当地の充実ぶりと共に無くなった。研究能を勤めた若手も立派に成長したと言うべきであろうか。

しかし、シテ方三役を問わず、機会均等の余りその内容が画一化・平均化してゆく弊が無いかどうか、改めて考慮しなければならないと思われる。大観世の傘下、見所動員力の強大で盛会であるだけにその想いは深い。閑話休題、

「**盛島**」　西下する着流僧三人（雅介・勝久・元）・名ノリ・道行の飄然とした導入部が仲々趣深く、連吟も好調。

シテ一英。へなどか雲居に帰らざらん、と下居のまま右から左へ薄く見渡す辺りの感慨の表出は素直・床几に掛っての語りも肩上げの水衣の武張った様子そのままにきびきびとして良かったが、ツレ（一政）から地との掛合に闘争の描写は、へこれを御覧じて、と一寸顎をしゃくるように面を切ったのなど少々表現過多。中入は送り笛の雅拙な味わいが幕入後も暫くたゆたって松籟とも聞え、余情捨てがたい。

二番目は、シテ方観世元昭、関根祥六、梅若盛義、武田志房、観世恭秀ほか、ワキ錦木岩男、囃子方は、藤田次郎、河村総一郎、横山藤二郎、観世元則、狂言方茂山千五郎、茂山千三郎、山本則直の諸氏ら約三十五名。

公演は、アデレード、パース、メルボルン、シドニーなど主要都市で延べ十数回にわたり開催する。

出目は「羽衣」「屋島」「隅田川」「紅葉狩」「土蜘蛛」、狂言は「棒縛」「梟」「蝸牛」が企画されている。

一行は三月二日出発、三月二十四日帰国の予定。

オーストラリア建国二百年祭出演 観世流能楽団

オーストラリアは建国二百年を記念して多彩な国際的行事が催されるが、三月同地で行われる記念演劇祭に、観世元昭師を団長とする観世流能楽団が約三週間にわたって公演する。

能楽団は、シテ方観世元昭、関根祥六、梅若盛義、武田志房、観世恭秀ほか、ワキ錦木岩男、囃子方は、藤田次郎、河村総一郎、横山藤二郎、観世元則、狂言方茂山千五郎、茂山千三郎、山本則直の諸氏ら約三十五名。

公演は、アデレード、パース、メルボルン、シドニーなど主要都市で延べ十数回にわたり開催する。

出目は「羽衣」「屋島」「隅田川」「紅葉狩」「土蜘蛛」、狂言は「棒縛」「梟」「蝸牛」が企画されている。

一行は三月二日出発、三月二十四日帰国の予定。

第18回 大蔵狂言会・なごや会

三月六日（日）午前十一時始　熱田神宮能楽殿

狂言組

小舞　松　森潤一　大西安春
様　大蔵弥太郎
鞍馬　山口茂雄　樽本道子
富士松　丹羽清恭　丹羽良之
清水

小舞　宇治の晒　森貴寛
七つに成子　松田陽子
末社の神　大野文恵
子の日　喜寅栄子
道明寺　中村つや
名取川　高倉昌子
薩摩守　紅谷与一　立川一枝　牛田敏明
塗師　松川佳澄　丹羽節　樽本道子
神鳴　河村弘祐　河村清太郎

小舞　蝉　小野加津子
海人　中嶌初美
鐘の音　河村文子
祐善　増本芳代
海道下り　奥村清子
おかしき天狗　岩田栞

靱猿　村松泰子　柾木信栄　大蔵基義　大蔵教義
替法東

（終了　午後四時頃）

〔入場無料〕

主催　大蔵狂言会　なごや会

事務所　名古屋市西区白菊町3—33　丹羽節方

63年2月・3月放送予定

〔2月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

14日（日）観世流「絵馬」「花月」藤波重和
21日（日）宝生流「定家」松本恵雄
28日（日）喜多流「鉢木」栗谷菊生

〔3月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

6日（日）観世流「芦刈」野村四郎
13日（日）宝生流「源氏供養」渡辺三郎
20日（日）観世流「千手」橋岡慈観
27日（日）金春流「桜川」金春欣三

〔テレビ〕・教育テレビ・3月21日午前9時

①観世流能「雷電」観世銕之丞
②能楽界の話題・金閣の薪能
・上野東照宮の謡初式
・奈良に能舞台

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

故 梅若猶義 十七回忌追善能

能「道成寺」上演

2月28日　サンケイ観世能

独語能観

デッサンの魅力

士野こつ、て考える

そうはいきません。こちらはお楽しみではなく、いわば商売なのですから、「仕舞とは何か」ぐらいの質問に一応の返事が出来なければいと思います。日舞（踊り）が歌舞伎から出て、歌舞伎とは違って独立した芸域をもつに至ったように、仕舞も能から出て、その家素描力の魅力、強さがあります。開き、さしこみ開き、左右等々の基礎技術の出来不出来が一目瞭然です。これは素人、玄人を問いま

観能独語

デッサンの魅力
仕舞について考える

私はときどき仕舞について考えますが、「仕舞とは何か」と聞き直って問いつめられると、なかなかむつかしくて、容易に答えが出て来ません。

ある一流の能楽師先生でも「能とは何か」よりも、「仕舞とは何か」の答えの方がむつかしいといってるぐらいです。私ごときズブの素人が答えに困るのは当然過ぎる話ですね。

ところが、現実には、毎週のように開かれる能の社中会（お稽古会）では、凝った着物の着流しの奥さんや、派手な袴をはいたお嬢さんが次々に舞台に登場して仕舞を舞います。見物席では家族や、友人、知人とおぼしき人々があたたかい拍手をおくるという風景を目にします。

劇場などで行われる、芝居がかりの声さえかかる日舞（踊り）の温習会にくらべると、小じんまりして地味で静かですが、そこに能独特の上品な雰囲気があって好ましいものです。ここでは誰も「仕舞とは何か」といった小むつかしい理屈抜きに仕舞を楽しんでいます。それでいいのです。趣味、お楽しみ、レクリエーションなのですから。

しかし能楽師、研究家となるとそうはいきません。こちらはお楽しみではなく、いわば商売なのですから、「仕舞とは何か」ぐらいの質問に一応の返事が出来なければ困ります。

「理クツは要らぬ、芸が勝負だ」の一点張りは、昔はそれで通ったが、今日ではそうは参りません。とはいうものの、それは難問中の難問で、答えが出来ないからといって、ご当人の芸まで否定するわけにはいきません。能楽師にとっては、あくまで芸が第一、理屈は二の次、三の次なのですから。いや、むしろ私ごとき素人の方が、とわいものなしで、勝手な返事が出し易い、まあ、世間話でも聞くつもりで、お読み下さい。

能評家の堂本正樹氏が仕舞といわず「能舞」といってはどうかと提言されています。ちょっと面白いと思います。日舞（踊り）が歌舞伎から出て、歌舞伎とは違って独立した芸域をもつに至ったように、仕舞も能から出て、その家来のような付属物のような格好で軽く見られている現状を破って、「能舞」という能とは違った舞台芸術の一分野として独立性をもたしたらどうかというわけです。

現に、名人、上手の仕舞は、能一番に匹敵するほどの重さ、面白さがあるとはよく云われることですが、そこまでいくと、仕舞というより「能舞」の方がふさわしいかも知れません。

仕舞は絵でいうならデッサンです。デッサンだけの大家もあるぐらいで、絵をつくる骨格、素描力の魅力です。仕舞も同じことじゃないでしょうか。能の一部（クセやキリの型どころ）を素で舞うのですが、そこに能の一部を離れた素描力の魅力、強さがあります。開き、さしこみ開き、左右等々の基礎技術の出来不出来が一目瞭然です。これは素人、玄人を問いません。

堂本氏は故桜間道雄を近年の「仕舞名人」と呼んでいますが同感です、彼の仕舞は私も見ましたが、仕舞というより能舞の名手といった方がふさわしいぐらい能とは別個の芸術境を見せました。曲柄、役柄を越えて、素の舞ならではの素の魅力、デッサンの素晴らしさ、これを仕舞の究極とでもいうのでしょう。

お素人のおたのしみに水をさすつもりは毛頭ありませんが、単にムードに酔うだけが仕舞ではないことは確かだと思います。考えてみると「おそろしい芸」ですね。あまり深く考えない方がいいかも知れません。（M）

まだ明けきらぬ薄青い空の色は四種位の絵具を混色にすると夜明けの山の空がほのぼのと描出される。脇正奥を凝視するなど、終始羞恥を基調としてそれを雪のベールに包み、雪のハーモニイを奏でたといった舞台だった。切地での面遣

演目は、能「俊寛」（梅若盛義）狂言「無布施経」（井上松次郎）能「求塚」（岡田朗詠）能「海士」懐中之舞（梅若修一）。（番

能、狂言公演

二月十四日からカナダのカルガリーで催される冬季オリンピック寸頭をしゃくるように面を切ったのなど少々表現過多。中入は送り笛の稚拙な味わいが幕入後も暫くたゆたって松籟とも聞え、余情捨大名」の十四行目、立場で逆転とあるのは、立場が逆転の誤りです。編集の校正ミスをお詫び致します。

昭和六十三年 新春喜多流二井会

二月十四日（日）午前十時半始
名古屋市千種区覚王山通り八―一八
覚王山会館　電（〇五二）七六二―三一五一

六浦　前シテ 山崎和子　後シテ 河合由美子　前ワキ 門澤里子　後ワキ 石黒サダ子
ワキツレ 大島雪枝　〃 横井孝子
飛鳥川　杉山一子　笹田初子　加藤春江　（地）加藤千代子
高野物狂　筒井英子　酒井武子
敦盛　大川大三　福田勝
羽衣（謡）河合由美子　大島雪枝　横井孝子　門澤里子　山崎和子　石黒サダ子
天鼓（謡）藤崎純子　加藤梅代　神保田鶴子　（小鼓）堀木徳田　小泉まさ　榊子　（小鼓）村瀬恒史
小督　土屋純一　峯崎孝純　川部滋　（地）阿部久枝　竹原文子
綾鼓　田辺伝蔵
秀衡　堀木愉子　徳田葛子　吉村たみ子　賀川きよ　小泉まさ
夕顔　小泉まさ　吉村たみ子　和谷衛市　徳田葛子
松風　荻原俊子　戸田貞江　和谷衛市　賀川きよ　（地）井田和子
源氏供養　杉山一子　加藤春江　（地）加藤千代子
玉葛　山本竹秋　宮本繁子
竹生島　堀木愉子　賀川きよ　徳田葛子
雲雀山　和谷衛市　徳田葛子
草子洗小町　和谷衛市　賀川きよ　（地）井田和子
敦盛　戸田貞江　井田和子　村瀬恒史
蟬丸　笹田初子　山田芳男　吉田たみ子
浮舟　折田育枝　吉田府二子　賀川きよ
東北風　笹田初子　山田芳男　吉田たみ子
高砂　折田育枝
半蔀　吉田府二子　賀川きよ
阿漕　太田康弘　鈴木靖
飛鳥川　笹之段　駒田宏
葛城　和谷衛市　長田曉
鵜之段　主催 二井会　当番（名古屋二井会）

'88能と狂言

片山定期能楽会主催

京都

片山定期能楽会主催の「'88能の狂言」は、初回二月六日上演をはじめ七回にわたって公演される。会場は京都観世会館。

第二回・三月五日（土） 正午開演、能「仲光」愁傷之舞（宮木祥二郎、満仲・片山九郎右衛門）「雲林院」（武田邦弘）「船弁慶」（河村博重）狂言「寝音曲」（茂山忠三郎）

第三回・四月三十日（土） 正午開演、能「田村」（古橋正邦）「楊貴妃」（渋井義寿）「国栖」（小林慶三）狂言「舎弟」（茂山千三郎）

第四回・七月二十二日（金） 午後五時半開演、能「俊寛」（分林弘一）「安達原」急進之出（藤井楽人）狂言「地蔵舞」（茂山千之丞）

第五回・九月二十四日（土） 正午開演、能「忠度」（古橋正士）「龍田」（片山清司）「善界」黒頭（梅田邦久）狂言「菽大名」（茂山千五郎）

第六回・十月二十二日（土） 正午開演、能「頼政」（橋本礎道）「松風」（武田欣司）「鉄輪」（実川紀）狂言「盆山」（茂山正義）

第七回・十二月三日（土） 正午開演、能「張良」片山九郎右衛門、ツレ片山清司、張良・森常好）「羽衣」（片山伸哉）「葵上」空之祈（橋保向）狂言「柑子」（茂山忠三郎）

入場料・前売券二千五百円、当日券三千円、学生券千五百円。セット（七枚組）一万五千円。申し込みは出演者、片山定期能楽会事務局（京都市東山区新門前通大和大路東入ル、片山方、電話〇七五―五六一―〇〇六七）

なおきたる三月二十一日（祝）別会能が催される。十時半開演。能「盆」（橋本礎道）「屋島」弓流（藤井楽人）「大原御幸」（梅田邦久）「小鍛冶」黒頭（武田欣司）舞囃子「二人静」（片山九郎右衛門、片山慶次郎）狂言「二九十八」（茂山真治）

入場券五千円。

能「道成寺」上演

2月28日　サンケイ観世能

第三十五回記念「サンケイ観世能」は、きたる二月二十八日、大阪・桜橋のサンケイホール特設能舞台で行われる。主催サンケイ新聞社、大阪新聞社。

能「安宅」勧進帳・酌掛之伝（観世銕之丞）
能「羽衣」和合之舞（観世喜之）
能「通小町」（観世元正）
能「道成寺」（梅若紀彦）
狂言「千鳥」（茂山千五郎）

S席当日券一万二千円（前売一万円）A席一万円（前売八千円）B席六千円（前売五千円）

大阪

観世流謡曲本
ちくさ正文舘
ちくさ駅前
電話(0)1137

故梅若猶義 十七回忌追善能

四月三日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

番組

仕舞
清経　菊池重郷
藤戸　熊沢恵美子　地謡 梅若池内幸三郎　寺岡佑子　梅若修一郎

能
寛　盛彦　岡田晃一　梅若盛義
間　西村欽也　佐藤友彦　福井啓次郎　河村総一郎　藤田六郎兵衛
後見　梅若善久　観世栄夫　橋本雅一
地謡　仲村清勇　小沢清　菊池重郷　熊沢恵美子　寺岡佑子　梅若善高　井上泉生香　泰孝

狂言
無布施経　井上松次郎　佐藤友彦

仕舞
俊寛　泉泰孝
富士太鼓　梅若善高
善知鳥　井上生香　地謡 梅若池内幸三郎　寺岡佑子　梅若修一郎

能
求塚　井戸和男　池内光之助　岡田朗詠
間　西村欽也　井上礼之助　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
後見　梅若盛彦　山本勝一　梅若基徳
地謡　仲村清勇　小沢泉泰孝　梅若善久　橋本雅一　池内幸三郎　観世栄夫　井上生香

仕舞
弱法師　山本勝一
鉄輪　観世栄夫　地謡 梅若池内幸三郎　岡田晃一　寺岡佑子　梅若善高　盛義一久

能楽
海士　井戸和雅　梅若修一
懐中之舞　飯富雅介　梅原富司忠　笠鉱一　助川竜夫　鹿取希世
間　大野弘之
後見　梅若盛彦　梅若基徳　岡田晃一　後見 梅若盛彦　岡田朗詠
地謡　菊池重郷　梅若基徳　橋本雅一　熊沢恵美子　井戸和男　梅若善高　池内光之助
（終了　午後五時頃）

主催　梅若猶義
後援　名古屋梅盛会
事務所　名古屋市名東区平和ケ丘3―76　日車マンション四〇四　熊沢恵美子方　電話〇五二―七八二―六九七三
〔有料〕特別指定席一万円、指定席七千円、自由席五千円、学生席二千円
会員券申し込み先　出演楽師又は梅猶会事務所

能楽養成会が東西合同で発表会

3月31日　国立能楽堂

東京、京都、大阪の能楽養成会の生徒が合同で行ってきた東西合同研究発表会は、ことし第十八回をむかえるが、本年はきたる三月三十一日（木）国立能楽堂・本舞台で、東京の若手囃子方と国立能楽堂の第一期研修生が初参加して開催される。

同発表会は入場無料であるが、観覧希望の方は、往復はがき（一人一枚）で、三月一日（火）までに国立能楽堂調査養成課（東京都渋谷区千駄ケ谷四―一八―一、郵便番号151）へ申し込めば、先着四百名が招待される。

発表会の番組は次のとおり。

（京＝京都能楽養成会、東＝東京能楽養成会、阪＝大阪能楽養成会、国＝国立能楽堂研究生）

能楽養成会 第18回東西合同研究発表会

六十三年三月三十一日（木）
午前十時三十分始
於国立能楽堂

舞囃子

観養　老　小野里修（中村保彦（京））鵜沢洋太郎（東）　松尾厉幸（国）寺井宏明（東）

春葛　城　金春穂高　柿原清水　弘和晧祐（東）（阪）　徳田森田　宗久保美（東）（京）

宝須磨源氏　佐野登　亀井佐藤　広忠信行（東）（国）　三島一噌　卓隆之（阪）（東）

観桜　川　大西礼久　井林住駒　久登匡彦（京）（東）　森田佳子（阪）

独鼓

観富士太鼓　河村信重　久田陽春子（阪）

観玉之段　古橋正邦　小嶋勉（京）

狂言（東京）　山本東次郎　加藤元（国）

御茶の水　若松隆（国）

観歌　占　味方玄　守屋紀之（阪）宮増新一郎（東）　松田弘之（東）

観賀　茂　上田大介　山本哲也（阪）荒木健作（阪）　上田慎也（阪）野口（森田佳子）（阪）

観敦　盛　梅若盛彦　辻吉阪雅之（阪）一郎（京）　松田弘之（東）

剛三　輪　広田泰能　高野成田彰逹志（国）（京）　中田森田弘美保美（阪）（京）

喜唐　船　狩野了一　山本島知哲也（阪）（国）　井上杉敬介市和（京）（京）

神　鳴　茂山千三郎（京）　茂山正邦（京）

狂言（京都）　若松遠藤隆義（国）　加藤博元（国）

舞囃子

観鞍馬天狗　片山伸吾　河村曽和　大尚靖（京）（京）　日向幸太郎市和（京）

剛猩々　羽多野紳弘　安福竹村光雄英敏（東）（京）　吉谷相原潔一彦（東）（京）

観野守　河村博重　成田幸正有辞昭（京）（東）　観世寺井元則義明（東）（東）

半能

片山清司　鼓　梅村昌功（国）　河村佐藤　大出（京）（国）　桜井一噌　均幸弘（国）（東）

観天　弄鼓之舞　後見　味方玄　片山九郎右衛門

地謡　武田味方　団分　衛道　河村山本　博和　重道　山林　河村　重博　片山伸吾　古橋正邦

主催　国立劇場能楽堂
京都能楽養成会
大阪能楽養成会
社団法人日本能楽会

後援　文化庁
社団法人能楽協会

新刊紹介

「能の女」

嶋田都彌子著

社行　風媒発

〝能のすばらしさを初めて知ったのは昭和五十五年十二月、熱田神宮能楽殿での「道成寺」であった〟と筆者があとがきで述べているとおり、時日からみれば能楽鑑賞の歳月は浅いかも知れない。が能のもつ〝ふところ〟の深さに魅せられ、鋭い感性で綴られた能鑑賞の随想である。

蕩いところからみた能理論の解説ではなく、素人が能への関心をもち、能鑑賞と、自らも謡曲、仕舞を学ぶ体験と、それを充実させていこうとする思想と行動を求めて、入門してから成長していくアマチュアの鑑賞眼の記録ともいえるが、しかし実は、このアマチュアが、能をどのようにとらえていくかが、現在の、またこれからの能楽界の大きな課題を内蔵している、ともいえよう。

著者は、観世流シテ方・泉嘉夫師主宰の壷界会員、朝日カルチャーセンターの受講から能の鑑賞がはじまる。自身の観能記録でもあるが、それはまた素人の成長のあゆみでもある。この素人が能鑑賞の大きな底辺を形づくっている現実にあるとき、玄人の解説書にみられない、素人の素直な感覚、しかも探求心をもった観能の印象と〝能の女〟を描く筆の運びは能入門のガイドとしても好適であろう。

内容は　・能の女―梅若丸の母と芦屋の某の妻
・「小町」三曲―能の小町像
・「井筒」「野宮」から「砧」への道―世阿弥の女能の世界
・現在能の人びと―熊野、千手の女性像や弁慶や小沢の男性像
・平家の公達の能二曲―悲恋の清経と奈良炎上の重衡
・船弁慶と道成寺―風流能の魅力
「謡曲と仕舞」教室での歩み―泉嘉夫先生の教育
・あとがき

著者は一九二六年東京生れ、現在金城学院中学校勤務

B5判、百四十頁、定価千六百円、発行・名古屋市中区上前津二―九―一四・久野ビル、風媒社

63年度能楽講座

本年度の能楽講座（藤田六郎兵衛氏主宰）の第一回は三月八日（火）第二ワシントンホテル前・大黒屋本店ビルで行われる。

ことしの能楽講座は、三月、六月、九月、十二月（各月第二火曜日に開催、六月二十二日の能「三山」公演招待が企画されている。

定員八十名、年会費一万円。申し込み、問い合わせは電〇五二―五七一―五七六三、藤田六郎兵衛方。（関連記事③面）

（事務所変更）

大阪能楽養成会はこのほど事務所を潮陽会館から山本能楽堂に移転、事務連絡所を次の住所に変更した。

連絡所＝高槻市大手町二―二七（〒569）用中治作方

信玄袋

―年末年始―

二月三日・四日、節分・立春の両日雪降る。大雪。節分の夜細かい雪が霏々（ひひ）と降る中を強い鬼は蓬莱の島をいかなる身なりでやってきたであろう。雪（剛）・葛城・鉢木や巴・二人静などの雪の情景を想像する。朝長の曲も雪がちらつくように思われる。狂言は木六駄。私の家では小さいときより雪の日の夕食にいも粥をつくってもらったが、今でもそうでなつかし。

× × ×

一月号の昨年の回顧にあわせて国際文化交流のことばを書き添えたい。実は名古屋市制百年の到来記念を明年に控え、名古屋と能楽の〈古典の歴史〉を大きく広く考え、あわせて新・名古屋の中の古典文化（芸術）の運動に頭書の国際文化交流のことを含めていきたい。

× × ×

演能。一月三十日、今年始めて〈熱田〉へ行く。庭の梅はもう咲きかけたが、熱田さんの梅の蕾はまだ固い。近か頃充実の勢盛んな青陽会第三二期を迎えて、屋島（小島一英）・葛城（久田徹二）船弁慶（祖父江修一）の三番。前二曲の佳演をみて、切りの曲にも期待をかけみて帰りたかったが、大分おそくなるので二番だけにした。心残りしきり。白い月が熱田の森の上に。

× × ×

年末年始の放送（NHK）では元旦のRで、独吟（梅若六郎〈故人〉）と一調（友枝喜久夫、大・安福建雄）の勧進帳、同じく一調羽衣（観世寿夫〈故人〉、太・観世元信）、同放下僧（近藤乾三、小・幸祥光〈故人〉）、同珠ノ段（桜間道雄、大・亀井俊雄〈いずれも故人〉）ほかがきけた。佳。テレビでは、三日の草紙洗（佐野萌、宝）が元旦の小鍛冶（喜多六平太）とともに印象に残る。FMは十日の高砂（桜間金太郎）。

付。やはり年末年始に二・三本の時代劇をテレビでみた。「伊達政宗」（NHK、総集編）では、始めに田村の仕舞（政宗の父）、中途翌々に扮する秀吉、終り頃羽衣をみて回想にふける政宗の三場面があった。羽衣は初代北（喜多）六平太に扮する現六平太氏であったと思う（注、六平太氏はこの大河ドラマの能楽指導を受け持たれた）。政宗は年・三万石も能に費用をかけた由解説する。

なお野上能楽全書によれば、仙台藩の能は金春流を主に記述され岩波の能・狂言講座には、金春・喜多両流併説で、初代六平太と政宗との親密振りがうかがえる筆つきである。テレビに登場の金春流のお抱え役者のことについて調べたきことあるも後日に。

× × ×

本。

狂言役者―ひねくれ半代記。茂山千之丞、岩波新書。

ためになり、おもしろし。兄千五郎氏の「千五郎狂言咄」と比べ読むもよし。入隊中かくし芸大会で狂言小歌を謡い、野次が飛んだ思い出。千五郎氏は海軍で大勢を前に、「那須」を語られたそのこと。私にも苦い経験がある。

「なお千秋や万歳と、俵を連ねて面々に楽しうなるこそ目出たけれ」（附祝言）と二十一世紀の狂言会で謡い上げたいと切なる願望で結ぶ。

× × ×

能し。日展で、森田茂氏の黒川能（連作）の絵ハガキを買う。今年は「獅子座」〈石橋〉。一―二月。中日ほか共能。

× × ×

さて、本年は観世左近氏五十回忌追善能が催される。四月東京・姨捨（観世元正）・鵜飼（空ノ働、観世元昭）ほか。望憶・追想の偲ぶ草も出る。山崎有一郎氏編。私も〈幻の能―左近氏と名古屋〉の一文を寄せる。改めて左近時代を回顧する。

他方京都観世会館建設三十周年記念の年にも当る。〈熱田〉より数年後に完成。記念能は二月十三・二十一の両日。能は片山三兄弟〈片山九郎右衛門・同慶次郎・杉浦元三郎〉のうち当主九郎右衛門氏の弱法師・盲目ノ舞ほか。なお慶次郎・国栖、元三郎・山姥（仕舞）あり。

× × ×

末尾に訃報を。昨冬十二月六日熊沢五六氏逝去。徳川美術館前館長（旧館時代）・名誉館長。かつて能の講演、能楽展示のお手伝いをした。温顔・寡黙、底の深い方、中学（五中）はわが恩師谷川徹三先生（健在）と同期であった。次弟に演劇研究家・熊沢復六氏（故人）あり。享年九十一才。

（野村広二）

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ！
舞姿の勉強と記念に是非どうぞ！
当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きっとご満足いただける自信があります。
テレビ放送番組企画制作
テレビCM企画制作
記録ビデオ撮影
ビデオプロダクション　西川企画
名古屋営業所（〒450）名古屋市西区名駅2-20-3輪の内荘　小椋方　☎（052）571―5816
（〒500）岐阜市北野町20―2　TEL（0582）63―9869

御料理あつた
蓬莱軒
本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686～8
神宮東門店　熱田区神宮一―一―一　電話（683）5598代

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話　（291）2488－9　振替東京3－3552
〒604　京都市中京区二条通鉄屋町東入
電　話（231）1990　振替京都1－113

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話　（731）7984
振替口座　名古屋0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年　1200円
一　部　70円

故　鬼頭八郎師一周忌
長世会追善能
5月7日（土）熱田能楽殿

観世流太鼓方として中部能楽界の興隆、伸展に尽くした故鬼頭八郎師の一周忌追善能が長生会（鬼頭喜太郎師）主催により、きたる五月七日（土）熱田神宮能楽殿で催される。

故八郎氏は、観世流太鼓方の重家・鬼頭家の三代目、十二歳で初舞台以来七十余年にわたり囃子方として活躍、日本能楽会会員、能楽協会名古屋支部副支部長を歴任後進の育成に尽力、昨年五月八日八十六歳で逝去された。

追善能は、シテ方宝生英雄宗家、観世銕之丞、金春安明、野村四郎、太鼓方観世元信宗家の諸師が来演能「砧」（金春安明）「融」舞返シ（野村四郎）舞囃子「姨捨」（観世銕之丞）はじめ一調、囃子、独鼓など十五番、入場無料。

北国宝生能
4月3日、石川県立能楽堂

昭和六十三年度「北国宝生能」は四月三日(日)石川県立能楽堂で第一部(午前十一時始)第二部（午後三時半始）の二部制で上演される。

〔第一部〕能「張良」（シテ宝生英雄、ツレ島村明宏、ワキ殿田謙吉）能「杜若」沢辺之舞（シテ佐野萌）狂言「八句連歌」（野村万之丞）

〔第二部〕能「隅田川」（シテ宝生英照、子方藪充男）「鞍馬天狗」（シテ佐野由於、子方高橋憲正）狂言「柑子」（野村万之丞）太鼓一調「葛城」（大坪十喜雄、観世元信）

35周年のあゆみ刻む
広田後援会記念能
4月3日　京都　金剛能楽堂

金剛流・広田後援会は毎年春秋の演能が回を重ねて今春第七十回を迎え、結成三十五周年を記念して、きたる四月三日（日）、京都・金剛能楽堂で「三十五周年記念能」が催される。

「同会は昭和二十八年、広田陛一、秦三両師の後援会として、京都商工会議所会頭の故中野種一郎氏ら在洛の知名士を発起人として誕生、戦後の能楽復興、振興が叫ばれるなかで、より多くの演能の機会をもち、修練の場として芸域の拡大、向上をはかるために結成されたもので、以来両師はこの後援会での舞台だけでも百十数番をつとめ、共に重要無形文化財能保持者に、また流儀の長老重鎮として円熟味を加えられ、両師の芸道への探究心の賜とはいえこの後援会の果してきた役割も大きなものがある。」と能楽評論家・渡会惠介氏は記念能に寄せてその意義を述べている。

演能は「翁附脇能高砂」（シテ広田幸稔、ツレ広田泰能）能「羽衣」（シテ広田陛一）舞囃子「八島」（広田泰三）など。

前売四千五百円（当日券五千円）学生券二千五百円。電話申込みは（〇七五）七八一―一八八五、七八一―三四二一、七三二―九一二三番（番組②面）

4月8日　鵜籌能
能「安達原」上演

岐阜護国神社大祭奉納「鵜籌（うかがり）能」は、四月八日（金）岐阜市長良川畔の護国神社神苑能舞台で催される。主催中日新聞本社、謡英会、桂会など。

演能は、小島一英師の「安達原」ほか仕舞、独調、連調など。午後四時開演。

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮能楽殿）

〔3月〕
21日（振休）正　風　会（来場歓迎）（番組①面）
27日（日）壺　泉　会　大　会（来場歓迎）（番組①面）

〔4月〕
3日（日）名古屋梅猫会追善能（有料）（番組②面）
10日（日）観　世　会　定　式　能（有料）（番組②面）
16日（土）青　陽　会　定　式　能（有料）（番組③面）
17日（日）邦　謡　会（来場歓迎）（番組③面）
23日（土）10周年記念初陽会大会（来場歓迎）（番組④面）
24日（日）久　田　観　正　会（来場歓迎）
29日（祭）幸　友　会　春　の　会（来場歓迎）

〔5月〕
3日（祝）豊　水　会（来場歓迎）
4日（休）朋　謡　会（来場歓迎）
5日（祝）巽　会（来場歓迎）
7日（土）長　生　会　追　善　能（来場歓迎）
15日（日）や　る　ま　い　会（来場歓迎）
21日（土）観　世　九　皐　会（有料）
22日（日）名　古　屋　観　衛　会（来場歓迎）
29日（日）清　韻　会　能（有料）

〔6月〕
5日（日）熱　田　祭　奉　納　能（来場歓迎）
12日（日）観　世　会　定　式　能（有料）
19日（日）宝　生　会　定　式　能（有料）
22日（水）能　と　狂　言　の　会（有料）
25日（土）一　謡　会・叶　石　会（来場歓迎）
26日（日）狂　言　也　留　舞　会（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

正風会大会
三月二十一日（振休）午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿

仕舞　田村キリ　衣斐　正宣
嵐山　金子あき子　西王母　児玉　啓子
大江山　平岡　一子　杜若キリ　藤川　柳
葵老城　小出　一乃　経政クセ　本全　晃子
葛城キリ　中野　裕子

素謡　土蜘　藤田　延男　棚橋　泰子　浜島　歌子　寺田　澄子　寺田　澄子　寺西かをる　池戸美保子　平岡　一子
望月　沢村　雅利　平田　正文　小林　光山　竹内　繁　井田　勝季
殺生石　宇野　洋平
仕舞　草子洗衣キリ　寺田　澄子　蝉丸　寺西かをる　羽衣　美濃島愛子
舞囃子　絃上　衣斐　愛清　船井　慶　夫馬いずみ　本多　二郎　吉野　淳夫　塚原　義久　椿　博明　川島　正男
素謡　夜討曽我　経　衣斐　郷志
素謡　黒塚　岡島　裕　大橋　清
仕舞　加茂　足立　尚子　三玉ノ段　後藤　恒子　天鶴亀　三浦　文子　巻山　竹内　千智　鼓　千田美也子　絹キリ　山名　和子
素謡　竹生島　田島　雅洋　伊藤　勝興　穂積　良治　池田　環　余語　一子
千手　後藤　恒子
放下僧　本多素之助　門脇　達祐　須藤　浩三
舞囃子　西王母　柴田　道子　忠度　松田よし子
岩船　後藤　新治
素謡　小督　三原満都枝　沢田　きよ　三浦　文子　山名　和子　竹内　銑治
東北　渡辺　与作
仕舞　小采胡歌女キリ　杉石　昭子　殺生石　余語　一子　蝶　柴田　昌宏　伊藤　文雅
一調　笠ノ段　山名　達郎　福井啓次郎
仕舞　小督実盛キリ　安野　歩　善知鳥　中島　暉夫
舞囃子　敦盛　浦野　正二　桜川　後藤　鎮子
野守　竹内　淳一　大前　数美　増本　斉　藤陵　巌達
素謡　善知鳥　石川　光三　小栗　重吉　静原　武　榊原　芳房
素謡　追鳥　占キリ　林　治代　羽衣キリ　川地　玲子
仕舞　歌　林　佳代子

壺泉会大会
三月二十七日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

仕舞　氷室　鶴　克彦
兼平　三島　憲
朝野　泉　雅一郎
柏崎クルイ　山本　正人
藤戸　近藤　幸江
鉄輪　加藤　春枝
素謡　東北　前川　和子　長坂　和子
定家　八神山季代　内藤　悦子
仕舞　高野物狂　中川　真澄
梅富士太鼓　柴田うた子　西尾　静枝
嵐山　大矢　洋美
素謡　玄象　倉地　幸子　宮部　悟
姨捨　酒井　逸夫　石附　一二　橋本　泰子　大槻　秀夫　斉藤　信隆
仕舞　玉之段　葛天砧　加藤　定子　内藤　悦子　大坪由紀子　鳥居千枝子
素謡　弱法師　福島雄一郎　大堀　力男
道成寺　柴田うた子　泉　泰孝　鶴　克彦　アイ　野村又三郎
仕舞　高砂　小森　辰雄
昭君　八神　敦子
政頼　倉地　幸子
船弁慶　石川　晴子
一調　松虫　山野　明子　柳原冨司忠
素謡　関寺小町　祖父江智子　中沢　修　泉　嘉夫　山本　正人
能　歌
仕舞　子方八神　光栄　ツレ黒田　博　シテ八神　孝充
占　笠鉢一　柳原冨司忠　鹿取　希世
祝言　大江山　泉　嘉夫　国栖　泉　泰孝

〔御来場歓迎〕
主催　正風会　衣斐正宣
名古屋市昭和区御器所三丁目二三―十九
御器所パークマンション八〇二
TEL（〇五二）八八二―五六〇〇

〔御来場歓迎〕
主催　壺泉会　泉嘉夫
〒466・名古屋市昭和区山里町一〇三
電話　〇五二―八三二―三一八五
〒662・西宮市甲陽園目神山町一ノ一七八
電話　〇七九八―七三―二四五八

本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686～8
神宮東門店　熱田区神宮一―一―一　電話（682）5598（代）

青雅日記 ㊽

精一杯に咲く

えと文　二井栄逸

家なくば花に住むべし。
病あらば花にいやすべし。
わざわい来らば花にのがるべし。

私は花の門生にとのことをよく教える。花の世界を幼い時から見てきた私は、自身も花によって救われてきたのであった。

何よりも精一杯に咲く花の心根に私は感動する。

そして精一杯に咲くことに花は無上の喜びを感じているのであろう。

そんな自然とのかかわり合いをしてきた私は、花の心を画面に秘めこもうと一生懸命になる。それは、能をえがく努力と少しも変らない。

花の心を知り得て、花の心と同化した美意識を秘めることが出来れば素晴らしい作業だと思っている。まだまだ私には出来ないことであるが、この永遠の仕事は死ぬまで続けてゆくつもりである。

一枚の葉ですら、芽出しの時から、落葉するまでのうつりかわりゆく姿は精一杯に生きつづける魂の燃焼のあかしなのである。

私には、激動の社会のうつりかわりよりも、ささやかな花の息吹きやうつりかわりの方が重大な事だと思っている。

世阿弥は至花道書に
能の体用のことあるべし、体は花、用は匂の如し。または月と影のごとし。体をよくよく心得たらば用もおのづからあるべし——
と伝えている。

カルガリーでの冬季オリンピックは、史上最大の友情と平和の祭典として、今日、盛大に幕を閉じた。

中でも私を感動させたのは、英国から単独参加のスキージャンパーの選手であった。

この選手は、七〇メートル、九〇メートル級の両競技とも飛距離が最低で、世界最下位であった。

この選手は二十四才でジャンプ歴はまだ二年、本職は左官であるとのこと。ところがこの青年に優勝者、ニッカネンをしのぐ人気が集まった。

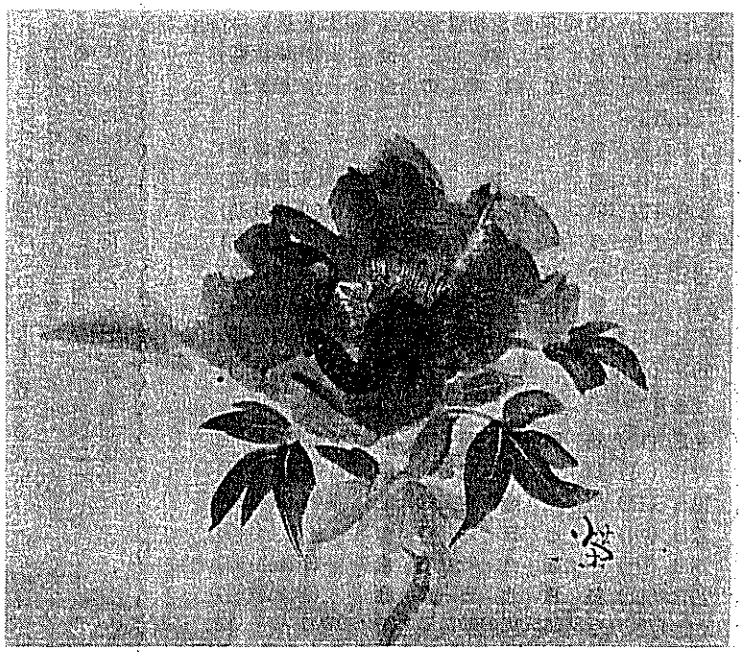
ジャンプを終える度に、スキーを頭上に担き上げ、全身で喜びを表現していた。

スタート台でも極度の緊張の中に、手を振り声援にこたえていた。

ビリでありながら、自己の最高記録を伸ばしえて、十二万の大観衆から大喝采を浴びたのである。

明るく、真剣に精一杯の挑戦をした立派さが人々を感動させたのであった。

（六三・二・二九記）



第70回35周年 広田後援会記念能

4月3日（日）午前十一時始
京都・金剛能楽堂

翁
能組
千歳　茂山正邦
三番三　茂山真吾
広田泰能
広田幸稔

高砂
谷田北野三郎
伊藤宗二朗井林
久蔵成田清一
曽和博達志
和尚朗前川
靖杉光長
市和

間　松本薫
後見　広田泰三　羽多野紳弘
金剛巌　種田道一
松野重本昌三
恭憲　地謡　宇高通成
豊嶋三千春
狂言後見　茂山千之丞
丸石やすし

狂言
末広かり
茂山千之丞　丸石やすし
佐々木千吉
後見　松本薫

仕舞
八島　広田泰三　谷口正喜
曽和正博　森田光春
地謡　湧永健治　宇高通成
塚本嘉樹　豊嶋三千春
谷口宗義
羽衣
広田陸一
岡次郎　森晴蔵
谷口雅信　谷口正喜
曽和正博　前川光隆
盤渉　地謡　山田安遊
佐藤筆雄　今井重本
松野洋樹　宇高昌三
恭憲清隆
通成
後見　広田幸稔
広田泰三
広田泰能
（午後四時頃終演予定）

仕舞
弱法師
金剛巌
地謡　羽多野紳弘
松野恭憲
金剛永謹
今井清隆

附祝言
主催　広田後援会
指導　宗家金剛巌
後援　京都金剛会

故梅若猶義 十七回忌追善能

四月三日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

番組
仕舞
清経　菊池重郷
藤戸　熊沢恵美子
地謡　梅若基徳
池内幸三郎
寺岡修一
佐藤佑子
能楽
梅若盛彦
岡田晃一
梅若盛義

寛
西村欽也
佐藤友彦
間　河村総一郎
福井啓次郎
後見　梅若善久
観世栄夫
橋本雅一
藤田六郎兵衛

狂言
無布施経
井上松次郎　佐藤友彦
仕舞
通小町　泉泰孝
富士太鼓　梅若善高
善知鳥　井上生香
地謡　梅若基徳
池内幸三郎
寺岡修一
佐藤佑子
能楽
井戸和男
池内光之助
岡田朗詠

塚
西村欽也
後藤孝一郎
間　河村総一郎
井上礼之助
後見　梅若盛彦
山本勝一
梅若基徳
地謡　小仲沢清勇
梅若善久
橋本雅一
鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛

名古屋観世会定式能（第二回）

四月十日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能組
能
雲林院
梅若紀彰
西村欽也　飯富雅介
杉江元
吉田定男
福井啓次郎
間　佐藤友彦
後見　久田敏二
山本勝一
地謡　松山幸親
今村嘉勇
加賀敏
高橋彦
鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛

仕舞
通小町　片山慶次郎
地謡　中村和男
梅久田敏二
中川田田
武田邦次郎
片山慶次郎
小島一英
梅田邦久
邦久弘

狂言
清水　井上松次郎　井上礼之助

能
鉄輪
山本勝一
谷田宗二朗
飯富雅介
後藤孝一郎　筧鉱一
間　大野弘之
後見　小島一英
梅若紀彰
地謡　本田須部
清沢一政
祖父江修一
鬼頭
森本
重郎
好信
中川雅章
武田邦弘
梅田邦久
田田
久田二
（終了　四時過頃）

附祝言
主催　名古屋観世会

（要会員券）
当日券七千円（自由席）

青陽会定式能（第三十二期）

四月十六日（土）十二時半始

〔有料〕
特別指定席二万円、指定席七千円、自由席五千円、学生席二千円
会員券申し込み先　出演楽師又は梅若会事務所

主催　梅若義盛
後援　名古屋梅猶会
事務所　名古屋市名東区平和ケ丘3—76
日車マンション四〇四　熊沢恵美子方
電話〇五二—七八二—六九七三

能
仕舞
弱法師　山本勝一
鉄輪　観世栄夫
地謡　梅若盛彦
岡田晃一
寺岡修一
佐藤佑子
梅若善久
橋本雅一
井上生香
能楽
井戸和雅
梅若修一

士
飯富雅介
間　大野弘之
後見　梅若盛彦
岡田晃一
地謡　菊池基徳
橋本雅一
熊沢恵美子
重郷
梅若善久
池内光之助
井戸和男
梅若修一
（終了　午後五時頃）

邦謡会大会

四月十七日（日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

63年3月・4月放送予定

〔3月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
20日（日）観世流「千手」橋岡慈観
27日（日）金春流「桜川」金春欣三
〔テレビ〕・教育テレビ・3月21日午前9時
①観世流能「雷電」観世銕之丞
②能楽界の話題・金閣の薪能
・上野東照宮の謡初式
・奈良に能舞台

〔4月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
3日（日）観世流「隅田川」観世元正
10日（日）宝生流「竹生島」「鵜」三川泉
17日（日）喜多流「杜若」「百萬」喜多節世
24日（日）観世流「雲雀山」浅見真州
〔教育テレビ〕祝日能（午前9時～10時）
29日　喜多流能「小鍛冶」喜多六平太ほか
（63年1月1日の再放送）

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

独観能語

よくわかる「葵上」

泉嘉夫（壺泉会）の新演出

苦を見する」と御息所と一緒に葵上を打つところ、保守派、守旧派はちょっとひっかかるのではないですか。私と一緒に見所にいた友人が「かっぱり御息所一人だけ」

主人公とする幽玄のワクの中でも表現の仕様があるのではないか。ここは演者の腕次第ということかも知れませんが。（泉なら出来た

観能独語

よくわかる「葵上」

泉嘉夫（壺泉会）の新演出

いつも研究熱心で新機軸を出しファンの心をおどらせる泉嘉夫（壺泉会）が、またまたヒットを飛ばしました。二月二十七日熱田能楽殿の「葵上」です。いつも年末にやるところを、昨年は十一月東京国立能楽堂で「女と影」「半獣神の午後」の新作翻訳能の二本立を敢行、ひきつづきこんどは名古屋で「葵上」と、そのさかんな意欲と馬力には驚かされます。しかもこの「葵上」、普通のやり方ではなく、一部古作の復活で、いつもは出ない御息所の侍女（青女房）が御息所について登場します。東京では既にこの形式で上演されたことがあると聞きますが、その時は車のつくりものまで出たそうです。泉は能の象徴性を重んじたとかで、車は出しませんでしたが青女房を登場させた演出効果は多大でした。泉にしても名古屋がはじめての試みだけに、翻訳能以上に神経を使ったそうですが、それだけの甲斐はありました。

こんどの演出では、梓神子（照日の神子）は御息所を呼び出す呪文を唱えるだけで、あとは全部青女房が謡います。もともとそのように書かれていたものを、いつからかシテ一人主義となり、青女房が出なくなったため、梓神子がその代弁を引受けることになったもののようです。現行の謡本でも不得要領な文句が多く解釈に苦しむところを、こんどの青女房の登場で筋が通り、眼からウロコがとれたようにハッキリしました。これが新演出最大の成果でした。

はじめ橋掛りに御息所が立ち、その横に青女房（近藤幸江）が座ったところは、はじめて見る一幅の絵のようでいい気分でした。しかし、青女房が「わらわは後にて苦を見する」と御息所と一緒に葵上を打つところ、保守派、守旧派はちょっとひっかかるのではないですか。私と一緒に見所にいた友人が「やっぱり御息所一人だけの方がスッキリしていい」といっていましたがどうでしょうか。微妙なところですが、青女房を出した以上、あすこまでいかなくては演出者の気がすみますまい。

私は「沢辺の蛍……」の型どころよりも、クドキから「恨みはさらに尽きすまじ」まで、座ってボソボソ謡ったり動いたりしているあたりが一曲のヤマで、演者としても一番むつかしい、苦しいところかと思うのですが、下手をすると、素人の見所は退屈しかねない。退屈する方が悪いといわれればそれまでですが、あのあたり、もっとメリハリをきかせることはできないものか、恨み泣きに泣いたり怨念を燃やすうちに感情が高潮、興奮して「いまは打たではかない候まじ」と立上り、嫉妬の狂乱「うわなりうち」に及ぶ段取り（心理的裏付け？）が、高貴な女性を主人公とする幽玄のワクの中でも表現の仕様があるのではないか。ここは演者の腕次第ということかも知れませんが。（泉なら出来たはずです）はからずも二月十四日の名古屋観世会（熱田）で観世元正の「班女」を見ましたが、「さるにても」から立ち上り、有名な「闌干に立ちつくし」の型にかかる前、何もしない居グセの部分が素晴らしくよかった（これは地謡の協力が大きかった）こと、それが橋掛りで型を生かしていたことを思い出し考えさせられました。

後場の小書「空の折り」は小聖が生霊の姿を見失って小袖に向い一心不乱に祈るのを、橋掛りの生霊が嘲笑するように胸杖をして見つめるあたりが見どころらしいですが、別に大した興味もわきませんでした。とにかく素人でも少し研究的に読めばわかりそうな文句の矛盾が、どうしてながい間放っておかれたのか、あるいは矛盾を知りながら、なぜあえて追及しようとしなかったのか、不思議ですね。

（M）

信玄袋

―「グーテンベルク聖書」、番組の並べ方、本のこと―

二月下旬、二五日から丸善（名古屋）で頭書の「グーテンベルク42行聖書」（ラテン語）公開展が催される案内状をうけた。グーテンベルクと活版術（活字本）のことは中学（旧制）の西洋歴史で、その文化性のことを教わったが、グーテンベルヒと習った覚えがある（近か頃はモーゼがモーセ、ベルグソン＜哲学者＞はベルクソンと本に書かれている）。そしてグ氏の名は児童用の物語本で知っていたはずである。それがはからずもこのたび「グ氏聖書」を目前にする機会を得て色々のことが学べると胸がはずんだ。しかし病気養生中と寒さきびしい折とて対面は出来なかった。同時に展示されている哲学書（写本）もみたかったのであるが。

丸善本は上下二巻のうちの上巻（旧約聖書）で昨年十月米国の競売でまことに運よく日本へ、丸善の手に落ちた。約八億円で。大貴重本であろう。これをテレビの紹介で眼福の栄に与るが、NHK（名古屋）ほかその紹介（報道）振りには感心しなかった。

「学燈」（丸善。月刊。好書。昨年第八四巻）の本年一月号はその特集号である。＜グーテンベルク聖書日本請来の意義・寿岳文章＞グーテンベルク聖書物語・庄司浅水ほか三篇＞。寿岳氏は「＜前略＞美しさに敏かった先人がやっと定着させた明朝活字はどこへ消えたか。印刷物のどこにもかしこにも、見るからに胸がわるくなる軟体文字やワープロ様式が幅をきかせている。カヴァー本来の意味さえ忘れてしまった書物人は、この際、襟を正してグーテンベルク聖書の前に立ち、書物本来の姿を深く脳裡にきざみこむべきであろう」と強調して結ぶ。グ氏聖書の意義とあわせて、何となく現在の能界の一端に触れるような気配を感じさせた（世阿弥随筆＜桧書店＞のうち＜工夫と変奏と記録・福原麟太郎＞関連）。

明年が丸善創業百二十年に当る記念の催事である。

× × ×

内藤泰二氏（宝）が名古屋市芸術特賞（六二年度）を受けられた。名古屋のシテ方の受賞はまことにうれしい。私も二月十五日の式典に招かれていたが、欠礼した。名古屋能界で同芸術賞の受賞者は五人を数える（特賞三、奨励賞二名）。能楽タイムズ三月号の第一面で大きく晴れやかに扱われる。第一回特賞（五四年度）の井上松次郎氏のときは同紙七月号（昭五五）で小林責氏との狂言対談が名古屋の狂言（狂言共同社）をしみじみと語り合った。

今から祝賀の能に何を舞われるか、楽しみである。なにとぞ能の心をいよいよ深められたい。

× × ×

観能は二月三日の宝生会だけ。実は一月末の青陽会とこの会の番組（曲）の並べ方について寸見を。まず青陽会では切能の船弁慶の直前に巴の仕舞が。長刀を扱う曲が続く。見くらべられるし、仕舞と能であるから、続けてもよいのであろうか。こういうことは避けた方がよいと先輩から聴いている。最近は幅広い取り扱いになったのであろうか。他方、宝生会では、加茂物狂（中ノ舞）・葛城（大和舞）・西行桜（序ノ舞）と並んだが、葛城が神楽の舞になって、三種の舞になった。しかし今の私に舞の曲三番は気が重い。もっとも初番はみなかったが、もちろん中ノ舞で進んだことと推察する。

なお、大坪十喜雄氏の葛城は舞のあたりみごたえあり。同氏のあのまるい謡は、流儀こそちがえ、桜間金太郎氏の謡とよく似て、味わい深い。また内藤泰二氏の西行桜は開雅のうちに一と刷毛はなやぎをみせた。趣あり。

× × ×

本。岩波新書の50年。二月。千五百点の刊行突破もあわせて記念。昭和十三年から昨六二年までの一四九七点の既刊書総目録を収める。六三年一月に発行が千五百点を超え、十一月で満五十年を迎える。赤版がまず出、次に青、それから現在の黄版となる。はじめの装釘は児島喜久雄氏（故人）で、今でも扉を飾るカット（四人＜四隅＞の子供が風を吹いている上からみおろすカタチ）はすぐれて、なつかし。能、狂言では＜能の話＞・＜観阿弥と世阿弥＞・＜戦国乱世の文学＞・＜日本文学の古典＞・＜歌舞伎以前＞・＜狂言役者＞など順序不同に挙げたが＜能の話＞は十五年に、＜狂言役者＞は六二年で目録の最後に載る。私の＜能＞はボロボロになっている。十三、四年に出て、紙の古びた＜奉天三十年＞・＜日本的性格＞・＜ミケルアンジェロ＞ほか数冊は今も在る。岩波文庫総目録との比較はやめた。

付、右著者名は省く。総目録の最後の年が六一年となる。

（野村広二）

青陽会定式能（第三十二期）

四月十六日（土）十二時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞 須磨源氏　祖父江修一
網之段　須部甫
鞍馬天狗　今村喜勇
地謡 今沢美和 幸江 前野都子 生駒里翠
玉木孝男
松山幸親

能 竹生島　杉江高安 飯富勝久 雅介元
後藤孝一郎 河村真之介 鹿取助川 希世龍夫
間 佐藤友彦
後見 前野都子 梅田邦久
地謡 今沢美和 生駒里翠 馬場信至 今村久田 嘉勇 加藤保彦 祖父江修一 清沢政一 久田徹二

仕舞 東北　本田勲
船橋　高橋暸一
地謡 須部甫 祖父江修一 武田邦弘 加賀敏彦

能 杜若　高安勝久 福井啓次郎 鬼頭英二
近藤幸江
後見 今沢美和 久田徹二
地謡 生駒里翠 馬場信至 本田勲 小島一英 今村嘉勇 須部甫 高橋暸一 加賀敏彦

狂言 空腕　井上礼之助　井上松次郎

仕舞 笠之段　小島一英
笹之段　武田邦弘
鵜之段　久田徹二
地謡 松山幸親 高橋暸一 中川雅章 祖父江修一

能 藤戸　飯富雅介 杉江元 鉱一 柳原冨司忠
梅田邦久
間 大野弘之
後見 近藤幸江 小島一英
地謡 前野都子 玉木孝男 松山幸親 本田勲 加藤保彦 中川雅章 武田邦弘 清沢政一

附祝言

主催 青陽会

〔要会員券〕当日券 三千円

邦謡会大会

四月十七日（日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

素謡 神歌　本田勲　須部甫

雨月　岩田徳七 杉山正一　岩田竜蔵

花筐　五藤時子 瀬辺聡子　坂川すう 溝口乙子

弱法師　高木正之　橋本治雄

仕舞 猩々　成田英生
江口クセ　妹尾久
道明寺　山本泉
小田澄子 平岩孝子　野田健三

素謡 砧

舞囃子 巻絹　野田博子　河村真之介 後藤孝一郎　助川鹿取　竜夫希世

二人静　岡田美佐子 松本直子　河村真之介 後藤孝一郎　助川鹿取　竜夫希世

百萬　森崎紀子　河村総一郎 後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
法楽之舞　鈴木志ず子　成瀬由喜恵

素謡 鵺　鵜小町

仕舞 胡蝶　正キリ
経　大塚多希子
殿下　成田裕子
番外仕舞 放下僧小歌　片山慶次郎
二木暉子

能 半蔀　西村欽也　河村総一郎 半田智子　藤田六郎兵衛
間 野村又三郎
後見 武田欣司 片山慶次郎　本田勲 橋本
地謡 須部甫 清沢政一 古橋正邦　磯道 橋本雅夫 梅田邦久 武田邦弘

仕舞 白楽天　丹羽久子
浮舟　牧野あい子
小鍛冶クセ　丸井寿子

舞囃子 松風　坂野富子　河村総一郎 福井啓次郎　藤田六郎兵衛
戯之舞

雲林院　高野千勢子　河村総一郎 福井啓次郎　助川鹿取　竜夫希世
藤田六郎兵衛

素謡 三山　岩田幹男 畑場吉成　橋本正晴

仕舞 井筒　徳田文代
仏原　宮川千尋
阿漕　井上苑枝

舞囃子 絵馬　坂野寿夫 名取和弘 井深一　河村真之介 福井啓次郎　鹿取助川　希世竜夫

養老　磯谷行雄　河村総一郎 福井啓次郎　鹿取助川　希世竜夫
水波之伝

番外舞囃子 熊坂　梅田邦久　河村真之介 福井啓次郎　鹿取助川　希世竜夫
（終了予定 六時三十分）

附祝言

〔御来場歓迎〕

主催 邦謡会
梅田邦久

創立十周年記念 初陽会大会

四月二十三日(土)午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡 高砂（松木千俊　宮崎一　新井和明）
紅葉狩（鷲見弘　恒川義朗　祖父江修一）
杜若（岩城ユキ　小川明宏）
忠度（大谷シズカ　大谷藤吉）
藤戸（高橋すゑの　岡久広　武田尚浩）

仕舞 草子洗小町（遠藤久枝）
蝉丸（鈴木容子）
鐘之段（安仁屋佳江）
夷（盛キリ　大谷藤吉）

素謡 求塚（小川博久　宮川美代子　武田宗和　地謡 武田　武田　古橋　藤井　観世　元正　完治　志房　尚浩）

能 菊慈童（神沢幸吉　飯富雅介　後見 筧鉱一　藤田六郎兵衛　地謡 清沢一政　小川明宏　中川雅章　林喜一郎　小島一英　藤井徳三　岡久広　後見 武田宗和　観世元正　地謡 助川竜夫　藤田六郎兵衛　松木千俊　小川喜一郎　中川雅章　林明宏　小島一英　藤井徳三　岡久広）

素謡 定家（岩本美智子　瀬川外波）

重要無形文化財 中日名匠鑑賞能

四月三十日(土)午後一時開演
愛知県文化講堂

能 景清（武田志房　武田宗和　観世元正　福王茂十郎　柿原崇志　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　松門之出　小返）

仕舞 難波（藤井徳三）
隅田川（山崎英太郎　地謡 水藤元三　中川雅章　加賀敏彦　久田音重　坂井徹二　角寛次朗）
鵺（関根祥六）

能 二人静（観世清和　観世元昭　立出之一声　西村欽也　後見 柿原崇志　福井啓次郎　森田光春　後見 坂井音重　野村四郎　地謡 今村嘉勇　菊池重郎　高橋瞭一　中川雅章　浦田保浩　勝海寛次郎　関根祥六　小島一英　藤井徳三　角寛次朗　山崎英太郎　中村和男　加賀敬彦　野村四郎　中川寛次郎　岡本房雄　堀武久　藤井徹二　田中敬彦　角寛次朗　梅若紀彰　山崎英太郎　地謡 中村保彦　加賀敬彦　野村四郎　中川寛次郎　岡本房雄　堀武久　藤井徹二　田中敬彦　角寛次朗）

番外仕舞 梅キリ（鈴木信太郎）

能 蔀（観世元正　西村欽也　後見 武田宗和　観世元正　地謡 祖父江修一　新井和明　上田貴弘　武田尚浩　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世　大矢高義　間 鹿取希世　助川竜夫　鹿取希世）

狂言 鬼瓦（野村又三郎　井上礼之助　上田貴弘　杉本勉　藤井完治　地謡 武田宗和　観世元正　小川明宏　藤井徳三　郭太郎　古橋正士　武田志房　岡久広）

素謡 恋重荷（浅井一元　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世　助川竜夫　鹿取希世）

舞囃子 砧（玄象　山本一　後見 河村総一郎　後藤孝一郎　武田宗典　野崎博子）

能 船弁慶（西村欽也　後見 筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　間 野村又三郎　後見 古橋正士　武田宗和　地謡 清沢一政　小川雅章　小島一英　中川博久　藤井徳三　郷武　郭太郎　志房　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　林喜一郎）

番外舞囃子 養老（武田宗和　水波之伝　河村総一郎　柳原冨司忠）

祝言（終了予定　五時四十五分）

〔御来場歓迎〕主催 初陽会　武田宗和

狂言 萩大名（野村万作　野村武司　野村又三郎）

仕舞 雨月（梅若盛義）
清経（角寛次朗）
求塚（野村四郎　地謡 高橋瞭一　小島一英　関根祥六　観世清和　祖父江修一）
船弁慶（坂井音重）

梅若靖記
梅若晋矢
赤瀬雅則
梅若紀彰

能 紅葉狩（替之型　替装束　福王茂十郎　中村弥三郎　村瀬純　河村総一郎　後藤孝一郎　森田光春　助川龍夫　間 野村信行　石田幸雄　後見 梅若節夫　山崎英太郎　地謡 松山幸親　本田勲　須部甫　武田哲久　梅若盛義　志房　武田音重　坂井宗和　上田公威　祖父江修一）

主催 中日新聞社

特別席 前売九千円（当日一万円）
A席 前売八千円（当日九千円）
B席 前売六千五百円（当日七千五百円）
C席 前売四千円（当日五千円）（全指定席）

◆如月の舞台から◆

「宝生会」「観世会」「九皐会」

竹尾邦太郎

「柑子」　当時の柑子（密柑）は極めて珍重された果物。それを三個共食べてしまったシテ太郎冠者・友彦。アド主・礼之助の好人物を呑んでかかる厚顔と口八丁の弁明が、逃げ腰めいた立シャベリであるだけに軽薄な太郎冠者像に旨く仕立てた。後味はよくない。（12分）

「西行桜」　シテ泰二。市芸術特賞受賞後初の意欲的な舞台。面舞尉・黒風折・白垂・襟浅黄・小格子厚板・茶の里狩衣は地紋に枝垂桜を透かす凝りようであるが、鮮やかな萌黄大口は褪色の寂びたものであって欲しかった。しかし内容はどこまでも閑雅。へ花見んと群れつつ人の来るのみぞ、あたら桜の科にはありける、に敢て異を唱えるのでは無く、この歌をきっかけに姿を現わした趣があり、序ノ舞の悠々閑々とした静けさの中には、月下に舞い遊ぶ老桜の精の逞しい生命力に支えられた勁さもあった。しかしキリ近く、へ待て暫し、と招き扇の後の、へ夜はまだ深きぞ、のところ、齟齬があったか一寸渋滞したのは残念。

ワキ欽也。小格子着流シ・黒水衣。如何にも閑栖の西行に相応しい奥床しさが好ましく、冒頭のサシ謡も春を愛する想いがしみじみと感じられる名調だった。また、作物の柱の歪みも無く、櫟に挿す桜に模した淡紅色五弁の花も上品だった。（62分・2月7日・宝生会）

「大社」　稀曲（但し62年6月京都「蘭の会」シテ元三郎がある）シテ元昭。翁烏帽子・縷狩衣・白大口・面小牛尉。萩箒を持つ老翁がワキ延臣・欽也に畏れの色も無く正中下居して狩衣の肩を下すと更に寛ぎ、地との掛合に時々ワキにアシラウ何となく曰くあり気な雰囲気が先ず引きつける。アイ末社ノ神・友彦。立シャベリ・三段ノ舞と形通り。替って天女・邦久が瓔珞を煌かせての天女ノ舞。神々の集う庭の一大ページェントのクロ[illegible]である。やがて、へ神体現れおはします、と引廻が下されると、容貌魁偉の大悪尉に烏兜を戴き、白地桧垣唐花文様袷狩衣・萌黄半切の後シテが、作物狭しと圧倒的な迫力で泰然と床几に居る。楽は磐石の威容が悠然と移動する趣で、ずっしりとした足拍子ゆったりとした袖アシライ、ずかりとした運びなど雄勁な骨格をもち、晦渋味も充分。エピローグの龍神・邦弘の舞働も小気味よく、へ諸神は虚空に遍満しつつ、と豪快に両袖を巻き上げるシテ元昭の大きさが強烈だった。

囃子は六郎兵衛・源次郎・鉱一・龍夫。気魄溢れる立派な囃子だった。地は四郎・徳三ら。後見・元三郎・裕久。（1時間52分）

「文蔵」　シテ又三郎。我と我が語りに陶酔して思わず仕形に熱が入ってしまったのが些か照れ臭かったのであろう。「主に骨を折らす。退りおれい」、のキリがじわりと利いた。計算もあるだろうが、それを感じさせない首尾の整った出来だった。アド信行。科白の無い時の表情に余裕が出てきて進境著しい。（25分）

「班女」　アイ松次郎の状況設定の旨さが光る。憤怒を押えに押えた佛頂面もさりながら、言葉を口に出すのも厭らわしいといった様子がありありで、最後に爆発する、「またしてもまたしても此の扇を持ってるる」、が利き、毫り取らんばかりに扇を取り上げる邪慳が凄まじい。シテ元正がまた殊更しおしお運ぶので、この無言の時間の長さが怖かった。クモリがちの面（増か）は目の下が涙で煤けたように黒っぽく、終始沈痛。

後シテは想いが内向するようなカケリ。クセ後半、立って一ノ松に抜け、へそなたの空よと眺むれば、と薄く左上を見る辺。いちらしい程の思慕が感じられた。中ノ舞の清婉。へ鹿の音、虫の音も、とスミで静かに面遣としたのも心持深く、へ人に見る事あらじ、と扇を胸にそっと押しつけるところなど不悉だった。ワキ吉田少将は美丈夫の茂十郎。美男美女のしっぽりとした趣返は些か情に流されたか。しかし元正の身も世もない甘美な風情得難い。（1時間22分・2月14日・観世会）

「鵺法師」　シテ直也。三ノ松で一セイを謡い、へ九曜の曼荼羅の、と運び出すと何事もなくすらすらと舞台に入り、常座手前で佇ると柱に向き直り、へ石の鳥居となれや、と杖を軽く触れ、撫り下した。型少なの中に勝手知った通い路の気分があった。しかし以後は気負いがあったか、施行を受けた後の手順など少々ぎこちなくまた下居で度々膝が割れるのも気掛りだった。イロエは静かでよかったが、へ万目青山は、と扇で強く胸を打ち、更に押しつけるようにしたのと、貴賤の人に行き会うところの足拍子は強すぎるように思った。全体にアクセントが付きすぎたと言うべきか。ワキ雅介。脇正でユーケンしてトメるとき、あまり嬉しそうには思えなかった。（62分）

「熊野・読継ノ伝・村雨留」　シテ喜之。面若女。御所車・枝垂桜・鳳凰文様紅白段唐織をすっきりと着けた姿は仄かに淋しく且つ可憐で、付き過ぎると見える装束の文様が逆にイメージを脹らませる喜之の充実ぶりだった。

小書でワキが文ノ段を、へただ然るべくは宜きやうに申し、暫しの、まで読み、後をシテが読み継いだが、へ申し、は期せずして同吟になった。何処で読み継ぐかは予め決められているのではあろうが、シテの願望が思わず吐露された気分で深い共鳴を覚えた。初間を受け、暇を乞うシテを峻拒するワキに、恐る恐る顔を上げようとして上げかねず、藁にも縋る気持に、へただ御暇を賜はり候へ、で初めてシオル胸中がせつない。車が出され、へはや御出でと勧むれど、とワキ・ワキツレ一斉に立ち上るその気配に、一瞬ワキにアシラッたシテの、やはり願いは無視されたか、の失望落胆の表現など素晴しかった。中ノ舞の途中、大小流シで一ノ松へゆき、右左細かく身体を動かすのは身悶えのように思え、また、へあら心なの、以下の狂乱は哀艶一入だった。心に屈託のある熊野の、陰翳に富んだ心理描写と身体の表現の肌目の細かさ、出色の舞台だった。（1時間28分・2月21日・九皐会）

10日発行）
友社
18-18
8 4
393
0円
0円
0円
62年度日本芸術院賞
観世流シテ方 梅若恭行氏
れまで通算十四人（うち故人十人）で、今回の梅若恭行、観世元正両氏を加え、近藤悠三（昭和三十四年受賞）桜藤得三（昭和三十七年
創立十周年記念 初陽会大会
四月二十三日(土)午前九時始
久田観正会春の素謡会
四月二十四日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場
名古屋総鎮守 若宮八幡社
各種会合や宴会にも御利用下さい
（駐車場完備）
名古屋市中区栄3丁目35—30　電話（241）0810

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋 0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年　1200円
一部　70円

62年度日本芸術院賞

観世流シテ方 梅若恭行氏
観世流宗家 観世元正氏

日本芸術院（有光次郎院長）は三月二十八日、芸術の各分野で優れた業績をあげた人に贈る六十二年度（第四十四回）の芸術院賞として十氏を内定、四月四日の総会で承認され、正式決定した。

能楽関係（第三部＝音楽・演劇・舞踊）では、観世流シテ方・梅若恭行氏（七〇）、観世流宗家・観世元正氏（五七）が受賞。両氏のほか芸術院賞は、洋画の大内田茂士、小説の八木義徳、日本画・鈴木竹柏、彫塑・中村晋也、工芸・三谷吾一、建築・池原義郎、歌舞伎の片岡孝夫、舞踊の花柳寿楽の諸氏。

芸術院賞の選考は、第一部（美術）、第二部（文芸）、第三部（音楽・演劇・舞踊）の各部会から四十七人の推薦があり、一部五人、二部一人、三部四人の受賞が決定された。

授賞式は六月上旬、東京・上野の日本芸術院で行われ、芸術院賞として賞状と賞金五十万円が贈られる。

能楽関係での芸術院賞受賞はこれまで通算十四人（うち故人十人）で、今回の梅若恭行、観世元正両氏を加え、近藤乾三（昭和三十四年受賞）後藤得三（昭和三十七年受賞）梅若雅俊（昭和六十年受賞）野村万之丞（昭和六十一年受賞）の六氏が活躍している。

梅若恭行氏、観世元正氏の授賞理由は次のとおり。

梅若恭行氏（うめわか・やすゆき、本名泰男＝やすお）

能の優れた演技に対して。父二世梅若実の薫陶を受け、特に女性に扮する三番目物に優れた演技を見せた。東京都生まれ。

観世元正氏（かんぜ・もとまさ、本名正司＝まさし）能楽界に尽くした業績に対して。観世流宗家として幼少より能一筋の道を歩み、真摯かつ幽玄な能で新生面。東京都生まれ。

奈良薪能

5月11、12日に催行

南都春日・興福寺古儀薪能は、五月十一日（水）十二日（木）の両日催される。

春日大社〈兜師走りの儀〉は午前十一時始、能「翁」、十二月往来・父尉・延命冠者」金春晃実、ツレ高橋忍・阪田力。興福寺〈南大門の儀〉は午後四時始。能「是界」金春安明、「杜若」（観世喜之）「巻絹」（宝生英雄）「藤戸」（金剛巌）が上演される。十二日には御社上りの儀で金春欣三師はじめ能四番、狂言。

金春流 伊勢神宮奉納能

金春流の伊勢神宮奉納能は、四月五日、内宮参集殿能舞台で催された。

能「恋重荷」（金春晃実、ツレ金春穂高）囃子「紅葉狩」（本田光洋）ほか仕舞など。

観世宗家が来演
初陽会10周年記念大会

初陽会（武田宗和師主宰）は、東京で同会で始められてから十年目に当り四月二十三日（土）十周年記念大会を熱田神宮能楽殿で開催する。この記念大会には、名古屋初陽会としては始めて観世元正宗家が来演、盛会が期待される。

能は「菊慈童」「半蔀」「船弁慶」素謡「恋重荷」「求塚」など八番、舞囃子、仕舞など。来場歓迎。（番組①面）

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮能楽殿）

〔4月〕
16日（土）青陽会定式能（有料）
17日（日）邦謡会（来場歓迎）
23日（土）10周年記念初陽会大会（来場歓迎）（番組①面）
24日（日）久田観正会（来場歓迎）（番組①面）
29日（祭）幸友会春の会（来場歓迎）（番組①面）

〔5月〕
3日（祝）豊水会（来場歓迎）（番組③面）
4日（休）丽謡会（来場歓迎）（番組③面）
5日（祝）巽会（来場歓迎）（番組③面）
7日（土）長生会追善能（来場歓迎）（番組③面）
11日（水）たまも会（来場歓迎）（番組④面）
15日（日）やるまい会（来場歓迎）（番組④面）
21日（土）観世九皐会（有料）
22日（日）名古屋観衛会（来場歓迎）
29日（日）清韻会能（有料）

〔6月〕
5日（日）熱田祭奉納能（来場歓迎）
12日（日）観世会定式能（有料）
19日（日）宝生会定式能（有料）
22日（水）能と狂言の会（有料）
25日（土）一謡会・叶石会（来場歓迎）
26日（日）狂言也留舞会（来場歓迎）

〔7月〕
3日（月）観世九皐会定期能（有料）
9日（土）野村四郎の会（有料）
10日（日）朝日狂言会（有料）
17日（日）観世素謡会（有料）
24日（日）呉竹会（来場歓迎）
31日（日）青陽会（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

創立十周年記念 初陽会大会

四月二十三日（土）午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡 高砂（松木千俊、宮崎一、新井和明）
紅葉狩（鷲見弘、恒川義朗、祖父江修一）
杜若（岩城ユキ、小川明宏）
忠度（大谷シズカ、大谷藤吉）
藤戸（高橋すゑの、岡久広、武田尚浩）

仕舞 草子洗小町（遠藤久枝）
蝉丸（鈴木容子）
鐘之段（安仁屋住江）
実盛キリ（大谷藤吉）

素謡 求塚（小川博久、宮川美代子、武田宗和、地武田古橋、藤井完治、観世正士、武田尚浩）

能 菊慈童（神沢幸吉、飯冨雅介、笠後藤孝一郎、鉱一助川竜夫、藤田六郎兵衛）
後見（武田宗和、観世元正）地謡（松木千俊、清沢一政、中川雅章、小島一英、小川林喜一郎、明宏、藤井徳三、岡久広）

素謡 定家（岩本美智子、瀬川外波）
番外仕舞 梅キリ（観世元正）

能 半蔀（西村欽也、河村総一郎、福井啓次郎、鹿取希世）
間（大矢高義）
後見（武田宗和、観世元正）地謡（新井和明、祖父江修一、古橋正士、藤井完治、上田貴弘、武田尚浩、武田志房、岡久広）

狂言 鬼瓦（野村又三郎、井上礼之助）

素謡 恋重荷（上田貴弘、杉本勉、藤井完治、地観世徳三、郷郭太郎）

舞囃子 砧（浅井一元、河村総一郎、福井啓次郎、鹿取希世）
玄象（山本一、河村総一郎、後藤孝一郎、助川竜夫、鹿取希世）

能 船弁慶（西村欽也、笠鉱一、柳原冨司忠、鬼頭喜太郎、藤田六郎兵衛）
間（野村又三郎）
後見（古橋正士、武田宗和）地謡（渋沢一政、中川雅章、小川博久、小島一英、郷郭太郎、武田志房、藤井徳三、林喜一郎）

番外舞囃子 羨（武田宗和、河村総一郎、柳原冨司忠、鬼頭喜太郎、藤田六郎兵衛）
水波之伝

（終了予定　五時四十五分）

〔御来場歓迎〕
主催　武田宗和
初陽会

久田観正会春の素謡会

四月二十四日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡 橋弁慶（番組：子方太田久、トモ大類忍、吉田寛）

仕舞 高砂（砂井深由実、鶴亀梅村展子）
経正キリ（近藤とこ代、村クセ山内ふさ）
々（平野裕子）
猩々（島加藤木邦夫、天鼓今尾正治）

素謡 西行桜（服部喜美子）

仕舞 竹生島（渡辺優子、清経木野島定子）
笹之段（霧木サチ子、経キリ岡田康子）

素謡 藤戸（若山あや子、石黒直子、田中雅子）

仕舞 班女（渡辺郁子、富士太鼓江川恵美子）

素謡 恋重荷（鈴木金子、稲垣つね子）
独吟実方（小田切敏子）

仕舞 高砂（子方梅村展子）
〃（井深由実）
〃（近藤とこ代）
〃（山内ふさ）
〃（臼井澄子）
〃（間山美恵子）
〃（安藤美智子）
〃（斉藤利子）
〃（前畑ハマ子）
〃（前野郁子）
〃（岡山敬子）

素謡 安宅（大脇寿美子、広中敬樹）

仕舞 花月キリ（神谷貞子、田中雅子）
笠之段（横井余史子、稲垣つね子）
鵜（星野路子）

素謡 正尊（吉川宇良子、佐野正吉）

仕舞 桜川（今川猛、小町通）
玉鬘（安藤録郎、神谷功）
鵜之段（星野路子、早川浄）

素謡 求塚（久米宏枝、岩田春江）

仕舞 高砂（砂井澄子、盛クセ間山美恵子）
羽衣キリ（安藤美智子、蝶前畑ハマ子）
女クセ（斉藤利子）
班女（坂）

番外仕舞 鶴（久田徹二）
（五時頃終了予定）

附祝言

〔御来場歓迎〕
主催　久田観正会
名古屋市北区東水切町四—四三
久田徹二

幸友会春の会

四月二十九日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

囃子二十五番、連調四番
一調「駒之段」泉嘉夫、上野智永

〔御来場歓迎〕
主催　幸友会

春雅日記 ㊶

早春の野草

えと文　二井栄逸

門の中に咲いた白の沈丁花は、今真盛りである。今のところ、外出する時も、家に帰る時も、この沈丁花がただよわせる春の香りの中をくぐりぬけて出入りしている理である。

沈丁花は、よい香りのする花木の代表的なものの一つで、春のおとずれを実感として知らせてくれるのは、どの木よりもまさっている。

二月にはスノードロップ、三月に入ると、翁草、かたくり、あまな、いかり草等、次々とまだ肌寒い初春の大気の中に顔を出してくる。

元人事院総裁であった佐藤達夫氏は、自著の「画文集」に、あまなのことをこうかいていられた。

「わたしが少年期を過ごした筑後辺では、よく麦畑のふちでこの花をみかけた。母から〝麦ぐわいの花〟という名前を教わったのもそのころである。

東京の郊外でもときどき出合うが、いまでもこの花を見ると、南国の麦畑の濃い陽炎と、空のひばりのにぎやかなさえずりを思い出す」

氏は「日本国憲法成立史」を始め、法律関係の専門の著書の外に、花の画文集や花の画集を出版されている。

東京山草会、日本シダの会のメンバーで、昭和四十一年度日本エッセイストクラブ賞を受賞されたことは、どれかの新聞で拝見したことを覚えている。

あまなは、氏の画文の中にもあるように、田園風景にはよくにあう花で私も好きである。

先年、南九州横断の旅をした時、都城（みやこのじょう）から、霧島の方へかかる丘陵地で白々とあまなの咲いているのを見た。

× × ×

スノードロップは、雪の花ともいうぐらいで、まだ雪の残る早春の野山に白い花を咲かせるほんとうにおとぎの国から来た早春の天使のような花なのである。

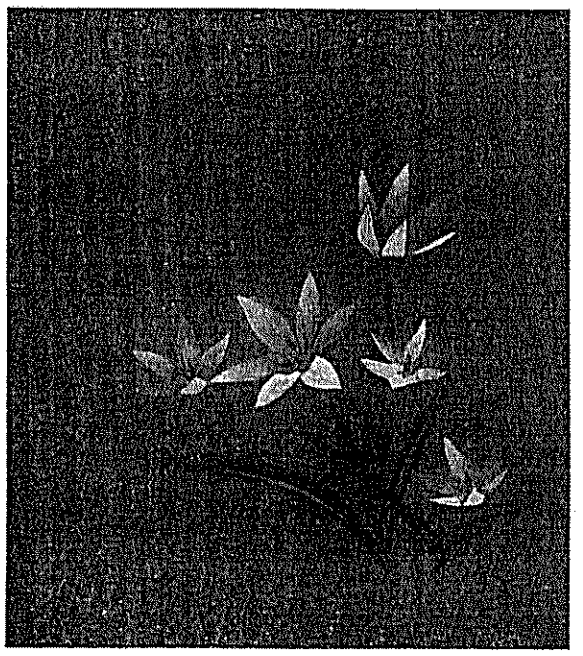
アダムとイブが天国から追われた時、地上には雪が降っていたが、天使が彼らをなぐさめようと春の近いことを語り、その手で雪にふれたとたん、雪はスノードロップの花に変ったというのはヨーロッパの伝説。

二枚のやわらかい葉が雪のしづくのような純白のつぼみをそっと抱えて地上に顔を出す。

日が昇ると、外がわの花びらが開き、逆V字形の若緑のマークをのぞかせ、夕方になると、又、純白のペンダントの姿にもどる。

早春の花にかぎらず、どの花々もそれぞれの生き方をしくみ、永遠のいのちをほこっているのは素晴らしいことである。

（63・3・31記）



多彩な宇高通成後援会活動

京都

金剛厳宗家の直弟子として芸道に精進する金剛流シテ方・宇高通成師の活躍を支援する「宇高通成後援会」は昭和五十八年発足、能を楽しむ会演能、エンジョイ能（能楽研究講座）開講、INI（国際能楽研究会）活動の後援など本年度はとくに多角的な活動を予定、後援会への入会がひろくよびかけられている。

宇高通成師は昭和二十二年九月十八日生まれ。昭和三十五年金剛宗家内弟子入門、四十五年独立、景雲会主宰。五十九年ローマ・バチカン（ローマ法皇献能）公演参加、六十一年日米文化交流の会能楽公演団長として渡米、演能、能楽史上はじめて米国人師範を養成し、世界へのアプローチとしてINI（インターナショナル能インスティテュート＝国際能楽研究会）を設立し、世界各国に支部を増設・努力している。このINI第三回公演が「イベント能」として五月十四日八坂神社で能「半蔀」、英語能仕舞「雪」で行われる。

また六月十二日に、第五回能を楽しむ会開催・能楽研究講座（エンジョイ能）が京都で年三回、名古屋で二回、松山、東京でそれぞれ二回開催。

宇高通成君を励ます会発起人には会長にムーンバット㈱社長・河野年男氏はじめ、京都大学・乾由明、矢野暢、吉田光邦教授、梅原猛国際日本文化研究センター所長、阿合宗管長・相山靖雄氏、大阪芸大・依田義賢教授、京都歴史資料館長・森谷尅久氏らが後援している。

後援会事務所は京都市左京区高野泉町四〇、電話〇七五（七〇一）〇七九三・一〇五五番。

63年4月・5月放送予定

〔4月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
17日（日）喜多流「杜若」「百萬」喜多節世
24日（日）観世流「羅生山」浅見真州
〔教育テレビ〕祝日能（午前9時～10時）
29日　喜多流能「小鍛冶」喜多六平太ほか
〔5月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
1日（日）休止
8日（日）観世流「羅島」坂井音重
15日（日）宝生流「国栖」松本忠宏
22日（日）観世流「忠度」梅若万紀夫
29日（日）金剛流「高野物狂」種田道雄
〔教育テレビ〕祝日能（午前9時～10時）
3日（祝）金剛流能「頼政」金春信高　森茂好
4日（休）宝生流能「抵玉」近藤乾之助　鏑木岑男
5日（祝）狂言二題
和泉流「蟹山伏」和泉元秀
大蔵流「狸腹鼓」大蔵弥太郎
（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

観能独語

「海士」の感銘

毎吉酉歳自善能会

日本能面巧芸会

「新作能面展」

5月3日から市博物館で

員会、名古屋市教育委員会、能楽協会名古屋支部。

豊嶋弥左衛門師

0手祭自唐能

春会

豊水会春季大会

五月三日（憲法記念日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

番組

歌　梅田久美　高橋邦充

地謡　中所宜夫　弘田裕一　観世喜之　高橋暁一

舞囃子　高砂　倉地明美　鬼頭孝一郎　英二郎　助川龍夫　鹿取希世
小袖曽我　藤本紀子　鬼頭孝一郎　英二郎　鹿取希世
鞍馬天狗　神田和恵　鬼頭孝一郎　英二郎　助川龍夫　鹿取希世
舞囃子　熊野　杉浦希恵子　鬼頭孝一郎　英二郎　鹿取希世

仕舞　吉野天人　加藤かづこ

素謡　蝉丸　白井正光　林明夫　黒野芳郎　奈倉早苗　野村幸子

素謡　花筐　寺下武子　楠木真理　鬼頭孝一郎　英二郎　藤田六郎兵衛　助川龍夫

舞囃子　難波　早川寛　鬼頭孝一郎　英二郎　藤田六郎兵衛　助川龍夫
松風　高井紀美子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
紅葉狩　下尾和子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
急之舞　牛島康晴　吉田定男　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛
融　白井正光
独吟　三井寺　古橋輝彦
仕舞　嵐山　外山圭一
通小町　黒野芳郎
菊慈童

舞囃子　鶴亀　楠木真理　吉田定男　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世
杜若　上野美与乃　吉田定男　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世
班女　奈倉早苗　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
乱　寺下武子　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

素謡　鉄輪　武井正臣　森谷達男　牛島康晴

舞囃子　桜川　磯部光子　河村総一郎　福井啓次郎　森本重一
玉鬘　田中喜代子　河村総一郎　柳原富司忠　森本重一
松虫　高橋邦充　吉田定男　柳原富司忠　森本重一
羽衣　浅見節子　吉田定男　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　森本重一

素謡　阿漕　鈴木英輔　森谷達男

船弁慶　上野美与乃　宮地俊彦　山田守男　児玉宏

（六時頃終了予定）

附祝言

主催　豊水会

（御来場歓迎仕舞）高橋旅一

萌謡会（第八回）

五月四日（休日）午前十時半始
熱田神宮能楽殿

連吟　草子洗小町　関谷千勢子　高野千尋　井上苑子　宮川枝尋
ロンギ　森崎紀子　小林富美子　今沢美和　半田智子　村中恵

仕舞（舞紀謡会）道明寺　伊東亮兎
柏崎　道行　堀藤吉郎
龍太鼓　三浦房子

素謡（勲謡会）葛城　久保田要子　山田真一
クセ省ク

連吟（富謡会）忠度　地謡　浅井敏　加藤敏　宇野鈴木正雅　山際愛静子　林本田靖　川本作二郎　伊藤広光　山陽太郎三勲

仕舞（芙蓉会）雛波　片岡なゝ子　地謡　梅田邦久　半田智子　小林富美子

独吟（千謡会）鶴山姥　日名地節子　川瀬富士子　有浦敦子

仕舞（和謡会）藤生田敦盛　富永豊子
クセ　鈴木千鶴子　地謡　宮川千尋　今沢美和　梅田邦久
東北キリ　増田仁美
葵上　種村とし江

素謡（誠謡会）松虫　戸田貞之丞　鈴木照之
サシ、クセ省ク　地謡　広瀬正雄　渡辺　西崎明政　堀場吉成登

連吟（恵謡会）羽衣　戸本晋　石井君子　岩木咲子　日江井俊子　長屋とみ　渡辺善子
サシ、クセ
菊慈童　大竹初美
船弁慶クセ　尾関喜久子
若キリ　福田やえ子　地謡　宮川千尋　梅田邦久　本田勲
手島照子
風　安井秀子
内藤和彦　金岩勇夫

仕舞（千謡会）杜若　地謡　野崎三千代　加藤美智子　宇佐美光彦　伊東亮晃　稲山陽太郎　伊藤広光　本田勲　岩田昇
千尋

素謡（勲謡会）松風　クセ省ク

仕舞（舞紀謡会）三江　雨之段　地謡　川瀬剣松　八代高子　大野操子　地謡　半田智子　梅田邦久　森崎紀子
輪ロクセ

連吟（薫謡会）蝉丸　岡川園枝　加藤静子　正村千代子　岡田房子　宮田初江　関谷薫　高橋武子
サシ道行
班女アト
笠クルイ

仕舞（千謡会）花筐　地謡　今沢美和　梅田邦久　宮川千尋
鉄輪　近藤かづゑ　水野次子

葛城　近藤幸江　山口義郎

舞囃子　胡蝶　鬼頭尚久　鬼頭孝一郎　英二郎　牧野繁次郎　森本重一
養老　村瀬郁子　鬼頭英二郎　鬼頭忠　好信

（3面につづく）

観能独語

「海士」の感銘

梅若猶義追善能会

故梅若猶義十七回忌追善能会が四月三日熱田神宮能楽殿でありました。大幹部の梅若盛義（俊寛）岡田朗詠（求塚）梅若修一（海士）が、大曲難曲に挑んで熱演、見ごたえがありました。優劣の比較は難しいですが、私の好みからいうと修一の「海士」が一番面白かったです。

この人の能は表現が平易でわかり易いのが特色です。平易でわかり易いといっても、俗っぽいとか、品が悪いとか、大衆受けする芸という風にとられては困ります。むしろ反対に理解が行き届き、それを見所に伝える表現力がすぐれた親切な芸といった方が当りましょう。私はそうした芸の持主は大切な現代感覚にすぐれているはずだと思います。

そういう意味で修一は私の好きな役者で、既に、二、三度この欄でもとり上げましたので、三人揃った大物の中で、あらためてとり上げるのは、いささか気がさすのですが、いいものはいい、好きなものは好きで仕方がありません。とんども、「海士」を中心に感想を述べたいと思います。

「海士」は有名な玉の段があり、この日の三曲の中で最もポピュラーな名曲です。玉の段が仕方話の面白さで大衆の興味をひきつけるのと同様に、「海士」という曲そのものが、母性愛という泣き所をおさえているために、新派悲劇的な甘さ、通俗性を能として高く評価しない向きもあるようですが、そうした見方には賛成できません。修一も同様とみえて、あえて母性愛の甘さに徹して見所を感動させました。能の格調を保ちながらこれだけ切実なリアリティは凡手の出せるものではありません。

第一、登場したときの姿に身分いやしき海士の風情が見えました。ミルメを刈ろうとかけ出すところ、「しばらく」と呼ばれて足をとめるところ、この辺から胸に一物を感じさせるのが修一独特の妙技です、と、まあこんな調子でやっていますと時間がいくらあっても足りません。クライマックスの玉の段など、皆様とっくにご存知のこと、くだくだしく申しません。引込みの橋掛でしおるところなど泣かせました。ただ子方がなかなかいい柄ながら、謡がご詠歌か、歌謡曲じみて困りました。

後シテの龍女の早舞もさっそうとしていました。舞の前にシテ柱の辺から子方をじっとみておりましたが、龍女即海士の解釈か、わが子の出世を喜ぶ歓喜の舞のような感じでした。前後を通じてまるごと母性愛のあふれる人情劇に仕立て上げたところが修一です。これでいいのです。「俊寛」「求塚」に比べスケールのやや小さいうらみはありましたが、それが却って曲柄にふさわしい演技になっていました。盛義、朗詠ともに好演でしたが、「俊寛」は強毅すぎて絶望感はあっても哀れさ足りず、「求塚」は前場の情景備わる明るさが素晴らしかったが、陰惨な後場にやや難あり、そもそも純情可憐な乙女に地獄の責苦を与えるとは、いかに古仏教の伝統的女性観とはいえ、われわれ現代人にはなっとくがいかない。どんな名技でも、芸のための芸としか見えない舞台には興味がもてません。いっそ龍女即海士の演出の方が解釈の可否にかかわらず同感できます。

（M生）

「能楽研究」第13号

法政大学能楽研究所発刊

野上記念・法政大学能楽研究所発行の「能楽研究」第十三号が三月三十日発刊された。

表章氏の「車屋謡本」新考、小田幸子氏の「能の舞台装置」―作り物の歴史的考察㊦、落合博志氏の「西教寺正教蔵本『六輪尺』について」、岩崎雅彦氏の「楠田家文書目録（付解題）」の諸論文、研究展望が集録されている。

日本能面巧芸会

「新作能面展」

5月3日から市博物館で

日本能面巧芸会は、きたる五月三日から八日まで名古屋市博物館で「新作能面展」を開催する。入場無料、毎日午前九時十五分から午後四時四十五分まで、最終日は午後四時まで。

同会の能面展は今回で六回目、二十七種、九十六点の出展が予定されている。後援・愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、能楽協会名古屋支部。

（㉔面より前謡会番組つづき）

素謡　桜川　小島　アイ　松下真知子
（鈴謡会）　クセ省ク　日置　豊子

独吟　景清　地謡　山中たね子　野田ちず子　内田貞子　村上沖子　一代子
（薫謡会）

仕舞　胡蝶　細川　定美
（島謡会）　桜川　クセ　石原　珠恵　高橋　武子

連吟　采女　地謡　森崎　梅田　高野千勢子　横井　川合　山上　国枝　苑枝　延子
（和謡会）　サシ、クセ　志水　芳子　富永　豊子　高橋　幸子　種村　とし江　鈴木千鶴子　有浦　敦子　増田　仁美　磯部三枝子

仕舞　蛙　岩田　加代　不破　峰子
（清謡会）　二人静クセ　地謡　本田　梅田　清沢　邦久　一政　熟

鞍馬天狗　小林美和子　堀場おきん　桜井文子　野田美江　井上苑枝　佐藤幸子　市川恭子

連吟　塩　小　待謡ヨリ
（謡謡会）

素謡　鉄輪　玉田　澄子　笠井千代子　山田多鶴子
（鳳声会）

番外仕舞　船弁慶キリ　梅田　邦久　地謡　池田　清沢　一米寿　本田　政熟　堀場　吉成
（終了　五時頃）

附祝言

主催　萌会
補佐　梅田謡邦久

〔御来場歓迎〕

名古屋巽会大会

五月五日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

仕舞　竹生島　村井　司
仕舞　鳥追　沢田美枝子
仕舞　経政　依田　佳子
仕舞　小歌　田中奈美江
仕舞　藤キリ　金子　恵津
仕舞　生敦　半敦　鞍馬天狗　雲雀山　土蔵　静香　鄙クセ　山田　紀子　温美公美乃　福田　左絵

舞囃子　西王母　高柳　京子　吉田　定男　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　森本　重一
高野物狂　葛原　正枝　筥　鉱一　福井啓次郎　鹿取　希世
高砂　長崎　邦子　筥　鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
五段

仕舞　田村キリ　別所　和子　采女キリ　藤田　いく
仕舞　天鼓　財田　詩子
仕舞　杜若キリ　加藤美智子　三山　河野　高子
仕舞　霊山　林院クセ　山本　郁霊雀山　夏目　哲子

舞囃子　松風　永井　嘉美　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取　希世
加茂物狂　藤田　静代　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

仕舞　花月キリ　杉浦　敏二東　北クセ　森　泰樹
仕舞　高野物狂　クセ　富田正代司　西行　桜クセ　織田　哲也
砧　前　河野　邦男　梅　稲美　昌久　寺部　一威

連吟　弱法師　平子　和田

能　巴　大溪　和子　吉田　定男　後藤孝一郎　森本　重一
飯冨　雅介

間　大野　弘之
仕舞　江口クセ　西村　梅子　松風　石原　康子
倉本　雅

一調　杜若　平河　和子

仕舞　葵老　稲川　寿一　鉱　佐藤　耕司
西行　桜キリ　吉田　俊彦　三輪キリ　鬼頭　嘉男

能　羽衣　森　ふじ子　高安　勝久　筥　鉱一　鬼頭喜太郎
盤渉　杉江　元　福井啓次郎　鹿取　希世

狂言　竹生島参　佐藤　友彦　井上礼之助

仕舞　邯鄲　小柳　寿子　笹ノ段　足立　知子
藤戸　高橋　昌子

仕舞　笠ノ段　玉井　博祐　江口キリ　戸田　和
番外仕舞　熊　広島　弥　辰巳　孝

能　鷺　高田　真六　高安　勝久　西村　欽也　飯冨　雅介　杉江　元　河村総一郎　福井啓次郎　前川　光隆　藤田六郎兵衛
間　井上松次郎　駒田　金之亮　和田　昌久　河野　邦男　稲美　昌久　平子　佐藤　耕司　辰巳　満次郎　鬼頭　嘉男　吉田　俊彦　広島　克栄　内藤　泰二　後見　衣斐　正宣　地謡

主催　名古屋巽会
愛知郡東郷町和合ケ丘二―十一―五　戸田　和方
TEL　〇五六一三―九―一四八七

〔御来聴歓迎〕

先考鬼頭八郎一周忌追善能

五月七日（土）午前十時始
熱田神宮能楽殿

連吟　天鼓　橋本　富慈　橋本　暁子　佐藤　道子　星野　桂　青木　昌碩　川口ふじゑ
独鼓　鵜飼　瀬戸三津子　池田　茂

（六時頃終了予定）

附祝言

主催　豊水会
補佐　高橋　瞭一

〔御来場歓迎〕

舞囃子　葛城　近藤　幸江　山口　義郎

舞囃子　胡蝶　鬼頭　尚久　鬼頭　英二　後藤孝一郎　森本　重一
養老　村瀬　郁子　鬼頭　英二　柳原冨司忠　鹿取　希世
現在七面　下田　雄三　内藤　泰二　金児あき子
独鼓　志賀　大野　朋子　鬼頭喜太郎
百萬　祖父江修一
杜若　奥田　薫
春日龍神　黒宮登美子　観世　元信
金春　安明

半能　砧　西村　欽也　吉田　定男　福井啓次郎　森本　敏雄
後見　金春　晃実　渡部　芳樹　小島　道三　福井啓次郎　高井　重一
広瀬　瑞弘　伏原　靖二　松岡　賢二　地謡　本田　光洋　吉場　広明　塚本　恵市明　鉄郎

狂言小舞　通円　井上松次郎　佐藤　友彦　井上礼之助　大野　弘之

舞囃子　吉野天人　石川　晴子　吉田　定男　後藤嘉津幸
西行楼　梅若　修一　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取　希世
熊坂　金児　晶子　河村総一郎　後藤嘉津幸　大川瀬　絹子　鹿取　希世
胡蝶　倉地　幸子　河村総一郎　長屋　とみ　北洞　節子　森本　重一
山姥　熊沢恵美子　筥　鉱一　柳原冨司忠　石井　啓之　森本　重一
猩々　前野　都子　鬼頭　英二　後藤孝一郎　伊藤　明美　寺井　啓之
誓願寺　橋岡　慈観　筥　鉱一　幸　義太郎　佐藤　英雄　寺井　啓之
海人　内藤　泰二　河村　義太郎　久野　幸三　冨士道　周明
三輪　山本　順之　河村総一郎　日江井俊子　村中　恵美子　鹿取　希世

一調　胡蝶　宝生　英雄　伊藤　長八

舞囃子　熊坂　観世鉄之丞　筥　鉱一　幸　義太郎　鬼頭　森本　伸幸　重一
船弁慶　観世　暁夫　河村　後藤嘉津幸　大冨士道伸子　幸
唐船　北村　利弥　河村総一郎　小島みゆき　観世　鹿取　元信　希世

半能　融　野村　四郎　飯冨　雅介　河村総一郎　半田　智子　片岡　鹿取　なゝ子　希世
舞返

後見　小島　観世鉄之丞　一英　地謡　須部　滑沢　高橋　幸親　甫　瞭一　祖父江修一　山本　順之　観世　中川　暁夫　雅章

狂言　魚説法　野村又三郎　野村　信行　後見　大矢　高義

番外舞囃子　姨捨　観世鉄之丞　筥　鉱一　後藤孝一郎　助川　龍夫　寺井　啓之　観世　暁夫　四郎　野村　順之　山本　雅章　地謡　祖父江修一　中川

追加

〔御来場歓迎〕

主催　長生会
補佐　鬼頭喜太郎　川龍夫　観世元信

第一回 たまも会

五月十一日(水)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

半能
巴　金児晶子　西村欽也　鬼頭英二　後藤孝一郎　鹿取希世

舞囃子
後見　竹内澄子　内藤泰二　地謡　鬼頭英二　後藤孝一郎　前川知賢　牧田謙三　杉山武三　中川清　加藤達三　安藤鉄二郎　安藤重治　鬼頭純郎　小溝啓介　吉田嘉宣　衣笠正彦　鬼頭久野　竹内喜代香　竹内澄子　内藤泰二　澄子二　清澄美子

天鼓　金児晶子　鬼頭英二　後藤孝一郎　鹿取希世　地謡　小竹林　内藤福子　竹内澄子　内藤泰二　澄子二　清澄美子　長阪清子　竹内酒井　内藤澄子

安宅　原美代子　鬼頭英二　後藤孝一郎　鹿取希世　地謡　酒井澄子　竹内澄子　内藤泰二　澄子二　清澄美子

連吟　唐船　加藤重三　杉山武三　酒井澄子　棚瀬幸子　鬼頭純郎　安藤鉄二郎　前川知賢　牧田謙三　中川清　斉藤治　金児晶子　中江明子　高木アイ子　大竹福子　小林悦子　松浦峰子　高橋みつる　平間ナホ　谷川弘子

鶴亀　金児晶子　安井照男　安井たかえ　安達正治　金児晶子

富士太鼓　松浦峰子　棚瀬幸子　小林澄子　井藤福美子　節子　峰子　中川前田　安藤知賢　牧田謙三　金児晶子　昌治清　伊藤亘彦　高木アイ子　服部勝子　中江明子　加藤重三　鬼頭純郎　安達鉄二郎　杉山武二　竹内喜代香　内藤泰二　金児晶子　斉藤節子　内藤澄美　酒井澄子

蝉丸　山田郁子　安井たかえ　村田クセ　羽衣　安達正治　嵐山　前川知賢　花月　牧田謙三　地謡　酒井澄子　内藤泰二　金児晶子　内藤澄美　松浦峰子　金児晶子　内藤泰二　晶子二　澄美子

仕舞　草紙洗　山田郁子　安井たかえ　村田クセ　羽衣　安達正治　嵐山　前川知賢　花月　牧田謙三　地謡　酒井澄子　内藤泰二　金児晶子　内藤澄美　松浦峰子　金児晶子　内藤泰二　晶子二　澄美子

連吟　遊行柳　井上弟郎　小溝啓介　金児晶子　長阪清子　村上博子　清晶子　山本辰雄　三橋星野　鈴木芳実　田中岡戸　茂三　宏幸　穂実

独吟　桜川　小溝啓介

仕舞　笠之段　長阪清子　小林福子　玉之段　地謡　鬼頭嘉男　内藤泰二　吉田俊彦　久野幸三

連吟　俊寛　安藤昌治　斉藤節子　牧田謙三　前川知賢　中川清　棚瀬幸子　安達鉄二郎　浦峰武子　三郎　加藤重三　鬼頭純郎　杉山武三　酒井澄子　金児晶子　小林福子　澄美子

附祝言

主催　たまも会
三重県一志郡一志町田尻七〇〇　金児晶子
TEL 〈〇五九六〉三―五〇五六番

〔御来聴歓迎〕　後援　雲　有志会

第31回やるまい会公演

五月十五日(日)午後一時半開演
熱田神宮能楽殿

能
片山清司
片山九郎右衛門
島　西村欽也　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
弓流し
那須之語

間狂言　野村信行

狐塚　茂山千五郎　茂山真吾　茂山正義
無布施経　野村又三郎　大矢高義
禰宜山伏　野村万之丞　野村良介　野村耕介

入場料　A席　五千円（指定）　B席　四千円（自由）
取り扱い所　名鉄、三越、中日ビル各プレイガイド　階上席（自由）三千円、学生割引二千円（共に当日売りのみ）
能楽殿（〇五二―六八二―一七五一）および
やるまい会事務所

狂言やるまい会事務所
名古屋市中区正木二丁目16―25　野村方
電話（〇五二）三三一―七五五三

（終了予定　四時半頃）

信玄袋

―放送のこと、野村家三代の狂言・放送時刻・テレビ能―

今年伊勢の桜は金春能奉納の四月五日には開花がみられるであろうか。〈熱田〉は十日の観世会にはチラホラ咲きのように思われる。三日の梅猶会（猶義氏追善能）の日はまだふくらみ程度であった。

三日の追善会は、真ん中あたり二時間程みせてもらって家路につく。久方振りの〈熱田〉であったが、いつも坐わる席に腰をおろすと、さすがに気分が落付く。岡田朗詠氏の求塚（地頭観世栄夫氏）は懐かしい猶義氏のあの華麗な花〈芸風〉を十分にしのばせた。当主盛義〈のりよし〉氏は俊寛を。猶義氏は六十一歳で他界。もう十五年いや十年の天寿が与えられたならばとつくづく惜しまれる。最晩年は名古屋できびしい闘病生活を持たれた。本年が十七回忌に当る。

東京は息・盛彦〈のりひこ〉君が教盛を同じく四月に、大阪では秋十月盛義・鵜飼〈真如ノ月〉が舞われる。

× × ×

さて、春になってもまだ新幹線の旅行に自信がない。折角招待されている観世左近氏追善能とその記念パーティー（四月十七日、二五日）は辞退の仕儀。厚意と欠礼を謝さねばならぬ。その時横捨を舞われる元正氏が六二年度の芸術院賞を受けられる。能界からは梅若恭行氏も。めでたし。

因みに梅若（六郎）家では、六十年度の同賞を雅俊氏が、紀彰〈としてる〉氏が六一年度の芸術選奨〈新人賞〉を受けている。果報な能の家である。

× × ×

放送について二・三のこと。

四月からのNHKの邦楽番組の放送時刻（日）は変らぬようである。FMの能楽鑑賞、テレビ能（狂言も）。四月のテレビ能は正月の小鍛冶（六平太）の再放送。今年は再放送が目立つ。またテレビ（総合、火、ヨル）に〈芸を語る〉の新番組が。十二日は野村万作氏の出演。

次は三月の放送（NHK）で〈狂言三代〉をみる。二一日。昭和五十年の再放送、野村万蔵―万之丞・万作・万之介三兄弟―耕介ほかの親子孫三代の狂言芸の伝承、きびしさと深高さと流動固定をみせる。万蔵氏の狂言芸がいきいきと胸に迫る。晩年の花子の稽古振り、孫をおしえるきびしさの中のやさしさ、その折の目が鋭い、そして万之丞氏たちとの懇談と幅の広い日常の積み重ねを通して。狂言即生活・生活即狂言。それでは万蔵氏の酒杯も狂言のためか。然り、楽しい酒、苦しい酒、羽化登仙のうちに、狂言の園を遍歴していたのではないか。私は狂言の強く太い心を見得することができた。

第三は三月のテレビ能。十九日は半能・春日竜神。金剛巌氏。古典芸能鑑賞会。竜神の威容充分。ワキ明恵上人に「入唐は」とただすところは唯一のやさしさ溢れるところ。また舞台中央の立姿は見事。この半能を以てしても当代有数かつ最高のシテ方であることがわかる。佳。

二十一日。雷電。初見が観世銕之丞氏であったことは仕合わせである。一畳台が二つ出る。清涼殿や紫宸殿に見立てる由。菅公が雷神となって御所に現われる話。切りは一ノ松で下に居て左袖を被く。昔市川寿海氏（雷蔵氏養父）の芝居でみたことあり（御園座）。能もおもしろし。佳。ひと言。前シテのオモテは何であったろう。オモテや唐織の絵柄の呼び方は字幕の説明を望みたい。

後者はおわって、能楽界の話題が三つ出た。話・羽田昶〈ひさし〉氏。金閣の薪能・奈良の能舞台・上野東照宮の謡初式復活を。

東照宮の行事のことは昨年十二月二五日の東京新聞（東京版）に大きく紹介された。「四五年ぶり復活・人間国宝の三家元競演〈後半副題〉」の見出しで。人間国宝は誤り。後世に誤った記録で残るであろう。一昨年だったか、高野山大門修復記念能のときも出演者の二・三名の方をそう書いていた新聞の例がある。〈個人指定〉と〈総合指定〉の間違いであるが、それだけではすまされまい。

× × ×

四月二一日の茂山狂言会（京都）は茂山千作〈三世〉氏を偲ぶ狂言会。観世会節。福の神・千三郎／花子・千之丞と忠三郎／那須の語・千五郎／唐相撲・大蔵弥太郎・真吾・正義ほか。豪華番組である。私も千作さんの福の神・那須の語・唐相撲（皇帝）は拝見している。

（野村広二）

卯月の舞台から（その一）

「梅若猶義十七回忌追善能」

竹尾邦太郎

「俊寛」　シテ盛義。きれいな銀鼠色花帽子・小格子目引・黒縹水衣に焦茶色和布腰巻を着けた。花帽子の気品は悴容の流人の印象から遠く、倨傲邪僻の俊寛像よりも、ひたすら不運の嘆き悲しむ俊寛像を目指したと思え、盛義の亡父追懐の心情と重なった。

前場、〈落つる木の葉の盃、と上を見てツッとスミ近く寄り扇で受けると、〈水上を、と左上方を薄く望見する辺りの寂寥感に亡父譲りの繊細な感性が窺えた。赦免状の段は、真偽の程が理解出来ないばかりか、一瞬の空白の時間が効果的で、ハッと事の重大さに目覚めた、「さては筆者の誤りか」、の語調が鮮やかに利いた。めそめそした感じのシオリはやがて、〈鳴くは我を問ふやらん、と慟哭を思わせるシオリとなり、思いの余り再び文を見る焦燥感も的確。〈夢ならば醒めよ醒めよ、と膝を打つ手も力萎え、文はハラリと落ちてシテは茫然自失にたたら退って安座双シオリ、この一連の過程が良かった。

船には纜を付けなかった。シテは、〈艫に取りつき、とドンと膝を落いて取りつく、と胴髪を入れずワキ欽也が強く拍子を踏み、シテはのけ返る態に安座すると目付柱に向いて肩で息をするかに双シオリした。〈帰落を、とシオリ解くと、〈程もなく、とシテはしゃくり上げる様に見えた。小手を翳して船を見送り、〈次第に、と招キ、常座まで数歩出て片膝着くと、〈船影を、と更に小手を翳し、〈見えずなりにけり、と安座すると返シにワキを向き双シオリにトメた。康頼・晃一、成経・盛彦、シテとのアンサンブル上々だった。

地謡・生香・善高。囃子・六郎兵衛・啓次郎・総一郎。後見・栄夫ら。（66分）

「無布施経」　シテ松次郎。世慣れた坊主が読経中何かと施主・友彦に世間話を持ちかけ、したり顔でまた読経に戻る。この辺りの機微に無理が無く松次郎老練。出ぬ布施に拘る執念はそれ程に思えなかったが、小細工を弄して要領を粉失した詐り、懐中深く入れ込んだのが仇となり、布施は出たが要領が仲々出ず、双方揉み合いの末やっと出てきた時の両人の表情が妙。トメはこの場合、「ハーア」よりむしろ「面目もござらぬ」か。（43分）

「求塚」　シテ朗詠。面は孫次郎。やや細面の若々しい色香が、二人の男に同時に愛されたのも宜なるかなと思わせる。襟白二・白摺箔（楓と桜を横列交互に金で押す）・赤地縫箔腰巻、白水衣は褐を金で観世水と楓文様。

前シテは、若菜を摘んでツレ二人が引く前辺り、〈川風までも冴えかへり、と薄く下方を眺めやり、語りでは、「その時わらは思ふやう」、と頭を垂れ、更に、「つがひ去りぬる哀れさよ」、と悲嘆を反芻する辺り、また中入地、〈この川波に沈みしを、と心持深く下を見詰める辺り、互いに呼応し合ってその淋しい情緒は胸を締めつける思いだった。

後シテは作物で謡い出し、〈苦しみは身を焼く、と引廻が下されると、痩女・浅黄大口・白練壷折姿が加何にも幽閉の趣で居る。ワキの念誦に、〈ありがたや、と合掌するところのほっとした気分も、忽ち幻覚に襲われ、男の霊と化鳥に苛まれる。その作物中での写実の型に朗詠円熟味を見せた。火の柱に縋り付き、〈あら熱や、と双手で胸を掻き抱いて安座し、〈追っ立つれば、と立って作物を出ると、〈八大地獄の数々と鈴鹿といった感じに数歩運ぶ辺りも視覚に訴えた。キリからトメまで、一つ一つの表情に必然性があり、〈亡者の形は、と半開きの扇で面を蔽いながら静かに安座したトメも、半開きの扇に何か不安が象徴されている思いがした。地は栄夫・泰孝・生香ら、難曲を支えて遺憾がなかった。（1時間49分）

「海士・懐中ノ舞」　子方・井戸和雅君。金風折に薄紫の単狩衣・白大口。声を張り過ぎ息継ぎに難しいところ無きにしもあらずだが、行儀の良いのが何より。シテ修一。他人に物を教える気負いか、ワキ雅介との問答に、「新しき珠島と書いて面向不背の珠と申し候」とやり、ワキは臨機応変に先を続けたが、更に珠が出た時はさぞ面喰らったであろう。眼目の玉ノ段は型どころをびしびしと極めて目覚しく、中入にシオリながら橋懸へ入り、一ノ松で振り返って数歩詰め、子方を見込む哀切の情も良かった。

後シテは龍戸・黒垂・泥顔・金鱗箔・緋大口・紫舞衣。経巻を懐中する。早舞は途中大小流シで幕際に抜け、そこで小さく廻ると再び大小太鼓の流シで舞台に入り、位進んで急々ノ舞。シテは子方に走り寄って懐中の経巻を取り出し、子方に渡して舞上げた。鮮やかだった。

（1時間25分・4月3日）

名古屋観世九皐会定例能（第二回）

五月二十一日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

「名古屋薪能」はことし第二十三回を迎え、きたる八月六日(土)熱田神宮神楽殿前・特設舞台で催される。午後五時三十分開演。

狂言「蟹山伏」（シテ佐藤友彦）ほか舞囃子、仕舞など予定。

なお毎年行われる能楽協会名古屋支部主催の「大衆能」は、八月

仕舞　三輪　網之段　笠之段　錦村とみ　岡村イツ子　鈴木幸子

舞囃子　西王母　近藤笑鉱一　辰男　助川竜夫　福井啓次郎　鹿取希世

謡曲本専門店
創業75年
株式会社 東文堂書店
名古屋市中区栄三丁目28番16号（〒460）
（松坂屋南一丁）電話（052）241-1059番

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号 464）
電話（731）7984
振替口座 名古屋 0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

名古屋 薪能

能3番、狂言1番上演

8月6日 熱田神宮で

「名古屋薪能」はことし第二十三回を迎え、きたる八月六日（土）熱田神宮神楽殿前・特設舞台で催される。午後五時三十分開演。

主催能楽協会名古屋支部、後援名古屋市、熱田神宮。

今回は、観世流能「経正」（シテ前野郁子）宝生流能「源氏供養」（シテ衣斐正宣）観世流能「紅葉狩」（シテ中川雅章）の能三番。狂言「盃山伏」（シテ佐藤友彦）ほか舞囃子、仕舞など予定。

なお毎年行われる能楽協会名古屋支部主催の「大衆能」は、八月十四日（日）熱田神宮能楽殿で行われる。

演能は、観世流能「羽衣」宝生流能「富士太鼓」喜多流能「鵜」が予定されている。

国家指定芸能 能楽特別鑑賞会

7月30日 石川県立能楽堂で

能楽部門で重要無形文化財総合指定保持者を会員とする社団法人日本能楽会、文化庁の主催による地方公演として毎年行われている。

国家指定芸能「能楽特別鑑賞会」が、きたる七月三十日（土）石川県立能楽堂で催される。

観世流能「実盛」（シテ片山九郎右衛門、ワキ西村欽也、ワキツレ飯富雅介、杉江元、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・助川龍夫、間・井上松次郎、地謡・梅田邦久武田邦弘ほか）

狂言「貫鉾」（野村又三郎、井上松次郎、佐藤友彦）

宝生流能「海人」（シテ渡辺容之助、子方・高橋憲正、ワキ西村欽也、ワキツレ飯富雅介、杉江元、笛・片岡憲太郎、小鼓・住駒幸英、大鼓・飯島佐之六、太鼓・鬼頭喜太郎、間・能村英丘）ほか舞囃子「草子洗」（島村巌）仕舞「松風」（宝生英雄）ほか数番、独吟が予定されている。

叙勲・褒章

・勲五等双光旭日章
狂言方・和泉流
井上松次郎氏（七四）

本名重兵衛、名古屋狂言共同社代表、初舞台五歳、日本能楽会会員、能楽協会名古屋支部の副支部長、支部長を歴任。後進の育成につとめ、青少年に対する狂言の普及活動に尽すい。熱田神宮能楽殿運営委員会委員。昭和五十四年度名古屋市芸術特賞受賞。

・勲五等双光旭日章
シテ方・観世流
梅若 恭行氏（七〇）

梅若実に師事、能楽協会理事歴任。梅若会副理事長、日本能楽会会員、芸術院賞受賞、東京都出身。

・勲四等旭日小綬章
桧 常太郎氏（七九）

桧書店当主、能楽養成会理事、社団法人京都観世会相談役などを歴任。

・紫綬褒章
シテ方 喜多流
栗谷新太郎氏（七〇）

喜多六平太、喜多実に師事、初舞台五歳、昭和三十九年芸術祭奨励賞受賞、昭和五十九年芸術選奨文部大臣賞受賞、日本能楽会会員能楽協会、喜多会理事を歴任。

◈演能カレンダー◈

（熱田神宮能楽殿）

〔5月〕
15日（日）やるまい会（有料）
21日（土）観世九皐会（有料）（番組①面）
22日（日）名古屋観衛会（来場歓迎）（番組①面）
29日（日）清謡会能（有料）（番組②面）

〔6月〕
5日（日）熱田祭奉納能（来場歓迎）（番組②面）
12日（日）観世会定式能（有料）（番組③面）
19日（日）宝生会定式能（有料）（番組③面）
22日（水）能と狂言の会（有料）（番組③面）
25日（土）一謡会・叶石会（来場歓迎）
26日（日）也留舞会・信謡会（来場歓迎）（番組③面）

〔7月〕
3日（日）観世九皐会定期能（有料）
9日（土）野村四郎の会（有料）（番組④面）
10日（日）朝日狂言会（有料）
17日（日）観世薬謡会（有料）
24日（日）呉竹会（来場歓迎）
31日（日）青陽会（有料）

〔8月〕
6日（土）宝生流教授・嘱託会全国大会（会員制）
6日（土）名古屋薪能（熱田神宮特設舞台）（有料）
7日（日）宝生流教授・嘱託会全国大会（会員制）
14日（日）大衆能（有料）
20日（土）邦謡会（有料）
21日（日）名古屋官庁実業団宝生会大会（来場歓迎）
27日（土）衣斐正宣後援会能（有料）

〔9月〕
4日（日）名古屋金春会追善会（有料）
10日（土）中日文化センター芸能発表会（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

名古屋観世九皐会定例能（第二回）

五月二十一日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

素謡
小林喜久
小島芳雄　青木武弘

能
観世喜之
政
西村欽也　飯富雅介
杉江元　笛藤孝一郎　鼓一郎　森本重一
間　井上礼之助
後見　高木美智子　佐々木勝輝
地謡　加藤保彦　高橋瞭一　吉田定男　中所宣夫　駒瀬直也　五木田三郎　小林喜久　五木田武計

狂言
酢薑
大野弘之　井上礼之助

仕舞
養老　加藤保彦
兼平　高橋瞭一
西行桜　五木田三郎
雲雀山　佐々木勝輝
鵜ノ段　五木田武計

能
高木美智子
羽衣
和合ノ舞　飯富雅介　吉田定男　福井啓次郎　助川龍夫　鹿取希世
後見　吉田妙　観世喜之
地謡　加藤保彦　高橋瞭一　小林喜久　小島芳雄　中所宣夫　駒瀬直也　佐々木勝輝　五木田三郎

舞囃子
百萬　吉田定男　後藤孝一郎　鹿取希世
天鼓　川口志満子　吉田定男　後藤孝一郎　鹿取希世
頼政　中川芳子　吉田定男　後藤孝一郎　鹿取希世
羽衣　奥村泰広　吉田定男　後藤孝一郎　助川竜夫　鹿取希世

番外仕舞
嵐山　松浦信一郎

舞囃子
西王母　近藤辰男　筧鉱一　福井啓次郎　助川竜夫　鹿取希世
六浦　伊藤秀子　筧鉱一　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
鞍馬天狗　豊住雅子　筧鉱一　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛

仕舞
雲林院　クセ　田代博
玉鬘　滝川一司
月キリ　久納希秋
花花　鉦クルヒ　水野浩司

素謡
阿漕　鈴木ぎくゑ　加藤歌子
山本博通
吉田琴子

能
砧
間　西村欽也　河村総一郎　柳原富司忠　藤田六郎兵衛
井上松次郎

素謡
野宮　三宅重光　川瀬保

舞囃子
松風　芹栄雄　筧鉱一　福井啓次郎　助川竜夫　鹿取希世
養老　杉野伸江　筧鉱一　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
融　駒形賀津子　河村総一郎　久田舞一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
山姥　川久保彰礼　河村総一郎　久田舞一郎　助川竜夫　鹿取希世

素謡
隅田川　河村悠紀子　加藤鳳来　神野勝之助　佐藤正次

一調
杜若　山本万有里　助川竜夫

舞囃子
盛久　藤井敏枝　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世
須磨源氏　伊藤健一郎　河村総一郎　久田舞一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
乱五段　足立奈々子　筧鉱一　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛

仕舞
老松　青柳イツエ
遊行柳　上遠野ひな子
東岸居士　キリ　村瀬つね
鄭　山田伸子
西行桜　加納保一

舞囃子
現在七面　山中節子　筧鉱一　久田舞一郎　助川竜夫　鹿取希世
難波　脇田喜美子　筧鉱一　久田舞一郎　助川竜夫　鹿取希世
菊慈童　バンシキ　川瀬やよ子　河村総一郎　久田舞一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛

番外仕舞
小鍛冶　クセ　山本順之
葵上　山本真賀

祝言
国栖　山本勝一

（終了予定　六時）

〔御来場歓迎〕
主催 名古屋観衛会
指導 山本勝一

名古屋観世九皐会春の大会

五月二十二日（日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞
嵐山　松浦信一郎

舞囃子
百萬　吉田定男　後藤孝一郎　鹿取希世
天鼓　川口志満子　吉田定男　後藤孝一郎　鹿取希世
頼政　中川芳子　吉田定男　後藤孝一郎　鹿取希世
羽衣　奥村泰広　吉田定男　後藤孝一郎　助川竜夫　鹿取希世

要会員券　当日券　四千円

〔有料〕　主催事務所　名古屋観世九皐会
〒457　名古屋市南区元塩町一一一一七（加藤保彦方）
TELO五二（六一一）三六五九

春雅日記 ㊷

春の落葉

えと文　二井栄逸

「あしたはみんなで山へゆくからどこにもゆかないでネ。車椅子も持ってゆきますよーッ」

と、一番下の孫がさけびながら飛びこんできた。

（あゝこれは嬉しいな）と、思いながら、「山ってどこの山にゆくんだい」

「泉の森と堀坂山にゆくってお父さんが言ってたよ」

泉の森という森があることはきいていたが、まだ行ったことはない。そこは、森の中に清冽な湧水の泉をつくり、その水が曲折して森の中を流れているというのである。

夜が明けると、外はよいお天気で薫風が爽やかに吹いていた。孫達を交えて泉の森にゆく。

樹々の梢から洩れてくる日影が縞をつくるほの暗い樹間のあちこちに車椅子を押してもらった。

うらしま草、まむしぐさ、じどくのかまのふた、母子草、山たちばな等のような春のひくい花が、しきつめられた落葉の中から一面に頭を出している。楽しみにしていた泉は渇水していて見られなかったのが残念。泉の森を出て、堀坂の頂上近くで車をとめ、又、あちらこちらと車椅子を押して貰う。

今はときわ木の落葉の頃。椎、樫等は、春から夏にかけて、黄色や茶色の葉をはら〳〵と散らす。ときわ木は落葉樹のように、すっかり葉を落してから、若葉色の衣にきかえるのでなくて、知らぬ間に新旧交代をすませていつも青々としている。

誰もいない山かげで静かに散る春の落葉をながめていると、心の中に安らかさが一ひら一ひら舞い落ちてくるような気がする。

岩の多いこの山はがけぶちが多く、そのがけぶちには山吹、つつじ、うつぎ等が咲き、地面には、一輪草、けまん草、猩々ばかま、ひとり静等、おし合って咲いている。

五、六年前末っ子の息子の車で吉野へ行った時、林道に迷いこんだことをふと思い出した。その時は、桧の山で、ほとんど日影が通らず、根元の方は、深海のようによどんで、吹き上げてくる風が冷えびえとしていたことを覚えている。

とにかく晩春の山路はほんとうに素晴らしい。

五月待つ　花たちばなの
香をかげば
昔の人の　袖の香ぞする。

これは雲雀山の後シテの一声。雲雀山は好きなのでよく絵にもかくし、謡の稽古にもよく教材にする。

図はクルヒの気分で舞う花尽くしの場面をかいて見た。一声の謡曲文は、古今集や第三巻に収められた読人不知の歌であるが、さつきの空に思いをはせる切実な気持ちがあふれていてよい。

五月を待って咲き始める花たちばなの香りをかぐと、今に忘れ得ぬ昔朝染の人の袖の香がするという意で、遠い昔をなつかしむ歌として、好きな古歌の一つである。

（63・5・3記）

異流共演の「大原御幸」

6月4日　森田光春後援会能

京都

笛方・森田光春師の第一回後援会能がきたる六月四日、京都観世会館で催され、能「大原御幸」の上演で、観世・金剛の異流の共演企画、さらに約二百年ぶりに復曲される一調一管「望月」の上演が注目されている。午後二時始。

森田光春師は、森田流職分会会長として昨春勲五等双光旭日章を受章されたが、これを機に高度な能の上演をめざし、「森田光春後援会」として発足、その第一回として、金剛流・金剛巌宗家の法皇、観世流・観世鉄之丞のシテ建礼門院、ワキ方宝生流・森茂好を配した「大原御幸」の上演。内侍・観世暁夫、局は片山清司の出演。

この異流共演は、昭和十七年にシテ先代金剛巌、ワキ宝生新、法皇に先代梅若万三郎の三名人が一堂に会し演ぜられた名舞台にちなみ、そのとき舞台を勤めた森田光春師がその再現を企画されたものである。

会費六千円（指定席は五百円増）申込みは森田光春方（京都市東山区八坂上町三七六、電話〇七五―五六一―六六二五）又は京都観世会館（電話〇七五―七七一―六一一四）

森田光春第一回後援会能
ごあいさつ、京都能楽養成会会長・吉田督識氏（森田光春後援会会長）
狂言「貰聟」（茂山千五郎、茂山千之丞、茂山正義）
一調一管「望月」片山九郎右衛門、笛・森田光春、太鼓・金春惣右衛門。
能「大原御幸」（シテ観世鉄之丞、法皇・金剛巌、局・片山清司、内侍・観世暁夫、ワキ森茂好、ワキツレ森常好、笛・森田光春、小鼓・曽和博朗、大鼓・谷口正喜、後見・杉浦元三郎、武田欣司、小林慶三、地謡・片山九郎右衛門、片山慶次郎、野村四郎、梅田邦久、分林弘三、武田邦弘、橋本晴道、青木道喜）

桃山時代と能楽

東京

国立能楽堂の特別展示

国立能楽堂では、春の特別展示として五月三日から六月一日まで「桃山時代と能楽」のテーマで織豊時代の伝書、謡本などの文献能面、絵画、工芸品などの美術品を中心に出展されている。

入場無料、午前十時から午後五時（月曜休み）主な出品物は（能面）小面（雪）小面（花）伝龍右衛門作・般若・伝般若坊作、孫次郎・河内作、般若・是閑作、（文献）観世小次郎あて信長朱印状、観世又次郎あて秀吉朱印状、北政所あて秀吉自筆書状、下間少進筆「童舞抄」（「舞台之図」）

独語　観能

序の舞物二番

「屋木完一」「二人静」

名古屋観世会定式能（三回）

六月十二日（日）十二時半始

熱田神宮能楽殿

高橋鋳三郎氏・小沢喜一師
加藤勝利師・鈴木義久師　追善

第32期・第2回

名古屋定式能

演能案内

清韻会能

五月二十九日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

能組

仕舞
淡路　三島憲
鉄輪　今村嘉勇　地謡　鶴賀克彦　赤松禎友　泉泰孝　祖父江修一

能
祖父江智子　近藤幸江
富士太鼓　飯富雅介　河村大福井啓次郎　鹿取希世
間　野村信行
後見　泉雅一郎　泉嘉夫　地謡　武富康之　山本正人　赤松禎友　今村嘉勇　久田徹二　大槻文蔵　上田拓司　水藤元三

舞囃子
砧　大槻秀夫　笠鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　殿島修二　泉泰孝　大槻文蔵　上田拓司

狂言
昆布売　野村信行　井上礼之助

仕舞
鵜之段　久田徹二
花筐　泉泰孝　地謡　武富康之　赤松禎友　上田拓司
熊坂　大槻文蔵　祖父江修一

能
融　泉嘉夫　西村欽也　笠鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

舞返之伝
間　大矢高義
後見　近藤幸江　大槻文蔵　地謡　武富康之　泉雅一郎　鶴賀克彦　山本正人　久田徹二　泉泰孝　祖父江修一

附祝言

主催　大槻清韻会

（終了　五時二十分頃）

〔有料〕
全自由席　四、〇〇〇円
〔入場券申込先能楽殿および出演各楽師宅〕

熱田まつり奉納能

六月五日（日）午後二時開演
熱田神宮能楽殿

能
衣更　正宜
（宝）忠　杉江元　飯富雅介　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世
間　佐藤友彦
後見　戸田和　竹内澄子　地謡　平子高田　稲川佐藤　真弓稲葉　耕司内辰巳　寿一竹腰　鬼頭嘉男　泰二孝　勝一

仕舞
（春）鼓之段　加藤富貴子　地謡　加藤広瀬　堤林幸　鉄瑞弘　正嗣夫
（剛）是界　東田康文　地謡　玉木百々　小林竹内　利雄治　幸康三司　忠

狂言
（和）伯母ケ酒　大矢高義　野村又三郎
後見　井上礼之助

能
生駒　里翠
（観）杜若　飯富雅介　笠鉱一　福井良久　池田茂　藤田六郎兵衛　松山幸親　本田勲　加賀敏彦　祖父江修一　清沢保一政　加藤彦　高橋徹二　久田徹二　後見　今沢美和　近藤幸江　地謡

（終了　五時頃）

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部

〔入場無料〕

「梅の木のごとく」

藤田六郎兵衛氏が毎日新聞に連載

笛方藤田流家元・藤田六郎兵衛氏の記述が三月から毎日新聞に連載、題は「梅の木のごとく」で〈笛の家に生まれて〉の副題、月曜日夕刊掲載で、「沢庵和尚と藤田流」「初舞台」「修業の出発」さらに「もう一度」「指・唇・歯」（五月九日）など、伝承と修業の道をたどる能楽師の生いたちを述べ、読者にわかりやすく、身近に〝能楽〟を感じさせるエッセーである。

63年5月・6月放送予定

〔5月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
22日（日）観世流「忠度」梅若万紀夫
29日（日）金剛流「高野物狂」瀧田道雄
〔6月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
5日（日）宝生流「葵老」「鷺」今井泰男
12日（日）観世流「班女」観世元昭
19日（日）喜多流「唐船」粟谷新太郎
26日（日）観世流「敦平」大西智久
※6月はFM放送のみ。
（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

◆夜の部（六時半開演）
後見　武田欣司　観世暁夫　地謡　清沢一政　河村和重　青木道喜　梅田邦久　橋本晴道　雅夫
「三山」解説　観世銕之丞

観能独語

序の舞物二番
「雲林院」と「二人静」

四月は梅猶会、観世会、中日名匠鑑賞能など、結構な催しがつづきました。その中で、私がひとしお興味をそそられたのは「雲林院」と「二人静」の序の舞物二番でした。「雲林院」（10日、観世会）は梅若紀彰が、「二人静」（30日名匠鑑賞能）では観世清和が、ともに異色の演出で素晴らしい舞台を見せてくれました。

「雲林院」は典麗優雅な序の舞の美しさに、もの思わせ顔の雰囲気をたたえて、不思議な魅力を発散しました。この曲は業平ものの中でも、伊勢物語につかず離れず断片を拾い集めたような一種のとりとめのなさが特徴ですが、紀彰はこのとりとめのない美しさをうまく生かしていたと思います。月が出たり雪が降ったり、花咲く夜の恋路をたどる道行きのおぼつかなさ、それ故か、やればやれる面白い型どころをあまり際立たせずサラリと淡彩画的手法で逃げた？ところが憎らしい。

ところが、「思い出でたり夜遊の曲」のイントロで序の舞にかかると（この辺りの転換の呼吸絶妙）、一変して油絵的手法で全体を色濃く塗りつぶし、地で語るべきところまで、精いっぱい舞の中に盛り込んだかに見えました。つまり「雲林院」という曲の心を舞に集約したような不思議な魅力に魅惑されたのです。（もっとも私一人の独断的思い込み、深読みかも知れませんが）。

この紀彰、名匠鑑賞能では「紅葉狩」をやりました。彼の能がつづけて二番も見られるとは、と喜んだのですがいけません。これはまた「雲林院」とは人が違ったような尋常さ、平々凡々さ。もともと作品そのものが、底の浅い俗受けするショー的なものですから、力の入れよう、工夫のし様もなかったかも知れません。それにしても紀彰ならなんとか、と期待した私は当てがはずれて失望しました。

「二人静」はシテ観世元昭、ツレ観世清和。菜つみ女に静御前の霊がのりうつるという古怪な語り口からして、能ファンにはたえられない一曲ですが、とんどは「出立の一声」という小書で型が変り、後シテは橋掛りに腰を下したまま。相舞の大部分もそのままの場所で舞いましたから、文字通り清和の一人舞台（両シテということですが）です。そのまた清和のよかったこと。序の舞のなめらかさはいわずもがな、父親ゆづりの品格、芸格（特にはとびの正確さに注目しました）、加うるに若々しい新鮮な現代感覚、少くともこの舞台に関する限り、さすが御曹子、おやじさん（景清）以上といっても賞め過ぎにはなりますまい。相舞本来の面白さは見られなかったものの清和の独壇場で胸がスッとしました。元昭も若い清和に花をもたせた格好で、却って役者があがったのではないですか。むつかしい相舞をよけて通ったのも賢明だったと思います。

余談ですが、ホール能では仕方がないといわれればそれまでですが、鏡板代りの松羽目まではゆるせますが、後の黒幕はいつもながら興をそぎます。華やかで若さがにおうばかりの舞台だっただけに惜しまれます。もう一つ、惜しまれるのは、橋掛りの松がいずれも大き過ぎたこと、元昭はこれで大分損をしましたね。（M）

原各務

第二回各務原市民鑑賞能
能と狂言の会
中村和男師、松和会主催

第二回各務原市民鑑賞能「能と狂言の会」が五月八日、各務原市民会館ホールで催された。

この鑑賞能は中村和男師、松和会が主催、岐阜県、県教委、各務原市、同市教委が後援、ぎふ中部未来博協賛として開催、当日は第一部（午前九時始）は、松和会会員による素謡「求塚」「景清」舞囃子九番、仕舞、連吟、連謡など二十数番、第二部（午後三時始）は、能「羽衣」狂言「隠し狸」の上演で盛会であった。

第二部の上演は次のとおり。

狂言「隠し狸」（太郎冠者・野村又三郎、主・野村信行）

能「羽衣」（シテ中村和男、ワキ西村欽也、ワキツレ飯冨雅介、笛・森本重一、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・筧鉱一、太鼓・鬼頭喜太郎、後見・奥善助、加賀敏彦、地謡・橋岡慈観、下田雄三、中川雅章、河合正次、本田勲、関谷正一、福田哲朗、岡田信道）

故人四氏の追善
名古屋宝生会定式能

名古屋宝生会の本年度第二回定式能はきたる六月十九日（日）熱田神宮能楽殿で、高橋鋳三郎氏、小沢喜一師、加藤勝久師、鈴木義久師の故人四氏の追善会として催される。（番組③面掲載）

名古屋観世会定式能（三回）

六月十二日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能組

能

萬　河村和晃　大槻文蔵
高安勝久　河村総一郎　柳原冨司忠　助川竜夫　鹿取希世
間　茂山真吾
後見　小島一英　藤波重和
地謡　松山幸親　今村嘉勇　加賀敏彦　久田徹二　梅田邦久　浦田保利　武田邦弘

仕舞

雨月　前　藤波重和
龍太鼓　浦田保利
地謡　本田邦弘　武田邦久　梅田邦久　中川雅章

狂言

金藤左衛門　茂山千五郎
茂山真吾
後見　松本薫

能

天鼓　観世喜之
西村欽也　吉田定男　久田舜一郎　藤田六郎兵衛
間　松本薫
後見　久田徹二　大槻文蔵
地謡　須部浩一　清沢政甫　高橋瞭一　梅田邦久　加藤保彦　藤波重和　小島一英　中川雅章

（終了　四時半頃）

附祝言

主催　名古屋観世会

〔有料〕要会員券
当日券　七千円（自由席）

名古屋宝生会定式能
高橋鋳三郎氏・小沢喜一師・加藤勝利師・鈴木義久師追善

第32期・第2回
六月十九日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

能

鵺　佐藤耕司
飯冨雅介　河村真之介　後藤孝一郎　森本重一　池田茂
間　佐藤友彦
後見　戸田和　玉井博祐
地謡　加藤純一　安江良郎　後藤辰巳　佐々木輝雄　内藤正宜　泰二孝　稲川寿一

仕舞

経政　戸田和
歌占　倉本雅
采女　竹内澄子
地謡　衣斐正宜　馬場辰巳　富田孝四夫

高野物狂　杉浦紀世美　佐野萌
西村欽也　杉江元　鉱一　柳原冨司忠　鹿取希世
間　井上礼之助
後見　倉本雅　竹内澄子
地謡　富田正代司　織田哲也　寺部一威　平子稲美　竹腰勝一　辰巳孝　馬場富四夫　稲川寿一

狂言

飛越　玉井博祐　宝生英照
井上松次郎　井上礼之助

能

葵上　西村欽也　飯冨雅介
梓ノ出　大野弘之
間　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
後見　辰巳孝二　内藤泰二
地謡　和田昌久　堀部学　久野幸三　河野邦男　鬼頭嘉男　佐野萌　馬場富四夫　佐藤耕司

主催　名古屋宝生会
名古屋市昭和区山里町一三五　内藤泰二方　電話八三二―三四四九

〔有料〕要会員券、当日券五千円

能・狂言に親しむ会
「三山」公演

六月二十二日（水）昼の部一時半開演　夜の部六時半開演
熱田神宮能楽殿

◆昼の部（一時半開演）

「三山」解説　観世栄夫

能

三山　片山清司　観世銕之丞
西村欽也　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
間　野村又三郎

「三山」解説　観世銕之丞

能

三山　観世暁夫　観世栄夫
西村欽也　河村大　大倉源次郎　藤田六郎兵衛
間　野村又三郎
後見　武田欣司　観世暁夫　青木道喜　武田欣司
地謡　祖父江修一　櫻本雅夫　河村和重　梅田邦久　片山清司　櫻本雅夫　櫻道

〔有料〕入場料三千五百円（全自由席）市内各プレイガイドにて発売
問い合わせ先　名古屋市西区幅下二―10―9　藤田六郎兵衛方　電話（〇五二）五七一―五七六三

主催　能・狂言に親しむ会　梅田邦久　藤田六郎兵衛

野村又三郎社中
也留舞会　信謡会　合同発表会

六月二十六日（日）午前十一時半開演
熱田神宮能楽殿

狂言

末広　第一番目ノ物　徳田文三
太郎冠者　松久惠美子
花争　太郎冠者　長谷川田鶴　落合由布子　すっぱ　加藤志津子
舎弟　弟　山崎慎也　兄　大矢高義　教え子　各川良三

業謡　安達原　平山みよ子　内田善太郎　桐谷弘充

通円　道円ノ妻　三宅千生
瓦鬼　大名　中山裕司　旅僧　落合由布子　所ノ者　種村とし江
杭井　杭ノ井　村手泰　太郎冠者　庄司武　何某　野村信行　算盤　野村又三郎

業謡　菊慈童　日比佐代子　山寺章子

小舞　花の袖　長谷川智恵子
宇治の晒　小山美保
よしの葉　村手悦子
貝尽し　白石友子
七つになる子　堀田淑子
法師ケ母　高橋貞
石河瀬五郎　平山みよ子

仕舞　敦盛　柴田錦子
熊野　田中芳子
羽衣　林紬加子

因幡堂　男　各川良三　寡婦　大矢高義
清水　太郎冠者　種村とし江　主　野村信行
蝸牛　山伏　庄司武　主　大矢高義　太郎冠者　落合由布子
（終了　午後四時頃）

〔御来聴歓迎〕

主催　也留舞会　信謡会
指導　野村又三郎

第五回記念 野村四郎名古屋公演

能「望月」古式を観る会

七月九日（土）午後二時開演
熱田神宮能楽殿

講演「望月」とその周辺　名古屋商科大学講師　那谷俊郎

仕舞
放下僧　小歌　武田邦弘
江口キリ　大槻文蔵
鵜之段　藤井徳三　地謡　大江将重　上野雄三　藤井完治　上野朝義
姥キリ　山中義滋

狂言
宗論　浄土僧　野村万之丞　法華僧　野村万作　宿主　野村又三郎

能
望月　古式　子方　山中雅志　梅田邦久　野村四郎　西村欽也　河村総一郎　福井啓次郎　三島元太郎　藤田六郎兵衛
間　野村万之介
後見　大槻文蔵　山中義滋　片山清司　地謡　上野雄三　鵜沢郁雄　武田邦弘　藤井徳三　大江将重　上野朝義　藤井完治　祖父江修一
（終了　五時頃）

附祝言

主催　中部日本放送　中日新聞社

（有料）A席（正面指定席）七千円・B席（一階自由席）五千円　C席（二階自由席）四千円
入場券取扱所―名鉄・丸栄・三越・松坂屋・中日ビル・CBC・各プレイガイド
お問い合せは　中部日本放送文化事業部　電話（〇五二）二四一―八一二一

百点越える新作能面展

日本能面巧芸会

日本能面巧芸会（林龍雲会長）の新作能面展が五月三日から八日まで名古屋市博物館三階展示室で開かれた。

同会は能面の制作、研究に研さんをつづける同好の方々で、会員の新作発表会は今年で六回目、愛知県教委、名古屋市教委、能楽協会名古屋支部が後援、市民文化芸術活動として年々評価が高まってきている。

出展は、翁面、尉面、姥面、男面、盲目面、女面、神仏面、鬼面など百四点の出品、林龍雲師の「中将」「増女」の特別出品も行われ、連日多数の参観でにぎわった。（写真は能面展会場）

◆卯月の舞台から◆（その二）

観世会

竹尾邦太郎

「雲林院」　折から能楽殿周辺は桜花満開、正先に据えられた立木はその一枝を截り取って風情満点、時宜に適った能柄の醍醐味である。シテ紀彰。面阿古父尉・檜浅黄・紺無地駝斗目・褐色水衣。桜を手折るワキ欽也を咎めるシテと、古歌を引き合いに反論する風流人士のワキとの問答が、自然保護の立場のシテに有利に働くところなどは実に今日的テーマで説得力があった。それに盗伐では無いにしても、眼前の桜立木がそれを象徴しているようで、それかあらぬか紀彰・欽也の問答は活き活きと精彩があった。

中入前に、業平か、と問われ、へいいやぁぁ、と長く引いてワキに向いていた身体を正へ直したところなど。図星を指されてあたふたする感じを隠そうとする気配に見えて面白く、ヘタベの空の一段（鼓の流シで一ノ松に抜け、小さく廻ると右袖返シて拍子踏み、ツマミ扇に二ノ松へ行くと、打合てヒラキ、扇持ち替え右逆手に持って左右の袖を返シ小さく廻ると三ノ松傍に進み、太鼓の刻ミ・大小笛のアシライでするすると常座に戻ると舞上げた（15分）。

地の、へ語るとも尽きじ、とワキにアシラッて下居すると、へ松の葉の散り失せず、と立ち、切地へ言の葉草の、と橋懸に入り、へかく頼せる、と一ノ松でワキを見込むと、へ伊勢物語、と廻りながら二ノ松へ往き、小さく廻って左袖返シ、更に廻ってワキ正奥を見てトメた。型少なに舞ってそこに旧都とした情趣を醸し出すことを意図したような舞台だった。

紀彰は景英時代、実追善の「熊」の前など、ずかりと舞台正面框まで踏み込み、ざんぶとばかり汐を汲み上げた鮮烈な型が印象深く、その奔放と技の冴えに瞠目したが六之丞時代は貫禄で押し切るといった様子で、それは近年復曲の「大般若」などにも見られたが、六郎襲名を控え、ここに漸く先代の香気が濃厚に感じられる「雲林院」だった。

ワキツレは雅介・元、アイ友彦。囃子は六郎兵衛・啓次郎・定男・喜太郎・地に慶次郎・邦久ら。後見は勝一・徹二。（1時間40分）

「鉄輪」　男が女をつくり妻を捨てる。妻の呪詛に夢見が悪い男は陰陽師に救いを求める。男女間に起る葛藤という普遍性のあるテーマではあるが、当時の社会にあっては女の怨みは陰に籠もるしかなかったのだろうか……。

シテ勝一・面泥顔・襟浅黄・白摺箔（七宝繋文様）・無紅厚板腰巻に無紅唐織（萌黄茶段鶴菱唐草文様）を重折り女笠を持つ。ふつふつと滾る妬心を鎮め、へ月遅き夜の鞍馬川、の道行、左手笠に掛けワキ正を見たのがよい型だった。アイ弘之との問答から中入地に、へ緑の髪は空さまに、と怒髪天を衝くかに左腕高く挙げ、同時に、床几をすっくと立ったその心理描写が具象化された型も的確だった。スミに出て風雨雷鳴を避けるかに笠の下に身を屈め、笠を盾に正中で小さく二度廻った後、なんでこの様な仕打を受けなければならないのかという理不尽に、なりふり構わず激しく笠を投げ出すと、へ思ひ知らせん、の気持の昂りももどかしく小走りに走り込んだ安定した下半身の中入も素晴しかった。

後シテは面橋姫・襟紺・赤地金鱗箔・紺地縫箔（白立涌・雲と龍の丸文様）腰巻の装着胴姿。一ノ松のサシは幽かに、無情の境遇を我と我身に言い聞かせる趣である。嫉妬が激しく強いだけに、内にこもる暗い情念の火照りはチロチロと冷たく燃える。勝一は激情をぐっと押え、台に登って手に髪を巻きつけて打つ呼吸にも一瞬の躊躇を見せて、夫を奪った女への同性の憐れみすら示し、女の性（さが）の切なさと哀しさと虚しさを綯い交ぜに簡く描写して好演だった。

ワキ宗二朗、囃子は重一・孝一郎・鉱一・好信。地に邦久・邦弘ら、後見は紀彰・一英。（63分・4月10日）

信玄袋

―叙勲、左近時代のこと、演能―

まずめでたいことから。春の叙勲で地元から狂言の井上松次郎氏（本名重兵衛、代々仏具師）が勲五等に、東京では檜書店の檜常太郎氏（文化財保護委員）が勲四等に叙せられる。また先き頃芸術院賞を受けられた梅若恭行氏も勲五等に。重ねてめでたい。なお粟谷新太郎氏（喜多流）に紫綬褒章が贈られる。関西はどうであろう。

× × ×

四月は観世左近（先代家元）氏の五十回忌追善能が本年いや長く人の口にのぼる大きな話題と言いたい。私も「偲ぶ草」に小稿を載せてもらったが、お能拝見には不参で、その盛儀をお伝えすることは出来ませぬ。三十日の中日能のとき観世元正氏にお礼とお詫びを申し上げたら、かえって身体のことを気遣っていただき恐縮した。元昭氏とは同誌写真集を飾る遊行柳を五月の京都で舞われることを話した。

右「偲ぶ草」は「二十四世観世左近像」の題名と石王作の姥のオモテが表紙の六五頁、大型版で内容は光彩かつ豊富。「左近時代」を再現させて見事。表紙をめくると左近染筆の「幽玄」の二字が目を射る。翁に始まり遊行柳で終る演能写真と左近氏生涯の写真集は得がたい。卒都婆と鵜鷀と姨捨三曲の演能写真は中で特に貴重。翁も佳い。それにつけても表紙の姥の面は手向けの姨捨に使われる（着けられる）のでは。同時代の長老たち・親しかった方々が語られてできた「左近像」が編集者山崎有一郎氏（左近氏と親交あり）の後記と、美しい交差をみせる（能界の政治面のことは省くと注にあり）。能評読みごたえ、松野奏風氏の県清画みごたえあり。「左近像」の名古屋関係は、田鍋惣太郎・西村弘敬・藤田六郎兵衛（先代）・柴田初太郎（みな故人）各氏が追想する。先代茂山忠三郎氏とは同じ小学校で左近氏は一年上、先代忠三郎氏の「清ちゃん」「左近像」の始めを飾る喜多実氏（故人）の「相撲と酒」、井上八千代さん（直弟片山博通氏未亡人）の「左近先生を偲う」などなつかし。檜藤芳一氏が「観世家と片山家」の筆を執る。拙稿が結びのようなカクチで最後を占める。それは昭和十四年四月の藤田家追善能（名古屋、笛方）で舞われるはずの松風の頭末のことを「幻の能」の題で書いた。そしてあとに長い演能記録が続く（明三三―昭十四・三月）。あのしようしやな姿はいつまでも忘れない。

付、私の文章は半分用いていただく。名古屋にも確かに「左近時代」があったことは余情に委せられた。桜間金太郎（弓川）・野口兼資・金剛巌（初代）・橋岡久太郎各氏各時代と重複して、名古屋の能界を盛り上げられたが、左近氏は他氏と一と味ちがっていたように思う。そしてその能芸精神は元正氏・元昭氏に深高に伝えられているとしるす。演能記注記・名古屋能楽堂は名古屋の能楽堂と解し「謡の為め」・小見出し

なお秋の京都追善能で元正氏は松風、元昭氏は安宅を、片山九郎右衛門氏が部鄙を舞われる。

× × ×

名古屋の二・三の方に左近氏のことを問った。河村証二氏（観世流、大・河村総一郎氏父上）は〈左近能〉をたびたび拝見。声に力をこめて語られた。また昭和十年頃の観能料は二円―五円であったとも。狂言の井上松次郎氏もそう話される。今の千倍前後である。その松次郎氏はある年高山・日吉神社の催能で左近氏の颯爽（さっそう）たる姿に間近かく接したことを覚えている由（元滋氏のときらしく、年月未詳。二日間の能の後日）。内藤泰二氏（宝生流）は昭和十年の卒都婆小町（呉服町能楽堂）を拝見しましたが、その折の装束の一部を、五十年たって〈熱田〉で舞われた九郎右衛門・同曲でみかけたとなつかしそうであった。左近氏のことの後半は拙稿からの大槌の転用です。

× × ×

演能歴・四月十日。観世会で、雲林院（梅若紀彰）をみる。紀彰氏は舞の中途で一ノ松あたりへ行きじっと正面をみてしぐさあり。万感こもごも。月を眺めたか、在りし日（夜）の道行を想い出しているのか、それとも往時そのもの（伊勢物語）を振りかえってか。いずれにしても、松風・杜若と同巧異曲の美しい味わいあり。佳。紀彰氏はこの七月に待望の六郎名をつがれる。名古屋の披露能は来年とのこと。

五月十一・十二両日は奈良春日興福寺の薪能。（野村広二）

謡曲集シリーズ第15巻を発行

〝謡は決してつづれ錦ではない。日本が世界で誇り得る古典文学である〟と原文対訳の「謡曲集シリーズ」を刊行している「謡曲」編集者・坂元英夫氏はこのほど謡曲集「第十五巻」を刊行した。

内容は「玄象」「小鍛冶」「小督」。定価千円。問い合わせは、神戸市兵庫区七宮町二丁目三―四　尚謡発行所、電話〇七八―六五二―一二〇七

割烹・小料理　城
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路（中区栄3―10）
電話 241―0248

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101 東京都千代田区神田小川町2―1　電話（291）2488―9　振替東京 3-3552
〒604 京都市中京区二条通麩屋町東入　電話（231）1990　振替京都 1―113

CBC ニュースワイド5 CBCテレビ
「こんばんわ」で始まる地元のニュース番組（月～土）18:00～18:30（日）17:00～17:30

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋 0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

岐阜市制100年記念
中部未来博協賛
長良川薪能
7月31日　長良川畔で

岐阜市制百年記念・ぎふ中部未来博協賛事業として、社団法人岐阜青年会議所主催により「長良川薪能」が七月三十一日（日）長良川特設舞台で催される。

上演は、観世流能「土蜘蛛」（入道之伝）狂言「棒しばり」で、「土蜘蛛」はシテ観世清和師はじめ東西から来演。「棒しばり」はシテ野村又三郎師がつとめる。

岐阜青年会議所は、二年前の昭和六十一年に三十五周年の記念事業として能を上演、五千名を越える市民の参加があり大きな共感をよんだが、名水長良川の河原で、名勝金華山を背景にくりひろげられる能上演が期待され、「二十一世紀の明るい豊かな社会とは、心の豊かさが大切」古典芸能として名高い能、狂言をひとりでも多くの方にご覧頂き、岐阜の文化や伝統づくりのひとつにしたい」（川島岐阜青年会議所理事長）と力を入れている。

入場無料。特設舞台は岐阜グランドホテル前河原）、雨天の場合は京町小学校内・中央青少年会館。

番組は次のとおり、午後五時四十五分開演。

連吟「竹生島」「羅々」素謡「三井寺」仕舞「松風」いずれも岐阜青年会議所謡曲部所演。

午後七時十分火入れの儀

名古屋城夏まつり
13日間にわたり能上演
8月2日から多彩に開幕

名古屋城の天守閣を夜間に公開するとともに、名古屋城ゆかりの多彩な行事をおこなって市民に親しまれている「名古屋城夏まつり」は、昭和六十一年から行われ、ことしは八月二日から十四日まで開催、能楽界も参加して〝伝統美の薪能〟が催される。

名古屋城まつりの期間中には、アトラクションとしていろいろなイベントが企画されているが、能の上演も大きな話題で、ことしは八月二日の初日から最終日の十四日まで全期間にわたり、少しでも市民に能に親しんでもらう機会をと能楽師による能上演が予定されている。

前売りは大人五百円（当日百円）小人八十円（当日百円）、六月十一日から市内各プレイガイドで発売。「名古屋城まつり」の開催時間は午後四時三十分から午後九時三十分まで。

・八月二日（火）
仕舞「高砂」（生駒里翠）「松風」（前野都子）「山姥」（近藤幸江）能「羽衣」（今沢美和）
・八月三日（水）
仕舞「屋島」（本田勲）「三輪」（清沢一政）「歌占」キリ（久田徹二）能「熊坂」（松山幸親）
・八月四日（木）
仕舞「兼平」（高橋瞭一）富士太鼓（清沢一政）「玉ノ段」（梅田邦久）能「天鼓」（祖父江修一）
・八月五日（金）
富壇会（柳原富司忠師）、能「猩々」（シテ八神孝充）囃子六番、連調、独吟など、六時三十分始。
・八月六日（土）八月七日（日）
学生能（愛知教育大、相山大、南山大、名古屋大学）午後七時。
・八月八日（月）
仕舞「熊」（前野都子）「葵上」（梅田邦久）「善界」（松山幸親）能「天鼓」（清沢一政）
・八月九日（火）
仕舞「笠ノ段」（近藤幸江）「花筐」・クルヒ（生駒里翠）「鉄輪」（今沢美和）
能「羽衣」（前野都子）
・八月十日（水）
仕舞「難波」（今沢美和）「松虫」クセ（本田勲）「野守」（梅田邦久）能「花月」（須部甫）
・八月十一日（木）
仕舞「邯鄲」（加賀敏彦）「笹ノ段」（須部甫）「殺生石」（祖父江修一）能「車僧」（久田徹二）
・八月十二日（金）
仕舞「賀茂」（梅田邦久）「班女」アト（加賀敏彦）「小鍛冶」キリ（須部甫）
能「半蔀」（高橋瞭一）
・八月十三日（土）
仕舞「放下僧」小歌（祖父江修一）「野宮」（久田徹二）「昭君」（高橋瞭一）能「巴」（近藤幸江）
・八月十四日（日）
仕舞「巻絹」（松山幸親）「井筒」（祖父江修一）「春日龍神」（清沢一政）
能「安達原」（梅田邦久）

狂言（和泉流）「棒しばり」太郎冠者・野村又三郎、主・井上礼之助、次郎冠者・野村信行。

能（観世流）「土蜘蛛」入道之伝、シテ観世清和、ワキ福王茂十郎、頼光・小島一英、胡蝶・中川雅章、トモ清沢一政。

笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・河村総一郎、太鼓・鬼頭喜太郎、間狂言・大矢高義、野村信行。

後見・角寛次朗、久田徹二。

地謡・野村四郎、坂井音重、梅田邦久、武田邦弘、祖父江修一、中村和男、本田勲、松山幸親。

◈演能カレンダー◈
（熱田神宮能楽殿）

〔6月〕
19日（日）宝生会定式能（有料）
22日（水）能・狂言に親しむ会（有料）（番組①面）
25日（土）一謡会・叶石会（来場歓迎）（番組①面）
26日（日）也留舞会・信謡会（来場歓迎）（番組②面）

〔7月〕
3日（日）観世九皐会定期能（有料）（番組②面）
9日（土）野村四郎の会（有料）（番組②面）
10日（日）朝日狂言会（有料）（番組③面）
17日（日）観世楽謡会（有料）（番組③面）
24日（日）呉竹会（来場歓迎）（番組③面）
31日（日）青陽会（有料）（番組④面）

〔8月〕
6日（土）宝生流教授・嘱託会全国大会（会員制）
6日（土）名古屋薪能（熱田神宮特設舞台）（有料）
7日（日）宝生流教授・嘱託会全国大会（会員制）
13日（土）各古屋学生能楽連盟発表会（来場歓迎）
14日（日）大衆能（有料）
20日（土）邦謡会（有料）
21日（日）名古屋宜庁実業団宝生会大会（来場歓迎）
27日（土）衣斐正宜後援会能（有料）

〔9月〕
4日（日）名古屋金春会追善会（有料）
10日（土）中日文化センター芸能発表会（来場歓迎）
11日（日）名古屋観世会定式能（有料）
15日（祭）鍵雲会（来場歓迎）
17日（土）観世九皐会定期能（有料）
18日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
23日（祭）鳳鳴会大会（来場歓迎）
24日（土）久田観正会（有料）

（②面につづく）

能・狂言に親しむ会
「三山」公演

六月二十二日（水）昼の部一時半開演　夜の部六時半開演
熱田神宮能楽殿

◈昼の部（一時半開演）

「三山」解説　観世栄夫

能
片山清司
観世銕之丞

三山
西村欽也　河村総一郎
柳原富司忠　藤田六郎兵衛
間　野村又三郎
後見　武田欣司　清沢一政
観世暁夫　河村和重　橋本
青木道喜　梅田邦久　藤道
橋本雅夫

◈夜の部（六時半開演）

「三山」解説　観世銕之丞

能
観世暁夫
観世栄夫

三山
西村欽也　河村大
大倉源次郎　藤田六郎兵衛
間　野村又三郎
後見　青木道喜　祖父江修一　橋本
武田欣司　地謡　河村和重　梅田邦久　藤道
片山清司　橋本雅夫

〔有料〕
入場料三千五百円（全自由席）
市内各プレイガイドにて発売

主催　能・狂言に親しむ会
梅田邦久
藤田六郎兵衛

問い合わせ先　名古屋市西区幅下二―10―9　藤田六郎兵衛方
電話（522）五七一―五七六三

一謡会・叶石会大会

六月二十五日（土）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

囃子
江口　村木寛茂
羽衣　柳原富司忠
弱法師　鈴居順司忠
安宅　延年ノ舞　海田トシ子　鬼頭喜太郎
西行桜　柳原富司忠　藤田六郎兵衛
福井啓次郎　藤田六郎兵衛
三宅川公香　藤田六郎兵衛
福井啓次郎
川瀬絹子　鬼頭喜太郎
後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

楽謡
通小町　利根川靖之　高野瀬恵三
仕舞　網之段　近藤重治
池ケ谷豊

囃子
吉野天人　吉田恵美子　鬼頭喜太郎
後藤孝一郎　鹿取希世
俊寛　長戸花子　後藤孝一郎　森本重一
鶴亀　中村多恵子　鬼頭喜太郎
福井啓次郎　鹿取希世
藤戸　佐野徳司　森本重一
福井啓次郎
船弁慶　吉田明　鬼頭喜太郎
柳原富司忠　鹿取希世

一調
蝉丸　梅田邦久　内田睦子

舞囃子
田村　海田トシ子　河村真之介　竹市学
後藤孝一郎
杜若　近藤重治　福井良久　鬼頭喜太郎
福井良久　森本重一
野宮　小林辰彦　河村総一郎　鹿取希世
柳原富司忠
合掌留
鞍馬天狗　川瀬絹子　吉田定男　鬼頭喜太郎
福井良久　竹市学

独吟三井寺　長戸花子

舞囃子
清経　澄川幸子　河村真之介　森本重一
福井啓次郎
半蔀　石川晴子　福井良久　鹿取希世
胡蝶　内田睦子　筧鉱一　助川龍夫
福井良久　竹市学

一調
笠之段　橋本雅夫　河村大

囃子
高砂　林喜久子　助川龍夫
後藤孝一郎　鹿取希世
右近　池ケ谷豊　助川龍夫
後藤孝一郎　森本重一
松風　高木敬二　鹿取希世
柳原富司忠
三輪　林博敬　助川龍夫
福井啓次郎　鹿取希世
砧　澄川幸子　森本重一
後藤孝一郎
後　姥　高木和子　助川龍夫
柳原富司忠　森本重一
山橋　河村真之介　助川龍夫
福井啓次郎　鹿取希世
石橋

主催　一謡会
叶石会

〔御来場歓迎〕

春雅日記 ㊸

山法師

えと文　二井栄逸

六月は意外に花が多い。

入梅のころに咲くので霜椿ともいう夏椿や、くちなし、花たちばな、未央柳、九蓋（くがい）草等お稽古のささぎでお目にかかるのが楽しい。

今日の毎日文化センターでは、さいはい蘭の水墨を練習してもらったが、それぞれに個性ゆたかな作品が出来たようである。

さいはい蘭は花の咲く頃には葉が枯れてしまう。葉は一枚か二枚で葉蘭のような葉であるが、家に咲いたさいはい蘭は、まだ葉があり、枯れる一歩手前で黄土と茶の中にえんじ色をぼかしたような色をしていたのが素晴らしかった。

花の集まった形が、昔　武将達が兵を指揮するときにふった采配に似ているところからこの名がある。

今度の稽古にはやまぼうしを課題にしたいと思っている。

やまぼうしは、北海道を除く日本の山地に自生するミズキ科の落葉喬木である。

花季は、さいはい蘭が満開になる頃、咲き出し、六月半ばになるとびっしりと花をつける。

この木は、水平に枝をひろげる性質があるので、咲き並んだ美事な花の列を見るのには、丘の上や、山の中腹から見なければならない。

やまぼうしの名前の意味は、比叡山の延暦寺の僧、特にその僧兵の頭と頭巾からとったのであろうか。

私は、梅雨の頃になると花屋からやまぼうしを持ってこさせ、教材にもし、自分も楽しむことにしている。

特に素焼のつぼに生けると、独得の高雅な気品をただよわす。

それは、花弁のように見える四枚の総苞が純白で形が美しいからかも知れない。花はといえば、苞の真中にマッチの頭位の大きさに小さな緑色をした花がかたまっているだけである。

那古野神社奉能薪能

九泉会主催　能「葵上」を上演

名古屋市中区丸の内の那古野神社で、六月十一日（土）奉納薪能が催された。

同神社での薪能は昭和五十九年に始められ一年おきの開催で今回は三回目。

同神社境内の能舞台は明治十五年に建てられ、戦災にも耐えて保存されている。

演能は名古屋観世九皐会主催、後援那古野神社奉賛会で、九皐会社中により午後一時半から「奉納、素謡と仕舞の会」が催され、素謡「雲雀山」「杜若」「班女」「賀茂」「小督」「隅田川」舞囃子「船弁慶」「玄象」はじめ連吟、仕舞など二十数番。

午後六時半から奉納薪能を開演、仕舞「蝉丸」（吉田妙）「胡蝶」（高木美智子）「田村」キリ（駒瀬直也）「鞍馬天狗」（高橋暸一）

火入れ式・那古野神社宮地俊彦宮司。那古野神社奉賛会青山房三会長あいさつ。

能「葵上」（シテ観世喜之、ツレ中所宜夫、ワキ西村欽也、ワキツレ飯冨雅介、笛・鹿取希世、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・吉田定男、太鼓・鬼頭喜太郎、後見駒瀬直也、青木武弘、地謡高橋暸一、奥川恒治、加藤保彦、牛島康晴、高橋邦充）

大分前の話であるが、奈良の興福寺の般若の芝で、薪能が催された時、流儀からは羽衣が出され、若先生（その頃は故喜多実先生のことをこうお呼びしていた）のお供をして、地謡に出演したことがあったが、能の始まる前に、僧兵が現われ、能の始まることを見衆に告げ、竹矢来を背に、舞台の前においた床几になぎなたをついて居並らび、能の終るまで見守っていたことを思い出す。

やまぼうしを生けるたびに、かがり火に赤々と映えた師の舞姿や、僧兵のいかめしい姿がよみがえってくる。

（63・6・3・夜）

信玄袋

—大原御幸、五月の能・狂言・放送の王乱声（らんじょう）です」と（文責筆者）。謝して帰る。

三日テレビ能頼政（金春信高）。後日（二一日）の喜之・頼政（九

である。能界で大評判であった。

これは謡曲界（昭十七・六月号）にくわし。あの頃私は、NHK名古屋の教養係（終戦後芸能係へ）

◆演能カレンダー◆　（①面より続き）

〔9月〕

25日	(日)	和泉会	（来場歓迎）

〔10月〕

2日	(日)	草楽会大会	（来場歓迎）
8日	(土)	猫恵会大会	（来場歓迎）
9日	(日)	七彩会大会	（来場歓迎）
10日	(祭)	松謡会大会	（来場歓迎）
15日	(土)	猫風会大会	（来場歓迎）
16日	(日)	武田謡楽会大会	（来場歓迎）
23日	(日)	名古屋淡交会大会	（来場歓迎）
29日	(土)	梅園会能	（有料）
30日	(日)	幸謡会大会	（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

63年6月・7月放送予定

〔6月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

19日	(日)	喜多流	「唐船」粟谷新太郎
26日	(日)	観世流	「兼平」大西智久

〔7月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

3日	(日)	観世流	「龍太鼓」「生田敦盛」泉孝
10日	(日)	宝生流	「蝉丸」近藤礼 本間英孝
17日	(日)	金春流	「山姥」高橋汎
24日	(日)	観世流	「融」井上嘉久
31日	(日)	観世流	「雨月」谷村一太郎

※7月はFM放送のみ。

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

野村又三郎社中

也留舞会　信謡会　合同発表会

六月二十六日(日)午前十一時半開演

熱田神宮能楽殿

狂言
末広　（果報者）徳田文三
花争　（太郎冠者）松久恵美子
舎弟　（弟）山崎慎也　（すっぱ）長谷川田鶴　落合由布子　（主）加藤志津子　（見物人）大矢高義　（教之手）各川良三

素謡
安達原　平山みよ子　内田善太郎　桐浴弘充
通円　（通円ノ母）三宅千生　（僧）落合由布子　（所ノ者）種村とし江
鬼瓦　（大名）中山裕司　（太郎冠者）庄司武
井杭　（井杭）村手泰　（何某）野村信行　（第三者）野村又三郎

素謡
菊慈童　日比佐代子　山寺章子

小舞
花の袖　長谷川智恵子
宇治の晒　小山美保
よしの葉　村手悦子
貝尽し　白石友子
七つになる子　堀田淑子
法師ケ母　高橋貞
石河藤五郎　平山みよ子

仕舞
敦盛　柴田鏡子
熊野　田中芳子
羽衣　林紬加子

因幡堂　（男）各川良三　（貴）大矢高義
清水　（太郎冠者）種村とし江　（主）野村信行
蝸牛　（山伏）庄司武　（主）大矢高義　（太郎冠者）落合由布子

（終了　午後四時頃）

〔御来聴歓迎〕

主催　也留舞会　信謡会
指導　野村又三郎

名古屋観世九皐会定例能（第三回）

七月三日（日）午後一時始

熱田神宮能楽殿

素謡
花筐　（奥川）恒治　五木田三郎　佐々木勝輝　加藤保彦

能
阿漕　（観世）喜之　西村欽也　（笠）鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

間
井上礼之助

狂言
二九十八　野村又三郎　佐藤友彦

仕舞
盛　駒瀬直也

観世会　夏の素謡会

七月十七日（日）午後一時始

熱田神宮能楽殿

番組

井筒　高木美智子
班女　吉田妙
大江山　小林喜久

能
山姥　（中所）宜夫　高橋暸一　飯冨雅介　河村総一郎　助川龍夫　杉江勝久　柳原冨司忠　森本重一　河村総一郎

間
大野弘之

附祝言

457　名古屋市南区元塩町一一一一七（加藤保彦方）TEL〇五二（六一一）三六五九

主催事務所　名古屋観世九皐会

〔有料〕
賛会員券
当日券　五千円

第五回記念　野村四郎名古屋公演

能「望月」古式を観る会

七月九日（土）午後二時開演

熱田神宮能楽殿

講演　「望月」とその周辺　名古屋商科大学講師　那谷俊郎

仕舞
放下僧　小歌　武田邦弘
江口　キリ　大槻文蔵
鵜之段　藤井徳三
山姥　キリ　山中義滋

地謡　大江雄三　藤井将蔵　上野朝義　上野完治

狂言
宗論　浄土僧　野村万之丞　法華僧　野村万作　宿主　野村又三郎

能
望月　（子方）山中雅志　梅田邦久　野村四郎　（西村）欽也　河村総一郎　福井啓次郎　三島元太郎　藤田六郎兵衛

古式
間　野村万之介

後見　大槻文蔵　山中義滋　片山清司　地謡　祖父江修一　上野雄三　鵜沢郁雄　藤井徳三　武田邦弘　大江将蔵　上野朝義　藤井完治

（終了　五時頃）

附祝言

主催　中部日本放送　中日新聞社

（有料）　A席（正面指定席）七千円・B席（一階自由席）五千円　C席（二階自由席）四千円

入場券取扱所—名鉄・丸栄・三越・松坂屋・中日ビル・CBC・各プレイガイド

お問い合せは　中部日本放送文化事業部　電話（〇五二）二四一—

仕舞風
玉　鳩　水谷宏
葛　安田静子
桜　川クセ　天野和喜子
小　督キリ　伊藤まさ
松　風　和田佳津子

信玄袋

―大原御幸、五月の能・狂言・放送のこと―

今年もはや六月を迎える。四日熱田まつり奉納能がシテ方四流で催される。狂言は一番。

緑の濃い六月のことをまず始めに。同じ四日京都で二流儀（異流）共演の大原御幸がある。笛方森田光春氏の後援会がつくられ、その第一回の演目である。これには訳がある。演能の深い因縁と言えよう。能組にはその有り様（よう）が光春氏・金剛巌氏（初）ほかで述べられていますが、私もお招きをうけ、お礼にその話を。語り草の一端となれば仕合わせです。

能大原御幸はシテ観世銕之丞にツレ（法皇）金剛巌、ワキ森茂好・アイ茂山千之丞の諸氏。笛光春・小曽和博朗・大谷口正喜の三氏と地謡片山九郎右衛門氏。狂言は貫舞（茂山千五郎・千之丞ほか、括弧内は敬称略）。それに一調一管望月（謡九郎右衛門・笛光春・太金春愈右衛門）。東西六月で期待される能会であろう。

実は昭和十七年四月にも観・剛の異流で同曲（当時金剛流は小原御幸）と同じ狂言（茂山千五郎家）が京都九曜会（金剛舞台）で行われた。シテ金剛巌（初代）・法皇梅若万三郎（先代、大万三郎と言われた）にツレ（局）金剛滋夫（現家元巌）・ワキ宝生新の各氏。その笛が光春氏、アイも千之丞氏（当時政次）。おくれたがワキツレに森茂好氏が。右のうち光春氏ほかの四氏が二度の〈御幸〉である。能界で大評判であった。

これは謡曲界（昭十七・六月号）にくわし。あの頃私は、NHK名古屋の教養係（終戦後芸能係へ）にいたが、その年の暮に応召とは知らず、時々布池能楽堂へ通っていた。〈忠盛〉は東京で。謡曲界の頁を繰ると、同曲の演能写真二葉（金景、シテとツレ二人）と三宅襲・沼艸雨両先輩長短の批評が載る。十二日のこと。三宅氏は前日万三郎氏の能一番（松本謙三後援会で清経〈音取・替ノ型〉桜間金太郎、卒都婆小町野口兼資観能後）を残して京都へ向うため停車場へ急ぐと書く。またこの四月には三日に鷺・観世元正（左近追善能）、十九日には梅若六郎氏（後の実）が大原御幸を演じている（梅若会）。なお万三郎氏は〈御幸〉を勤めてから融を舞った。

演者は時の流れに感慨ひとしおであろう。盛会を祈る。

付、名古屋の同年四月には先々代観世喜之追善能（先代喜之と先代万三郎ほか）があった。

× × ×

五月のこと。と言っても、四月二九日から〈黄週〉の催し。三十日は中日鑑賞能。二人静で元昭氏の着けたオモテは孫次郎。盛し。清和氏のは小面か。またいただいたパンフに目玉の小書の解説を欠く。念のため。悉しくは後述。

五月一日、熱田神宮舞楽神事。快晴。熱田の杜に太大鼓の音がこだまする。禎福装束の左右の舞は陵王（木村通嗣）と落蹲（らくそん、納曽利、千秋季頼）。「陵王で高麗笛がたびたび吹かれるのは能のアシライ笛のようですね」、指導の長谷晴男権宮司「あれは陵王乱声（らんじょう）です」と（文責筆者）。謝して帰る。

三日テレビ能頼政（金春信高）。後日（二一日）の喜之・頼政（九皐会）と二つのオモテを比べるとおもしろし。前者は分別あっておだやかな頼政オモテ。後者のはきびしい気性を教養で彩る。テレビは前後ともオモテを大きく写す。佳。また紅地系（紅に紫まじり）に右三つ巴文の単法被（長絹とも）が印象的。本でもみたことあり。喜之氏では切りに扇をワキ正へさっと投げた気迫に興趣あり。

四日テレビ能祇王（宝生流）。

五日同狂言。盤山伏（和泉元秀）と狸腹鼓（大蔵弥太郎）。彦根狸（茂山家）よりリアル。珍し。終って大蔵氏の話あり。控え目の口調よし。

翌日のない〈黄週〉であった。

八日鬼頭八郎氏（太鼓方観世流）の追善会。舞囃子で娘掲が手向けられる。シテ銕之丞氏、太鼓助川竜夫氏（披キ）。切り特に味わい深し。佳。盛況。

十五日狂言やるまい会。別記。

二五日。茂山千五郎氏が、授業・シリーズ（放送はいずれもNHK）で、母校の京都春日小学校の児童へ狂言附子、これは今度小学校の国語の教科書に入れられそうであるが、これを口写ししながら狂言を語る。きびしさの中にやさしさのある教室のふんい気であったと好感がわく。終ってしたたる汗もぬぐわず千五郎先生は「どんな仕事でも一生懸命好きになるように」、教え子はうなずく、「茂山さんもお身体お大切に云々」と心が通い合う。異色。走り書きで。

× × ×

五月信玄袋で、叙勲の桧常太郎氏（文化財保護）と披露するのを（同委員）としました。お詫びして訂正します。（野村広二）

今度の稽古にはやまぼうしを課題にしたいと思っている。

やまぼうしは、北海道を除く日本の山地に自生するミズキ科の落

和泉元秀を観る会

じゆう舞台謡舞座　創立15周年記念

じゆうぶたい謡舞座（名古屋市昭和区鶴舞二―二―二二）の創立五周年を記念して、去る五月二十七日（金）名古屋市芸術創造センターで「和泉元秀を観る会」が上演され、狂言「素袍落」「鈍太郎」が上演された。

この催しには落語家・柳家小さんも特別出演、狂言解説に関山和夫氏が当った。狂言は次のとおり。

「素袍落」（和泉元秀、和泉元弥、井上松次郎）

「鈍太郎」（和泉元秀、佐藤友彦、鳥越正夫）

NHK・FMで藤田六郎兵衛氏が出演

笛方・藤田六郎兵衛氏は、NHK・FM放送「音楽と私」の番組で七月一日（金）八日（金）の二回にわたり出演する。午前九時より十時十分まで放送。

第三十回 朝日狂言会

七月十日（日）午後一時始

熱田神宮能楽殿

番組

舟渡聟　舟頭聟　和泉元秀　妻　井上祐一

茶壺　スッパ　大蔵弥太郎　中国ノ者　目代　大蔵基嗣　大西安春

武悪　主　井上礼之助　武悪　太郎冠者　大野弘之　佐藤友彦

呼声　太郎冠者　善竹圭五郎　主人　次郎冠者　善竹十郎　大蔵基義

六地蔵　スッパ　井上松次郎　田舎人　井上祐一　スッパ　佐藤融　〃　井上靖浩　〃　今枝郁雄

（終了予定五時頃）

主催　朝日新聞社　狂言共同社

後援　名古屋テレビ

会費　指定席三、〇〇〇円　自由席二、〇〇〇円　階上席一、〇〇〇円

取扱所　各出演楽師宅・朝日新聞企画部　松坂屋・三越・名鉄・各プレイガイド

事務所　中区橘一丁目七―五　井上方　電〇〇一四三〇

観世会夏の素謡会

七月十七日（日）午後一時始

熱田神宮能楽殿

番組

盛　盛クセ　今沢美和

敦盛　女アト　前野都子　地謡　須部中川雅章甫　武田邦弘　祖父江修一

班女　姥キリ　久田徹二　熊沢恵美子　ナリヤス　小島一英　観世元昭

山姥　寛　井上嘉久

俊寛　若キリ　本田勲　地謡　加藤保彦　小久田徹二　小島一英　梅田井上嘉久　観世元昭　野村四郎

蟬丸　中村和男　地謡　中川雅章　今村嘉勇　清沢一政　梅田邦久

松虫　虫キリ　須部甫

杜若　若キリ　本田勲　地謡　中川雅章　加賀敏彦　久田徹二　井上観世裕久　松山幸親　野村四郎　武田邦弘

松風　井上裕久　観世元正　野村四郎

田村　キリ　清沢一政　地謡　中川雅章　加賀敏彦　久田徹二　井上観世裕久　松山幸親　野村四郎　武田邦弘

三輪　仕舞　高橋暁一　地謡　中川雅章　小島徹二　加賀敏彦　松山幸親　英

融　仕舞　中川雅章

葵上　武田邦弘　観世銕之丞　梅田邦久　祖父江修一　地謡　本田勲　中村和男　武田邦弘　井上嘉久　観世銕之丞　田中武男　梅田邦久　祖父江修一

（終了四時半頃）

附祝言

〔有料〕　主催　名古屋観世会

全館自由席、入場料四千円

申込み先　能楽殿（〇五二―六八二―一七五一）及び出演楽師宅

呉竹会

七月二十四日（日）午前九時始

熱田神宮能楽殿

能　経正　菊慈童　片山慶次郎　鬼頭英二　後藤嘉津幸　助川龍夫　竹市学　片山伸吾　飯富雅介　福井啓次郎　筧通　玉木孝男　馬場信至　松山須部　幸親甫　梅田祖父江修一　本田邦久　後見　生駒里翠　片山慶次郎　地謡　清沢一政　森本重一

狂言　謀生種　野村信行　野村又三郎

囃子　安宅　三口謙介　筧鉱一　伊藤温通　辻本正樹　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

紅葉狩　近藤とき子　筧鉱一　和田篤　藤田六郎兵衛

百萬　坂野嘉子　鬼頭英二　水谷禾代　藤田六郎兵衛

班女　北洞節子

玄象　西川喜代子　吉田定男　福井啓次郎　佐藤英雄　後藤迪夫

附祝言

〔御来場歓迎〕　主催　呉竹会

能　杜若　森崎紀子　西村欽也　猪瀬孝　後藤孝一郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛　後見　近藤幸江　泉嘉夫　地謡　玉木孝男　馬場信至　加賀敏彦　祖父江修一　梅田邦久　中村和男　加藤保彦　高橋暁一

独調　玉之段　後藤迪夫　山本とよ子

一調　鐘之段　鈴木志ず子　筧鉱一

囃子　唐班女　北村利弥　佐藤英雄　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　奈倉早苗　水谷文雄　柳原冨司忠　鹿取希世　桜川　坂野富子　足立知子　福井啓次郎　森本重一　胡蝶　高野千勢子　松田よし子　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世　鞍馬天狗　大谷荒男　柳原冨司忠　助川龍夫　鹿取希世　天鼓　梅田邦久　弄鼓　河村真之介　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　関谷薫

（終了六時頃）

附祝言　主催　呉竹会　寛　三男　鉱一

仕舞　玉　桜　小　松　松　虫　風　葛川クセ　督キリ　伊藤まさ　和田佳津子　大久保喜代　小沙弥　宵山武雄　安田静子　天野和喜子

連調　羽衣　小笠原賢司

独吟　網之段　吉野天人　野田博子　河村総一郎　福井啓次郎　池田茂　寺田淳子

囃子　花月　丹羽久子　吉田定男　柳原冨司忠　戸田登紀子

草子洗小町　関谷薫　福井啓次郎　筧鉱一　足立知子

竜田　小林冨美子　河村総一郎　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　阪口泰子

猩々　河村真之介　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　戸松利作

連吟　羽衣　中山美枝子　松岡則子　水谷園子　水谷富子　水谷宏　和田佳津子

独調　吉野天人　加賀敏彦

連調　雪　雀山　本間千律子　長谷修利　亀山裕一

囃子　忠度　妹尾久　野村信輝　後藤孝一郎　鹿取希世

船弁慶　村中恵美子　青山宏邦　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

花筐　半田智子　山本万有里　柳原冨司忠　鹿取希世

囃子　中ノ舞　河村総一郎　柳原冨司忠　石野光明

楽囃子　神楽　吉田定男　後藤孝一郎　天野映子　天野雅昭

仕舞　高砂　中西やす子

花月　加藤小都子

東北クセ　伊藤悦子

笹之段　水谷園子

富士太鼓　水谷富子

C席（二階自由席）四千円

入場券取扱所―名鉄・丸栄・三越・松坂屋・中日ビル・CBC・各プレイガイド

お問い合せは　中部日本放送文化事業部　電話（〇五二）二四一―

聞　井上礼之助

狂言　二九十八　野村又三郎　佐藤友彦

仕舞　通盛　駒瀬直也

仕舞　[illegible]

◆演能

〔9月〕

25日（日）

〔10月〕

2日（日）

8日（土）

9日（日）

10日（祭）

15日（土）

16日（日）

23日（日）

29日（土）

30日（日）

（演

63

〔6月〕N

19日（日）

26日（日）

〔7月〕N

3日（日）

10日（日）

17日（日）

24日（日）

31日（日）

※7月は

（放送

青陽会定式能（第32期 第3回）

七月三十一日(日)午前十時半始
熱田神宮能楽殿

能組

仕舞

邯鄲　アト　今沢　美和
清経　キリ　前野　郁子
花筐　クルイ　近藤　幸江　　地謡　馬場　信至　祖父江修一　久田　徹二　本田　勲
鉄輪　生駒　里翠

能

町ツレ　高橋　瞭一
天女　今村　嘉勇
加賀　敏彦

賀茂

高安　飯冨　雅介
杉江　勝久　元　　鬼頭　英二　後藤孝一郎　鹿取　希世
間　佐藤　友彦

後見　近藤　幸江　武田　邦弘　地謡　生駒　里翠　玉木　孝男　中村　和男　松山　幸親　加藤　保彦　中川　雅章　小島　清　須部　重　沢　一政

仕舞

通小町　久田　徹二
野宮　中川　雅章　　地謡　須部　重　玉木　孝男　梅田　邦久　中村　和男
善界　祖父江修一

能

本田　勲

羽衣

杉江　元
高安　勝久　　河村　大　福井啓次郎　助川　范夫　藤田六郎兵衛

後見　前野　郁子　小島　一英　地謡　今沢　美和　馬場　信至　今村　嘉勇　高橋　瞭一　加藤　保彦　中川　雅章　清沢　一政　祖父江修一

狂言

竹生嶋参　井上松次郎　佐藤　友彦

仕舞

敦盛　キリ　須部　重
松虫　キリ　清沢　一政　　地謡　今沢　美和　前野　郁子　近藤　幸江　生駒　里翠
雅　坂　松山　幸親

能

武田　邦弘

殺生石

飯冨　雅介
白頭　　河村　真之介　柳原　富司　森本　重　池田　茂
間　大野　弘之

後見　今沢　美和　梅田　邦久　地謡　近藤　幸江　松山　幸親　本田　勲　今村　嘉勇　須部　重　高橋　瞭一　久田　徹二　加賀　敏彦

附祝言

主催　青陽会
名古屋市熱田区神宮一―一―一
熱田神宮能楽殿内
電話〇五二(六八二)一七五一番

〔有料〕
要会員券
当日券　三千円（普通席）

◆皐月の舞台から◆

「故鬼頭八郎一周忌追善能」「やるまい会」「九皐会」

竹尾邦太郎

舞囃子「旗捨」 シテ鈴之丞。誠実そのものの舞台だった。そしてそこには凄まじいばかりの役への集中力があった。何の脈絡も無く、ふと芥川龍之介の短篇「手巾（はんけち）」を思った。微笑を浮べ、息子の死を淡々と語る婦人の、卓子の下では手巾が強く握りしめられて激しく震えている、という。

鈴之丞の老女はあくまで静謐。しかし四肢に漲る力は鳩尾の一点に集まり、そこだけが激しく脈動している。将能や舞囃子は能のデッサンと言われるが、まさに雄勁なデッサンがありありと見えた。本来よぼよぼした婆さんは昇華して抽象化され、流汗淋漓、月光の中に舞う序ノ舞にも、踞って月光を扇に受けて見る型にも、寂寥感一入だった。強烈な燃焼度で引き付けるシテに見所は寂として声無く、一時間に亜んとする充実した舞台は名古屋能楽界の長老鬼頭八郎追善に相応しかった。地謡（四郎・暁夫・順之・雅章・修一）、囃子（啓之・孝一郎・鉱一・龍夫）の活躍も見逃せない。（58分・5月7日・長生会）

「盛島・弓流シ・那須之語」 長袴に威儀を正した囃子方（六郎兵衛・啓次郎・総一郎）に見所が鎮まる。ワキ欽也は大口僧。二人のワキツレ雅介・元を伴なう。漂泊の着流僧で無いだけに、「行き暮れたる修行者」の名宣が利く。しかし宿を乞うワキに応対したシテツレ清司は、「諸国一見の御僧」とシテ九郎右衛門に取り次ぐ。調章の異同は装束付にも影響すると思われるが、申合せで歩み寄れないものか……。

前場、へ旅人の故郷も、とワキにアシライ、へ都と聞けば懐かしや、と懐旧の念に誘われてシオルところなど、シテの極く自然な感情の吐露が素直で良かった。シテ語りは正中下居。「突っ立ち上り」、とスッと伸び上って居立つ姿に後シテが二重写しになる思いがした。アイは又三郎嫡子信行。晴れがましい那須ノ語の披きである。襟浅黄・白茶江戸段熨斗目に毘沙門亀甲文様の長袴。清々しい若武者ぶりは気力横溢、殷立（もだち）取って勇躍義経御前に目見得るところ、馬上波に乗り入れるところ、矢を放った瞬間の「フッツ」以後の目覚しい敵味方四囲の情景描写に卓抜したものを見せ、与一の成功と共に信行の堂々として立派な披きに感服した（15分）。

後シテは小書の弓流シに精彩を見せた。イエロの後、ワキ前で小鼓のポに合わせ扇を落す所謂弓流シ。一ノ松に抜けると、潮に流れる弓を目で追うように扇を見込み、右から左へ見遣って、再び舞台に戻り、太刀を抜くと殺到する敵を薙ぎ払い切り抜ける態に左、右と膝を溶くと扇を拾った。キリは橋懸。へ敵と見えしは群れ居る鷗、と面ツカイ、関の声と共に走り込んでワキがトメた。（1時間55分）

「狐塚」 シテ太郎冠者千五郎・アド次郎冠者正義。両人嬉々として鳴子を鳴らし、大声上げて囃しながら群鳥を追い散らす雅気満満の前半が出色。後半は日暮れて狐に化かされまいと、ねぎらい酒持参の主真吾と知ってか知らずか、両冠者二人掛りで主を縛り上げ、燻して懲るのは少々くどいが、狐を口実に主に戯れていると思わせる節（ふし）も窺える千五郎が巧妙。（30分）

「無布施経」 金銭に拘泥執着する人間の一典型を、又三郎は僧に托して活写した。特に、布施を忘れられて独白で本音を吐くところなど、恐懲やるかた無い気持の昂りが行きつ戻りつの神経質な運びにも現われて、当方もいらいらさせられる程だった。高圧的な強弁や説法、時に見せる阿ねた愛想笑い。布施への異常なまでの執心が又三郎の粘着性のある芸質で遺憾無く発揮され、陰翳に富んだ好舞台となった。アド高義もよく付き合い成長著しい。（37分）

「祢宜山伏」 敬岸な山伏万之丞に怯えの表情を見せる祢宜万介。互いに牽制し合って無言で面を切る辺に一刻ユーモラスな雰囲気があった。祢宜に同情を寄せる茶屋耕介との三者の調和もよく取れ、親子競演の実が上った。（31分・5月15日・第31回やるまい会）

「頼政」 シテ喜之。前後を通じて無常感というか人の世の儚なさが色濃く滲み出た。

前シテ、ワキ正に寄り、へおばろおぼろとして、と右から左へ見廻すところなど、それが象徴的。名所教えも自慢より一種の懐旧となってはかなく、へ露の身の姿見せんと来りたり、を実感させる。中入で、ワキ僧に思いを寄せる気分の濃厚は、常座で小さく廻るとワキに向ってサシ込ヒラキするところに窺えた。

後シテ、へ世を宇治川の網代の波、と一ノ松勾欄下を感慨深く見詰め、ふっと気を取り直したかに、へ泡沫の、と運び出す辺りの情感は、水勢盛んな夏川にたちまち消える水泡に、老武者である己の姿を見る哀しさが満ちているように思った。（1時間23分）

「酢薑」 シテ酢売・弘之、アド薑売・礼之助。相手に触発され、次々と口を突いて出る酢のスッパさと生姿のカラさを引っ掛けた秀句の応酬が、互いを「出来るな」という気持にさせ、相手の秀句の一端を三度舌転させるうちに可笑味が増幅され、二人が呵々大笑する過程と弘之・礼之助の極く乾いた笑いに味がある。キリの「いざどっと笑って行こう」には俗な世界をぶち破る大らかさがあった。秀逸（18分）

「羽衣・和合ノ舞」 シテ美智子。小書で三保松原の情景描写が抜け、ワキ白龍・雅介との羽衣を廻るやりとりの挙句の舞に重点があり、春の長閑な気分は薄い。物着で着けた白地に金で一面の芭蕉葉文様の長絹が、如何にも大空を行く翼の様に見えた。序ノ舞から直ぐ破ノ舞。袖捌きや足拍子に少々不満はあるがまずまず。キリは橋懸。二ノ松から一ノ松に戻ると左袖被さそのまま地のうちに幕に入りワキ留。女流らしい楚々とした美しい舞台だった。地は勝輝・芳雄ら。囃子は希世・啓次郎・定男・龍夫。後見に喜之・妙。（60分・5月21日・九皐会）

料理あつた
蓬莱軒
本店　熱田区神戸町三四　電話(671)8686～8
神宮東門店　熱田区神宮一―一―一　電話(682)5598

■生きた設備を誇る日進堂
メガネ調整設備は、正しいメガネ・快適なメガネづくりの根本です。日進堂は視力測定・メガネ調整用の諸設備はもちろんのこと、必要なときには数分でピックアップできる…お客様一人一人の視力記録システムなど常に生きた設備の充実を心がけています。
■ビス一本にも全神経を集中する日進堂
メガネ店の技術をささえるもの――それは、お客さまの信頼におこたえする責任感とまごころです。正しいメガネを安心してご使用いただくために、日進堂は、たとえビス一本にも全神経を傾倒しています。
■徹底した日進堂のアフターサービス
メガネをいつも正しく、最良の状態でご使用いただけるよう努めることもメガネ店のつとめです。日進堂は可能な限りの修理サービス、レンズ・フレームの清掃サービスを無料で行なっております。いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。
定休日　毎週木曜日
正しいメガネで しあわせを……
メガネの日進堂
◉駐車場完備　名古屋市西区那古野2-20-23（円頓寺本町）
〒451　TEL（571）6181―3

面打教室　於名古屋・栄朝日神社
毎週木曜日及び土曜日（それぞれ月4回）
（教室の見学・能面お求めになりたい方お気軽におこし下さい）
日本能面巧芸会
会長　林　龍雲
事務局　名古屋市中区錦1丁目3―31　丸満ビル3F　晃栄化学内　電話(052)211―4451

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ！
舞姿の勉強と記念に是非どうぞ！
当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きっとご満足いただける自信があります。
テレビ放送番組企画制作
テレビCM企画制作
記録ビデオ撮影
ビデオプロダクション　西川企画
名古屋営業所（〒451）名古屋市西区名駅2-20-3輪の内荘　小椋方　☎（052）571―5816
（〒500）岐阜市北野町20―2　TEL（0582）63―9869

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電話（291）2488－9　振替東京3－3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電話（231）1990　振替京都1－113

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

ぎふ未来博で「狂言」

特設舞台で伝統芸能上演
8月21日、和泉宗家ら来演

ぎふ中部未来博は、ことし中部地方の都市イベントとして、七月八日オープン以来好評を博しているが、この開催期間中、会場のイベント広場で世界各国、また国内の各県から参加があるなかで、日本の伝統芸能として「狂言」が参加、八月二十一日（日）に和泉流宗家・和泉元秀師らが来演する。上演のタイトルは、「日本の伝統文化・狂言の世界」〈狂言&薪狂言〉、主催は和泉宗家後援会。午後五時半開演。

出演は、和泉元秀、和泉元弥、和泉淳子、和泉祥子、井上松次郎、以下総勢二十五名による一大狂言イベント。囃子方は、一噌幸弘、大倉源次郎、山本孝、助川治の諸師。とくにこの企画に共感して永六輔氏が協力、企画の意義と日本の伝統文化紹介を積極的にすすめる和泉宗家に拍手をおくる講演とアピールをするとともに、未来博の趣旨にそって、出演の狂言方、囃子方も未来に活躍が期待されるメンバーが参加している。

番組は、素囃子「養老・水波之伝」「二人袴」「附子」「田植」永六輔氏のアピール、狂言「首引」火入れ式、素囃子「獅子」小舞「鮎」狂言「蝉」

特設ステージは、横三十尺、奥行十五尺、杉皮と竹で野外風の装置を施し、櫓掛りは青竹。かがり火、大提灯で薪狂言としての演出、ソニー提供のジャンボシネトロンを活用して背景の変化とドライアイスを使っての演出が試みられる。

大阪城薪能

8月3日　能3番

夜空に浮かぶ大天守閣を背景に、能楽五流が競演する「大阪城薪能」は、きたる八月三日（水）大阪城西の丸庭園で行われる。

読売新聞大阪本社、読売テレビ主催、大阪府、同教委、大阪市、同委、大阪21世紀協会後援

演能は「観世流能「田村」替装束（後シテ山本真賀、前シテ生一泰知）

金剛流仕舞「笠ノ段」（金春晃実）

金春流仕舞「鵜ノ段」（金春晃実）

宝生流仕舞「玉ノ段」（辰己孝）

観世流能「羽衣」和合之舞（観世元昭）

大蔵流狂言「蝸牛」（茂山忠三郎茂山千之丞、茂山千五郎）

喜多流能「小鍛冶」白頭（喜多六平太）

入場料＝一般二千五百円（前売り二千円）学生（小学生以上）千五百円（前売り千円）

前売りはプレイガイド、京都・檜書店、京阪神のおもな能楽室で取扱い。

問い合わせは読売新聞大阪本社事業本部。（電話〇六－三六一－一一一一）大阪城薪能係。雨天中止の場合は翌四日に延期。

◈演能カレンダー◈

（熱田神宮能楽殿）

〔7月〕
24日（日）呉竹会（来場歓迎）
31日（日）青陽会（有料）

〔8月〕
6日（土）宝生流教授・嘱託会全国大会（会員制）
6日（土）名古屋薪能（有料）（番組①面）
7日（日）宝生流教授・嘱託会全国大会（会員制）
13日（土）名古屋学生能楽連盟発表会（来場歓迎）
14日（日）大衆能（有料）（番組④面）
20日（土）邦謡会（有料）
21日（日）名古屋官庁実業団宝生会大会（来場歓迎）
27日（土）衣斐正宜後援会能（有料）

〔9月〕
4日（日）名古屋金春会追善会（有料）
10日（土）中日文化センター芸能発表会（来場歓迎）
11日（日）名古屋観世会定式能（有料）
15日（祭）鼓雲会（来場歓迎）
17日（土）観世九皐会定期能（有料）
18日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
23日（祭）鳳鳴会大会（来場歓迎）
24日（土）久田観正会（有料）

暑中御伺い申上げます

熱田神宮能楽殿運営委員会

委員長　熱田神宮権宮司　長谷晴男

第23回名古屋薪能

八月六日（土）午後五時半開演（雨天順延）

熱田神宮神楽殿前

（剛）仕舞　巴　吉川周子
歌　占　河井陸子

（春）仕舞　笹之段　加藤正嗣

（喜）仕舞　玉之段　長田暁

（観）仕舞　殺生石　小島一英

前野郁子
正　杉江元　河村真之介　福井啓次郎　鹿取希世

後見　高橋暁一　松山幸親　田中
梅田邦久　須部敏彦　中川雅章　武
地謡　加賀保彦　久田稲生芳雄　敏市　渡部道三　林鉄郎　広瀬瑞弘　山本和男　長田衛　和谷市郎　中川雅章　松山幸親　泉今村嘉夫　東田康文　百々治　竹市幸司　小林忠三

（観）能　紅葉狩　飯富雅介　高安勝久　杉江元　井上松次郎　大野弘之　吉田定男　柳原富司忠　鬼頭好信　藤田六郎兵衛

生駒里翠　高木美智子　熊沢恵美子　高橋暁一

後見　泉近藤幸江　今沢嘉夫　和地謡　今村本田勲　清沢嘉勇　中村小島稲生秀雄　和男　武田邦一英　祖父江弘修一

（宝）能　源氏供養　衣斐正宜　高安勝久　西村欽也　飯富雅介　福井鉱一　良久森本重一

後見　戸田和　玉井博祐　地謡　稲川寿一　竹腰勝一　佐藤平子　耕司稲美　辰己吉田俊彦　鬼頭内藤泰二　嘉男

火入式
御挨拶　熱田神宮権宮司　長谷晴男
名古屋市長　西尾武喜

狂言　蟹山伏　佐藤友彦　井上礼之助　野村信行

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部
後援　名古屋市
熱田神宮

前売　千八百円。当日　二千五百円。
プレイガイド、能楽殿、出演楽師で取扱い
◎雨天その他で順延または中止のお問い合わせは熱田神宮能楽殿（電話六八二－一七五一）

〔有料〕
要金員券
当日券　三千円（普通席）
名古屋市熱田区神宮一－一－一
熱田神宮能楽殿内
電話〇五二▽六八二－一七五一番

本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686－8
神宮東門店　熱田区神宮一－一－一　電話（682）5598（代）

観世元正

清和
芳宏
芳伸

社団法人　鋭仙会

観世雅雪
観世鋭之丞
観世栄夫
観世暁夫

中日文化センター特別教室
観昭会
昭門会

観世元昭

幽誣会
片山九郎右衛門

井上嘉久
（〒603）京都市北区紫野下鳥田町六

財団法人　梅若研能会
橘香会
梅若万三郎

大槻清韻会
大槻秀夫
大槻文蔵
大阪市東区上町二番地

梅猶会
猶諷会
梅若盛義

山本観衛会
山本勝一
〒540　大阪市東区徳井町一丁目二〇
電話〇六（九四二）四〇七〇番

鳳鳴会
武田志房

武田誣楽会
武田小兵衛
武田欣司
武田邦弘

第5回天王薪能

8月7日 津島・天王川公園

津島で毎夏行われる「第五回天王薪能」は、八月七日（日）天王川公園野外特設能舞台で天王薪能鑑友会の主催で催される。開演は午後五時半。

今回はとくに第五回をむかえて金春流・金春信高宗家が来演、能「国栖」を上演、また早大、上智大、愛大の学生能として「加茂」の上演など。津島市・同教委、佐織町、佐屋町、立田村、八開村の後援など地元の熱意と相まって期待がよせられている。

会員券二千円（前売券千五百円）学生券千円、小・中学生券五百円。

問い合わせは津島市市立図書館電話（〇五六七）二五―二一四五番。

番組は次のとおり

連吟「花筐」（横江享子ほか女性）独調「熊」（シテ坂田猛、小鼓・小島みゆき）独鼓「杜若」（シテ服部正臣、太鼓・石黒康行）

金春流学生能「加茂」（早大金春会、上智大能楽研究会による出演。小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・鬼頭英二、太鼓・片岡なな子）火入れ式は午後七時予定。

狂言「文荷」（佐藤友彦、大野弘之、今枝良治）

金春流能「国栖」（シテ金春信高、ツレ本田光洋、王・鬼頭伸幸、天女・鬼頭尚久、ワキ・飯冨雅介、間・井上松次郎、井上礼之助、笛・鹿取希世、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・筧鉱一、太鼓・助川龍夫。後見・金春安明、横山紳一、加藤正嗣。地謡・瀬尾菊次、吉場広明、林鉄郎、広瀬瑞弘、塚本恵市、伏原靖二、赤広一雄、渡部道三、小島芳樹、武馬正和）

なお雨天の場合は佐屋町中央公民館で開催。

春雅日記 ㊹

天の川

えと文　二井栄逸

夜空に銀の砂をまき散らしたような天の川は、やはり秋の始めの頃が一番美しく見える。

陰暦七月七日の夜、美しくきらめく天の川に牽牛、織女の二星が一年に一度の出合いをするという伝説は、古代中国で生れ、乞巧奠と呼ばれ、奈良時代に日本に伝わってきた。

又、我が国では、古代、七夕を夏と秋がゆきあう祭り日とし、この時季に村はづれに作られた棚で来臨する神々のために、機（はた）を織る女を棚機つ女（たなばたつめ）といった。

そして、神々の帰る折に七夕竹を立て、七夕流し、七夕送りをしたという言い伝えがある。この棚機つ女の信仰と、中国伝来の乞巧奠（きこうでん）とが習合して、現在のような七夕の風習が生れたのだという。

七夕は陰暦七月七日に行われる行事であるが、東京では陽暦七月七日に行われているし、又、月おくれの八月七日に行う地方も多い。私は子供の頃　硯洗いといって、母に教えられ、七夕の前夜、使っている硯や机を洗い清めたことを覚えている。

あの、有名な仙台の七夕まつりは毎年八月六日から八日まで行われ、観光客で賑わうのをテレビでよく見るが、まだまのあたりに見たことはない。

去年、仙台の荒巻に和紙の店を開いている良寛の庵というお店の主が七夕まつりの模様をくわしく手紙に書いて下さった。

七夕には七の数に因んで、短冊吹流し、千羽鶴、屑籠、紙衣、巾着、投網の七つ道具をつるのがきまりのようである。

老女物の中でも、もっとも位の高い能に関寺小町がある。

それは、閑けたる位であって、技巧を超越し、幽玄の極致を示すものとされている。

近江国関寺の僧が七月七日の夕稚児たちを伴って山かげのわらやに住む歌よみの老女をたづねる。

それは、老女の面（おもて）に無色唐織（いろなしからおり）を着流した年老いた小野の小町の姿であった。

硯をならしつゝ
筆を染めて漢塩草――

と短冊に一首をしたためた老女は、僧のすすめにより、関寺に足を運ぶのであった。

老女は、星まつりの宵を露にふるえる秋草の風情のように嫋嫋と序の舞を舞うのである。

老木にさく返り花の風趣。
牽牛は鷲座のアルタイル
織女は琴座のベガ

この両星を擬人化し、一年に一度、きらめく天の川を渡り、逢瀬を楽しむというロマンは、古代人ならずとも、すべての人々が胸にいだく天上への憧憬なのである。

（63・7・1記）

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話(〇一一三七)

観能独語

合理的で古風

宝生英照の「葵上」

つぼい装束が、派手な唐織を見なれた目にはややさみしく感ぜられました。それはそれでいいとしましてももう少し色気と情緒がほしらも甘様不十分のうらみがありましたが、今度の「葵上」では堂々たる舞台姿、やがて立派な弁慶役者がみられそうな気がしました。

63年7月・8月放送予定

〔7月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

24日（日）観世流「融」井上嘉久
31日（日）観世流「雨月」谷村一太郎

〔8月〕

7日（日）宝生流「芭蕉」金井章
14日（日）故人をしのんで
21日（日）観世流「大般若」梅若六郎
28日（日）観世能「玄象」山本真賀

（放送予定につき変更の節はご理解下さい）

名古屋観世九皐会
観世喜之
有賀滋子
加藤保彦
青木武弘
高木美智子
吉田妙
高橋瞭一

邦謡会
梅田邦久
須部甫
清沢一政
今沢美和
本田勲
名古屋市昭和区台町二丁目十六―五
電話（〇五二）（八四一）四六三二番

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山里町一〇三
電話八三二―三一八五
西宮市甲陽園目神山町一の一七八
電話（〇七九八）（六八）二四五八

初陽会
武田宗和

毎日文化センター
謡曲教室
風韻会
殿島修二

竹翠会　若松宏守
（〒662）西宮市平松町四―九
電話（〇七九八）二三―〇六〇一

謡交会　奥柳助
東京都世田谷区三軒茶屋二―一〇―二二
電話（〇三）四二二―二六三七番

大垣浦声会
稽古場　大垣市竹島町善念寺
住所　京都市左京区下鴨芝本町五八
浦田保利

名古屋修諷会
梅若修一

名古屋観生会
野村四郎
東京都杉並区永福四―三〇―一〇
電話（〇三）三二一―五一二九
名古屋稽古場
名古屋市千種区日和町四ノ一〇
小嶋方　電話七五一―一八八〇番

上田観正会能楽堂
社団法人　観正会
上田観正会
上田貴弘
上田拓司
神戸市長田区大塚町二丁目一ノ一四
電話（〇七八）六九一―五四四九番

笙月会　中川雅章
長浜市地福寺町八ノ二九
電話（〇七四九）六二〇六三〇番

一謡会　河村鉦二
叶石会　河村総一郎
河村真之介
〒466　名古屋市昭和区前山町一丁目二三
電話（〇五二）七六一―四八八二
河村大
〒603　京都市北区出雲路神楽町二一―一
ジョブコートビライ二〇三
電話（〇七五）二五二―四七七〇

金剛巌

本田光洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三（三八六）二六四一番

名古屋橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

久田観正会
久田徹二
大倉流小鼓
松月会　久田舜一郎
郁風会　前野郁子
松韻会　松山幸親
〒462　名古屋市北区東水切町四ノ四三
電話（〇五二）九八一―三六四三番

宝生雄
宝生英照

謡恵会　熊沢恵美子
名古屋市名東区平和ケ丘3―76
日車マンション四〇四

近藤乾三
近藤乾之助
〒170　東京都豊島区巣鴨五―二三―八

名古屋巽会
辰巳孝

内藤泰二

雲会（たいうんかい）
佐野由於
〒141　東京都品川区大崎五丁目一の四
五反田南ハイツ一〇〇三
〒921　金沢市泉野町四丁目十二―十四

高安会

観能独語

合理的で古風
宝生英照の「葵上」

六月十九日の宝生会で、宝生英照の「葵上」を見ました。英照は観世清和と並ぶ御曹子のホープで私は二人とも好きです。清和は去る四月「中日名匠鑑賞能」で「二人静」のツレを好演、私は大変感心しました。それにつけても好敵手の英照を思いだし、今度の「葵上」を見てあらためて両者を比較してみたい気になりました。

一方、観世の新感覚派泉嘉夫が同じく「葵上」で青女房を登場させるという思いきった新演出を試みてファンを驚かせたあとだけに本格派の宝生の御曹子が、折目正しい演出をどのように見せるかという点にも関心をひかれました。

この月は大家、大曲、希曲が数多く上演され、とくに「能狂言に親しむ会」主催の「三山」など番組を見ただけで声をのむ程の名企画もありました。

しかし目下体調をくずしている私には残念ながらつぎからつぎへと見て廻る力も時間も足りません。今更のように「葵上」をとりあげることに御不審と御不満のむきも多いかと思いますが、以上のようなわけであえて英照の「葵上」にまたまた一言申すことにしたわけです。悪からず。

ところで舞台の方ですが、「梓之出」の小書で御息所の登場が早くなり、前半が簡潔でひきしまったのは賛成です、英照の姿形も動きもさりっとしていましたが、白っぽい装束が、派手な唐織を見なれた目にはややさみしく感ぜられました。それはそれでいいとしましてももう少し色気と情緒がほしいところです。嫉妬に燃える貴女御息所が〝艶消し〟では如何なものでしょうか。

一番こまったのは照日の巫子です。女性だから仕方がないかもしれませんが、柄も声も小さくシテの迫力におされっぱなし、全くかすんでしまったのはお互に気の毒大いに舞台の効果をそぎました（ツレを軽視すべからず）。舞台は役半がよかったと思います。シテが、かついだ小袖をパッと脱いだ立姿のあざやかさ、ワキの小型（西村欽也）がなかなかの健闘ぶりでシテの競り合いなど迫力十分でした。

以前（たしか六十年の宝生会）で英照の「安宅」をみた記憶では整然たる合理的演出に感心しながらも貫禄不十分のうらみがありましたが、今度の「葵上」では堂々たる舞台姿、やがて立派な弁慶役者がみられそうな気がしました。私は厳揚な英照の舞台をみているうちになんとなく、今は昔の古い演出をしのばせるものがあるような気がしてきました。

合理的な英照の演技が古風めくとは皮肉の様で皮肉でない。私はそこに宝生の本流にそった英照の知性の働きをみとめたいのですが如何。我々は近代心理主義的見方にとらわれ、少し神経質になりすぎているのではないかと反省させられたのは収穫でした。（M）

〔お断り〕暑中広告の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。順不同と併せ何卒ご理解賜りますようおねがい申上げます。

信玄袋
―芸能史研究会、五座のことば―

六月の名古屋市博物館で「シーボルト展」（注、正確な名称は省略）が催された。放送でも採り上げられた。その妻お菊さんと娘お稲のことも。実はそのお稲の生涯が、昭和五十年前後、CBCのヒルの連ドラで放送された。丘みつ子さん扮する主役のお稲さんをみるのが毎日の楽しみ。「おらんだお稲」と言う題で一年続いたと思う。最後の方で、白髪のお稲さんが明治の宮中に参内（さんだい）して皇室の出産に立ちあう話も出た。そう、お稲は立派な女医でありました。父シーボルトには藤原義江氏（故人）がなった。今NHK「ノンちゃん」のお母さん役の丘さんもそうだが、あの八重歯が印象的であった。会場にはお稲さんの記念品も展示されたことであろう。波瀾の生涯をしのぶ。

ここ数年何かと名古屋市・東海三県は文化行事その他のことであわただしい。明年はいよいよ文化熱が盛り上げられるでしょう。能楽はじめ古典芸能は名古屋市制百年にどんな協賛をするのか。

× × ×

「芸能史研究」が第百号を迎え次の第百一号が創立二十五周年記念号で刊行された。百号は〈折口信夫と古代〉（上田正昭）・〈芸能史の課題〉（島津忠夫。注・発起人林屋辰三郎氏を一つの中心に）の両研究と現在会員名簿を載せ、百一号は〈情報産業社会における芸能〉（梅棹忠夫）に〈芸能史研究会の仕事〉と〈執筆者索引（一号―百号）〉を添える。

付、名古屋の芸能〈能・狂言〉は三篇はあったはず。なお同市の会員・香道蜂谷宗由氏が逝去で抜ける。私の属するこの二十五年は思い出多い。

× × ×

五座のことば。江戸期の能楽を表わすのに必ず用いられる四座一流のことばと新しく関係を生ずるようである。

この頃出版されている岩波の能・狂言講座の第一巻・能楽の歴史のことである。これも五回配本がすみ、あと二冊で完結（右第一巻を以下〈歴史〉と呼ぶ）。その〈歴史〉のなかで《五座》のことばを目にする。これは表章氏担当の分であるが、天野文雄氏担当の年表にも《五座》としるす箇所あり。本文の方（表氏）は〈江戸初期の五座の役者と曲名〉の見出しがついて、明暦三年（一六五七）の能役者付を載せ、喜多十太夫座二七名と紹介する。ワキ・囃子方はのらず。その前の方、〈北七太夫の生涯〉の項で、「当時（野村注、寛永初年か）七太夫が金剛座から独立していたのは確かであるが、シテ方の流儀としての喜多流や演能グループとしての喜多座の成立とは別である云々」、以下喜多座成立を説く。年表は元和九年（一六二五）の年の「以後将軍宣下の能は五座の参仕となる」がそれである。また明暦三年五座云々とある。

さて、野上全書の第二巻・能の歴史（昭五六、新訂版）によると追補の〈能の歩み・表章〉では、寛文二年（一六六二）の頃の記事に四座一流とあり、万治元年（一六五八）の役者付を引く処には、四座一流の能役者と書き、〈喜多二七名〉と紹介する。なお同書の小林静雄氏は維新時四座一流の家元云々と録し、森末義彦氏の文章では延宝九年（一六八一）の武鑑にもとづき喜多七太夫座二七名としるす。この森末氏の用語以来長く《五座》の二字はみなかった。

くわしく通読せず、二・三の書も一・二のことも調べず、遠聞寡見、メモ風に記した。四座一流とあわせて五座の用字が広く使えるのか、念を押したかった。

なおまた、第四巻・能の構造と技法（昭六二・十）は横道萬里雄氏の執筆。その〈能劇論〉（昨秋「能劇の研究」刊行）展開に期待して頁を開きたい。

× × ×

本と放送。

「芸は長し」・福原麟太郎・沖積舎（再刊。初版・垂水書房）。能楽随想・沙翁復興ほか・良書放送。文化ジャーナル・能楽界昭和の名手たち。江島伊兵衛氏（わんや書店、先代）の戦前撮影。松本長（熊野）・兼資（山姥）・金剛右京（花月）・万三郎（先代、菊慈童）・六平太（先代、頼政）各氏の舞台再現。謡は現代楽師。話・西野春雄氏（能楽タイムズ七月号、放送うらばなし・柳沢新治関連）。NHK、六・十三。昔なつかし。

× × ×

七月三日、河漕（観世喜之）。しっかりした中に爽秋と地獄の責め・救いの色濃く、「心引く綱の」「雲霧」のあたり印象強し。佳。（野村広二）

金剛巌
金剛永謹

廣田後援会
廣田陛一
廣田幸稔

豊嶋能の会
豊嶋春の会
豊嶋三千春

菊扇会
後援会
廣田泰三
泰能

金春信高
金春安明

金春欣三
東京都杉並区成田東四丁目35―20
電話〇三（三一五）七三八二番

〒167 東京都杉並区南荻窪3―17―16
電話〇三（三三一）二五七一番

春敲会
金春晃実
廣瀬瑞弘

〒467 名古屋市瑞穂区東栄町三―二四
電話〇五二―八四一―四七四五

本田光洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三（三八六）二六四一番

名古屋金春会
林鉄郎
近藤修彦
渡部道三

伊勢金春会
中村富次
伊勢市宮町一―一四―一七
電話〈五六〉㉒二四五六番

社団法人 能楽協会理事長
喜多流十六世宗家
喜多六平太

大阪喜多会
和調会
和島富太郎
〒665 宝塚市宝梅一丁目12―1
電〈〇七九七〉㈹八六三〇

二井栄逸
松阪市殿町1412の3
電〈〇五九八〉二三―〇二一六

長田驍後援会
〒514-23 津市高野尾町三三五―一四六
電話〈五九三〉㉚〇六九七番

喜多流 山本才
名古屋市千種区北千種3―3―10
合同宿舎千種東住宅30号
電話〈〇五二〉七一二―一五七四番

高安会
西村欽也
高安勝久
飯冨雅介
杉江元

福王茂十郎
〒662 西宮市名次町六番十二号
電話〈〇七九八〉㉓〇七七二

宝生閑
欣哉
〒176 東京都練馬区小竹町一―五〇―五
電話 〇三（九七二）七二三〇
〇三（九五五）四七九五

豊嶋十郎
〒271 松戸市下矢切五五―五
電話〈〇四七三〉㉒一九八二

京都・高安流
岡次郎右衛門
向日市上植野町地田一ノ五四
電話〈〇五九〉九三四―二四〇六

高安流 岡同門会
清水 高坂 森利 北康 塩宣 村蔵 中弘 伊三 清郎 谷蔵 口昭 水信
藤 坂 利 川 野 久 田 晴 山 湖 耕 三 雅 弘 舟 三 郎

第29回大衆能

八月十四日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

番組

経正
舞囃子（金剛流）　竹市幸司　吉田定男　福井啓次郎
地謂　東田康文　百々治　田中敏文　竹市学

羽衣
能（観世流）　今沢美和
飯富雅介　鬼頭英二　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
後見　前野邸子　武田邦弘
地謂　松山幸親　本田徹　今村嘉男　須部市　加藤保彦　久田徹二　梅田邦久　清沢一政

半部
仕舞（金春流）　クセ　伊藤雄二
地謂　渡部道三　林鉄郎　広瀬瑞　加藤弘　正嗣

旅風
仕舞（観世流）　祖父江修一

松風
加賀敏彦　小田島　中　泉一　稲生英　芳雄　武夫

天鼓
能（宝生流）　内藤達俊
内藤泰二
富士太鼓　高安勝久　河村総一郎　福井良治
間　佐藤友彦
後見　竹内澄子　玉井博祐
地謂　久野幸三　寺部一威　高田佐吉　川真武　野俊彦　稲六孝　竹田史　腰勝一

狂言（和泉流）
伊文字　井上松次郎　野村又三郎　井上孔之助　今枝郁雄

鵜
能（喜多流）　長田驍
間　西村欽也　筧鉱一　柳原富司　忠　大野弘之　森本重一　川龍夫
後見　高林白牛口二　長田郷　和谷衛市　和田男　高林呻二　山本　松井彬　森田克彦　中鵜功　大島政　長島茂允
地謂

（終了　三時半頃）

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部

前売券　千五百円（全自由席）当日券　千八百円
取り扱いは各プレイガイド、能楽殿、出演楽師宅

◆水無月の舞台から◆
「観世会」「宝生会」

竹尾邦太郎

「百万」　アイ・真吾が戯れの念仏踊の間にすらりと出たシテ・文蔵。シテ柱際でふっと立ち止り、よう佳懲りもの、といった気分で舞台に入ると、軽く窘めるようにアイの肩を打つ。蜂が刺した、と大仰に飛び退くアイ。この曲唯一の和やかな場面が良かった。

笹ノ段は流れるような鮮やかさが却って屈託した胸中を窺えないのが不満な程。クセで、へ影写す面影、とスミで水鏡を見る前にふと上を見たのがより効果的だった。

人込みに吾子を探す立廻りも、突然ものに急かれてツツと歩を速めては茫然と立ち尽して遠くを見詰めるなど、細かい描写に精彩を見せる。ただ子方の調子が悪く、辛抱し終えてやっと母子再会を果した時に、鼻を詰まらせてシテを見上げたのが妙に生々しく興を殺がれた。子方の巧拙が一曲に関わること言う迄もないが、文蔵の深井女のそこはかとない哀愁のムードは上々。（67分）

「金藤左衛門」　シテ千五郎、大髭の山賊雲ノ上ノ金藤左衛門。独得のハッタリで山道を狂くアド女・真吾を威嚇する。雲の上とは禁中。その雲の上人（うえびと）とあれば清涼殿の殿上の間に勤仕する人。さればこそ、お上より山立（山賊）の許状を持った者、の大法螺が利く。そして、それを文盲の女に読み聞かせる辺の得意が如何にも千五郎で、鼻蠢かす如くである。しかし、大まかに見えて文にみせる心持の有様は実に細かく行き届く。

さて結果は、隙に長刀奪われ立場が逆転。積善の余慶、の負け惜しみに「めでたうどーっと笑って帰らうと存ずる」も、崩れた相好はそのまま泣きっ面に変じ、正中でトメ。千五郎の持味が良く出た。（28分）

「天鼓」　シテ喜之。面小牛尉・小格子・茶水衣。気の進まぬままの参内で終始クモリがちな面は居クセにもこわばりつく。へ時の鼓のうつつとも、と居立つように伸び上り鼓を見上げる辺りの感情の起伏、細かい面遣ヒ・鼓を打ち、小首傾げて聴き入る音色に亡き子を偲び、思わず挽を落すと退って安座双シオリ。その挙措の一つ一つが滑らかで有機的関連がある。中入はアイ薫の送り込み。

後シテは黒頭に朱を刷いた様な初々しい面差しの童子。亀甲繋紅白段厚板・袷法被右肩脱・紫地半切。ワキ欽也の立ったままの待謂は如何にも水に臨んで天鼓の出現を待つ趣。シテもそれに呼応してすらりと水上に現われる態にするとシテの気分がしっくりとして気持がよい。

楽は途中挽を抽てて囃で舞い、浮き浮きとした喜悦で流麗に舞上げ、キリの型もきびきびと歯切よく、その目まぐるしい程の流暢は果して天鼓の本心なのかと思ったりした。前後の対照が際立って面白い舞台だった。（1時間30分・6月12日・観世会）

「鵜」　蓬髪に紛う黒頭・面怪士のシテ耕司の登場は水から上ったばかりの印象で妖怪味を見せるが、へ頼政きっと見上ぐれば、と顎をしゃくるように面を切るなどオーバー・アクション気味。意気込みはよいが少々荒っぽい。そのためかどうか、へ得たりやおう、と立って妖怪を取り押え、へ九刀ぞ刺いたりける、も力余って水衣の袖の中で突くことになってしまった。

後は赤頭・面小飛出・法被・半切。前の元気がここに発揮され、へ矢先に当れば変身失せて、と両袖キリと巻き上げて変幻滅却を見せたり、へ淀みつ流れつ、の流レ足など迫者で面白かった。キリは橋懸に抜け、三ノ松で、へ山の端の月と共に、と膝着いて袖を被き、返シに立って幕に入った。（63分）

「高野物狂」　シテ朝。襟浅黄・紺白段裏斗目・長袴に金襴の掛絡。全体に重っ苦しい気分が支配した。萌の直面は堂々とした風格があり、家臣でこれなのだから主君はさぞやと思われた。その遺児が残した文をシテはしっとりと努めて平静に読み、そこから健気な遺児春満を想像したが、現実は仲々旨くゆかないものである。

後場はスミに松立木を斜めに出した。（些細なことだが巻いた白布が所々セロテープで留めてあったが感心しない）後シテは土鳥帽子に測度掛をし、白大口に濃萌黄水衣。狂イ笹に文を挟む。地との掛合に笹で舞い、ついで、へ立寄りて休まん、と笹を置き、松の前に安座。ここでワキ高野僧・欽也との丁丁発止の問答が就中見事だった。クセの途中、へ実に三会の暁を待つ如くなり、とワキにアシラウが、この辺の心持深いと思った。へ深山鴉、とワキ正から正へずーっと見廻す辺りも深々とした気分があり、男物狂の中ノ舞も静かで何かしんみりしてしまった。キリは折角再会したのに何の感慨も無いように呆気無く子方が入ってしまい余韻どころでなかった。（1時間23分）

「飛越」　茶の湯に行く途中の流れがどうしても越えられぬシテ松次郎。しからばとアド礼之助が連れ跳び、と称して手を繋ぐ。その恰好がそれだけで十分可笑しい。揚句、流れに落ちた松次郎、笑われた腹いせに、昔相撲に負けた礼之助の醜態を揶揄する。「そこもと御免〳〵」と人垣をかき分け、「チンガリ、チンガリ、チンガリ」、と殿をひいて逃がれる描写がリズミカルで面白い。（24分）

「葵上・梓ノ出」　シテ英照。一ノ松で佇むと正に直シテ一声。へ遣る方無きこそ、が一際ヒステリックな印象で、へ悲しけれ、とシオル手も震えんばかりだった。小書で次第から上歌までが抜け、常座で、へ梓の弓の音は何処ぞ、と訝し気に四辺を見廻すところが怖い。クドキのアクセントのある謡が心象風景を窺わせて巧妙。小袖を打つところは、へ何を嘆くぞ、と身体を右に廻してすっくと居立ち、前方を凝視すると、へ怨みは、とキッと面を切り、へ今は、と意を決して勢いよく立ち上るとさっと小袖に寄った。へ枕に立ち寄りちやうと打てば、は振り翳した扇が一瞬虚空で逡巡するかに見えた。中入はあられもない振舞に羞恥をみせ、へ恥かしや、と袖で面を隠し、へ枕に立てる、と扇を投げ抛てると大小前で唐織引っかづき、後見座で衣襖（きぬぶすま）を立てて物着。久しぶりに見た。

後シテは長髪を崩し、白般若。凄艶の気分を残し、ワキの加持の間にひっそりと枕元に伏す不気味さが印象深かった。英照しっかりとした良い舞台だった。（53分・6月19日・宝生会）

能・シェークスピア研究会
渡米公演でリハーサル公演

能・シェークスピア研究会（代表宗片邦義氏）は、アメリカ公演のため八月二十四日渡米するが、それに先立って「渡米公演、リハーサル・パフォーマンス」として七月十五日、静岡大学体育館で、能「オセロー」が上演された。

瞳好会
森茂好
森常好

龍吟会
藤田六郎兵衛
〒151 東京都渋谷区代々木四—三八—二 電話（〇三）370—4609
名古屋市西区幅下二丁目一〇番九号 電話（〇五二）五七一—五七六三

森田光春
京都市東山区八坂上町三七六

幸圓次郎
〒164 東京都中野区中央四—四七—一一 電話（三八一）九四一三番

幸義太郎
〒116 東京都中野区丸山二—二四 都営丸山アパート一号三二〇号 電話（三三七）五六七二番

野中正和
〒174 東京都板橋区宮本町五七—一 第一宮本寮 電話（五五八）八四二七番

飯島佐之六
〒920 金沢市香林坊2—8—8

大倉正之助
〒161 東京都新宿区下落合二—一四—一五ノC

大倉源次郎
〒584 大阪府吹田市江坂町五—一七—二

谷口正喜
京都市上京区中立売通室町西入室町スカイハイツ610号

亀井俊一
忠雄
保雄
実

前川光隆
前川光長
名古屋稽古場　京都市右京区御室芝橋町一の六　名古屋市東区葵一—25—1 ニッシンビル六階六〇二号室 電話九三五—一〇一〇番

名古屋和泉会
大垣狂言の会
和泉元秀

大蔵狂言会
大蔵彌太郎
大蔵基嗣
基義
〒215 川崎市麻生区岡上四三八—一 電話〇四四（九八七）一一八七番

茂山千五郎
茂山正義
茂山真吾
茂山千三郎
京都市上京区中筋通り石薬師上ル

茂山忠三郎
〒606 京都市左京区北白川大堂町47—1 電話〇七五（七〇一）二〇一一番

狂言やるまい会
野村又三郎
〒460 名古屋市中区正木二丁目16—25 電話（三三一）七五五三番

セントラルパーク薪能
9月23、24日2日間

友社
118-18
8 4
3 9 3
00円
00円
70円

松音会
泉
翠
中日文化センター
謡曲・仕舞教室　名古屋（栄）岐阜・四日市
謡会

二井栄逸師画抄集
'89 能画カレンダー
◉ 予約特価1部1100円、郵送の場合送料とも1部1450円（2部以上の場合、部数に拘らず送料は一律 500円、例・3部の場合送料とも3800円）
◉ お申込み方法　ハガキで部数明記のうえ当社へ予約お申込み下さい。
能楽の友社（詳細9月号）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号 464）
電話（731）7984
振替口座 名古屋 0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年 1200円
一部　70円

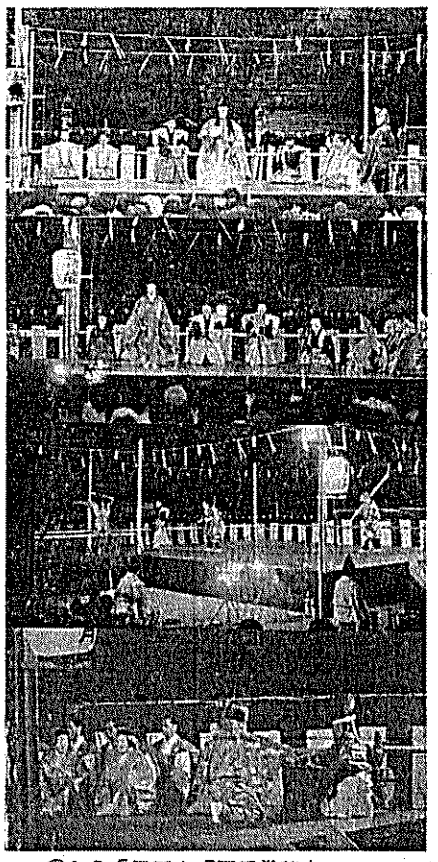
◈演能カレンダー◈
（熱田神宮能楽殿）

〔8月〕
20日（土）邦舞会能（有料）（番組②面）
21日（日）名古屋官庁実業団宝生会大会（来場歓迎）
27日（土）衣斐正宜後援会能（有料）（番組②面）
〔9月〕
4日（日）名古屋金春会追善会（有料）（番組②面）
10日（土）中日文化センター芸能発表会（来場歓迎）
11日（日）名古屋観世会定式能（有料）（番組③面）
15日（祭）鼓盤会（来場歓迎）
17日（土）観世九皐会定期能（有料）（番組③面）
18日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
23日（祭）鳳鳴会大会（来場歓迎）（番組④面）
24日（土）久田観正会（有料）
25日（日）和泉会（来場歓迎）

63年9月放送予定

〔9月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
4日（日）喜多流「野宮」喜多六平太
11日（日）観世流「俊寛」橋岡久馬
18日（日）宝生流「砧」大坪十喜雄
25日（日）観世流「梅枝」浦田保利
◈ NHK教育テレビ・祝日能（午前9時）
15日和泉流・狂言「棒しばり」野村又三郎
観世流・能「土蜘蛛」観世清和
――岐阜・長良川薪能から――
23日　映画「名家の面影」より（昭和7・8年）
宝生九郎「望月」観世左近「花筐」梅若万三郎
「菊慈童」「道成寺」桜間弓川「角田川」金春八条
「景清」喜多六平太「頼政」
能「黒塚」金春流（昭和32年）前シテ・本田秀男
後シテ・桜間道雄
狂言「寝音曲」和泉流（昭和48年）シテ野村万蔵

第23回 名古屋薪能
6日 熱田神宮で盛会



㊥から「経正」「源氏供養」
狂言「蟹山伏」能「紅葉狩」

セントラルパーク薪能
9月23、24日2日間

名古屋の中心、栄で行われるセントラルパーク薪能は、昭和六十年に初演以来、多くの話題を提供してきたが、ことしは、セントラルパーク十周年にあたり、九月二十三日（金・祝）と二十四日（土）の二日間、セントラル広場で催される。

上演は初日が狂言「柿山伏」能「松風」二日目が狂言「しびり」能「船弁慶」で親しまれた演目の上演である。開演は両日とも午後七時。

主催　セントラルパーク
後援　愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所
協力　セントラルパーク薪能を愛する会、能楽協会名古屋支部

構成　能と狂言に親しむ会（梅田邦久、藤田六郎兵衛）

なお　上演の一日又は両日とも雨天の場合は、九月二十五日（日）まで順延。観賞は無料。

・九月二十三日（金・祝）
狂言「柿山伏」（山伏・大矢高義、畑主・野村信行、後見・野村又三郎）
能「松風」（シテ・梅田邦久、ツレ清沢一政、ワキ・西村欽也、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・筧鉱一、後見・須部甫、今沢美和、地謡・小島一英、中川雅章、祖父江修一、本田勲）

・九月二十四日（土）
狂言「しびり」（太郎冠者・野村信行、主・大矢高義、後見・野村又三郎）
能「船弁慶」（シテ・祖父江修一、ツレ今沢美和、子方・祖父江智子、ワキ・西村欽也、笛・鹿取希世、小鼓・柳原冨司忠、大鼓・河村真之介、太鼓・助川竜夫、間・野村又三郎、後見・近藤幸江、前野郁子、地謡・久田徹二、高橋暸一、加賀敏彦、松山幸親）

宝生会定式能
9月18日　能3番

名古屋宝生会の第三回定式能は九月十八日（日）熱田神宮能楽殿で開催される。

午後一時始。能「養老」（シテ・稲川寿一、ツレ佐藤耕司）「三山」（シテ高橋章、ツレ衣斐正宜）「邯鄲」（シテ玉井博祐、子方杉浦由直）狂言「柿山伏」（佐藤友彦）仕舞など。

主催　能楽協会名古屋支部
前売券　千五百円（全自由席）当日券　千八百円
取り扱いは各プレイガイド、能楽殿、出演楽師宅

名古屋観世会
藤井久雄
藤井徳三
楽人
完治
神戸市中央区熊内町二―一―二〇
電話（二二一）五一四四番
名古屋淡交会
橋岡慈観
稲沢市稲島町二ノ宮六　瀬戸方
電話〈〇五八七〉㉜三三八八番
幽花会
片山慶次郎
〒603 京都市北区小山下花ノ木町二一
電話 四九二―五三〇二番
財団法人 鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太
〒248 鎌倉市長谷三―五―十三
電話（〇四六七）㉒五五五七
山本眞賀
豊中市本町六丁目一〇―六
松音会
泉泰孝
東京都杉並区宮前四―一九―四
電話〇三（三三二）八二八〇番
下田雄三
大阪市東区高麗橋話五三
雄諷会中部地区連合会
名古屋和諷会
一宮竹石会
岐阜花諷会
下呂雄諷会
萩原雄諷会
高山雄諷会
倭文之屋社中
洗心会　奥村富久子
〒606 京都市左京区永観堂西町二〇
電話㊐豆（七七一）〇七六七番
大西智久
〒560 豊中市北桜塚2―10―3
春嶽会　梅若善高
豊中市新千里南町三丁目18―12
電話（〇六）八三一―七八五四
水雲会
水藤元三
緑名会　田中武
〒488 尾張旭市城山町三ツ池六一九八
電話（〇五六一五）③三三〇四番
芳韻会　稲生芳雄
半田市船入町三十一
電話〇五六九㉔〇八一五
加賀敏彦
名古屋市守山区森孝新田字乙98の44
電話（〇三三）（七七一）八九四五番
松和会　中村和男
各務原市那加桜町2丁目15番地
電話〈〇五八三〉㉜二七九四番
野村又三郎
〒460 名古屋市中区正木二丁目16―25
電話（三三一）七五五三番
中日文化センター
謡曲・仕舞教室（名古屋（栄）岐阜・四日市）
翠謡会
生駒里翠
名古屋市名東区社ガ丘3ノ1503
電話〈〇五二〉七〇三―五七一七番
重陽会　菊池重郷
犬山市犬山字相生五九―一六
電話（〇五六八）㊶四五〇一番
幸謡会　近藤幸江
岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話（〇五六四）㉔二五二九
観修会　祖父江修一
多治見市日ノ出町2丁目
電話〈〇五七二〉㉒三六五六
清諷会　今村嘉勇
岩倉市東新町下境52―401
電話〈〇五八七〉㉗七二三八
正風会
衣斐正宜
〒466 名古屋市昭和区御器所3―23―19
御器所パークマンション802号
衣斐正宜後援会
〒450 名古屋市中村区名駅三―二六―二六
平松昌彦方
電話（〇五二）五八六―一一二〇番
倉本雅
神戸市東灘区田中町一―13―26
本山アーバンライフ四〇一号
電話〇七八（四四一）五四六五番
宝生流
嘉宝会
鬼頭嘉男
名古屋市昭和区川名本町二ノ五一
吉田俊彦
竹腰勝一

春雅日記 ㊺

はまひるがお

えと文　二井栄逸

花期を過ぎた浜昼顔が、まるい厚みのある葉を一ぱいつけて、砂浜にひろがっている。

南紀の海。

朝な夕なにはもう秋の気はいを感じさせる八月二十日あまりの海。

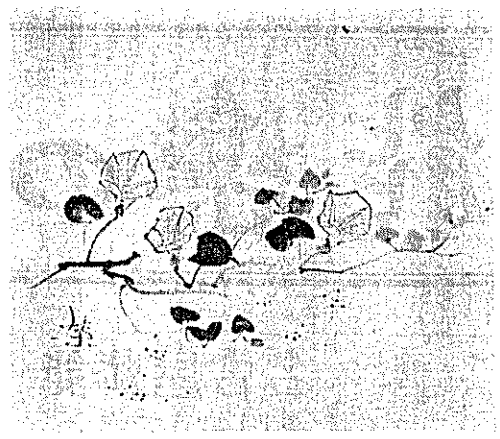
六月の始め、この海を見に来た時は、はまひるがおは真盛りであった。

村山さとしの句に

こんなに咲いて　まだささびしいか

浜昼顔。——

というのがある。



薄いピンクの花を咲かせ地べた一面にひろがっているけれど、何となくさびしそうな花である。

この花の咲く頃は、海水浴のシーズンには早すぎるので、海岸には人かげが無く、そんな中で海の風に吹かれながら群落を作っている風景はすばらしい。

しかし、この花には何かわびしさがついてまわるのである。

ゴールデンウィークが過ぎ海の夏がおとづれるまでの間隙にしか咲けない孤独というこの花の宿命のせいかも知れない。

でも私は好きである。海の音と、青い波、そして薄桃色の透明の花がつくる幻想の世界にひたっていると、これまでに体験した数々の舞台での心の感動がよみがえってくるからである。

× ×

わら屋の柱によりすがって荒磯に打ちよせる夕潮の音をじっときく景清の胸に去来するもの。

平家一門の人々をのんだ西の海。

あかねに映える夕波、潮風にはためく平家の赤旗（反逆、あきらめ、哀愁——

又、絶海の孤島に残された俊寛、ロンギからキリまで、遠ざかりゆく舟影を思わせるような律動の中、舞台にはただひとりひれ伏す俊寛のすがたが、浪音とのかすかな幻想のうちに薄れてゆく鬼界島。

又、月の光、海のひびき、流離の才子行平に寄せる薄命の美女の思慕は、そのままものあわれの世界となって幽玄の極致に達する松風等。

× ×

はまひるがおと違って、普通のひるがおは、垣根や、山裾の灌木にまきついて生長するのでよく見かける花である。

葉は薄く長い。この花は浜昼顔と少しちがって可憐さをただよわせている。

萬葉では容花（かおばな）とよばれ多くの人に愛された。

大伴家持が愛妻に贈った歌は

高円の　野辺の容花　おもかげに　見えつゝ妹は　忘れかねつゝ——

まことに心こまやかな美しい歌である。

（63・8・1記）

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話(08)1137

第四回 衣斐正宜後援会能

八月二十七日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

講演　後援会会長
作曲家　神津善行

「日本音楽の中の能楽」

番組

能　前田晴啓
間　月　飯富雅介　寛鉱一　柳原冨司忠　鹿取希世　山本則直
後見　辰巳孝　宝生英照　佐藤耕司　稲川寿一　武田孝史　地謡　鬼頭喜太郎　辰巳満次郎　嘉男　衣斐寺井　東川良雄　光宜正夫

狂言
花売　山本東次郎　山本則直
調　宝生英雄　福井啓次郎

能
歌　昆布一　宝生英雄

狂言
船弁慶　塩谷亜喜　福王茂十郎　飯島佐之六　広谷和夫　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
後ノ出　留ノ伝　山本東次郎
間　佐藤耕司　寿一　武田孝史　宝生英照　地謡　稲川寿一　鬼頭嘉男　寺井良雄　佐野登　東川光夫

附祝言

主催　衣斐正宜後援会
事務所　名古屋市中村区名駅3—26—26
平松昌彦方

入場料
一般四千円、学生千円　電話〇五二—五八六—一一二〇

本田秀男先生二十三回忌追善記念 名古屋金春流同門会番組

九月四日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

能
仕舞　田村山木崎三郎　蝉丸小林慈行
仕舞　舟屋　野切山口貴与志　嵐山口美保
仕舞　高砂橋木昌浩　羽衣中川由美
仕舞　網之段長尾勇人
仕舞　東北曲松岡賢二生田切林功
独吟　俊寛初同赤広一雄
連吟　杜若曲デンソー金春会
寛　中部金春会
仕舞　羽衣切松本弘子
独鼓　加茂山田信善　片岡なな子
仕舞　鐘太鼓段新竹加奈子　経葛切原松枝　政切鈴木寿
連吟　俊寛　伏原靖二　瀬戸昌子
仕舞　羽衣切加藤正嗣　花月切加藤冨貴子
独鼓　山玉葛能　丸渡部道三　鬼頭英二　鹿取希世
仕舞　羽衣　柳原冨司忠
舞囃子　蝉（㉓面より）

（㉓面より金春同門会つづき）

舞囃子　融　松本武　鬼頭英二　柳原冨司忠　鹿取希世　鬼頭喜太郎
舞囃子　松風　林鉄郎　鬼頭英二　柳原冨司忠　鹿取希世
（十二時三十分終了予定）

邦謡会能

八月二十日（土）一時始
熱田神宮能楽殿

素謡
清経　今沢美和　本田勲　須部甫
地謡　河村和重　松山幸親　梅田邦久　古橋正邦

能
鄙　河村和見　清沢一政　西村高安　飯冨欽也　杉江雅介　寛勝久　福井啓次郎　鉱一　鹿取希世　鬼頭喜太郎
間　野村信行
後見　河村和重　小島一英
地謡　塩見保　本田勲　加賀敏彦　古橋正邦　梅田邦久　青木道喜　敏二　久田徹二
舞囃子　融　松本武　鬼頭英二　柳原冨司忠　鹿取希世
舞囃子　松風　林鉄郎　鬼頭英二　柳原冨司忠　鹿取希世
（十二時三十分終了予定）

観世会定式能（四回）

九月十一日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能
加茂　青木道喜
夕顔　小島一英　地謡　加賀田敏彦　久田徹二　清沢一政
歌
占キリ　橋本確道

狂言
口真似　野村又三郎　井上礼之助　大矢高義

仕舞
河村和貴　梅田邦久
弁慶　西村高安　飯冨欽也　雅介　勝久　吉田定男　柳原冨司忠　鬼頭好信　鹿取希世
前後之替
間　大矢高義　松山幸親　塩見保　須部甫　清沢一政　古橋正邦　久田徹二　橋本確道　河村和重
後見　青木道喜　小島一英　地謡
附祝言

主催　邦謡会
梅田邦久

〔全自由席、入場料三〇〇〇円〕

（終了　五時十分頃）

名古屋観世九皐会定期能（納会）

九月十七日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

若草山荘
電話(0532)(22)1137

司宝会
佐藤耕司
名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅一三〇　電話(052)七三七二

金剛流　景雲会
国際能楽研究会（I・N・I）
インターナショナル能インスティチュート
（日本・カナダ・アメリカ・ニュージーランド・ドイツ・フランス・台湾）
にい
新居能面の会
宇高通成後援会
宇高通成
〒606　京都市左京区高野泉町四〇
TEL(075)七〇一—〇七九三
名古屋事務所　前組英安方
TEL(052)八五一—二三二四

金剛流
松野恭憲
松野洋樹
〒616　京都市右京区鳴滝泉殿町一八—三
TEL(075)(四六一)一一四八番

金剛流
周星会・名古屋
周星会・岐阜
吉川周子
名古屋市千種区西崎町三—六
電話(052)七六一—二二五七

谷田宗二朗
〒603　京都市北区衣笠街道町31—7
電話(075)492(0235)492—8113

筧三男
森本重一

九州高安流同人会
飯冨徹
飯冨良人
大山要二郎
山崎悛輔
横田富生

幸友会
福井啓次郎
福井良久
福井良治
柳原冨司忠

桂会
後藤孝一郎

冨耀会
柳原冨司忠
〒466　名古屋市昭和区山里町七四
八事パーク・マンション五一五
電話(八三二)一〇三一番

小鼓教室
名古屋市中区栄　朝日神社内（丸善前）

瀬尾乃武
〒171　東京都豊島区西池袋1—30—10—305

筧鉱一
吉田定男

楽諷庵舞台

（㊐面より金春門前まつづき）

舞囃子　融　松本武　鬼頭英二　柳原冨司忠　鹿取希世

能　広瀬雅弘　伊藤雄二　金春晃実

舞囃子　松風　林鉄郎　鬼頭英二　柳原冨司忠　鹿取希世

（十二時三十分終了予定）

主催　名古屋金春会　春蔵会

中部金春会　トヨタ車体金春会

〔ご来場歓迎　入場無料〕　デンソー金春会

本田秀男先生二十三回忌追善記念
名古屋金春会能

九月四日（日）午後一時始

熱田神宮能楽殿

氷室

能　飯冨雅介　高安勝久　杉江元　吉田定男　柳原冨司忠　佐藤友彦

間　金春信嵩　松岡賢二　地謡　加藤正嗣　佐久間祥夫　杉浦尚三　堤治九郎　林幸夫　金春広瀬　瀬尾安明　吉場広明　前田茂穂

仕舞　鄙吉場広明　松風瀬尾菊次　弱法師高橋汎　地謡　金春中村富次　林鉄郎　前田茂穂　塚本恵市　信嵩高次

融　金春安明

能　近藤修彦　本田光洋

清経

飯冨雅介　恋音取　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

後見　高橋汎　前田茂穂　地謡　赤広一雄　林功　木崎三郎　永田孝司　小林喜行　金春瀬尾菊次　吉場晃次　本松武明　富次

狂言　薩摩守　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助

三輪

能　金春信嵩

間　西村欽也　大野弘之　福井啓次郎　鹿取希世　鉱一　鬼頭喜太郎　芳樹　高橋鉄郎　正和　林安明　汎郎

後見　本田光洋　加藤正嗣　地謡　武馬　小島　渡部道三　松岡　伏原　靖二　塚本恵市

（六時終了予定）

追加

主催　名古屋金春会　金春円満井会

〔会員券五千円〕

問い合わせ先　広瀬瑞弘（〇五二―八四一―四七四五）　前田茂穂（〇五二―二四一―三一四二）　小林嘉行（〇五六六―二二―二〇七五）　塚本恵市（〇五二―九三一―六七三四）　伏原靖二（〇五二―九三五―二七二一）（名古屋金春会事務局）

観世会定式能（四回）

九月十一日（日）十二時半始

熱田神宮能楽殿

能組

龍田

武田志房

能　飯冨雅介　西村欽也　杉江元　吉田定男　柳原冨司忠　鬼頭好信　藤田六郎兵衛

間　佐藤友彦　今村嘉勇　須部甫　高橋瞭一　加藤保彦　武田宗和　梅田邦久　小島一宗和　中川雅章　井上邦弘　嘉久　地謡

後見　武田邦弘　井上嘉久

女郎花

仕舞　井筒武田宗和　井上嘉久　地謡　松山祖父江修幸親　梅田邦久　清沢一政

狂言　子盗人　井上松次郎　大野弘之　佐藤友彦

後見　今松良治

阿漕

関根能祥六　植田隆之亮　宛後藤孝一郎　鉱一　鬼頭喜太郎　鹿取希世

間　大野弘之　本田加賀　敏彦　中川雅章　梅田邦久　井上嘉久　武田邦弘

後見　小島一英　武田宗和　地謡　中村和男　田中武　（終了四時頃）

附祝言　主催　名古屋観世会

〔要金員券〕当日券七千円（自由席）

観能独語
「望月」と「宗論」
野村四郎を観る会

「望月」はなかなかの大作ですが、名作とはいえないと思います。昔は敵討と獅子舞の組み合わせが喜ばれ、珍重されたそうですが、現代では敵討への関心もうすれ、獅子舞だけがもてはやされる一曲です。

獅子舞はたしかに見ものですが、それまでの段取りが長すぎます。芸づくしの趣向は買いますが、それだけ劇能的迫力は薄れました。だれがやってもだれやすいのですが、七月九日熱田能楽殿で行われた野村四郎名古屋公演「望月」を観る会では、さすがに四郎、緊張感をゆるめずもちこたえました。

それには西村欽也の望月、めくら御前の梅田邦久、子方の山中雅志らの協演が大いに力がありました。とくに子方はすこぶる達者で前半の冗長さを救い見所の目をさますました。

近年では観世元昭の「望月」が颯爽たる男ぶりで印象にのこっていますが、四郎はこれに比べ地味ながら例によって手がたく、そつのない演技で成功でした。ただしそつのないだけでは十分とはいいきれないのが「望月」のむつかしいところです。

主人母子をじっと見返るところ、敵望月と知り、おどろいて一足引くところなど大芝居ですが、それだけのことで、四郎らしい面白さはありませんでした。獅子舞は「古式」の替り演出で長袴で舞いましたが、さすがに袴さばきは鮮かでした。四郎程の役者では当然のことですが、うまくいくかどうか気になる見所もいるとすると、替り演出も考えものような気もします。

舞い終って衣装をかえ、すっくと立った姿は立派でしたが、衣装をかえる時間が少々かかりすぎたようでした。衣装替えに、もそもそするのが見所の気になるようではいけますまい。四郎にはもっとキメのこまかい作品かとまかいいると思います。

それはそうと、この催しは野村万之丞、万作、万之介ら四郎兄弟総出演の豪華版で、とくに狂言「宗論」は作もよく役者もよし「望月」に勝るとも劣らぬ舞台が見られるものと期待しましたが、結果はそれほどでもなかったようです。といいますのは、浄土僧の万之丞、法華僧の万作が兄弟とはいえあまりに芸風が似通いすぎて、対立する鋭しさ、はげしさが十分でなかったからだろうと思います。

両者の共演はたびたび見ましたが、今度ほど「やっぱり兄弟だなあ」と思わせられたことはありません。野村兄弟一座のなごやかな雰囲気が自然と鋭鋒を和らげたのでしょうか。ユーモラスなやりとりの中に敵意と憎悪のみなぎらない「宗論」が面白いはずはありません。芸のうまさでは抜群の二人、さらに気の合ったところを見せようとしたのかも知れませんが、気の合い方がちょっとちがったようです。（M）

名古屋観世九皐会定期能（納会）

九月十七日（土）午後一時始

熱田神宮能楽殿

半蔀

素謡　佐々木勝輝　高橋瞭一

雷督

能　高木美智子　ツレ　中所宜夫　トモ　加藤保彦

間　杉江元　柳原冨司忠　鹿取希世

狂言　井上礼之助　大野弘之

小督

仕舞　佐藤友彦

遊行柳

能　観世喜之　飯冨雅介　西村欽也　杉江元　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

間　青柳ノ舞　井上松次郎

附祝言　主催　名古屋観世九皐会

事務所　名古屋市南区元塩町一―一―一七　加藤保彦方、電話〇五二（六一一）三六五六

（有料）要会員券　当日券五千円

森本重一

吉田定男

長生会　鬼頭喜太郎　好信　鬼頭英二

大鼓方　鬼頭英二　愛知県中島郡平和町城西　電話（〇五六八）⑥一九六〇番

助川竜夫

名古屋和泉会

狂言共同社

能楽講座　能と狂言に親しむ会　梅田邦久　藤田六郎兵衛

朝日カルチャーセンター　囃子教室　小鼓　後藤孝一郎　丸栄スカイル10階

栄能楽舞台　名古屋市中区栄五―四―一二　電話（二六二）一一八三番

楽諷庵舞台　加納保一　名古屋市昭和区滝川町四七―八三　電話（八三二）七〇〇一番

葵心庵舞台　尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二　若杉ビル（旭市役所南）　電話〇五六一五③二三四六番　能舞台　電話〇五六一五④〇六九八

彰諷閣舞台　名古屋市天白区植田西二―八〇二―二　電話（〇五二）八〇五―三三〇一　連絡先　名古屋市緑区鳴海町有松裏40―9　電話（〇五二）六二一―四二三八

演能写真　ウシマド写真工房　〒602　京都市上京区北野上七軒　電話〇五二（四六二）一三四一番

ビデオ撮影　西川企画　名古屋営業所　名古屋市西区名駅2―20―3輪の内荘　小椋方　電話（〇五二）五七一―五八一六　〒500　岐阜市北野町20―2　電話〇五八二㊐九八六九番

能楽の友社　同人一同

〔お断り〕暑中広告の掲載は紙面の都合にて勝手ながら七月号、八月号に分けて掲載させて頂きました。順不同と併せ何卒ご理解賜りますようおねがい申上げます。

鳳鳴会大会

九月二十三日（秋分の日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡　神歌
半蔀　鶴亀　山森幸男　武田友志
井筒　木下義国　笹山忠
江口　大坪重遠　一柳正直
松風　祖父江修一　長谷川島　小藪義郎
卒都婆小町　武田孝子　村上郁子　伊藤義郎　高橋すゑの　武田志房　小川博久

仕舞
鶴亀　吉村ワカ
屋島　森部道子
葛城　城キリ原啓子
葵上　原恭子
鼓　喜多村芳子
融　伊東秀人
独吟花筐　加藤武
連吟鵜之段　植野晃弘　塚田照夫　沢田豊
一調女郎花　武田志房

地謡　武田尚浩　武田宗和　小島武　志房　一英

雛子
盛久　山本一　筧鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
砧後　武田孝子　筧鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
紅葉狩　急之舞　義江美穂子　筧鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

素謡　弱法師　水野幸子　加藤ふみ子
武田文志　長谷川京子

能　隅田川　西村欽也
後見　武田尚浩　武田志房
地謡　筧鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　新井和明　祖父江修一　小川博久　中川雅章　松本千冬　岡久広　武田宗和　郷郭太郎

仕舞
葵　老　中島智恵子
草子洗小町　秋山モト枝
桜川　佐藤保子
柏崎　道行　新開雅子
邯鄲　長島洋子
天鼓　石堂つゆ子

雛子
高砂　山崎佐東子　筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
通小町　石井鈴子　筧鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
野守　富小路禎子　筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

素謡　恋重荷
経正　村上清　浅井一元　松井弘　筧鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
船弁慶　吉田明　筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

素謡　山姥
番外仕舞　野々山紫　木本仁之　二村正　宮武志房

（終了予定六時）

附祝言

主催　武田鳳鳴会
田志房

松野宇高　二人の会

9月11日　金剛能楽堂

金剛流・松野恭悠、宇高通成両氏の「二人の会」は今回九回を迎え、九月十一日（日）金剛能楽堂で公演される。午後一時始。

能「安宅」（シテ宇高通成、ワキ岡次郎右衛門、笛・杉市和、小鼓・曽和博朗、大鼓・谷口正喜）

狂言「縄綯」（茂山千之丞）

能「殺生石」小書女体（シテ松野恭悠、ワキ谷田宗二朗、笛・光田洋一、小鼓・曽和正博、大鼓・中村喜彦、太鼓・前川光隆）

一般入場券・前売四千円（当日五千円）後援会員一口・一万二千円（三名招待）申込みは、二人の会＝電話（〇七五）四六二一―二一四八、金剛能楽堂＝（〇七五）二二一―三〇四九

京都

信玄袋
―八月の思い出と武智鐵二氏のこと―

七月も二十八日になって蝉が鳴き出す。

八月は私にとってお盆の月、それから終戦記念日のある月。そして毎年ヒゲもそらずに数冊の本を終日読む月でもある。

名古屋弁使用の拡大運動、拡大はちと大げさであるが、普及運動が盛んな昨今、〈お盆〉のことを私の小さいときは〈おしょりょいさま〉（注、精霊祭）と言った。〈おしょりょいさま〉の発音が微妙。普及もよいが、名古屋の新古の風俗・習慣、名古屋人の心と結びつけて、やっているのであろうか。もちろんそうであろう。さしづめ「お能を見に行こみやあか」「今日の芸題（能）はなんだったなも（ね）」「山姥と石神だぎぁ―（ぜ）」「わたし狂言の方がおもしろいけど」「狂言もええなあ」と言った按配か。それでも能楽堂へ行けば、ワキ「月に声澄む深山かな」シテ「あらものすごの深谷やな云々」（山姥、後シテの出）を行儀よく耳にする。

次に、名古屋・栄の交差点下の地下街の四ツ角はモダンな名がついているが、そこのトイレを時々借りる。前に置かれたタバコの吸殻入れをみて、心が沈むのが、ここ数年前までの七・八月であった。それは「金（かね）の茶碗に金の箸」とうたわれた内地の軍隊使用のアルミの飯入れであった（外地の事情は知らない）。飯盒（はんごう）同様大切な備品である。歩兵六連隊から乙幹の福知山教育隊（冬の昼食はその飯盒に入れた、ひとつまみの佃煮と沢庵二切れで凍った色の黒い米飯を、足踏みしながら食べた）、電波兵器教育部までそうであった。その後の爆撃隊は竹の器で（九州）。トイレの僅かな時間に明暗さまざまなことが走馬灯のように駆けめぐっていた。

爆撃隊では軍医殿に謡をすすめたが、やがて謡本片手の姿をよく見かけた。私の身辺（私物）には許可印紙をはった、恩師谷川徹三先生の「心の世界」をしのばせていた。〈芸術についての思い出〉〈有島（注、武郎）さんとその頃のこと」はくり返し読んだ。

付、谷川先生は最近「生涯一書生」の新著を出された（岩波）。

× × ×

七月二十六日武智鐵二氏がなくなられた。七十五歳。武智さんのことは堂本正樹氏の追悼随想にくわしい。「武智鉄二氏を悼む」（朝日、七・二八夕刊、演劇欄）。私も戦中・戦後の断絃会開催の功績を第一に推したい。次は新様式（戦後）の「東は東」・「夕鶴」・「月に憑かれたピエロ」、新作能「智恵子抄」、新狂言「彦市ばなし」・「仏陀と孫悟空」ほかの上演を挙げたい。「ヌード能」「絵姿女房」は行き過ぎ・失敗作と言われる。或は「武智歌舞伎」を認める方もあろう。これと歩調を合わせるように、狂言ブームが起ったのが昭和三一年のこと。「東は東」「夕鶴」「彦市ばなし」「智恵子抄」は名古屋でも公演された。

武智氏とは昭和二十五年から三十年頃奈良の春日・興福寺薪能で一緒し、午後の日射しの春日野でわらび餅を食べ（三月、数人で）、また三十年すぎに、名大文学部（国文学）の集中講義で来名のとき私（NHK）もお願いして特別聴講させていただいた。資格は私設秘書と言うことで。正式には権藤芳一氏が随伴であった。昼食代りにうまいきしめんを食べさせる栄の古いうどん屋へ案内した。講義はもと六連隊の連隊砲の兵舎二階であった。その後時経て狂言などや会（大蔵弥太郎氏指導）で魚説教をされたうまいものだった。

接するとおだやかな物腰でやわらかい言葉遣いであるが、シンはまことに強い人だと思った。

注、同氏「蜀犬抄」（昭二五）に断絃会の記事〈開催趣旨、第一回公演〉載る。

× × ×

七月九日の「野村四郎の会」・第五回を迎えた今年は望月・古式である。船弁慶・俊寛・羽衣・藤戸（ほかに一曲）どれも佳演であったが、望月も冴えた能芸をみせる。ただ獅子の舞になって、シテが今まで被いていた厚板（または厚板唐織）がうまく運折のカタチにならず、折角の舞姿をいささかよごした。いや武家の舞だからあれでよいと言う考え方もあろうか。他の三兄弟、万之丞・万作・万之介三氏が狂言宗論とアイで花を添える。

翌十日の第三十回朝日狂言会（昭三四、第一回）は別記。

× × ×

訂正。七月号の信玄袋・「オランダおいね」を「おらんだお稲」従って名前をお稲、放送期間の半か年（昭四五）を一年としました（CBCに確認。朝日「シーボルトのまなざし」・芳賀徹〈七・十一、文化欄〉関連）。お詫びして訂正します。（野村広二）

◆水無月・文月の舞台から◆
「能・狂言に親しむ会」「九皐会」「野村四郎の会」

竹尾邦太郎

「三山」　案内に二百年ぶりの復曲と謳う。初演は昭和60年12月13日、宝生能楽堂。

「女の修羅能に作り上げたい」という鈴之丞の意欲作である。今回の昼夜二回の公演はワキ良忍・欽也、アイ所ノ者・又三郎、笛六郎兵衛・地謡邦久・雅夫・磯道・和重以外はダブルキャストである。夜の部をシテ栄夫・ツレ暁夫で見た。

次第でワキ僧が従僧を伴なって出ると、アイと問答。その間にシテが運びながら呼び掛けて出る。面若女・襟白ニ・白摺箔・唐織（面散シ文様）・居クセに左肩少し落し気味に、春愁の気配濃厚である。〈入相もつくづくと、と一段と耳を敲てる辺りの風情を栄夫繊細に見せる。前場の桜子と耳成の桂子との確執を言い、身を引き入水して果てるシテ桂子の霊の中入は、常座でひっそりと沈み、寂しい送り笛でゆっくりと入る。

アイは立シャベリ。ワキの待謡から一声。ツレは面小面・付ケ髪・襟赤・白摺箔（露芝文様）・絢爛とした胴箔地に大きな蝶の文様の縫箔の右肩を脱ぎ、右手に桜の持枝。あでやかそのものである。桂子の面影を払拭せんとするかのような狂おしいカケリは動悸を伝える程に激しく、その間隙に後シテがするすると出て足拍子一つ、スミへ往くところなど内面の葛藤はさて置き鮮やか。互いに持枝で打合う型は珍らしく、地のへさて懲りやさて懲りや、でシテが強く拍子を踏むとツレは思わず持枝を落し、〈因果の報いはこれまでなり、とシテも持枝を捨てる。妄執が去ったところを巧みに視覚化して、栄夫・暁夫ともに巧緻で説得力があった。キリは、〈ほのぼの明けて、とシテ正中でワキ柱上を〈耳成山も、と目付柱を見ると、〈影白々と、と橋懸へ抜け、ツレも従って地の裡に幕に入ると、ワキが常座に出てトメた。

後シテは襟白・浅黄白段摺箔（唐草文様）・無紅唐織は濃い納戸地に籠文様で右肩脱、桂の持枝を持ち、面はこの曲のために打たせたという女流面打谷口某の作。増と橋姫と泥顔を意識して、と解説にはあったが、むしろ十寸髪に近い。キリで割とあっさり和解するところをみれば、むしろ専用面でない方がシテの自由な演出意図に副えて良いのではないかという気がした。栄夫はかつて「殺生石・白頭」を、故寿夫が「王女メディア」のために打たせた女面を使用して不思議な味を出したが、それに及ばないと思った。（1時間17分・6月22日・能・狂言に親しむ会）

「阿漕」　シテ喜之。着附は無地でなく紺地に黒と紺の格子。裾藍の腰蓑に褐色水衣（肩上）、面朝倉尉。粗野の気分を出すための外股の運び、呼ばれた声。殺生と思えど浮世の業（わざ）、と開き直ったふてぶてしさを見せはするが、語りからクセへと殺生戒を犯し煩悩する姿に漁翁が阿漕の幽霊に重なってゆくところなど説得力があった。釣糸を竿に巻く型は、以下の切迫した型との対照を考慮して慎重。〈とはそも如何に、と正先で竿を両手で差し上げて捨てた音と、〈叫ぶ声の、と耳をふさぐ型の暗合の巧みなど、喜之随所に細心を見せた。

後シテは黒頭に面蛙（かわず）・白縷水衣。腰蓑は茶と白の染分に替えた。スミに網を置くと少し位置を直したが、如何にも網を仕掛けるという感じだった。立廻は一ノ松先までゆき、ゆっくり身体を廻して網を見込むと数歩匂欄に寄り、頭を取って更に見込み、再び舞台に入るとワキ座から正先へ左右に大きく腕を拡げ魚を追って大小前に至り、雌子の急調で反転すると双手を拡げつつ網に寄ると下居、網を取った。網を手繰るのも獲物沢山の感じがよく出ておりキリの〈雲霧、と面遣い、〈起居に隙もなき、と右左と膝を着くところも冴えた。トメは扇で面を隠して沈み、〈また波に入りにけり、の返シに立って拍子踏んだ。ワキは着流僧（欽也）だった。（1時間18分）

「山姥」　シテ瞠一。前は深井女。茫洋として捉えどころのない山の賤の女の雰囲気が仲々よい。後は鹿背杖をついて一ノ松に出るとツレを見込み、〈懸河渉々として、の詞頭はツレを意識して山霊と言える鬼女の自己陶酔を見せる如くである。〈金輪際に及べり、は派手な型をするわけではなくサシて拍子一つ踏むだけ。全体に型少なに内省的なのはよいが、山姥が本来持っているどっしりとした磐石の重味に欠け、立廻などすらすら運び過ぎるきらいがあった。なお、大柄のシテに厚板の袖が短かく、要らぬところに神経を使わねばならないのは気の毒。（1時間40分・7月3日・九皐会）

「望月・古式」　シテは四郎。当地五回を数える四郎の会を記念し、初の直面の重習を勤める。前場、花若母子を目敏く認め、驚きを鎮め兼ねて独り一ノ松に抜けるとその奇遇に感慨一入の心持を見せる辺り、更には次なる投宿客を敵（かたき）と見咎め、密かに三ノ松に行き、一大事のことを独白し、子方とツレを呼んで策を授ける辺りも細心で、四郎の充実ぶりが窺えた。また子方山中雅志君の健気（けなげ）な挙措、就中シテと手を取り交わすところは感動的ですらあり、それが決して能を逸脱したものでは無く、この子方を得て舞台は大いに引きしまった。

「いざ討たう」、「暫く候」の呼吸も上々であったが、シテが中入し、子方は羯鼓の調緒を左手に握り、右手をツレに掛けて寄り添いスミから後見座へ行くと訴えかけるように母を見上げる真剣なまなざしが実によかった。子方は後見座にクツロギ、ツレは一ノ松で杖をパタリと落して幕入したが、その胸中万感の想いが感じられた。子方はカツコも達者。

後場は小書で長袴のまま。白頭の頭頂には紅牡丹を戴く。獅子舞の奮迅の活躍も見事なら、紅白段唐織を被いて跪り、獅子頭を脱ぐのも鮮やかだった。ツレ邦久・ワキ欽也共に好演で、則の正しい清々しい舞台だった。ただアイ万之介が眼に落着きがなく精彩がなかった。雌子は六郎兵衛・啓次郎・総一郎・元太郎。後見に文蔵・義滋・清司（舞台の進退が目立たず気持がよかった）。地謡は徳三・完治・将重ら（〈稚かりし心にも辺り少々怪しかったが先ずは無難）。（1時間28分・7月9日・野村四郎の会）

回10日発行）
友社
目16-18
984
6393
00円
00円
70円

名古屋市芸術特賞受賞
内藤泰二師記念公演
9月15日　熱田能楽殿で

ひがしフェスティバル'88
10月9日薪能
名古屋市の東区では、区制八十周年を記念して「伝統と文化の祭

内藤泰二　名古屋市芸術特賞受賞記念公演
九月十五日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

名古屋観世九皐会定式能（納会）
九月十七日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

エンゲージリング
山田宝石
貴金属・時計・装飾品
名古屋・本山駅
電 762—2434代表

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋 0-36393

購読料　1年　700円
郵送の場合　1年　1200円
一　部　　70円

名古屋市芸術特賞受賞
内藤泰二師記念公演
9月15日　熱田能楽殿で

宝生流・内藤泰二氏は、昭和六十二年度名古屋市芸術特賞を受賞されたが、この受賞記念公演が九月十五日（祝）熱田神宮能楽殿で開催される。

内藤氏は十歳で初舞台、昭和二十三年に名古屋宝生会を創設、定式能を開催して中部地方の能楽鑑賞の場を定着させた。

記念公演には宝生流宝生英雄宗家、観世流太鼓・観世元信宗家が来演。能「七騎落」（シテ内藤泰二）舞囃子「草子洗」（辰巳孝）一調「山姥」（宝生英雄、観世元信）狂言「酢薑」（井上松次郎、野村又三郎）の上演。

なお引きつづき社中会・鍵雲会大会が催される（番組①面）

能「野宮」上演
久田徹二「能」リサイタル

観世流・久田徹二師による第三回「能リサイタル」が九月二十四日（土）熱田神宮能楽殿で公演される。

演能は「野宮」（シテ久田徹二）独吟「俊寛」（久田徹二）はじめ仕舞六番（番組②面）。

故梅若猶義師
17回忌追善能

観世分家・観世雅雪氏（本名・茂）は八月二十二日午前四時六分肺炎のため東京都渋谷区の都立広尾病院で逝去された。享年九十。

告別式は二十九日午後二時から港区南青山四—二—二九の鎮仙会能楽研究所で執り行われた。

喪主は四男で八代目観世銕之丞（静夫）氏、二男栄夫氏、長女沢野春江さん。

故、観世雅雪氏は五代目銕之丞（紅雪）の四男として明治三十一年生まれ。兄の六代目華雪について昭和二十二年七代目銕之丞を襲名、戦後の能楽界の重鎮として活躍。昭和三十二年日本能楽会会員。三十三年大阪芸術祭奨励賞、四十年芸術祭賞受賞、四十四年勲四等瑞宝章受章。四十六年度芸術選奨文部大臣賞受賞。観世寿夫（故人）栄夫、八代目銕之丞の能楽三兄弟を育て、五十四年雅雪と改名した。

大阪
10月2日　大阪能楽会館

故・梅若猶義師十七回忌追善能がきたる十月二日（日）大阪能楽会館で催される。主催梅若盛義、後援梅猶会。

番組は能「景清」（シテ梅若善高）「二人静」（シテ井戸和男、ツレ池内光之助）「鵜飼」小書真如之月（シテ梅若盛義）狂言「重喜」（善竹幸四郎）はじめ連吟、仕舞十二番。午前十一時始。

特別指定席一万円、自由席六千円、学生席三千円。

梅猶会連絡所、豊中市新千里南町三—一八—一二、梅若善高方、電話〇六—八三一—七八五四。

ひがしフェスティバル'88
10月9日薪能

名古屋市の東区では、区制八十周年を記念して「伝統と文化の祭典・ひがしフェスティバル'88」の行事の一環として十月九日「薪能」が催される。会場は東区葵公園（徳川園）中央広場。

開演は午後五時十五分。火入式。「能との出会い方」藤田六郎兵衛氏の話。演能は狂言「盆山」（野村信行、井上礼之助）能「土蜘蛛」（シテ久田徹二、ツレ清沢一政、本田勲、今沢美和、ワキ西村欽也、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、大鼓・河村其之介、太鼓・助川竜夫、間・大矢高義。

後見・近藤幸江、前野郁子、生駒里翠、地謡・祖父江修一、高橋暲一、加賀敏彦、須部甫、加藤保彦、松山幸親）雨天の場合は十日に順延。入場無料。

◈演能カレンダー◈
（熱田神宮能楽殿）

〔9月〕
15日（祝）内藤泰二師名古屋市芸術特賞受賞記念公演（来場歓迎）（番組①面）
17日（土）観世九皐会定期能（有料）（番組①面）
18日（日）名古屋宝生会定式能（有料）（番組①面）
23日（祭）鳳鳴会大会（来場歓迎）（番組②面）
24日（土）久田徹二「能」リサイタル（有料）（番組②面）
25日（日）和泉流狂言大会（来場歓迎）（番組②面）

〔10月〕
2日（日）名古屋皐楽会大会（来場歓迎）（番組②面）
8日（土）猶恵会秋の大会（来場歓迎）（番組③面）
9日（日）七彩会十周年記念大会（来場歓迎）（番組③面）
10日（祝）松謡会十周年記念大会（来場歓迎）（番組③面）
15日（土）梅若猶義17回忌猶義会追善会（来場歓迎）
16日（日）謡楽会大会（来場歓迎）
23日（日）淡交会大会（来場歓迎）
29日（土）梅猶会定期能（有料）
30日（日）幸謡会大会（来場歓迎）

〔11月〕
3日（祭）幸友会秋の会（来場歓迎）
6日（日）風韻会大会（来場歓迎）
12日（土）清謡会大会（来場歓迎）
13日（日）名古屋観世会定式能（有料）
19日（土）修風会大会（来場歓迎）
20日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
23日（祭）久田観正会大会（来場歓迎）
26日（土）青陽会定期能（有料）
27日（日）和泉会（有料）

〔12月〕
3日（土）一謡会・叶石会大会（来場歓迎）
4日（日）歳末助け合い協賛能（有料）
11日（日）壺泉会能（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

内藤泰二名古屋市芸術特賞受賞記念公演
九月十五日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

舞囃子
草紙洗　辰巳孝　吉田定男　後藤孝一郎　鹿取希世

能
子方　内藤達俊
ツレ　吉田俊彦
〃　佐藤耕司
〃　稲川寿一
〃　鬼頭嘉男
立衆　広島克栄
ツレ　辰巳満次郎
シテ　内藤泰二

七騎落　西村欽也　福井啓次郎　鹿取希世
間　佐藤友彦
後見　宝生英雄　辰巳孝　地謡　青木堯　竹内孝成　久野幸三　朝倉俊樹　平子稲美　朝倉象太郎　衣斐正宣　竹腰勝一

一調　山姥　宝生英雄　観世元信

狂言　酢薑　井上松次郎　野村又三郎　後見　井上礼之助

（正午頃演了予定）

〔入場無料〕
主催　名古屋市教育委員会　鍵雲会

63年度鍵雲会例大会

素謡　景清　小溝啓介　稲川寿一　竹腰勝一　鬼頭嘉男

能
羽衣　金見晶子　西村欽也　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
盤渉　内藤飛能　内藤宝紳

橋弁慶　坂野いつ子　勝島とし子　山田嘉子　長谷川美知子　森和枝　加藤幸　小林福子　長坂清子　鬼頭英二　柳原富司忠　森本重一

紅葉狩　飯富雅介　高安勝久　杉江元　河村真之介　後藤孝一郎　池田茂　鹿取希世
間　佐藤友彦　大野弘之

舞囃子「高砂」（村瀬郁子）「松風」（小林福子）「遊行柳」（野村千代子）居囃子「鵜」
連吟「祇王」「船弁慶」「加茂」「岩船」仕舞「鶴亀」「玉葛」「田村キリ」「経政キリ」「小督」「蝉丸」「玉ノ段」「東北」「駒ノ段」「大江山」

主催　鍵雲会
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤泰二方　電話八三二—三四四九

名古屋観世九皐会定式能（納会）
九月十七日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

素謡　半蔀　佐々木勝郎　高橋暲一

能
小督　杉江元　鬼頭英二　柳原富司忠　鹿取希世
間　佐藤友彦

狂言　雷　井上礼之助　大野弘之
仕舞　道明寺　小林喜久
俊成忠度　観世喜正
松風　駒瀬直也
鉄輪　五木田三郎
観世喜之

能
遊行柳　飯富雅介　杉江欽也　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
青柳ノ舞
間　井上松次郎

附祝言

主催　名古屋観世九皐会
事務所　名古屋市南区元塩町一—一—一七
加藤保彦方　電話〇五二（六一一）三六五六
〔有料〕
要会員券　当日券五千円

名古屋宝生会定式能
九月十八日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

佐藤耕司　稲川寿一

能
養老　高坂康広　西村欽也　杉江元　鬼頭英二　福井良治　鬼頭好信　藤田六郎兵衛
間　佐藤友彦
後見　戸田和　玉井博祐　地謡　石森智幸　富田正代司　織田哲也　高橋章　吉田俊彦　衣斐正宣　鬼頭嘉男　寺部一威

狂言　柿山伏　佐藤友彦　井上礼之助

能
三山　飯富雅介　高安勝久　高橋章　衣斐正宣　笠井一威　後藤孝一郎　森本重一
間　井上礼之助

仕舞
女郎花キリ　内藤泰二
野守　辰巳孝

能
邯鄲　飯富雅介　高安勝久　杉江元　寺部一威　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
間　井上松次郎

主催　名古屋宝生会
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤泰二方　電話八三二—三四四九

〔有料〕
要会員券、当日券五千円

青雅日記 ㊱

ふしぐろせんのう

えと文　二井栄逸

この頃はよく山鳩がなく。四五百森（よいをもり）をねぐらにしている山鳩達は、新秋のおとずれを喜んでいるのだろうか。今朝方も楽しそうにその鳴き声が樹間の奥からきこえてきた。

私は、鳥達のさえづりをききながら絵具をとく。

文化センター等の半ばおおやけの教室は休めないけれど一般の教室は八月一ぱいはお休みにしたものの、依頼されている絵がたまっているので結構いそがしい。

依頼されている絵の中にはむくげ、せんのうの絵もある。不思議に山鳩のよく鳴く頃にせんのうをかいたことが三回あった。今、かいているのはむくげであるが、一週間程前にはふしぐろせんのうの写生をしたし、これからふしぐろせんのうをかくつもりでいる。

山鳩とせんのうに何のかかわり合いがあるのか私には分らない。

唯、私がふしぐろせんのうを好きになったのは、五年程前だったか、青山高原へ行った帰り道の山裾に咲いているのを見た時である。ふしぐろせんのうは、下草の中にぱっちりと朱の色を輝かせていたのである。

普通の朱ではない。萱草色に山吹色をまぜたような色である。

軽井沢にはよく咲いているよ、と、友の便りがあったので一度行って見たいと思う。

ふしぐろせんのうの別名をオウサカソウとも言う。京都府と滋賀県の境にある逢坂山に群生していたことからこの名がついたと言う。

同じナデシコ科に、がんぴがあり、此の花も朱色が美しいが、ふしぐろせんのうにはかなわない。

或る能会で東北が出たことがあった。その時のシテ、和泉式部の緋大口の色がふしぐろせんのうの色を少し薄めたような色調であったのがすばらしかった。萱草に香染（こうぞめ）をかけたような色で、緋大口ものをかく時にはいつも鮮烈によみがえってくる。

父に花鋏を持たされたのは私が十才位の頃だったと思う。今から考えると、私はよほど花がすきであったのかも知れない。

長年、花と暮しを共にしていると、花と人間は何かテレパシーのように交信出来るものだな、と思うようになってくる。

でも、私の絵の源泉はすべて能であると思っているし、能は夢幻の中に人生観の厚みをつけてくれる。

私は、伝統の中に自己を投影させたいと常々思うのである。

（昭和六三・八・三一）

63年9月・10月放送予定

〔9月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
18日（日）宝生流「砧」大坪十喜雄
25日（日）観世流「梅枝」浦田保利
◎NHK教育テレビ・祝日能（午前9時）
23日　映画「名家の面影」より（昭和7．8年）
宝生九郎「望月」観世左近「花筐」梅若万三郎
「菊慈童」「道成寺」桜間弓川「角田川」金春八条
「景清」喜多六平太「頼政」能「黒塚」金春流（昭和32年）前シテ・本田秀男、後シテ・桜間道雄
狂言「寝音曲」和泉流（昭和48年）シテ野村万蔵
〔10月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
2日（日）観世流「夕顔」山階信弘
9日（日）宝生流「花筐」松本恵雄
16日（日）金春流「正尊」金春信高
23日（日）観世流「三輪」梅若盛義
◎NHK教育テレビ・祝日能（午前9時）
喜多流能「求塚」（再放送）
シテ後藤得三・ワキ宝生弥一

鳳鳴会大会

九月二十三日（秋分の日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡　神歌
鶴亀　山森幸男　武田友志
半蔀　木下義国　笹山忠
井筒　大坪重遠　一柳正直
江口　祖父江修一　長谷川島　小藪義郎
松風　武田孝子　村上郁子　伊藤義郎
卒都婆小町　高橋すゑの　武田志房

仕舞　鶴亀　吉村ワカ
屋島　森部道子
葛城　城キリ　原啓子
龍太　原恭子
鼓上　喜多村秀子
葵　伊東秀人
殺　加藤武
独吟　花筐　植野晃弘　塚田照夫
連吟　鵜之殿　沢田豊　武田志房

囃子
盛久　山本一　笠田鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
砧　武田孝子　笠田鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
後　紅葉狩　義江美穂子　笠田鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

素謡
弱法師　水野幸子　加藤ふみ子　武田文志　長谷川京子

能
隅田川　西村欽也　笠田鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

仕舞　饗　老　中島智恵子
草子洗小町　秋山モト枝
桜川　佐藤保子
柏崎　道行　新開雅子
鄙　長島洋子
天　石堂つゆ子

囃子
高砂　山崎佐東子　笠田鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
通小町　石井鉦子　笠田鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
野守　富小路禎子　笠田鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

素謡
恋重荷　村上清　浅井一元　松井弘

囃子
経正　河野節子　笠田鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
船弁慶　吉田明　笠田鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

素謡
山姥　木本仁之　二村正
番外仕舞　野々山繁　宮武志房

附祝言

主催　鳳鳴会　武田志房

第三回 久田徹二「能」リサイタル

九月二十四日（土）午後一時開演
熱田神宮能楽殿

独吟
俊寛　久田徹二

仕舞
松虫　松山幸親
玉鬘　玉木孝男　地謡　高橋信至　馬場瞭一　祖父江修一　須部甫
菊慈童　前野郁子

仕舞
清経　久田徹二
花筐　泉嘉夫　地謡　須部甫　山田義高　笠田稔　松山幸親
殺生石　上田貴弘

久田徹二

能
野宮　西村欽也　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
間　野村又三郎

後見　前野郁子　上田貴弘　地謡　玉木孝男　馬場信至　松山幸親　高橋瞭一　山田　祖父江修一　笠田稔　泉嘉夫　高義

附祝言

主催・問い合わせ
久田徹二
電話（〇五二）九八一―三六四三
〔入場料〕一般（前売）三、五〇〇円（当日）四、〇〇〇円
学生（前売）二、〇〇〇円（当日）二、五〇〇円（全自由席）
申込み＝各出演楽師宅・熱田神宮能楽殿（六八二―一七五一）
市内各プレイガイド

和泉流狂言大会

九月二十五日（日）十一時始
熱田神宮能楽殿

狂言組
昆布売　大名前原美紀　昆布売二村敏勝
竹生嶋参　太郎冠者小柳保志　主人井上松次郎
鐘の音　太郎冠者コラ・フォルクマール　主人丹辺文彦
薩摩守　新発意長谷川寿美子　船茶屋頭高橋恒吉　高橋美子　幸子
口真似　太郎冠者足立米子　主人前原美紀　客人前原まり　鼓美紀
武悪　主人西野彰恵　武悪伊藤幸子　太郎冠者村松敦子
花の袖　足立米子
七ツ子　前原美紀
小舞　雪山　鼓まり
掛林朝子
祐川善中北宇多子
お冷し　太郎冠者井上靖浩　主人井上松次郎
文蔵　主人冨田智之　太郎冠者佐藤友彦

名古屋皐楽会秋季大会

十月二日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

発声
番外仕舞　菊慈童　観世喜正
蝉丸　高木美智子
殺生石　中所宣夫

舞囃子
花筐　水田純子
松芝村栄枝

素謡
頼政　浅井鉦二　山田延恒

舞囃子
井筒　水野あや子
玉鬘　深見一枝

素謡
三井寺　西埜信子　田中きんゑ　五木田武計

松永敬子

能
羽衣　西村欽也　河村総一郎　鬼頭喜太郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

狂言
盆山　佐藤友彦　井上礼之助

素謡
姥捨　後藤新蔵　観世喜之

舞囃子
巻絹　奈倉早苗

仕舞
実盛　外山圭一
春日竜神　太田正子

素謡
道成寺　諸隈良吉　観世喜之　五木田三郎

舞囃子
忠度　佐藤千代子
乱（猩々）　橋本とも

深見しげ

能
天鼓　西村欽也　笠田鉱一　助川竜夫　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
番外　弄鼓之舞

祝言仕舞
白楽天　観世喜之

主催　名古屋皐楽会

〔御来場歓迎〕補導　観世喜之

二井栄逸氏 マルジス賞受賞

日本美術出版が能画「仕舞」頒布

猶恵会秋の大会

十月八日（土）午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿

素謡
熊坂　日下すみ子　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
雲雀山　小川美愛　笠田鉱一　後藤孝一郎　鹿取希世

連吟　船井慶　鈴木章　宇佐美竹郎　鬼頭秀治　渡辺精三
丸山圭　竹内澄子

連吟　東北　伊藤久子　市原英子　傍嶋七三枝　池田和子　岡田鶴子　大田和子　西田通子　長尾勝美　晃野場とし子　大池元子　小杉栄子　山本登紀子　山田良一　大野晶一　渡辺三郎　武田彦　鬼頭喜三郎　博弥
推名川芳子　鈴木敬子　武田徳一

柑子　太郎冠者増田昭典　主人長谷川寿美子
貰聟　聟藤田茂樹　女藤本コラ・フォルクマール
痺舟　太郎冠者小柳悠志　主人井上松次郎
ふな瓦　主人鼓まり　太郎冠者藤本栄
鬼薩摩守　新発意津田律子　茶船屋頭中西淳子　井沢千鶴子
犬山伏　山伏僧個野芳朗　丹辺文彦　茶屋冨田智之　犬屋藤田茂樹

（終演予定五時頃）

〔入場無料・御来場歓迎〕
主催　狂言共同社

二井栄逸氏 マルジス賞受賞

日本美術出版が能画「杜若」頒布

フランス画壇の巨匠であるサージ・マルジス氏が審査する「サージ・マルジス賞」がこのたび制定され、能画家・二井栄逸氏（喜多流シテ方、本紙連載「胥雅日記」執筆）が同賞を受賞された。

このマルジス賞受賞を記念して㈱日本美術出版では、二井栄逸氏の手彩色版画の特別頒布を企画している。

作品は「杜若」で大きさは三八・〇×四六・〇センチ、額縁の大きさ五九・〇×六七・〇センチ、価格六万八千円。

手彩色版画は機械で刷る版画と異り、版画のリトグラフ制作ののち作者が一枚一枚彩色するもので、今回は特別限定制作である。

問い合わせは、東京都品川区西五反田七―一七―七、日本美術出版（電話〇三―四九五―一二〇一番）

猶恵会秋の大会

十月八日（土）午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿

素謡 鵜飼　山下時子　岡田晃一　梅若盛彦
葛城　田中あさ　池内幸三郎
杜若　辻信子　池内光之助

仕舞 班羽　女クセ　安藤美恵子
衣クセ　水野孝美
桜川クセ　神谷千津
三輪　本村美子

素謡 葵上　森勝子　熊谷リ江　井戸和男　橋本雅一
山姥　寺岡佑子　加藤恵美子　梅若修一

仕舞 女郎花　石川良子
笹之段　仲瀬範子
清経クセ　萩野知津

舞囃子 草子洗小町　河辺あき　柳原冨司忠　鹿取希世
芦刈　長谷みつ　柳原冨司忠　鹿取希世
巻絹　谷節子　河村総一郎　助川竜夫　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

観能独語

不気味な「鵺」
大衆能の在り方

久しぶりに「鵺」を見ました。八月十四日熱田能楽殿で行われた大衆能で、演者は長田騏でした。長田は地元喜多流の第一人者で切れ味のいい達者な芸風の持主、ちょっと先代の名人六平太を偲ばせるところあり、といったらほめすぎでしょうか。もちろん芸格やスケール等の点は問題外としての話ですよ。

この「鵺」でも前シテの陰惨な雰囲気、それと対照的に後シテのスピーデーで華麗な動きに、思うぞんぶん長所を発揮しました。ことに前シテの陰々滅々たる最初の出（舟人姿）で「正体不明」の語源ともなった「鵺」という怪物のえたいの知れぬ不気味さを十分に表現していました。中入前の「いくへに聞くは鵺の声恐ろしや凄しや」のところで棹をキュッと胸にひきつける不思議な型（鵺の鳴き声の象徴的表現とみる人もいます）をしたのち、消えるように橋掛をひっこむまで見所はその妖気にのまれた形でした。この曲は六平太が大評判をとった、いわば喜多のお家芸とみてもよいようなものだけに長田も格別力がはいったのかもしれません。鵺が本体を現わした後シテは頓政の鵺退治の武勲と名誉を誇るかのような勇ましく派手な型の連続。それはそれで面白くうまいものでしたが、鵺のすごみはうすれました。私には前場の暗さの方が気に入りました。

この日は「鵺」のほか今沢美和（観世）の「羽衣」、内藤泰二（宝生）の「富士太鼓」井上松次郎、野村又三郎らの狂言「伊文字」と並んだところ、それぞれに見どころあり入場料千五百円はたしかに大衆能ならではのおねうちものです。しかし入場料の安いだけが売り物ではものたりません。これはくりかえし本欄で書いたことで今更らしく言うのはやめます。しかしこのままではいつまでたってもよくならないように思います。どうです、このへんで大衆能の「能」より「大衆」の方に視点をずらして、ちょっとばかりハメをはずしてみてはいかが。

良し悪しは別として「やったぞ」と話題を呼ぶだけでもプラスじゃないですか。え？「ハメをはずすのが一番苦手で」は困りましたナ。

（M）

七彩会十周年大会

十月九日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡 紅葉狩　三ツ口直美　松原久子　加藤紀子　角谷純子
経政　北原弘子　佐藤すみ代
玉葛　渡辺千恵　飯田都

仕舞 藤戸　井寺キリ　占キリ
三歌　八島々
猩々

舞囃子 経政　祖父江恭子
胡蝶　谷口和子
小袖曽我　柴田道子

仕舞 班三田　藤川柳
羽玉　小島京子

舞囃子 熊坂　日下すみ子　河村総一郎　助川竜夫　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
雲雀山　小川美愛　後藤孝一郎　鹿取希世
花筐　熊沢恵美子　外山聖子　梅若善高　梅若善久　梅若基徳

猶恵会

熊沢恵美子

〔御来聴歓迎〕

舞囃子 玄象　井戸和男　池内光之助　宮崎勝二
弱法師　山本康子　後藤孝一郎　鹿取希世
舟弁慶　中嶋玲子　柳原冨司忠　鹿取希世
山姥　鈴木ふく　河村総一郎　鬼頭喜太郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
紅葉狩　杉浦一枝　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
急之舞
菊慈童　福山智恵子　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
バンシキ
番外舞囃子 歌占　熊沢恵美子　後藤孝一郎　鹿取希世

素謡 山姥　木本仁之　宮武田志房　二村正
番外仕舞 野附祝言

主催 猶恵会

（終了予定六時）

鳴志内房

63

〔9月〕NHK
18日（日）宝
25日（日）観
◎NHK教
23日 映画「名
宝生九郎「
「菊慈童」
「長清」喜
和32年）前
狂言「寝音
〔10月〕NHK
2日（日）観
9日（日）宝
16日（日）金
23日（日）観
◎NHK教
喜多流
シテ後

連吟 船弁慶　宇佐美竹郎　鬼頭秀治　渡辺精三

能 海人　丸山圭　竹内澄子　飯冨雅介　杉江元　河村総一郎　助川竜夫　福井啓次郎　鹿取希世
間　井上松次郎

素謡 千手　後見辰巳孝　衣裏正宣　地謡祖父江恭子　不破由美子　武藤聡子　大木美恵子　小沢喜久美　倉本雅　玉井博　阪口泰子　服部恭子　久保田秀代　水藤典子

仕舞 氷室　芳村明子　谷口美穂子
雲雀山　渡辺千恵
葵上
鶴亀　谷口正直
鞍生石　武田隆二

舞囃子 竹生島　後藤鎮子　吉田定男　福井啓次郎　助川竜夫　鹿取希世
天ノ舞
上　大木美恵子　吉田定男　柳原冨司忠　丸山圭
絃班　女阪口泰子　吉田定男　柳原冨司忠　石川裕子
女郎花　不破由美子　河村総一郎　小沢喜久美　鹿取希世

素謡 小督　津田節子　谷口正直　武田隆二
仕舞 小督　歌　藤クセ　久保田秀代
半之段　水藤典子
網　服部恭子
簾　米山幸子
巻絹クセ　前野美津子
松風　竹内千智

舞囃子 安宅　武藤聡子　吉田定男　柳原冨司忠　鹿取希世
紅葉狩　安野美根子　河村総一郎　柳原冨司忠　鹿取希世
急ノ舞
高砂　小沢喜久美　河村総一郎　柳原冨司忠　助川竜夫　阪口泰子
五段

主催 七彩の会（にじかい）

名古屋市名東区にじが丘三―三七―一
竹内澄子
電話七八二―四一七一

〔御来場歓迎〕

十周年記念 松謳会秋の会

十月十日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡 小鍛冶　小堀いと　志水千代　浅田八重子
葵上　安土珂恵　園部かず江　岡田貞子　浅井ヨシエ
通小町　三好頌子　塚田いと　坂野房子

連吟 鶴亀　渡辺英岳　山本次雄　石崎弘子　若杉勉　高井利雄　田尻和子　荒河俊彦　中西温子

連吟 東北　伊藤久子　市原和英子　池田勝子　岡田鶴子　大西通子　鈴木しづ子　椎名芳子　川鈴子　長尾勝子　野場と子　大池元子　山杉喜子　小栄子　大野美子　友田七三子　横嶋枝子　渡利山登紀子　梶野博弥　鈴木山正治　田辺武彦　大野国一　山田良一　三徳郎

（都福祉）

連吟 蝉丸　大野進　藤原登敏子　鈴木敏子　布藤すみ子　浅野八重子　片山ゆき子　早川とし子　本多冨　宇田野与志　坂本つ千鶴　松竹内ふる　杉藤静幸子　大黒栄　加藤かね子　志づ　溝口志賀　青山しか　中尾豆　伊藤正治　今井山本克次男　伊藤国男　所良男　淳生

（都謡会）

仕舞 難波　安土珂恵
杜若　玉田弘子
玉之段　福井加代子
独吟 竹生島　倉地英行

素謡 藤戸　岡本多加　松山幸親　藤谷音弥

舞囃子 田村　中野美枝子　吉田定男　柳原冨司忠　森本重一
花月　若山直代　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世
翔鼓入
胡蝶　島田敏歌　柳原冨司忠　鬼頭好信　森本重一
巻絹　羽柴恒子　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世

素謡 俊寛　成今村寛吾　東園原昭　舟橋錦
独吟 砧之段　藤巻美光

舞囃子 川船　田千寿　吉田定男　後藤孝一郎　鹿取希世
松風　滝寿美子　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
櫻百萬　大島貞子　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　森本重一
養老　黒宮琴恵　鬼頭好信　後藤孝一郎　森本重一

素謡 景清　トモ舟橋錦　ツレ西村たつ子　藤田良子　林邦三

舞囃子 熊野　辻和江　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
船弁慶　佐竹皓　吉田定男　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世

番外仕舞 歌占　キリ　上田貴弘

番外半能 石橋　松山幸親　久田徹二　西村欽也　福井啓次郎　鉞一　助川龍夫　藤田六郎兵衛
大獅子

番外舞囃子 熊坂　日下すみ子　河村総一郎　助川竜夫　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

番外 祝言仕舞 白楽天　観世喜之

主催 名古屋皐楽会

〔御来場歓迎〕

お冷し

太郎冠者　井上靖浩　主人　井上松次郎
祐善　掛川林朝子　中北宇多子

蔵主人

冨田智之　太郎冠者　佐藤一友彦

〔御来場歓迎〕

主催 松謳会　松山幸親

名古屋観衛会秋季大会

十月十日(体育の日)午前十時始

名古屋・栄　栄能舞台　電話　二六二―一一八三番

素謡　神歌　山中節子　千才山本博通
独吟　雛波　原田一平
頼政　藤井敏枝　山田仲子　地頭加藤歌子
松虫　芥栄雄　佐藤正次
連吟　鐘之段　鈴木幸子　太田和子
仕舞　笹之段　岡村イツ子
俊寛　ナリヤス　鈴村とみ　川口志満子　豊住雅子
朝長　村瀬つね　山本万有里　中川芳子
独吟　采女　伊藤秀子
大原御幸　青柳イツエ
邯鄲　駒形賀津子
藤戸　近藤辰男　滝川一司
実盛　水野浩司　田代博　森本哲郎
独吟　江口之段　川瀬ぎよ子　雨吉田琴子
砧　中川芳子　船田喜美子　鈴木きくゑ
当麻　伊藤健一郎　奥村泰広　加藤鳳来
独吟　遊行柳　川瀬保
定家一字題　川久保彰礼
道成寺　足立奈々子　神野勝之助　河村栄重
番外仕舞　野宮　山本順之
熊坂　山本勝一
（終了予定五時半）

附祝言

主催　名古屋観衛会
〔御来聴歓迎〕　指導　山本勝一

加藤総兵衛氏

8月15日　告別式

観世流師範・加藤総兵衛氏（本名・時直）は、かねて病気療養中のところ老衰のため八月十三日午前四時四十五分逝去された。享年八十七。

通夜は八月十四日午後七時から、告別式は八月十五日午前十一時から名古屋市千種区仲田の乗西寺で執り行われ、関係者多数が会葬、山本勝一氏、山本同門会など弔電が寄せられた。喪主長男・加藤寛氏。

故人は名古屋観衛会の中枢として活躍、都福祉会館謡曲講座で指導に当たり、篤実な人柄が親しまれていた。

「朝日狂言会」「第23回名古屋新能」「邦謡会」

竹尾邦太郎

「舟渡聟」　船頭・元秀、舞・元弥。科白が性急になりがちな元弥を元秀が旨く押えて親子競演の実を上げた。（35分）

「茶壺」　シテ弥太郎は白を黒と言いくるめるのはお手のもののスッパ。アド基嗣の茶壺を我が物と言い張る。そして、シテの銀を張った瓢の絵柄が鷺と烏の意味深長。そこに弥太郎の意気込みを見る思いだった。（27分）

「武悪」　主・礼之助の剛直、武悪・弘之の殿直、太郎冠者・友彦の実直。後場の幽霊を境の、主の恐いもの見たさの好奇、武悪の図に乗る揶揄、太郎冠者の腹癒せ的傍観、と三者三様の持味が微妙にからみ合って相乗作用となり好舞台となった。（43分）

「呼声」　大蔵流のみにある曲。居留守をつかう太郎冠者・圭五郎を呼び出そうとする主・十郎と次郎冠者・基義。音曲好きな稚気満々の庶民感情が自然に流露した長閑さで、呼出しよりも音曲の掛け合いに関心が移り、平家節以下次第にエスカレートしてゆく過程が小気味よかった。（18分）

「六地蔵」　シテ松次郎・アド祐一・小アド靖浩の井上家三代に融と郁雄が加わり、目出度く大勢物で締め括った。使用面は乙二・嘘吹一。（28分・7月10日・第30回朝日狂言会）

「経正」　シテ伸吾。面はえくばのある十六。黒垂・梨打烏帽子・白鉢巻。襟白浅黄・蝶文様赤地縫箔・白大口・立湧文様萌黄長絹右肩脱。スミを取るにも大胆にずかりと目付柱に寄る深さ。クセは夜遊忘我の境か、舞台一杯風を孕んで廻る様に初々しい貴公子ぶりを見せつけた。なお大鼓は大倉流覓鉱一嫡子の迴。ケレン味なく真摯。そしてこの能の、〈呉竹の筧の水は変るとも、から取った「呉竹会」での初能はさぞ印象深かったろう。初心忘るべからず、大成を祈りたい。（36分・7月24日・呉竹会）

「経正」　シテ郁子。面今若・赤地縫箔の華やぎはいっそ憂愁を深め、苦悶の表情を見せるカケリの面遣イも確かだが、太刀はすらりと抜いて欲しい。（32分）

「源氏供養」　薪能には渋い選曲でその上半能。紫式部ノ霊のたおやかな容姿を目で追うだけになった。ワキ（欽也）は「経正」に続き名宣笛。さらりと勿体ぶらないところが良い。シテ正宜。折烏帽子・緋大口・紫長絹。襟は白浅黄（に見えた。物の本には白赤と互換性あり、と）なら面は増か。全般に寂し気な風情があり、地も沈みがち。ただ気分はどうあれ舞クセのちょっとした袖や面のアシライは繊細優美だった。（39分）

「蟹山伏」　異形の者に尻込むばかりの強力（礼之助）と軽躁なシテ山伏（友彦）。異形の蟹ノ精は磯。慣れぬ面（賢徳）に屋外舞台、右行左行の拗を失ったかスミ手前で落下。「落ちよったわいやい」のアドリブは更に「早やう上らんかいやい」と手を借すシテの臨機適切な処理に舞台経験の重味をみた。（14分）

「紅葉狩」　シテ瞭一。ツレ侍女三人が女流のせいもあるが一頭地抜きん出たグラマーの魅力でワキ維盛（雅介）を悩殺した。舞の途中、睡魔に抗し切れないワキを見込み、急ノ舞となるところも巧みだった。

後シテは赤頭・般若・赤地半切・紫地袷法被で、前に着けていた唐織を被いで出た。後場もワキはシテに圧倒されそうで、組討ちにやっと仕留めたという感じがしないでもなかった。薪能にはぴたりの曲で、金具伸び伸びと楽しんでやっていた。（60分・8月6日・薪能）

「邯鄲」　シテ一政。妙に深刻ぶるのは青年期に特有の癖だが、人生懐疑の青年盧生を荒削りに表現し、その生硬さにまた魅力もあった。さて、夢中玉殿の「楽」は一畳台を敵う緋の掛布が膨れ上がって足捌きの不自由を同情したが空下りはうっかり足を踏み外してしまった、という風だった。跳び込み横臥の型は、台に跳び乗ってから横になる慎重な型で少々がっかりした。夢から醒めた後の盧生は、寝相の悪さの蓬髪のせいか一昔前のヒッピー紛いで、それが哲学青年だと言えば言えないとも無いなと思った。（1時間26分）

「口真似」　主の口舌を忠実になぞるシテ太郎冠者（又三郎）を軸に起こる突然の混乱。とんだとばっちりを喰い、他家の召使ゆえに叱るに叱れないアド（礼之助）の困惑ぶりが旨い。呆れ返って万事お手上げの主（高義）の苦笑がもう少し出れば。とかく退き際はお役御免の気分でほっとする所であるが故に。（15分）

「船弁慶・前後ノ替」　シテ邦久。襟白赤・白摺箔（金の菊菱文様）・紅白段唐織（枝垂桜に鳳凰文様）・面若女。物着に金色烏帽子を着け、小書で序ノ舞。途中一ノ松に抜け、そこで少し退ると、子方を見込むのとは逆にむしろ子方に背を向ける感じに下居してシオルのが、ひっそりと胸の裡を嘆く哀切の風情満点で珍しかった。再び舞台に入ると常座で少し沈みツマミ扇で正先手前に進み拍子二つ。鬘逆に持ち替え、スミで扇開くと小さく廻りながら常座に戻りワカを謡った。戻る時、一度鬘が見える程伸び上ったのが印象的。ワカの後、アイ船頭は切戸からアイ座に就いたが不審。その場に居てこそシテの情も分ろうというものである。中入はシオリながら往きかけ、後髪引かれる重い運びをちょっと止めて佇み、地が切れてゆっくり揺懸に入った。

船中の場は波を鎮める態の棹扱無く、左右面を遣い、「シィーシィー」という詞だけの描写であり、船中のタブーに触れたワキツレを叱責するところも今一つ盛り上らなかった。

後場は床几の姿を半幕に見せ、幕内で名宣ると、〈声をしるべに〉と一旦幕が下り、早笛で一気に常座へ出た。黒頭・面怪士・白地縫箔（金の雲板文様）・白地半切（金の波の丸文様）・白地袷狩衣（金の立湧文様）両袖折込みを衣紋に着け、一見、重キ前後ノ替の白式の印象。凛とした鮮やかな長刀あしらいを見せ、キリは三鼓の流シでさっさと幕に入り残り留だった。装束の白の気品と、折られて潔く消えた余韻が心に残る舞台で、邦久手練ぶりを発揮した。ワキ欽也も充実、子方は少々附き加減だったが、昂然として居て貰いたい。（1時間30分・8月20日・邦謡会）

信玄袋

―金春流本田秀男さんのこと、観世雅雪氏追悼―

八月十四日こおろぎが庭で鳴きだす。二六日雲間の月も澄み、朝晩の風に秋の気配を感ずる。

九月に入って、四日は秋の先きがけに本田秀男氏追善能が催される。二十三回忌。本田さんのことは十三回忌追善（名古屋）の能組に追憶のことばを述べた。

明治二三年熊本市生れ。桜間伴馬・金太郎（弓川）二代を師と仰ぎ、きびしい修練を広く積む。伊勢・奈良・京都（金剛能楽堂）や秀麗会（東京、本田さんの会）でその秀（ひい）でた能をみて、感激したものだった。昭和三十年の弓川氏関寺小町には金春八条氏に付き添って後見を勤め、光洋君も子方に出た。光洋氏には忘れ得ぬ重い舞台であったろう。名古屋では四十年余りの稽古と演能歴を持たれる。今から六十年も前から昭和四一年まで。その年なくなられた。大正十一年の忠度が記録（「能の番組」）では始めて。戦後は源太夫・清経・黒塚・石橋に新作能奥の細道がある。来名四十年記念（昭三九）には復曲の砧を舞って名声を高める。熱田さんゆかりの源太夫も久々の上演、東西から来名の見所を沸かせた。

右追想には、「固い結晶の美しさとやわらかさ」、「能の心と古拙の味」の持ち主と書いたが、本田さんの能芸は達人の芸で、まことに人間の真実と美を体得し、見識高く物腰低い人であり、名古屋への貢献度大である。

かつて弓川氏・〈関寺〉の放送（NHK）を録音し、名古屋資料室で保管していたところ、資料班長の私に写しを所望されたことがある。当時の録音盤保存のむつかしさから、複写してあげられなかった。本田さんは弓川師匠の声を得ることなく、雨中を倒（しょう）然と帰られた。今でもその後姿が忘れられぬ。東京の資料室のは今どうなっているのであろう。実に貴重である。右あらためて追懐し名古屋と関係が長く深い金春流現代の一断面を紹介した。

当日光洋氏は清経恋音取を手向ける。大能である。

× × ×

八月二十二日観世雅雪（先代鉄之丞）逝去。九十歳。雅雪氏の能の初見は昭和十七年。東京、西町の観世分家の舞台で。織雄氏時代であった。初夏の袴能・熊坂をみる。重厚かつ几帳面な中に何とはなしに清爽な味わいに接した（その前後朝鮮の高名な舞姫〈字に誤りなくば〉崔承喜女史が来堂、後の方で心熱く舞台にみいっているのを覚えている。容姿端麗な女性であった）。戦後〈熱田〉で三十年過ぎ花筐を舞われた。東京風・江戸前と言うか、おかしなことばであるが、なかなかしゃれたものを感じた。重厚かつ端正な能芸の印象が強かった。なお三十五年頃であったか、朝日五流能（名古屋）の砧もすぐれていた。晩年は大能のとき〈熱田〉の楽屋でお目にかかると、黙ってタバコをふかす姿が板についていた。橋岡久太郎氏と通ずるタバコ好きであったらしい。名古屋の演能歴は、点と線で表わせば、渋い点の演能であった。華雪・雅雪・鉄之丞（現）・晩夫と続いて、視野の広い芸能で感銘を与えてきている。家に悲事あれば慶事も訪れん。

付、雅雪氏の初来名は昭六の布池能楽堂の舞台披キ（観・宝・剛二日間）。初日仕舞二人静（織雄〈当時〉・武雄〈先々代喜之〉）二回目石橋大獅子（鉄之丞・織雄〈赤〉・武雄〈前〉）。また明治三十三年の那古野神社能舞台、明治末までここが名古屋の能舞台でしたが、四月に行われた三日間の能で初日融（鉄之丞、のち紅雪）二日目弱法師（鉄）の記録がある。観・春・剛三流儀で。この前後観世清雅・片山九郎三郎（のち観世元義）の来名たびたび。

× × ×

七月三十一日青陽会（第三二期第三回）。殺生石白頭（武田邦弘）。この曲近か頃白頭の演出多し。たまには作り物ありの赤頭でみたい。本日は特に「殺生石となりて」のあたり秀逸。佳。

九月が待たれる。

訂正。〈6月号信玄袋〉狂言附子。「園語の教科書に入れられたそうである云々」のたが抜けていました。遅くなりましたが、お詫びして訂正します。（野村広一）

二井栄逸師画抄集

'89 能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー1989年版。B3（タテ51.5㎝×ヨコ38.0㎝）表紙とも7枚の美麗カレンダーです。能画は「般若」（表紙）「羽衣」「西王母」「経政」「松風」「六浦」「千寿」

◉ 予約特価　1部 1100円、郵送の場合送料とも1部1450円（2部以上の場合、部数拘らず送料は一律500円、例・3部の場合送料とも3800円）

◉ 予約申込み期限　10月15日（それ以後は1部 1800円、ただし部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい）

◉ お申し込み方法　ハガキで部数明記のうえ当社へお申込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。

申し込み先　能楽の友社
〒464　名古屋市千種区千種2-18-18　電話(052)731―7984
振替口座　名古屋　0 ― 36393

10日発行）

友社
18-18
8 4
3 9 3
0円
0円
0円

伊勢能楽鑑賞会　能3番上演
三重喜多会主催　11月6日演能

梅若猶義十七回忌
猶諷会追善会
十月十五日(土)午前九時三十分始

素謡　三山　菅瀬独子　加藤花子　坂勉
舞囃子　経正　高木宏子　吉田定男　福井啓次郎　森本重一
女　小林富美代　鬼頭英二郎　森本重一

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場
名古屋総鎮守 若宮八幡社
各種会合や宴会にも御利用下さい
（駐車場完備）
名古屋市中区栄3丁目35—30　電話（241）0810

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋 0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年 1200円
一部　70円

伊勢能楽鑑賞会 能3番上演
三重喜多会主催　11月6日演能

三重喜多会主催「伊勢能楽鑑賞会」が十一月六日、伊勢文化会館で、喜多節世師はじめ東西からの来演で、能三番が上演される。開演は午後二時。

能組は、仕舞「月宮殿」（長田鄉）「鞍馬天狗」（高林呻二）能「経政」（シテ和谷衡市、ワキ飯冨雅介）狂言「魚説法」（森浩一、大西安春）能「三輪」（シテ喜多節世、ワキ西村欽也）舞囃子「松風」（長田驍）仕舞「笹之段」（大島久見）「玉之段」（和島富太郎）能「石橋」（シテ喜多節世、ワキ杉江元）

なお鑑賞会にあたって伊勢商工・会議所会頭吉田正路氏のあいさつが予定されている。会員券四千円。

新作能「女と影」
10月29日　大槻能楽堂自主公演能

大槻能楽堂は昭和五十八年新改装され、能楽の殿堂としてことし五周年を迎えた。とくに五十九年から行われている自主公演はこの五周年を記念し、従来の第二水曜日、夜六時の公演とともに、十月、十二月の特別企画として〝現代の能を考える〟テーマのもとに、十月二十九日（土）新作・能と狂言として、狂言「維盛」能「女と影」を上演。また十二月十八日には新作能「鷹姫」の公演が予定されている。

新作能「女と影」は、原作ポール・クローデル、訳・脚色・木村太郎、作能・泉嘉夫。ポール・クローデルは劇詩人で、フランス大使として在日中に歌舞伎の作品として書いたものを生誕百年（一九六八年）にあたり能的な作品として翻案された。女と男の想念を象徴的な技法によって表現しようとしたこの「女と影」は、いま新しい〝国際化〟のトレンドのなかで伝統というタテの線と東西の融合の新しい接点を求める横への広がりを象徴するものであり、その公演が期待される。

シテ（影）泉嘉夫、ツレ（女）多久島利之、ワキ（武士）植田隆之亮、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・清水晴祐、大鼓・河村総一郎、太鼓・小寺俊三、地謡・大槻文蔵、泉泰孝ほか。

シテ泉嘉夫師は、昭和四十三年の新作上演以来昭和四十七年フランスでの上演をふくめ、これまで十五回にわたって公演している。

なお狂言「維盛」は茂山千五郎ほかの公演。

当日券一般三千円（前売二千八百円）学生千五百円（前売千三百円）予約は大槻能楽堂（〇六—七六一—八〇五五）

人間国宝 近藤乾三氏逝去

重要無形文化財個人指定（人間国宝）、宝生流シテ方・近藤乾三氏は、十月一日午前十時三十三分心不全のため東京都新宿区の目白病院で逝去。享年九十七。

葬儀、告別式は四日正午から東京都文京区白山五の心光寺で執り行われ、能楽界はじめ各界の会葬で冥福を祈った。喪主長男乾之助氏。

氏は明治三十三年、十六世宝生九郎に師事、重厚で格調高い芸風で、昭和三十四年日本芸術院賞、五十二年勲三等瑞宝章受章、日本芸術院会員、文化功労者、能楽界の最長老として敬慕されていた。

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮能楽殿）

〔10月〕
15日（土）梅若猶義17回忌猶風会追善会（来場歓迎）
16日（日）謡楽会大会（来場歓迎）（番組①面）
23日（日）淡交会大会（来場歓迎）（番組①面）
29日（土）梅猶会定期能（有料）（番組②面）
30日（日）幸謡会大会（来場歓迎）（番組③面）

〔11月〕
3日（祭）幸友会秋の会（来場歓迎）
6日（日）風韻会大会（来場歓迎）（番組③面）
12日（土）清謡会大会（来場歓迎）（番組③面）
13日（日）名古屋観世会定式能（有料）（番組④面）
19日（土）修風会大会（来場歓迎）
20日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
23日（祭）久田観正会大会（来場歓迎）
26日（土）青陽会定期能（有料）
27日（日）和泉会（有料）

〔12月〕
3日（土）一謡会・叶石会大会（来場歓迎）
4日（日）歳末助け合い協賛能（有料）
11日（日）壺泉会能（有料）
21日（水）熱田高校能鑑賞会（高校生のみ）

〔64年1月〕
3日（火）能楽協会名古屋支部謡初式（能楽協会関係者のみ）
6日（金）名古屋学生能楽連盟学生能（来場歓迎）
14日（土）青陽会定期能（有料）
15日（日・祝）清韻会大会（来場歓迎）
21日（土）正風会20周年記念大会（来場歓迎）
29日（日）柳原富司忠蔵分20周年記念能（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

梅若猶義十七回忌
猶風会追善会
十月十五日（土）午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿

謡曲　山姥　政　藤戸　弱法師
仕舞　紅葉狩　松風　雨月
能　安宅　砧
仕舞　羽衣　遊行柳　巻絹
舞囃子　班女　熊
番外舞囃子　熊坂
仕舞　清経　誓願寺　玉之段
舞囃子　融　山姥
仕舞　春栄　舞囃子　小督　唐船
謡曲　羽衣　芦刈　井筒
仕舞　松虫　実盛

〔御来聴歓迎〕
梅若猶義会
主催　名古屋猶風会

武田謡楽会秋季大会
十月十六日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

謡曲　三山　経政　班女　頼政
舞囃子　竜田　二人静　猩々乱　隅田川
仕舞　敦盛　邯鄲
謡曲　俊寛
仕舞　大江山　融
仕舞　花月　天鼓
舞囃子　養老　杜若　山姥
番外仕舞　笹之段　玉之段
番外舞囃子　嵐山
仕舞　小袖曽我　船弁慶　田村
仕舞　鶴亀　井筒
謡曲　藤戸
番外仕舞　高砂
連吟　吉野天人
舞囃子　蝉丸
仕舞　我日比野清実　川島利雄　近藤正登　白水二郎　後藤弘次郎
番外舞囃子　砧　橋岡慈観
仕舞　葛城明石省八　船井松井健一郎　衣切尾立浩隆　朝岡初男

〔御来場歓迎〕
主催　武田謡楽会
武田欣司
武田邦弘

名古屋淡交会秋季大会
十月二十三日（日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

（終了予定　六時）

（②面へつづく）

春雅日記 ㊼

桐一葉

えと文　二井栄逸

一葉落ちて天下の秋を知る。という言葉は昔からつかわれてきた。

桐の広葉が一枚ずつ落ちるのを見て、秋のおとずれを知るということである。単に一葉とだけいっても桐の葉が散ったことになる。

豊臣氏没落前の情景を脚色した坪内逍遙の戯曲、「桐一葉」が公演された以後は、桐一葉の言葉がよくつかわれるようになった。

二十四節気（にじゅうしせつき）の一つである白露（はくろ）がめぐってくると、朝夕の身辺にはめっきりと新秋の爽やかさがみなぎってくる。そして秋分が過ぎ、寒露のおとずれが近づくと、桐の広葉が一枚一枚散り始めるのである。

十月になると割合いに秋の長雨の多い九月下旬と違って、本格的に秋晴れとなり、雲を見るのには一年中で最もよい季節となる。

私は絶えず変化してゆく雲の姿を眺めながら桐一葉をきく。空が晴れて白雲のゆきかう日に落ちる葉音は、悠久な感じがしていい。曇り日に葉ちる葉音には感動がない。

三番目能の中に芭蕉という他に類例のない能がある。

古歌や、伝説にあらわれた女性を中心として、佳人の薄命をなげき、恋愛の悲しい終曲を惜しむというような題材を採っているのが本三番目の能であるのにこの能はそのもっとも本格的なものでありながら、恋愛とか、人間的情味をすて、又、草木の精でありながら大鼓の序ノ舞という定型によらずひたすらに清高幽雅な詩趣を表現しようとした能である。

第十四世六平太先生の芸談集、「六平太芸談」に次のような素晴らしい言葉が収録されている。

これは実に皮肉な能で、難曲中の難曲ともいうべく、曲見の面をかけての序の舞であり、他に類が無い。

初同で動きはするが、動くのではなく、たたずんでいる姿であり中入前も、説経を聞くうちにおのづから心が和らいでくるとともに人間の姿が芭蕉の葉の一枚一枚はがれてゆく心となってあらわれなければならない——

なんと素晴らしいことなのか——

桐一葉の音の中に永遠へつながりを感ずるのと同じように、芭蕉の能の中にも芭蕉の葉が一枚一枚はがれてゆく人間の姿が透徹した大気の中に昇華してゆく永遠の美しさを感ずるのである。

（63・9・29記）

各地だより

梅若万紀夫能の会公演

入場料全自由席前売四千円。当日四千五百円。取り扱いは出演楽師、大槻能楽堂（〇六—七六一—八〇五五）大阪能楽鑑賞会（〇六—三四一—三八四七）など。

風韻会秋季能大会

十一月六日（日）十時半始
熱田神宮能楽殿

（①面より名古屋淡交会秀秋大会つづき）

仕舞 笠之段 水谷宏蝉
三輪曲 伊藤悦子 放下僧小歌 加藤小都子 大久保喜代
素謡 井筒 矢沢種子 山岡俊幸
仕舞 玉鬘 松島久代 草子洗小町 中田恵子
杜若切 秋田恵美子 山姥切 間山美恵子
仕舞 蝉丸 戸松花枝 班女曲 川島千代子
班女舞跡 加藤恒子 籠太鼓 伊藤さち子
独吟 弱法師 吉田富貴松 隅田川 瀬戸照男
素謡 求塚 大川雪子 中野末子 伊藤さち子
連吟 船弁慶 松井健一郎 尾立浩隆 明石省八郎 近藤正登 後藤弘次郎 白水二郎 川島利雄 日野清 比野清 安井治栄 山岡俊幸 朝岡初男
連吟 菊慈童 森松島清子 中田久代 加藤恒子 戸原田千松花枝 恵子 秋田恵美子 川島千代子 鈴木多美子 矢沢種子 間山美恵子 伊藤好子
舞囃子 敦盛 安井清治 吉田定男 後藤嘉津幸 鹿取希世
羽衣 森正一 鬼頭英二 後藤嘉津幸 森本重一
芦刈 森清子 鬼頭英二 後藤嘉津幸 鹿取希世
仕舞 松風 虫曲 福田万里子 玉鬘 組切
松風 加藤悦子 巻
舞囃子 吉野天人 仲尾和子 鬼頭英二 後藤嘉津幸 天野和喜子
桜川 伊藤好子 吉田定男 後藤嘉津幸 和田佳津子
井筒 山口幸 吉田定男 後藤嘉津幸 鬼頭英二 後藤嘉津幸 鹿取希世
仕舞 清経 早川功一 草子洗小町 吉田定男 後藤嘉津幸 森本重一
笹之段 村瀬登美子 網之段 柳原冨司忠 鬼頭喜太郎 鹿取希世
舞囃子 清経 原田千恵子 吉田定男 後藤嘉津幸 森本重一
杜若 鈴木多美子 吉田定男 柳原冨司忠 鬼頭喜太郎 鹿取希世
砧 大川雪子 吉田定男 柳原冨司忠 森本重一
仕舞 松虫 坂野儀子 芭蕉 柳沼梅子
遊行柳曲 加藤鉦一
仕舞 屋島 長沢良子 鵜之段 古川波奈子
花筐 土屋美根 卒都婆小町 瀬戸綾子
一調 唐船 橋岡慈観 伊藤長八
独吟 杜若 伊藤好忠 鵜飼小町 長沢三郎
赤獅子 瀬戸三津子
白獅子 瀬戸勝治
前シテ
能 石橋 高安勝久 鬼頭英二 柳原冨司忠 鬼頭喜太郎 藤田六郎兵衛
大獅子間 井上松次郎
附祝言 後見 奥加賀敏彦 松田普助 憲二 地謡 竹井喜信 正次 清水 河合 下田 寛二 忠士 橋岡雄三 中村 越川慈観 和男 高橋弘
主催 名古屋淡交会
〔御来場歓迎〕 協賛 三交会 電話（〇五八七）三二—三三八八番

名古屋梅猶会定期能

十月二十九日（土）十二時三十分始
熱田神宮能楽殿

素謡 通小町 梅若修一 梅若盛義 岡田朗詠 地謡 橋本雅一 梅若修一 岡田朗詠 梅若盛義 菊池重郷
能楽 熊沢恵美子
井筒 高安勝久 後見 佐藤友彦 間 筧鉱一 後藤孝一郎 鹿取希世
後見 岡田朗詠 梅若盛義 地謡 梅若基徳 梅若善久 橋本雅一 梅若基徳 池内幸三郎 井戸和男 池内光之助 岡田晃一
狂言 地蔵舞 井上松次郎 井上礼之助
能楽 菊池重郷 飯冨雅介 杉江元 吉田定男 福井啓次郎 助川竜夫 森本重一
安達原 大野弘之 間
後見 梅若修一 梅若盛義 地謡 梅若基徳 梅若善久 熊沢恵美子 盛彦 池内幸三郎 岡田晃一 井戸和男 池内光之助
附祝言 主催 名古屋梅猶会
入場券 四、〇〇〇円（全席自由席）
学生券 一、五〇〇円
◎会員券申込先 能楽殿・出演楽師・梅猶会事務所
熊沢恵美子（〇五二—七八二—六九七三）

幸謡会大会

十月三十日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡 吉野天人 大谷とみ子 杉浦昭子
連吟 千手 前田鈴子 杉浦絵子 向綾子 本多ハル 荒川志づ 大見富美子 野村菊代 加藤マサ子 杉浦ヤエ 郁子 杉浦ゆき
舞囃子 高砂 須賀原淑子 河村大 後藤孝一郎 池田茂 藤田六郎兵衛
屋島 大場はま子 吉田定男 福井啓次郎 河村大 藤田六郎兵衛
舟弁慶 上田千代 河村大 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
海士 川越糸子 吉田定男 後藤孝一郎 池田茂 藤田六郎兵衛
田村 杉浦則行 河村大 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

松風

能 松風 殿島博子 古井佐季 植田隆之亮 河村絵一郎 後藤孝一郎 鹿取希世
戯之舞
仕舞 羽衣 安達原 長谷川龍子 山本博子 吉村春枝 川クセ 磯村千鶴子
大江山 衣キリ 奥村小浪 林和子 羽衣クセ 高井真智子
柏崎 衣キリ 吉村春枝 紅葉狩クセ 鈴木昌子
仕舞 鞍馬天狗 小林俊雄
紅葉狩 青木朋子
笠之段 小津尚美
玉鬘 中根麗子
杜若 小野喜子
素謡 蝉丸 高取良昌 小森辰雄 小林俊雄
東北 青木朋子 太田静江
富士太鼓 稲葉和エ 内田敏子 中根麗子
舞囃子 難波 竹本百合子 河村大 福井啓次郎 池田茂 鹿取希世
安宅 田中米子 吉田定男 後藤孝一郎 鹿取希世
鉄輪 小島照子 河村大 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 鹿取希世
仕舞 笹 上田知代 小野喜子 泉雅一郎 高取良昌
素謡 花筐 石川晴子
能 半蔀 高安勝久 吉田定男 後藤孝一郎 鹿取希世
間 大矢高義
後見 泉嘉夫 大槻秀夫 地謡 稲葉和エ 小津尚美 田中米子 小島照子 川浪泰子 塩谷恵子 近藤幸江 磯貝勝子
素謡 藤戸 加藤千代子 小林よし 横井敬子
仕舞 雷電 雀山 太田静江 稲葉和エ
融 横井敬子
龍田 小森辰雄
巻組
舞囃子 善知鳥 村井邦子 河村大 福井啓次郎 鹿取希世
カケリ入
砧 川浪泰子 吉田定男 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 鹿取希世
松風 磯貝勝子 吉田定男 後藤孝一郎 鹿取希世
戯之舞
番外仕舞 嵐山 泉嘉夫
采女キリ 大槻秀夫
番外舞囃子 弱法師 近藤幸江 河村大 福井啓次郎 鹿取希世
附祝言 （終了予定五時半頃）
〔御来場歓迎〕 主催 幸謡会
近藤幸江
岡崎市鴨田本町十一ノ三
電話（〇五六四）二一—二五二九

幸友会秋の会

十一月三日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

囃子二十数番ほか連調、独調など
〔御来場歓迎〕 主催 幸友会

各地だより

梅若万紀夫能の会公演

11月26日　大槻能楽堂

十二回梅若万紀夫能の会大阪公演が十一月二十六日（土）大槻能楽堂で催される。

能「松風」見留（シテ梅若万紀夫、ツレ梅若万佐晴）狂言「寝音曲」（茂山忠三郎、善竹幸四郎）一調「難波」（観世銕之丞、三島元太郎）ほか仕舞。

入場料全自由席前売四千円。当日四千五百円。取り扱いは出演楽師、大槻能楽堂（〇六―七六一―八〇五五）大阪能楽鑑賞会（〇六―三四一―三八四七）など。

広田後援会能

広田後援会能は十月二日、金剛能楽堂で第七十一回、秋季公演を催会。

能「芭蕉」（広田泰三）狂言「柿山伏」（茂山千五郎、木村正雄）能「泰山府君」（広田泰能、広田幸稔）

なお次回第七十二回催能は明春四月二日（日）に開催される。

茂山家一門会の狂言公演

11月29日　一宮で

狂言大蔵流・茂山家一門会による狂言公演が十一月二十九日（火）一宮勤労福祉会館で催される。主催フォーラム21。

演目は「附子」「室町歌謡組曲」「武悪」、出演は茂山千五郎、茂山千之丞、茂山正義、茂山真吾、茂山あきら、茂山千三郎、丸石やすし、笛・藤田六郎兵衛。

入場料S席二千円、A席千五百円、午後六時三十分開演。タマコシ、ユニーサンテラス一宮など。で入場券取扱い。

能「松風」を上演

セントラルパーク薪能

セントラルパーク十周年を記念して九月二十三、二十四日の二日間予定された「セントラルパーク薪能」は、初日の二十三日は降雨のため待機、雨上がりの午後七時半から決行となり、狂言小舞「祐善」「七つになる子」（野村又三郎）につづき、能「松風」（シテ梅田邦久）が予定どおり上演された。なお二日目は降雨のため中止となった。

観能独語

直面（ひためん）物（もの）私見

内藤泰二の「七騎落」

九月十五日熱田で宝生流内藤泰二の名古屋市芸術特賞受賞記念公演がありました。能「七騎落」のほか宝生英雄、観世元信両宗家の一調「山姥」、舞囃子（辰巳孝）狂言（井上松次郎、野村又三郎）等があり、内容充実、受賞記念にふさわしい公演でした。眼目はもちろん内藤のシテの「七騎落」ですが、一調の元信の太鼓の冴えたひびきが一際耳にのこりました。

私は元来直面（ひためん）物はあまり好きでありません。能は本質的に歌舞劇であり、仮面劇です。歌舞的要素の少ない直面物は、能の本質から遠いように思われるからです。「七騎落」はもちろん直面物の劇能であり、しかも雪葉の多いセリフ劇です。幽玄味など求めようがありません。面には仮面の美、仮面の芸があります。これがどんなに能の美、能の芸を深めていることか。仮面があってはじめて能の深遠な幽玄味は発揮されるのです。

直面物は簡明卒直、幽玄味とは反対の単純明快、そのものずばりの迫力が生命です。いさましい武士の活躍する人情物にはもってこいの形式です。「七騎落」などはその典型的なものでしょう。しかし、その面白さはストーリーの面白さで、歌舞伎等に近く、能としては底が浅いといわれてもしかたがないような気がします。もっとも（これは私見ですが）「七騎落」のシテ実平という男、いささか気の弱いところがあり、作品にもそう書かれているようですが、舞台では剛毅の関東武士、強い男でなければなりますまい。その強い男が親子の情にまけて、メソメソヨロヨロするところがこの劇のミソですね。はじめからメソメソヨロヨロでは折角の趣向が死にましょう。橋懸からして、情を内に秘して、毅然たる武人の面魂が見えねば成功といえないのではないでしょうか。

ところで素顔を直面といいかえて、あくまで仮面劇の建前を貫こうというのは当然ながら立派ですが、素顔はやっぱり素顔です。能面同様の無表情になりきれません。無理をすると顔が硬直して直面のねらいが死んでしまいかねません。むつかしいところです。

たとえばこんどの「七騎落」でも実平親子の別れの場面、ここが一番の見どころでしょうが、「弱気を見せじと」舟を降り死地におもむく我が子遠平を見かえりもせず、そっぽをむいて立ちつくすところ、ただ無表情につったっていては劇になりません。そうかといって顔や目鼻を動かすような大芝居はもってのほか、内藤は一生懸命にやっていましたが、どうも実平の断腸の思いが十分につたわってこなかったような気がします。ここはシテ方だけでなく、ツレも地謡、囃子方も必死になって協力しないといけないでしょう。これは一般論で、今度の「七騎落」のアンサンブルが悪かったというのでは決してありません。

面は無表情といいますが、俗に照らせば笑い、曇らせば泣く、というように、演者の力次第ですばらしい表現力を発揮します。そこへいくと直面は不利です。表現力が限られていて、却って自由がきません。ある意味では面をつけた演技よりむつかしいとさえいえましょう。私は直面物はもっともっと研究工夫が必要ではないかと思います。

底が浅いというのは覆物などにくらべ研究が浅いということで、演者、演出にも一半の責任があるといえますまいか。その意味で内藤があえて名古屋では比較的珍らしい直面物のセリフ劇に挑んだ意図には拍手を送りますが、何となく詰めの甘さ、息の弱さが感じられて気になりました。疲労、体調不良等健康のことも思いましたがまだまだ元気なはずの名古屋支部長、そんなことをいい出すと「心配無用」としかられそうです。直面物は演者のコンデションが、それこそ単純卒直に出ますからついつい失言おゆるし下さい。ともあれ名古屋の能界にはかけがえのない大事な人です。ご自愛専一に願います。

（M）

風韻会秋季能大会

十一月六日（日）十時半始

熱田神宮能楽殿

素謡　班女　中村喜久子　中垣こう　吉田文子（クリ・サシ・クセ省く）

地謡　鈴木芳子　高木あき子　船橋澄子　平岩昌子　山島春子　此島としこ　毛利美子　水野組子　富田貞子　広瀬喜子　石黒緒方　山田操子　津崎陽子

仕舞　屋島　三笠之段　輪之段　網之段　鐘之段

地謡　志水志津枝　大橋ひな子　吉田八重子　渡辺澄子　梯原富貴子　渡辺節子　近藤幸江　佐藤アヤ子

素謡　安達原（クセ省く）　田中文子　武山とよ子　田中泰子

地謡　加藤精子　今枝みつ子　岩田正子　浅野芳子　青山信子　原田江子　樟本圭子　坪内孝子　木野照子　森田榮子　伊藤清子　志方つるり子　富田初ね子　阿部タマ子　坪田玉江

舞囃子　鶴亀　山田欣也　河村真之介　柳原冨司忠

松虫　佐久間美親　河村真之介　柳原冨司忠　森本重一

通小町　石黒操子　河村真之介　後藤孝一郎　森本重一

連吟　天鼓　伊藤晏義　高田武雄　浮貝鋼一　北原良一郎

能

松風　殿島博子　古井佐季　植田隆之亮　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世　戯之舞

後見　大槻秀夫　近藤幸江　殿島修二　地謡　武原良一郎　富田康之　泉雅一郎　伊藤晏義　北原良一郎　浮貝鋼一　大槻文蔵　山本正人　田中博人

舞囃子　養老　富士道周明　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世　助川竜夫

熊野　鬼頭貴代子　村雨留　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世

富士太鼓　福間克彦　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世

仕舞　難波　都鄙　伊藤敏子　殿島満里子　班女　奥田黛　地謡　谷口寛子　熊坂　斉藤信隆　赤松禎友

舞囃子　実盛　佐藤アヤ子　河村総一郎　柳原冨司忠　森本重一

弱法師　渡辺節子　河村真之介　柳原冨司忠　森本重一

紅葉狩　御牧紀代　河村真之介　柳原冨司忠　鹿取希世

番外仕舞　采女　大槻秀夫　泉雅一郎　水田博　殿島修二　地謡　斉藤元三　赤松禎友　急之舞

附祝言　慈童　大槻文蔵　地謡　泉嘉夫　山本正人（終演五時頃の予定）

主催　殿島韻会

〔御来場歓迎〕　後援　毎日新聞社

秋の清謡会（第十一回）

十一月十二日（土）午前十時始

熱田神宮能楽殿

素謡　鶴亀　相木幸子　服部玲子

土蜘蛛　水越弥生　加藤洋子　深谷紀佐子

花月　伊藤米子　水野幸子　地謡　鬼頭和子　田中たみ　森丹下悦子　高見かね子　那波操　奥村ひさ　小浪

源氏供養　山岡米子　加藤茂代　樹山きよ子

安達原　長谷川龍子　山本博子　吉村春枝

仕舞　羽衣キリ　奥村小浪　桜川クセ　磯村千鶴子　大江山中入前　林和子　羽衣クセ　高井真智子　柏崎道行　吉村春枝　紅葉狩クセ　鈴木昌子

連吟　藤戸キリ　林不破和子　浅野愛峰子　小林美和子　岩田加代

仕舞　白楽天　神谷直市　巴　高野物狂道行　金原好江　采女クセ　山口耕造　蝉丸道行　金原孝典

素謡　井筒　神谷冨美　川合光子

舞囃子　養老五段　磯部三枝子　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎

江口　岩田加代　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎

龍田　不破峰子　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎

素謡　俊寛　成経　磯村千鶴子　康頼　鬼頭みゆき　鬼頭澄　樹山きよ子

舞囃子　田村　小林美和子　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

百萬　高梨千代子　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎

海士　山本博子　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎

山姥　三輪藤枝　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎

連吟　班女サシ・クセ　十倉成己　黒谷秀彦　五藤里見　柴垣横田　水山中　清行譜　慶蔵次郎　信行賢　柏倉三　幹彦峰芳

番外舞囃子　野守　清沢一政　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎

融　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎

附祝言　梅田邦久　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　鬼頭喜太郎

主催　清沢謡会

〔御来場歓迎〕　補佐　梅田邦久

63年10月・11月放送予定

〔10月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

16日（日）金春流「正尊」金春信高

23日（日）観世流「三輪」梅若盛義

〔11月〕NHK・FM

5日（土）午前7時15分～8時45分

宝生流「隅田川」三川泉ほか

（NHK能楽鑑賞会から）

能楽鑑賞：FM午前8時～9時

13日（日）観世流「実盛」木原康次

20日（日）観世流「三井寺」梅若恭行

27日（日）金剛流「松虫」金剛巌

NHK教育テレビ（午前8時～9時）

3日（祝）観世流能「鉄輪」片山九郎右衛門ほか

23日（祝）新作狂言「死神」茂山正義、茂山千之丞

（NHK能楽鑑賞会から）

観世会定式能（五回）

十一月十三日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

葛城　能
観世銕之丞　宝生閑　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
大和舞　井上礼之助
間　後見　武田邦弘　片山慶次郎　地謡　松山幸親　須部甫　加藤保　加賀敏彦　久田徹二　梅田邦久　小島一英　山本順之

二千石　狂言
井上松次郎　井上祐一　後見　井上礼之助

松風　仕舞
山本順之

船弁慶キリ　地謡
片山慶次郎　小島一英　梅田邦久　中川雅章　小田徹二　本田一勲

能
久田徹二　片山九郎右衛門
姥　飯冨雅介　西村欽也　杉江元　河村大　久田舜一郎　藤田六郎兵衛　助川竜夫
白頭　佐藤友彦
間　後見　小島一英　山本順之　地謡　清沢一嘉　高橋一歌　今村中川　梅田邦久　片山慶次郎　武田邦弘
祖父江修一　（終了　五時半頃）

附祝言

〔有料〕　主催　名古屋観世会
要会員券　当日券　七千円（自由席）

二井栄逸師画抄集

'89 能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー1989年版。B3（タテ51.5cm×ヨコ38.0cm）表紙とも7枚の美麗カレンダーです。能画は「般若」（表紙）「羽衣」「西王母」「経政」「松風」「六浦」「千寿」

◎ 予約特価　1部 1100円、郵送の場合送料とも1部1450円（2部以上の場合、部数拘らず送料は一律500円、例・3部の場合送料とも3800円）

◎ 予約申込み期限　10月30日（それ以後は1部 1800円、ただし部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい）

◎ お申し込み方法　ハガキで部数明記のうえ当社へお申込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。

申し込み先　能楽の友社
〒464　名古屋市千種区千種2-18-18　電話(052)731—7984
振替口座　名古屋　0 — 36393

「衣斐正宜後援会」「名古屋金春会」「観世会」

竹尾邦太郎

「花月」　シテ晴啓。浅黄縫箔・白大口・濃緑色の水衣が明食の面によく合う。幼時、天狗に攫われた暗い過去の片鱗も無く、すっかり遊芸者になりきっているシテの浮き〳〵した気分、就中アイ則直との絡みが洒落ていて如何にも戯れた風が面白い。カッコも軽快キリに捻を捨て、鬼に替えてくるくる廻り常座でトメる迄軽妙だった。ワキ雅介。父子再会の感慨を味わうには些か却が足りないことは否めない。地は良雄・正宜・孝史ら。後見に孝・英照、囃子は希世・冨司忠・鉱一。よくまとまり小品ながら見応えがあった。（49分）

「昆布売」　当地久しぶりの大蔵流山本家の登場。太刀持を請け合って礼を言われ、「ヤ、これはお礼までにござらぬ」のアド則直の苦笑い気味のヤ、激しい太刀風に、「真平命はタタタスケテ呉れい」のシテ東次郎の吃音など、山本家の剛のイメージの中に仄見する軽味が得も言われなかった。（29分）

「舟弁慶・後ノ出留ノ伝」　シテ正宜。襟白赤・白摺箔（金の露芝文様）・赤萌黄浅黄段唐織（菊と波文様）・面節木増。物着に金色烏帽子を着ける。イロエ前の地（英照・良雄・孝史ら）との掛合はしっとりと、イロエに大小前小さく二度廻るその挙措はシテの揺れ動く心象そのもの。纏綿とした舞クセから惜別の中ノ舞・途中常座で子方を見てシオル・ツマミ扇が如何にも虚脱した力無い様子を印象づける。舞の間橋懸へは行かなかった。地の、へ旅の宿りを、と子方は立って数歩進み下居するとシテも正中下居して向き合う。へ烏帽子直垂、と烏帽子の紐を引くとばたりと前に落ち、へ涙に、と両人シオル。この愁嘆場は少々くどかった。

船中の場は型通りアイ東次郎は棹を使いながら「シィーシィー」と波を鎮めるが、船中のタブーに触れたワキツレを咎めるワキ茂十郎の後について揺にかかり、叱責するアイの詞が無かった。

後場は観世流「前後ノ替」と同様だが、早笛では先ず一ノ松に出て、へ声をしるべに、の返シに拍子を踏み、それから舞台に入った。黒頭・面三日月・厚板（稲妻文様）・紺地半切（金で波頭文様）・萌黄袷狩衣（金で雲と輪宝文様）両袖折込みと衣紋に着ける。飛び上りざま安座するるきびきびした型や働キの躍動感など見事だった。キリは一旦二ノ松に遁れて長刀捨てると太刀を抜き、ずかずかとシテ柱際へ来て跳躍し一気にワキに寄るあたりが目覚しかった。へまた引く汐に、の返シに幕へ走り込む引き際も鮮やかなら、半幕で後姿見せての囃子の残り留も余情一入だった。なお附祝言を聞いてからワキ以下船を出たのも珍らしいと思った。更にはワキ・アイ・大鼓（佐之六）・地謡後列の配役の妙も楽しめた。（1時間21分・8月27日・衣斐後援会）

×　×　×

「氷室」　シテ晃実。初同前うっかり後見が小道具の杁（えぶり・雪掻き）を引いてしまったが、無いと分れば委細構わず押し切るシテは、クセで再び手にしてもさりげ無く、不時の心得は流石だった。

ツレ雄二の天女ノ舞の後、後シテは作物の中で謡い出し、地との掛合の裡に、へ紅蓮大紅蓮、で引廻が下ろされ床几のシテが姿を現わす。白地狩衣の袖を折込んで衣紋に着け、紫地半切は金で雲と稲妻の強い文様。黒頭・唐冠に天神の面が珍しかった。何もかもが大ぶりの印象で舞働の豪放は圧倒的。トメは扇カザシて常座へ往き、一ノ松を向き拍子二つ踏んだ。遠い曲の所為か謡の聞き難いところもあったが、脇能の清爽は氷の涼で残暑を吹き飛ばし爽快だった。なおアイ末社ノ神（友彦）が郷びた俚謡で、へ雪こっこ、霰こっこ、と舞いながら神慮の降雪で更に、へ雪転ばかし、〳〵と三鼓のアシラヒで雪達磨を作るように舞台を廻るところなど、何やら懐旧の情に誘われて面白かった。（1時間25分）

「清経・恋音取」　亡父本田秀男甘三回忌追善に嫡子光洋が勤めた。笛は六郎兵衛。シテは無紅蝶文様縫箔を着付に白大口。薄紫色の長絹は袖を折込み、面は中将・貴公子の矜持から入水して果てた哀れさの中に冷やかな気品が感じられた。

笛に惹かれて運んでは三・二・一ノ松に立ち止まり、その都度耳欹（そばだ）てる型の面のクモラセ加減の深浅に深度があり、光洋・六郎兵衛の阿吽の呼吸が素晴しかった。クセの、へ月に嘯く、は抱エ扇に非ずカザシ扇をし、へ西に傾く月を見れば、の雲ノ扇は大小前から地裏を見たのが観世と違った面白さだった。ワキ淡津三郎は雅介。曲趣の一である寂寥感が滲み出ていて好演だった。（1時間18分）

「三輪」　シテ信高。前は面小面、襟白赤・白摺箔・紅白段唐織（青海波・笹文様）の若い女に一寸驚いたが、幾春秋を送った女にしても思慕の情に口実を設けて玄賓の許（もと）に通う若造りの女とすれば辻褄は合う筈。さすれば女子の二百米で一位を勝ちとつたF・ジョイナー選手（米）が大地（トラック）にキスをするカタチは美しかった。まるで能をすませて楽屋に戻ったシテはじめ諸役があいさつを交（かわ）す光景に似ていると思った。

×　×　×

内藤泰二氏より新著・「眼ハめ〉・名古屋から」を贈らる。宝生流・能協名古屋支部長の同氏が名市芸術特賞（昭六二）を受けられた記念の一書。雲霧随筆とも呼ぶべき名古屋能楽史の貴重な新資料（注、同氏会名は鍵雲会）。

薄い浅黄色の箱には伊勢門水氏（狂言共同社創立者の一人。狂言と共に画をよくす。狂言の画多く趣味広し）描く鯉泥の姫小松が数本美を添える。松のいわれは本文にあり。本の扉の眼の字は漢字の古い書体（萩原冬琅氏筆）。それを繰ると女面（カラー）。北濃長滝の白山神社蔵の古面。印刷見事。大きく本を飾る。

本文は維新後の名古屋の能楽史と能面の話に大別される。第一篇の能楽史は能楽堂別に由る能楽史で、維新後の町方の能舞台—愛知博物館—那古野神社—呉服町—布池と移る（変わる）能楽堂（能舞台）の呉服町まで。布池はほんの少し。明治のはじめから昭和六年頃までの新能楽史。内藤家のことが織り込まれて広さ深さを増す。「お能の番組」・「小菱芸話」（田鍋惣太郎氏編・著）の二書とカナエの重さをみせる。そして前二著で分明とは言えない保能会（第一次、二次）・愛知能楽会や名古屋能楽会の消長をはっきりさせたことは第一の功績。それと並んで〈呉服町〉の様子を演能当日の時間の推移にしたがっての描写はその文才をたたえたい。なお〈呉服町〉を呼ぶとき、私は能楽堂と言うが、記録上から（名古屋）能楽倶楽部の方がいいのかも知れない。第二篇の能面の話も参考になりかつおもしろし。

文中の〈呉服町〉の二階から紙飛行機（とんぼ）を作って飛ばしたり（第一篇）、金剛巌氏（初）の装束付でカヅラの頂をたびたび押えていたり（第二篇）、その思い出が活き活きと語られ、のどかな昔をしのばせる（注、内藤家は〈呉服町〉内に住む）。掲載の写真も得難い。

私も三・四の諸賢にこの滋味あふれる書物の贈呈送付をお願いした。布池以後の続篇刊行を切に望み、併せてその節〈呉服町〉の地図・間取図も載せられたい。六三・九刊・暁教育図書（東京、九段南四丁目）制作協力。

信玄袋

—内藤泰二著「眼・名古屋から」、演能—

九月はソウルでオリンピックが催され、明暗さまざまな話題が伝えられた。二六日の女子陸上一万米で、日本の松野明美選手がゴールに入るや倒れる。それを英国の長身の選手が助け起す。一位のマッコルガン選手である。ゆかしさに胸が熱くなった。かつて国際男子マラソンのとき、いつどこであったかもう忘れたけれども、激走のおしまいの方で、やはり英国選手がへこたれようとする日本の青年に寄り添い励ましながら走ったこともあった。今度も良さイギリス国民性のあらわれをみた。孟子が説く〈惻隠（そくいん）の心と通ずる伝統の英国精神である。また、ひた走るとき、高く跳ぶ瞬間にくらべ、共に走り出そうとする前後の心の緊張は、時間に長短の差こそあれ、能で「お幕」の声を発し橋掛に姿をあらわすシテと同じものがあろう。また女子走り高跳びで一米九三に失敗してさがる日本の佐藤恵選手がしずかにパーの方へ向って一礼する姿〈同じく

×　×　×

演能。

九月四日本田秀男氏の二三回忌追善能。大成を期待される光洋氏は父上に清経・恋音取を手向け名声を博す。よい手向けであった。薄い紅色のさす法被（か）、ほんのりクリーム色の大口の渋い装束と直線的に進んでは止る動きとが相乗して小書の効果をうまくあらわす。入水（じゆすい）を中心にその前後を、地謡座、笛座前・中央と巧みに演じ人生の哀歓をそそる。切りもよし。充実感が大きく、出色の一番。前後の水室（金春晃実〈てるちか〉）は強く、清爽重厚。三輪（金春信高）は古拙の味あり、おもしろし。この二番には山（と一畳台）や杉宮の作り物がそれぞれ出る。なお氷室は黒頭にオモテ天神、この上演珍し。十一日観世会。本年有数の新鮮な二番であるがみず。十五日内藤泰二氏祝賀能は七騎落を演ずる。大勢出演で祝う意味か。十七日九皐会。遊行柳（観世喜之）をみる。これで近年西行桜・遊行柳を続けてみる。古雅。テレビ能は次号。

×　×　×

十月—十二月。NHK市民大学講座（木）。「世阿弥の演劇論」・堂本正樹氏。期待すること大。

（野村広二）

名古屋二十五周年
修諷会記念大会
十一月十九日（土）午前九時三十分始

第四回　第二期
名古屋宝生会定式能
十一月二十日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

何となくなまめいた前シテで、夜寒に衣を所望するところも意味深長。間近にシテが差し出す左腕にワキ欽也が衣を掛け、それをシテが沁々見詰めるなど異色だった。

後シテは面増・金色風折・緋大口・白地長絹（襟・着付は不変）の玲瓏とした姿。袖アシライ・扇遣イも優雅そのもの、神楽からキリまで含羞に溢れた初々しさが印象的だった。（1時間28分・9月4日・名古屋金春会）

「龍田」　道行から着セリフ、へはや暮過ぎし秋篠や、外山の紅葉名に残る、と薄く下を見て一足詰める辺り、余光に鈍く光る龍田の川面の神さびに風景が現前してワキ僧欽也好演。古歌に寄せ、川渡りを断る些か強独付会の理屈も神巫ならばこそ。シテ志房の問答も活き活きとして導入部が殊の外面白かった。

前後共面は増・襟白赤・着付は白摺箔。後シテに黒垂・天冠・鬘金大口・金唐草文様赤地舞衣童折。装束の色合いが如何にも陽を透かしたようなもみぢで趣深く、龍田姫神の舞う神楽の素朴も風情があった。（1時間29分）

「阿漕」　シテ祥六。生業に自己嫌悪を覚えながらも続けてゆかねばならない苦渋は何やら求道者めき、何事もない所作にも卑賤は見えてこない。このため後シテには禁断の漁に開き直った強さのようなものが見えた。

後シテは無地熨斗目を焦茶から紺に替え、腰蓑（白茶染分）は同前。白縷水衣・黒頭に面は河津（かわず）。人目を避けるかの癖放レ、人気（ひとけ）が無いのを徐々に大胆になってゆく四手網を仕掛ける前後、遂には漁に没頭してゆく過程を、祥六は自らが能にのめり込むようにして見せた。就中一ノ松で勾欄に数歩詰め、頭を取ってじっと四手網を見込むところ、河津の洞穴めいた虚ろな眼の不気味さが象徴的だった。ワキは隆之亮神妙。（1時間24分・9月11日・観世会）

〔訂正〕本紙9月号④面、邦謡会演能「邯鄲」の記事中、玉殿とあるのは「玉殿」の間違いでした。お詫びして訂正します。

（編集部）

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電話（291）2488－9　振替東京3－3552
〒604　京都市中京区二条通烏丸東入
電話（231）1990　振替京都1－113

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電話（731）7984
振替口座　名古屋0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一部　70円

◈演能カレンダー◈
（熱田神宮能楽殿）

〔11月〕
19日（土）修諷会大会（来場歓迎）（番組①面）
20日（日）名古屋宝生会定式能（有料）（番組①面）
23日（祭）久田観正会大会（来場歓迎）（番組②面）
26日（土）青陽会定期能（有料）（番組③面）
27日（日）和泉会別会（有料）（番組③面）

〔12月〕
4日（日）歳末助け合い協賛能（有料）（番組③面）
11日（日）壺泉会能（有料）（番組④面）
21日（水）熱田高校能鑑賞会（高校生のみ）

〔64年1月〕
3日（火）能楽協会名古屋支部謡初式（能楽協会関係者のみ）
6日（金）名古屋学生能楽連盟学生能（来場歓迎）
14日（土）青陽会定期能（有料）
15日（日・祝）清鏡会大会（来場歓迎）
21日（土）正風会20周年記念大会（来場歓迎）
22日（日）正風会20周年記念大会（来場歓迎）
29日（日）柳原富司忠職分20周年記念能（有料）（番組④面）

〔2月〕
5日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
12日（日）名古屋観世会定式能（有料）
18日（土）梅若六郎襲名披露能（有料）
19日（日）名古屋観世九皐会定期能（有料）
26日（日）春蔵会大会（来場歓迎）

〔3月〕
5日（日）梅猫会（有料）
12日（日）大蔵狂言会（来場歓迎）
21日（祝）名古屋大学学生能（来場歓迎）
26日（日）壺泉会大会（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

秋の叙勲

・勲四等旭日小綬章
大倉流小鼓方
鵜沢寿氏（八〇）

昭和五十七年重要無形文化財保持者個人指定（人間国宝）
・勲五等双光旭日章
大蔵流狂言方
善竹玄三郎氏（七四）

歳末助け合い運動　協賛能
能楽協会名古屋支部主催
12月4日　能4番　狂言2番

能楽協会名古屋支部（内藤泰二支部長）主催の「歳末助け合い運動協賛能」は、きたる十二月四日（日）熱田神宮能楽殿で、協会支部能楽師の出演により、能四番、狂言二番、舞囃子、仕舞により上演される。

助け合い運動に協賛して協会名古屋支部の公演はことしで第二十回。昨年は愛知県、名古屋市へそれぞれ二十三万九千七百三十円が寄贈された。この趣旨にもとづき愛好者の鑑賞が期待されている。

能は、宝生流「経政」（シテ戸田和）観世流能「葛城」（シテ中川雅章）観世流能「龍太鼓」（シテ近藤幸江）金剛流能「黒塚」（シテ百々康治）。狂言は和泉流「文山賊」（井上礼之助）「茶壺」（野村又三郎）喜多流舞囃子「邯鄲」（長田隆）金春流仕舞「融」（近藤修彦）観世流仕舞「蝉丸」（吉田妙）の上演。

入場料千五百円、午前十一時始。（番組③面掲載）

古典芸能鑑賞会
安城市文化センターで一開催

安城市教育委員会主催の「古典芸能鑑賞会」は、十一月二十六日（土）安城市文化センターで開催される。

舞囃子「安宅」（シテ辰巳孝）狂言「寝言曲」（野村又三郎）能「葵上」（シテ内藤泰二）で名古屋宝生会の出演。

午後六時開演。S席千五百円、A席千円。取り扱いは安城市教育委員会社会教育課（電話〇五六六－七六－一一一一）安城市文化センター（電話〇五六六－七六－一五一五）

能「木賊」上演
11月20日　豊春会秋の能

金剛流・豊春会（豊鶴三千春師）は、十一月二十日（日）豊春会秋の能を開催する。

今回は、春の弥左衛門追善能「朝長」「藤戸」につづいて老女物につづく難曲の「木賊」（シテ豊鶴三千春）舞囃子「高砂」（豊鶴訓三）が上演される。ほか狂言「蝸牛」（茂山正義）一調「玉之段」仕舞など。午後一時始。

なお来年度は春の能が五月十四日（日）能「墨染桜」秋の能は十月八日（日）能「調伏曽我」の上演が予定されている。

故近藤乾三氏
宝生会葬執行

さる十月一日逝去された近藤乾三氏（宝生会常務理事）の宝生会葬が十月二十四日、東京・水道橋の宝生能楽堂舞台で郷儀午後二時から、告別式は午後三時から執り行われ、生前の功績をたたえ、冥福を祈った。宝生会会長・宝生英雄宗家、郷儀委員長・宝生会専務理事重井玄剛氏。

京都

能「木賊」上演
11月20日　豊春会秋の能

金剛流・豊春会（豊鶴三千春師）は、十一月二十日（日）豊春会秋の能を開催する。

今回は、春の弥左衛門追善能「朝長」「藤戸」につづいて老女物につづく難曲の「木賊」（シテ豊鶴三千春）舞囃子「高砂」（豊鶴訓三）が上演される。ほか狂言「蝸牛」（茂山正義）一調「玉之段」仕舞など。午後一時始。

なお来年度は春の能が五月十四日（日）能「墨染桜」秋の能は十月八日（日）能「調伏曽我」の上演が予定されている。

名古屋二十五周年
修諷会記念大会
十一月十九日（土）午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿

番組

能
熊沢恵美子　平手鉦治　梅若善久
田村　高橋弘　梅若基徳
弱法師　山本千代　井戸和男
砧　橋本雅一　近藤愛子　岡田朗詠
求塚　池内光之助　塚田澄子　梅若修一

狂言
仕舞半蔀　木南俊彦
富士太鼓　前川好江
連吟木賊　高橋道子　梅若修一

地謡　梅若　岡田　森勝子　晃一　盛義　朗詠　梅若　岡田　盛彦

楽謡
当麻　法皇　山内直行　局　鈴木正子　内侍　前川好江　岡田晃一　伊藤恵美　梅若修一
大原御幸　川口重野　平田徳次　木南俊彦
道成寺　沢田春子　梅若善高　池内幸三郎

間　野村又三郎

舞囃子
源氏供養　大島貞子　河村総一郎　柳原富司忠
砧　後　金野克子　河村総一郎　柳原富司忠　藤田六郎兵衛

地謡　梅若　岡田　晃一　修一　盛義　朗詠　井戸　岡田　和男　鹿取　希世

楽謡
景清　ツレ　梅若修一　トモ　梅若盛彦　杉田和子　河村総一郎　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
天鼓　鬼頭みき江　バンシキ　河村総一郎　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

舞囃子
雲雀山　中嶋和子　笠　柳原富司忠　鉱一　鹿取希世
松風　稲本三津子　笠　柳原富司忠　鉱一　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

番外舞囃子
松風　五段・替之型　森恭子　笠　柳原富司忠　鉱一
虫　梅若修一　笠　柳原富司忠　鉱一　鹿取希世
難波　橋本雅一　笠　柳原富司忠　鉱一　鬼頭喜太郎　鹿取希世

（終了　五時三十分頃）

〔御来場歓迎〕
主催　修諷会
梅若修一

第二期第四回　名古屋宝生会定式能
十一月二十日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

番組

能
橋弁慶　鬼頭嘉男　柴田昌宏　玄斐正宜
間　佐藤友彦
後見　内藤泰二　吉田俊彦
地謡　鈴木久仁七　熊田豊吉　中島静男　河野邦男　稲川寿一　竹腰勝孝　佐藤耕司

狂言
昆布売　辰巳孝　井上礼之助　大野弘之
輪　西村欽也　柳原富司忠　笠　鉱一　助川龍夫　藤田六郎兵衛
間　井上松次郎
後見　倉本雅　玉井博祐
地謡　舟津正雄　清水一郎　佐々木輝雄　高田真六　稲川寿一　広島正宜　佐藤克栄　耕司

仕舞
清経　キリ　戸田和
野宮　玉井博祐
大江山　吉田俊彦
鼓　広島克栄
天鼓　倉本雅
地謡　稲川寿一　辰巳孝　広島克栄　佐藤耕司
黒塚　飯冨雅介　杉江元　福井啓次郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
間　白頭　井上祐一
後見　衣斐正宜　佐藤耕司
地謡　稲葉和子　平子　稲本義久　外山通夫　広島辰巳　竹腰勝一　鬼頭嘉男　克栄孝

附祝言

主催　名古屋宝生会
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤泰二方　電話八三二－三四四九

63年11月・12月放送予定

〔11月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
13日（日）観世流「実盛」木原康次
20日（日）観世流「三井寺」梅若恭行
27日（日）金剛流「松虫」金剛巌

◈NHK教育テレビ（午前8時～9時）
23日（祝）新作狂言「死神」茂山正義、茂山千之丞
（NHK能楽鑑賞会から）

〔12月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）
4日（日）観世流「船弁慶」観世栄夫
11日（日）喜多流「葵上」友枝昭世
18日（日）宝生流「邯鄲」渡辺三郎
25日（日）観世流「多度津の左衛門」大槻文蔵

（TV放送はありません）

（青海波・笹文様）の若い女に一寸驚いたが、幾春秋を送った女にしても思慕の情に口実を設けて玄瓷の許（もと）に通う若造りの女とすれば辻褄は合う筈。さすれば

〔訂正〕本紙9月号④面、邦謡会演能「邯鄲」の記事中、玉殿とあるのは「玉殿」の間違いでした。お詫びして訂正します。（編集部）

春雅日記 ㊽

こうやぼうき

えと文　二井栄逸

昔、夜能で高野物狂を見たことがあった。其の時の高野物狂は、特に曲（クセ）の謡がよかったことを今でも覚えている。

それは、おのづから心眼明らかに開け、心耳も澄みわたるかのような感動を覚えた名謡であったのである。

金剛峰寺山内の三鈷の松のほとり。さし交す青葉、若葉の樹間から降るようにさし込む葉洩れ日を浴びながら、みやまがらすの声を聞く。

老樹森々と生い茂る中に、堂塔多く、このクセの謡は、たしかに弘法大師一山開基の要義がひたひたと伝わってくる名曲である。

× × ×

高野物狂に関連して、今、山野にあまりめだたないが、白い小花をしろじろと咲かせているこうやぼうきのことを書いて見たくなった。

昔、高野山では、女人禁制など十ケ条の禁があった。ナシ、クルミ、タケ等の植栽もその一つで、利潤を得る行為をいましめる意味で禁ぜられていたという。

それで竹がなく、竹箒がつくれないので、たまばはき（玉掃）で箒をつくった。高野山ではそれを竹箒のかわりに使うことになったので、誰言うとなく、たまばはきをコウヤボウキとよぶようになった。

萬葉では、たまばはきとしてうたわれている。

始春（はつはる）の初子（はつね）の今日の玉箒（たまばはき）手に執るからにゆらぐ玉の緒

——大伴家持——

「宴（うたげ）をなさる初春の初子の日の今日、頂戴しましたタマバハキを手に取り持ちますと、その箒に飾ってある玉の緒がゆれて音を立てます。ほんとうにこのタマバハキはおめでたい結構なものですネ」

当時、宮廷では、正月初子の日に、玉を飾った「玉掃」というものを贈るならわしがあった。

玉掃は饗宴に事よせて、盃の床を掃くものを装飾品としてつくったもので、勧業の意と、めでたさを兼ねたものだと、日本植物友の会々長の松田修氏は万葉花譜にこう記されている。

又、正倉院御物として保管されている玉掃も、コウヤボウキの幹で作ったものであることは、白井光太郎博士がたしかめられている。

コウヤボウキは、オケラ、カルカヤ、アケボノソウ等と共に、晩秋の野をつつましやかに色どっているが、十一月初旬をすぎると冬一番が吹きあれて、ひそかに姿を消してゆく野の花達である。

（昭和63・11・1記）

柳原富司忠師 職分20周年記念能

明春1月29日　熱田能楽殿

幸清流小鼓方・柳原富司忠師は明春一月二十九日（日）熱田神宮能楽殿で「職分二十周年記念能」を開催。片山九郎右衛門、観世銕之丞、山本勝一、奥善助、山本真賀、観世暁夫、幸義太郎、幸正昭師らが来演する。

能「卒都婆小町」半能「石橋」囃子「翁」狂言「蝸牛」舞囃子「高砂」「屋島」一調「雲林院」「放下僧」「笠ノ段」など。

柳原師は、昭和二十一年十二月十五日岐阜市生れ▽四十年名古屋大学入学とともに名大観世会に入会、学生能活動に入る。▽四十一年二月、福井啓次郎師のもと幸清流小鼓に入門、指導をうける▽四十四年三月、大学卒業、幸円次郎宗家に指導を受ける▽同年四月「遅々乱」を披く、シテ柴田初太郎師、同年十二月、先代観世銕之丞師のシテ望月にて職分披露能▽四十七年一月、翁脇鼓をシテ先代梅若六郎師にて披く　昭和五十三年五月、石橋・大獅子、シテ梅田邦久師で披く▽昭和五十四年二月、職分十周年記念能、道成寺、シテ観世静夫（現銕之丞）師にて披き、名古屋を中心に演能、現在に至っている。

〈中世芸能の世界〉平曲「那須与一」と能「屋島」上演

18日　市民芸術劇場'88

「中世芸能の世界」をテーマに平曲「那須与一」と能「屋島」弓流、奈須与市語の上演により、鎌倉時代から室町時代への芸能の流れを感得できる公演が十一月十八日（金）名古屋市芸術創造センターで催される。

主催は、中世芸能の世界上演実行委員会、名古屋市文化振興事業団、名古屋市教育委員会。

「那須与一」は平家物語の〝扇の的〟の物語、平曲は文学的語りものとして近世音楽の基礎を開いたが、現在平曲を紹介する演奏家は数少く、今回の出演は愛知県無形文化財指定、名古屋市無形文化財指定の土居崎検校正富氏と今井勾当勉氏。

能「屋島」は弓流の小書つきで間狂言で「奈須与一語」の上演。能の出演は、シテ梅田邦久、ツレ清沢一政、ワキ西村欽也、ワキツレ飯冨雅介、笛・鹿取希世、小鼓・福井啓次郎、大鼓・河村総一郎、間・野村又三郎、後見・近藤幸江、今沢美和、地謡・武田邦弘、中川雅章、祖父江修一、須部甫、本田勲、松山幸親。

開演午後六時半、入場料一般二千五百円、学生券千五百円。市内各プレイガイドで発売。

国宝 源氏物語絵巻

徳川美術館で公開

徳氏美術館ではきたる十一月十九日から二十七日まで「国宝源氏物語絵巻」《蓬生・橋姫》の特別公開を行う。

伝統と現代の交響「翔」を上演

テレビアホールオープン記念イベント

人間国宝九世三宅藤九郎米寿
和泉祥子十世三宅藤九郎名跡継承　記念
名古屋和泉会別会
十一月二十七日（日）午後一時開演

歳末助け合い運動 協賛 能（第二十回）

十二月四日（日）午前十一時開演
熱田神宮能楽殿

久田観正会秋の大会

十一月二十三日（祭）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞　杜若　臼井澄子　羽衣　平野裕子
蝶丸　井深山実　桜川クセ　梅村展子
猩々　山内ふさ
連吟　葛城　名市観正会
仕舞　鶴亀　大野妙子　花月　森照光
熊野　高橋喜久子　菊慈童　花田美晴
紅葉狩　船備里美
仕舞　杜若　今川猛　笹之段　安藤録郎
玉鬘　岩田実松　風　市野美代子
鵜　星野路子
舞囃子　屋島　石黒直子　後藤嘉津幸　鬼頭英二　森本重一
熊野　岡田康子　福井啓次郎　吉田定男　藤田六郎兵衛
村雨止メ
玄象五段　田中雅子　後藤嘉津幸　鬼頭英二　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
素謡　通小町　眼部喜美子　岩田実　今川猛
舞囃子　花月　神谷貞子　後藤嘉津幸　鬼頭英二　森本重一
遊行柳　福堀つね子　福井啓次郎　笈鉱一　鬼頭喜太郎　森本重一
青柳之舞
雲林院　横井余史子　福井啓次郎　吉田定男　鬼頭喜太郎　森本重一
素謡　砧　独吟和　星野路子　鈴木金子　国　小田切敏子　安藤録郎
番外仕舞　田　村キリ　上田貴弘
局　前野郁子
内侍　近藤幸江
法皇　久田徹二
女院　大脇寿美子
能　大原御幸　高安勝久　西村欽也　飯冨雅介　杉江元　笈鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
間　井上松次郎
舞囃子　高砂五段　砂摩木サチ子　吉田定男　後藤嘉津幸　助川竜夫　藤田六郎兵衛
七騎落　今尾正治　吉田定男　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛
船弁慶　神谷功　笈鉱一　福井啓次郎　助川竜夫　森本重一
素謡　定家　三島恵那子　山下恵美子
仕舞　敦盛　斉藤利子　紅葉狩　服部喜美子
猩々　村松綾子
番外仕舞　天鼓　久田徹二（五時半頃終了予定）

附祝言

主催　久田観正会
名古屋市北区東水切町四—四三
久田徹二

〔入場無料・御来場歓迎〕

青陽会定式能（第三十二期 第四回）

十一月二十六日（土）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能　組
素謡　祖父江修一　加藤保彦　馬場信至
通小町　地謡　松山幸親　中川雅章　久田徹二　清沢一政
須部甫
能　月　高安勝久　佐藤友彦　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世
間
後見　前野郁子　梅田邦久　地謡　生駒里翠　今沢美和　玉木孝男　小島一英　高橋瞭一　祖父江修一　加賀敏彦
仕舞　小鍛冶　キリ　本田勲
通盛　今村嘉勇
松風　松山幸親　地謡　今沢美和　前野郁子　近藤幸江　生駒里翠
松虫　クセ　玉木孝男
阿漕　清沢一政
中川雅章
筒井筒　杉江元　河村真之介　後藤孝一郎　鹿取希世
間　井上礼之助　馬場信至　清沢一政　武田邦弘　梅田邦久　加藤保彦
後見　近藤幸江　小島一英　地謡　松山幸親　本田勲　今村嘉勇
仕舞　和布刈　武田邦弘
錦木　キリ　小島一英
籠太鼓　梅田邦久　地謡　玉木孝男　祖父江修一　久田徹二　須部甫
放下僧　小歌　加賀敏彦
船弁慶　キリ　高橋瞭一
狂言　栗焼　大野弘之　井上松次郎
紅葉狩　高安勝久　飯冨雅介　杉江元　大野弘之　佐藤友彦　鬼頭英二　柳原富司忠　池田茂　藤田六郎兵衛
間
後見　祖父江修一　久田徹二　地謡　馬場信至　本田勲　須部甫　中川雅章　武田邦弘　加賀敏彦　高橋瞭一　加藤保彦

附祝言

主催　青陽会
会員申込は関係楽師方及び青陽会事務所
名古屋市熱田区神宮一—一—一
熱田神宮能楽殿内
電話〈683〉六八二—一七五一番

〔有料〕当日券三千円（普通席）

「放下僧」「笠ノ段」など。

槇原師は、昭和二十一年十二月十五日岐阜市生れ▽四十年名古屋大学入学とともに名大観世会に入会、学生能活動に入る。▽四十一

伝統と現代の交響

「翔」を上演

テレビアホールオープン記念イベント

東海テレビ放送では、テレビアホールの完成で、オープニング記念イベントNO・8として、〝伝統と現代の交響〟三条万里子、藤田六郎兵衛ジョイントリサイタル「翔」（ショー）を十一月二十八日（月）上演する。

ジョイント公演は、昨年「能舞台との交響」シリーズで三条万里子氏が出演し注目と反響をよんだが、今回の公演は、能との出合いの場を求めて意欲的な活動を表現しようという藤田六郎兵衛氏の企画で、制作協力・マネージメント・アートハウス。出演はシテ方・梅田邦久、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、三条万里子ほか。

開演午後六時四十五分、入場料三千五百円（全自由席）市内各プレイガイドで発売。

観能独語

難しい能の鑑賞

梅猶会の「井筒」を見る

能の鑑賞はむつかしいですね。去る九月二十九日梅猶会の熊沢恵美子が「井筒」を舞いました。「井筒」は屈指の名作、世阿弥の最高傑作とされ、学者、研究家、評論家、実演家が口をそろえてほめますが、本当にそうでしょうか、といいますのは、あえて定説に異をたてるのでは毛頭なく、名作に違いないとしても、名作通りの舞台がみられるかどうかは別問題です。役者、出演者がうまければ、名作はいよいよ輝きを増すでしょうが、役者が下手なら、やたら名作も台なしということにもなりかねません。これは「井筒」だけのことではなく、すべての能の演出についていえる事ですが、とくに「井筒」は代表的名作といわれるだけに、劇的波乱は葛藤といったものは全然なく、単純素朴、しかも古雅優婉な歌物語です。序の舞と井戸をのぞきこむところぐらいが、型といえば型といえる程度でこれといって目だつ動きはほとんどありません。不要のものは全部とりはらって、能のエッセンスだけを裸にして放りだしたようなもので、素人目にはまことにそっけない作品です。そこが又たえられないところと玄人筋はマスターベーションじみた感激ぶりですが素人のなかにはうとうとねむ気を催す向もあるのではないでしょうか。心酔的ファンはこれを見て、おこったり軽蔑したりしますが、ねむくなったらねたらよろしい。これも一つの観賞法です。いや、皮肉ではなく「井筒」の様な本三番目物などはねむくなっても不思議ではない。むしろねむくなるのが本当じゃないですか。ねこんでぐうぐういびきをかかれては近所迷惑でこまりますが、細部も見逃がすまいと、目を見張り肩をいからせるいわゆる通（つう）よりも、よっぽど正直で素直な観賞者といえましょう。

芸能は楽しんで見るものです。能も芸能の一つですから「楽しんで見て頂きたい」と、わけ知りの専門家はいいますが、能は当世を去る事遠き古典中の古典です。しかも江戸時代は武家の式楽となり支配階級の独占物として庶民の目を遮ぎってきました。明治になっても庶民はおそるおそる「お能拝見」の気分が長くぬけなかったようです。本当の意味で能が民主化されたのは昭和になってから、或いは戦後からではないですか。その名残りを家元制度に見るとまではいいませんが、庶民の目からする能観賞の歴史は浅いといえましょうし、その楽しみ方もまだ十分身についてないような気がします。

ところで「井筒」へもどりますが、梅沢は男まさりの堂々たる押出しで、貫録十分、女芸とは思わせぬ力感がありました。しかしこれは本三番目物でも、叙事詩というよりは叙情詩といってもいいほど、香気豊かな作品です。大作ながらまろやかな小品の味がほしいところです。力演が目立ってはいけますまい。素人がねむくなる位でいい加減ではないでしょうか。（M）

人間国宝九世三宅藤九郎米寿記念

和泉祥子十世三宅藤九郎名跡継承

名古屋和泉会別会

十一月二十七日（日）午後一時開演

熱田神宮能楽殿

素囃子　養老　水波之伝

狂言　唐人子宝　和泉　元秀　ほか

呂蓮　井上松次郎　ほか

奈須与市語　和泉　祥子

隠狸　和泉　淳子　和泉　祥子　ほか

弓矢太郎　和泉　元弥　ほか

主催　和泉宗家後援会　名古屋和泉会

〔入場料〕一階席五千円、二階席三千円

申し込み取扱所　東京都板橋区東新町二―五八―七　電話（〇三）九七四―〇五〇六（代）

入場券取扱所　市内プレイガイド

徳氏美術館ではさきたる十一月十九日から二十七日まで「国宝源氏物語絵巻」《蓬生・橋姫》の特別公開を行う。

歳末助け合い運動

協賛能（第二十回）

十二月四日（日）午前十一時開演

熱田神宮能楽殿

能　組（宝生流）

経政　戸田和　後見　竹内澄子　玉井博祐　地謡　佐藤稲川耕司　鬼頭竹腰勝寿　嘉男一一　吉田藤辰巳　俊彦二　奈良正宜　竹市学　高安勝久　福井吉田定男　良治

狂言（和泉流）

文山賊　井上礼之助　佐藤友彦

能　組（観世流）

葛城　杉江元　後見　今沢美和　梅田邦久　地謡　中村本田　加賀和田男　高橋敏一　瞭一彦　小島祖父江　田中修一　武英　加藤保彦　池田希茂　鹿取世

仕舞（金春流）

融　近藤修彦　地謡　佐久間祥夫　前田茂穂　堤幸　杉浦尚三

狂言（和泉流）

茶壺　野村又三郎　大矢　野村信行　高義

能　組（観世流）

籠太鼓　近藤幸江　高安勝久　後藤孝一郎　筧鉱一　井上松次郎　森本重一

仕舞（観世流）

後見　前野郁子　武田邦弘　地謡　須部今村　清沢喜勇　一政甫　松山幸親　稲生泉　水藤久田　嘉芳雄夫　元三　徹二

蝉丸　吉田妙　地謡　高木瀬戸　生駒美智子　里翠三津子

舞囃子（喜多流）

邯鄲　長田暁　福井良久　鬼頭英二　藤田六郎兵衛　助川龍夫　地謡　長田衡　和谷市　松本彰郷　和男

（金剛流）

黒塚　飯富雅介　杉江元　大野弘之　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　地謡　前田東　小林康久　玉木忠三　利雄文　竹市幸司　豊本昌三　田中鳴訓三　敏文　（終了予定五時半頃）

能　百々東治

後見　吉川周子　牧野春子　豊島三千　元子　地謡

附祝言

入場料　一、五〇〇円（全館自由席）

前売券　各出演楽師宅

お問合せ　熱田神宮能楽殿　☎（六八二）一七五一

主催　能楽協会名古屋支部

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ！

舞姿の勉強と記念に是非どうぞ！

当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きっとご満足いただける自信があります。

テレビ放送番組企画制作
テレビCM企画制作
記録ビデオ撮影
ビデオプロダクション　西川企画

名古屋営業所（〒451）名古屋市西区名駅2-20-3輪の内荘　小椋方　☎（052）571―5816
（〒500）岐阜市北野町20―2　TEL（0582）63―9869

面打教室　於名古屋・栄朝日神社

毎週木曜日及び土曜日（それぞれ月4回）

（教室の見学・能面お求めになりたい方お気軽におこし下さい）

日本能面巧芸会

会長　林龍雲

事務局　名古屋市中区錦1丁目3―31　丸満ビル3F　晃栄化学内　電話（052）211―4451

外科・せいけい外科・皮膚、泌尿器科

東山整形外科

TEL781―7835

東山公園駅下車　オークランドビル2F

割烹・小料理　城

●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路（中区栄3―10）
電話　241―0248

■生きた設備を誇る日進堂

メガネ調整設備は、正しいメガネ・快適なメガネづくりの根本です。日進堂は視力測定・メガネ調整用の諸設備はもちろんのこと、必要なときには数分でピックアップできる…お客様一人一人の視力記録システムなど常に生きた設備の充実を心がけています。

■ビス一本にも全神経を集中する日進堂

メガネ店の技術をささえるもの――それは、お客さまの信頼におこたえする責任感とまごころです。正しいメガネを安心してご使用いただくために、日進堂は、たとえビス一本にも全神経を傾倒しています。

■徹底した日進堂のアフターサービス

メガネをいつも正しく、良好の状態でご使用いただけるよう努めることもメガネ店のつとめです。日進堂は可能な限りの修理サービス、レンズ・フレームの清掃サービスを無料で行なっております。いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。

定休日　毎週木曜日

正しいメガネで　しあわせを……

NIKKIDO　メガネの日進堂

◉駐車場完備　名古屋市西区那古野2-20-23（円頓寺本町）
〒451　TEL（571）6181―3

附祝言

主催　久田観正会

名古屋市北区東水切町四―四三

〔入場無料・御来場歓迎〕　久田徹二

〔有料〕

当日券三千円（普通席）

主催　青陽会

会員申込は関係楽師方及び青陽会事務所

名古屋市熱田区神宮一―一―一

熱田神宮能楽殿内

電話〈052〉六八二―一七五一番

壺泉会能

十二月十一日(日)午後一時三十分始
熱田神宮能楽殿

講演　別離と音楽
元神戸女学院大学文学部英文学科助教授　モニカ・ベーテ

能
一調　春日龍神　朝山清　鬼頭喜太郎
仕舞　砧　泉泰孝　地謡　加藤春枝　祖父江修一　水藤元三　泉嘉夫　山本正人　鶴克彦
狂言　藤戸　大槻文蔵
井礒　野村又三郎　野村信行　大矢高義　後見　井上礼之助
子方　祖父江智子　泉嘉夫
隅田川　西村飯冨欽也　河村総一郎　井筒啓次郎　藤田六郎兵衛　彩色　飯冨雅介
後見　近藤幸江　朝山清　地謡　鶴泉克彦　今村雅一郎　祖父江嘉勇　大槻文蔵　赤松泰孝　山本正人　泉泰孝　大槻文蔵　植友

主催　壺泉会
名古屋市昭和区山里町一〇三　泉嘉夫方
後援　朝日新聞社
〔入場料〕一般券四千円、学生券二千円
取扱所　壺泉会事務所（〇五二―八三二―三一八五）
能楽殿（〇五二―六八二―一七五一）市内各プレイガイド

柳原冨司忠職分二十周年記念能

昭和六十四年一月二十九日(日)正午始
熱田神宮能楽殿

能組
囃子　翁　片山九郎右衛門　武田邦弘　福井啓次郎　後藤嘉津幸　福井良治　地謡　藤田六郎兵衛　河村順之　山本勝一　山本博通　山本博通　信重　鹿取希世
舞囃子　高砂　観世暁夫　寛一　幸正　昭鹿取希世　八段之舞　地謡　高橋暁一　河村信重　山本真賀　山本博通　久田徹二
泉嘉夫　福井良久
一調　雲林院　泉嘉夫　地謡　須部清沢　浦一政　中川雅章　片山九郎右衛門　武田邦弘
舞囃子　屋島　梅田邦久　吉田定男　野中正和　森本重一
一調　放下僧　奥善助　後藤孝一郎
能　卒都婆小町　観世鉄之丞　西村飯冨欽也　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　飯冨雅介

狂言　蝸牛　野村又三郎　後見　奥善助　片山九郎右衛門　地謡　清沢一政　武田邦弘　久田徹二　中川雅章　梅田邦久　暁夫　山本順之　観世
一調　笠之段　山本真賀　井上礼之助　野村信行　幸義太郎
半能　石橋　大獅子　高安勝久　中川雅章　後見　泉嘉夫　武田邦弘　地謡　須部浦一　中村和男　高橋暁一　松山幸親　小島一英　奥善助　山本真賀　梅田邦久　河村大　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世

主催　冨耀冨司会　柳原冨司忠

入場券　指定席一万円、自由席六千円　学生席三千円
★会員券申込先　熱田神宮能楽殿・出演楽師
〒四四六　名古屋市昭和区山里町七四
八事パーク・マンション五一五
柳原冨司忠
（〇五二―八三二―一〇三一）

「鍵雲会」「九皐会」「宝生会」

竹尾邦太郎

「七騎落」　シテ泰二。62年度市芸術特賞受賞を自祝して勤める。主ツレ満次郎の細性個狭な頬朝像に生彩があり舞台を締める。同志から一人を降ろさねばならないシテの苦衷はツレ岡崎（俊彦）との問答によく現われ、言い過ぎを反省するかの沈痛な岡崎の表情も佳。〈哀れ遠平、とクモリ、〈別れぞ哀れ、と退ってがっくり腰を落とすシテの落胆の気分もよかった。

ワキ和田小太郎は欽也。シテの猜疑に憤慨する気合の入った問答の緊迫感があり、またアイ友彦の、「戯れ言も時によることにて候ぞ」の強い詞が利く。喜びの実平・遠平父子再会は、〈泣き居たり、とシテ実平だけがシオル。古い倫理かもしれないが、義侠の世界を泰二・欽也うまく演出し、男舞に泰二瑞々しい若さを見せて出色の直面物とした。なお後見に宗家を迎え華を添えた。地頭は遠来の粂太郎。（52分）

「酢茎」　シテ松次郎・アド又三郎、両人とも泰二に先立って市芸術特賞を受賞し、これが祝賀狂言である。秀句の応酬の爽々とした軽味は流石ヴェテランの滋味。笑い留めの付祝言となった。（16分・9月15日・内藤泰二受賞記念鍵雲会）

「小督」　シテ保彦・風折烏帽子に襟白・紫地狩衣の袖を折込み白大口。遠暗け姿は古武士の風貌のシテによく合い、明日を背に一谷入れる辺り、ぶりぶりする脇部が先代喜之写しでそれが如何にも馬上の気分。ツレ小督（美智子）に文を渡す際の謂直は、酒を勧められる段になって寛ろぎ、男舞は途中両袖巻いて膝行するような型があった。シテ保彦の人格を反映した古雅な舞台だった。（66分）

「雷」　黒武悪の、魁偉な容貌の割には垂れ目が気弱さも見せるキャラクターをシテ礼之助自家薬籠中のものとして伸び伸び演じた。アドは弘之。頭脈を取るのはお手のもの。（20分）

「遊行柳・青柳ノ舞」　〈人跡絶えて荒れ果つる、と遥かに見遣るシテ喜之の風情は胸中の心象風景をも映して寂しい。

後は舞クセに、〈手飼の虎の引綱も、と屈低くカザシ、左袖抽い込み、スミからワキ正に静かに廻り込み、綱を引く心持を奥床しく見せた。〈立ち舞ふも、と作物に縋る気分は青柳ノ舞に揺曳し、左袖たくし込んで持つ杖も力なく、立ち止ってふっと足を引くところなど、心許なさの中にも粘り強さを窺わせる。

キリは、〈足元もようようと、と退って杖を離すと、〈弱々と、とへたりこむように安座枕ノ謂をした。喜之、粘っこいしなやかさを存分に見せつけた。なお太鼓は珍らしく小寺佐七。（1時間57分・9月17日・九皐会）

「養老」　シテ寿一。緊張気味でやゝ生硬、神舞は露を取るなど少々ぎこちなく脇能の清朗を欠くが、真摯懸命な態度が気持よい。（1時間24分）

「柿山伏」　子供狂言恰好のレパートリイを大人が演る可笑味。無能な山伏を嘲弄する余裕綽々のアド畑主を礼之助。対照的に進退窮まった剣が峰のシテ友彦。陽に透けるような熟柿の皮のぶりんとしたつめたい肌触りを思い出させるシテの喰いっぷりが懐かしい。（17分）

「三山」　シテは遠来の章。やさしい叙情的な地（辰己孝ら）が掛合にシテの内面を描写して好調なら、居クセのしおらしさにそこはかとない哀感を寄せてくるシテも出色。中入前、〈南無阿弥陀仏、と合掌するシテにはだされたワキの連吟も滋味がある。〈これまでなりや、と立ち、〈生ける者には非ず、と身を明かし、左袖取ってワキにアシラウところも、取り乱したことへの羞恥を仄見せてたおやめ振りを強く印象づける。送り笛にもう少し婀々とした余韻が欲しいところ。

後場はツレ桜子正宜。紅白段唐織を脱下げ桜の枝を担ぐ。後シテは面を泣増から増髪に替え桂の枝を持つ。正中で佇立の桜子を意識した桂子のカケリ。章はそこに暗い官能の火照りを見せる。ついでツレは謂の裡に地前へゆき、シテと掛合。地となるとシテは舞台を廻るだけ。〈打ち散らし打ち散らす、でシテとツレは互いの持枝で丁丁発止と打ち合い、〈外目をかしや、とそのあられもない諍は、持枝を捨てることで終熄し、キリに桂子は桜子の肩に手を掛けユウケンして和解を示す。ツレは一ノ松、シテは常座で共にワキにアシライ合掌すると、シテは常の如くワキ正を見て留拍子。（1時間14分）

「邯鄲」　シテ博祐。半切に唐織壷折。全体に堅実な舞台で型所をきちんと決めていた。楽も台上余裕があり空下りは自信をもって右足を板につけきわどいことをしないのが良かった。飛び込みは台の前で一旦弾みをつけてから飛び上って旨く横臥した。シテの、〈盧生は夢さめて、には囃子は無く、それが如何にも白日夢の虚しさの只中に居るようで無常感が感じられた。なお、〈皆消え消えと、と失せるとき、ワキツレ・子方の頂に囃子方の後を通って切戸に入ったのを珍しく思った。（1時間17分・9月18日・宝生会）

信玄袋

―邦楽の思い出と近藤乾三氏逝去―

十月二三日秋晴れ。この日は伊和家小米師の鳴和会（名古屋、同女史の鳴物社中の会、中電ホールの日。快晴に誘われて久方振りに栄（町）に出る。

まず錦通りの両口屋で抹茶を喫する。「山月」の短冊に水引（みずひき）とホトトギスがいけられていた。増（改）中の東海テレビの見上げる建物の前を中電ホールに向う。楽屋で小米師と久淵（かつ）を叙（じょ）す。かげ囃子の桜戸美枝さんにも久々おあいした。演奏は鷺娘を聴いた。なかなか風格もあり、まあるい味わいもあってよかった。新名取の小文さんが小鼓に懸命であった。技も大事、心も大切である。

私が江戸邦楽、なかでも長唄の演奏会を訪ねたのはいつ頃からか。小学三年いや二年生位であったろうか。松坂屋が栄町角から今の処に移っていて、そのホールで。年上のしゃれ者の従弟に連れられて行ったはず。従弟は夏の上物の和服とカンカン帽がよく似合っていた。陽のあるうちに戻るため席を立ったが、松坂屋の女店員の方が親切に一階まで案内してくれた。やはり松坂屋は〈しつけ〉がちがうなあと子供心に思った。戻り道栄町角のカフェ、パウリスクでコーヒーか氷菓を食べさせてもらった。実はこの会は父が属していた長唄の会で、父は三味線を弾き、上調子は父の役であった。家でならすことは殆どなかった。武士の家に生れ（尾張藩、上園町、柳生家と隣閭士で当主によく可愛がられたと母からきいた）、役所に勤めた父は〈名〉ももらわず生涯の趣味で通した。上調子で一番右に（向って）すわる父をみて、父は余りうまくないのかと小さな不安をもったが、わけ（上調子は一番右）を聞かされて安心した。お師匠さんは杵屋三喜緒と言う女師匠。眼のきびしい女性（ひと）でした。そうそう常磐津・三世相の通しを毎夜おそ梅雨の初夏の蚊帳（かや）のなかで、一段づつラジオできいた。大人で言えば寂しさと無常が伝わってきた（NHK）。また平曲の井野川幸次検校の家はとなりの町内で親しく、その町内には女義太夫のおとなしい師匠も住んでいて、そこを通って井野川さんの方へ行くのだが、いつも太棹の音がしていた。謡曲ですか。それは中学に入って、ラジオで謡と講座（石田元季博士）を聴き、国語のI先生に隅田川を謡ってもらいました。母には芝居と活動写真へよく連れて行ってもらった（芝居は御園座・新守座・末広座ほか）。これが邦楽好きになった下地の小一端であろう。小暗い幕間の数分であった。

外は西日がつよい。テレビ塔を右に地下街へおりる。元・市立名古屋公衆図書館の跡は自動車置場になっている。日進堂（東）で「正倉院」（岩波新書）をもらう。五絃ビワの「ラクダ上の西方人」（飾り）の写真があってほっとした（本年記念切手）。夜十三夜のきれいな月をみる。

×　×　×

近藤乾三氏が十月一日長寿を全うされる。九十七歳。シテ方宝生流長老。人間国宝・芸術院会員・文化功労者。

晩年増田正造氏だったと思うがそのお相手で談笑裡に対談をされた（NHK）。趣深かった。あれが私には最後であった。昭和四十年の中日五流能（第十回、愛文講堂）の杜若は、沢辺ノ舞の小書付で舞われたが、格調高い佳品、今でも忘れない。名匠鑑賞能（催主田鍋惣太郎氏）にも出られたはずです。眼鏡越しのなごやかな目と大きなからだの持ち主でした。来名は、記録によれば、明治四四年の融がはじめて。翌四五・五月蟻通（宝生流謡曲研究会）、大正元年十二月花月を勤める（いずれも呉服町能楽堂）。その前後の同流儀には宝生嘉内・野口政吉（のち兼資）・松尾長・藤野渚平・佐野吉之助・桐谷政治（一調一声小鼓、小鼓田鍋惣太郎）諸氏の名前が見出される。宝生一流のほか観、剛と合同能であった。かつての関寺小町の放送は先きにFM愛知が六週にわけて、後にNHKが二回にして行い、晩年には桧垣の放送があった。なつかし。宝生会葬にはご案内をうけて上京できず、「セキデラノウタイイツマデモミミニノコル」と弔電をおくった。

×　×　×

金剛・第一三二号・受贈。表紙を巌氏の鈿女（うずめ）の写真で飾る。六四年の定期能番組の発表と「謹之助氏の道成寺開曲」（前西芳雄）載る。演能写真よし。

（野村広二）

（お知らせ）　皆様のご協力により毎年実施してきました「能楽の友謡曲名所めぐり」旅行は、本年は都合により中止致しました。ご報知が遅れましたことをお詫びしお知らせ致します。

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話㈹1137

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2－1
電　話　（291）2488－9　振替東京3－3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電　話（231）1990　振替京都1－113

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18-18
（郵便番号　464）
電　話　（731）7984
振替口座　名古屋　0-36393
購読料　1年　700円
郵送の場合　1年1200円
一　部　70円

第10回観世寿夫記念 法政大学能楽賞 受賞

友枝喜久夫氏 伊藤　正義氏

法政大学は、昭和五四年に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに九回の授賞が行われたが、本年も、各方面の識者に推薦された候補者について、選考委員（増島宏・広末保・吉越立雄・観世栄夫・安章の諸氏）により慎重に選考された結果に基づき、第十回の受賞者として、喜多流シテ方・友枝喜久夫氏、能楽研究家・伊藤正義氏を決定した。

授賞式は新春一月九日午後六時から赤坂プリンスホテルで行われる。

。〔受賞者〕友枝喜久夫（ともえだ・きくお）氏

〔授賞理由〕喜多流の長老たる氏の芸にはすでに定評があるが、近年は特に、昨年十一月友枝会での老女物〈檜垣〉、本年四月喜多会別会での〈弱法師〉などで的確澄明な演技を見せ、壮者をしのぐ舞台活動を展開している。

。〔受賞者〕伊藤正義（いとう・まさよし）氏

〔授賞理由〕本年十月に下巻が刊行された新潮日本古典集成『謡曲集』全三冊は、氏の広範な学識を背景とする緻密・斬新な注釈や卓越した各曲解題によって先行諸注を越え、謡曲注解に新機軸を打ち出した大業である。

（受賞者の経歴④面）

家の名「左近」を襲名

二十五世観世宗家

観世流宗家・観世元正氏は、ことし二十四世先代左近の追善能をつとめたが、このたび、観世家の名「左近」を襲名、二十五世観世左近となった。

襲名にあたり同氏は次のように各界にあいさつしている。

このたび、各位のご賛同を得まして元正改め家の名「左近」を襲名させていただく運びとなり、謹んでごあいさつ申し上げます。

今後一層身を引締め斯道のために尽力致す覚悟でおりますが、何卒宜敷くお願い申し上げます。

嚊子方顕彰の「催花賞」設定

服部記念法政大学能楽振興基金

第一回受賞　観世流大鼓方　守家金十郎氏

法政大学は、かねて法政大学能楽研究所に寄託されていた「観世新九郎家文庫」の一切を所蔵者の服部康治氏より寄贈されたことを記念し、本年四月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設定したが、同基金に基づく事業の一つとして能楽嚊子方の功労者等を顕彰する「催花賞」が設けられることになった。観世新九郎家の先祖で「船弁慶」「紅葉狩」などの作者として著名な観世小次郎信光（専門は大鼓方）の技芸を称えて明国の人が揮毫した「催花」の額が、服部家の家宝として伝来しているのに因んだ名称で、その「催花賞」の第一回の受賞者を、能楽研究所所員会議の推薦に基づき、観世流大鼓方、守家金十郎氏に決定した。

。〔受賞者〕守家金十郎（もりや・きんじゅうろう）氏

〔授賞理由〕大鼓観世流の唯一の継承者として、戦前には京城（現ソウル市）で、戦後には岡山市を中心に、地道な活動で地方能楽の発展に貢献し、九十歳を越えるまで演奏し続けてきた嚊子方の最長老であり、後継者の育成にも努力し、一昨年には、能楽界の了承を得て、かつて「宝生錬三郎派」と呼ばれていたのを本来の名称たる「観世流」に戻す悲願を達成している。

なお、授賞式は、観世寿夫記念法政大学能楽賞の授賞式と合わせ明年一月九日（月）午後六時より赤坂プリンスホテルで行われる。

（受賞者の経歴は④面掲載）

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮能楽殿）

〔12月〕
21日（水）熱田高校能鑑賞会（高校生のみ）
〔64年1月〕
3日（火）能楽協会名古屋支部謡初式（能楽協会関係者のみ）
6日（金）名古屋学生能楽連盟学生能（来場歓迎）
14日（土）青陽会定期能（有料）（番組①面）
15日（日・祝）清韻会大会（来場歓迎）（番組②面）
12日（土）正風会20周年記念大会（来場歓迎）
22日（日）正風会20周年記念大会（来場歓迎）
29日（日）柳原富司忠蔵分20周年記念能（有料）（番組③面）
〔2月〕
5日（日）名古屋宝生会定式能（有料）
12日（日）名古屋観世会定式能（有料）
18日（土）梅若六郎襲名披露能（有料）
19日（日）名古屋観世九皐会定期能（有料）
26日（日）春蔵会大会（来場歓迎）
〔3月〕
5日（日）梅猶会（有料）
12日（日）大蔵狂言会（来場歓迎）
21日（祝）四大学交流会（関係者のみ）
26日（日）壺泉会大会（来場歓迎）
〔4月〕
9日（日）観世会定式能（有料）
15日（土）猶諷会（来場歓迎）
16日（日）邦謡会（来場歓迎）
23日（日）久田観正会（来場歓迎）
29日（祝）幸友会春の会（来場歓迎）
30日（日）賀水会・三交会（来場歓迎）
（演能変更の節はご了解下さい）

64年度 観世会定式能 予定番組

昭和六十四年度の名古屋観世会定式能予定番組がこのほど決定、二月十二日を初回として年五回開催される。

第一回　二月十二日（日）十一時始
翁　観世　左近　千才　観世　芳宏
舞囃子　羽衣　観世　清和
和合之舞　関根祥六　片山九郎右衛門　杉浦元三郎
仕舞　姥　梅田邦久　勝手　久田徹二　子守　武田邦弘
嵐山　観世　元昭　白頭　猿楽
第二回　四月九日（日）十二時半始
弱法師　片山慶次郎
仕舞　山本勝一　片山九郎右衛門　梅若六郎
船弁慶　前後之替
第三回　六月十一日（日）十二時半始
通盛　小島一英　橋岡慈観
仕舞　武田宗和　山本順之　中川雅章　観世喜之
千手
第四回　九月十日（日）十二時半始
冨士太鼓　梅若盛義
仕舞　井上喜久　浦田保利　野村四郎
融
第五回　十一月十二日（日）十二時半始
巻絹　祖父江修一　片山九郎右衛門　替装束
仕舞　大槻文蔵　片山慶次郎　観世晴夫
自然居士　観世鉄之丞

▽指定席年間会費三万五千円、自由席二万五千円、当日券（自由席）八千円。（第一回目の当日券は発売されない）。申込みは能楽師又は熱田神宮能楽殿（電話〇五二－六八二－一七五一番）

64年度 青陽会定式能 予定番組

第一回　一月十四日（土）正午始　番組①面掲載
第二回　四月二十二日（土）
田村　玉木孝男
桜川　今沢美和
天鼓　小島一英　弄鼓
第三回　七月三十日（日）
忠度　中川雅章
班女　高橋暎一　近藤幸江
葵上　前野郁子
素謡
阿漕　加藤保彦
第四回　十月二十八日（土）
旅葛城　今村嘉勇　生駒里翠
女郎花　須部甫　武田邦弘

▽当日券三千円（自由席）、会員申込みは関係楽師及び青陽会事務所（熱田神宮能楽殿内、電話〇五二－六八二－一七五一番）

青陽会定式能（第三十三期回）

昭和六十四年一月十四日（土）正午始
熱田神宮能楽殿

能組

能楽
神歌　シテ　馬場信至　千才　玉木孝男　地謡　今村嘉勇　加賀敏彦　梅田邦久　清沢一政

能
高砂　松山幸親　久田徹二　八段之舞　飯冨雅介　高安勝久　杉江元　河村真之介　福井啓次郎　鹿取好信　鬼頭希世
間　井上祐一
後見　玉木孝男　武田邦弘　地謡　生駒里翠　前野郁子　馬場信至　今村嘉勇　清沢一政　中川雅章　小島一英　祖父江修一
仕舞　旅　近藤幸江　地謡　瀬戸三津子　生駒里翠　前野郁子　今沢美和
隅田川　子方　成田英生　梅田邦久　高安勝久　飯冨雅介　後藤孝一郎　鬼頭英二　藤田六郎兵衛
後見　近藤幸江　小島一英　地謡　今沢生駒　美和里翠　須本田甫　加藤保彦　中川雅章　武田邦弘　加賀敏彦
仕舞　東北　今村嘉勇
弱法師　小島一英　地謡　玉木孝男　高橋暎一　松山幸親　久田徹二
玉之段　武田邦弘
狂言
青葉練　井上礼之助　佐藤友彦　後見　井上松次郎
野守　清沢一政　杉江元　河村大　柳原富司忠　池田森本　田茂一
間　大野弘之
後見　前野郁子　梅田邦久　地謡　瀬戸三津子　近藤幸江　松山幸親　本田　須部甫　祖父江修一　高橋暎一　加藤保彦
附祝言

〔有料〕
当日券　三千円

主催　青陽会

青雅日記 ㊾

冬至

えと文　二井栄逸

冬至が近づいてきた。

冬至ときくと、木枯らしの吹きあれる冬の真只中のように早合点するが、寒さは冬至の頃からだんだんきびしくなるので、冬至は寒さの始まりと言ってよい。

もっとも十二月に入ると、雪が降ることもあるし、霜柱の立つこともあるが、身をきるような冷たさは冬至以後ということになる。

私は、毎年能のカレンダーをかいているけれど、暦の方は無頓着である。だが暦を読んで見るとなかなか面白く、古人の感性の鋭さには頭が下がる思いがする。

太陽が我々の住んでいる北半球から最も遠ざかり、夜が一番長く昼が一番短かくなるのが十二月二十二日の冬至で、二十四節気（にじゅうしせっき）の出発でもある。

二十四節気というのは、太陽年を太陽の黄経（こうけい）に従って二十四等分して季節を示す語で、繰って見ると、冬至が十二月二十二日頃、夏至は六月二十二日頃、立春は二月四日頃、春分は三月二十一日頃、秋分は九月二十三日頃と、太陽暦では毎年同じ日付となる。

冬至というと、若い頃、東京の喜多宗家に住みこませて貰っていた私は、毎年十二月になると、なぜか冬至の前日に、ふるさとの松阪に帰らせてもらうのが常であった。勿論、宗家では餅搗きやすすはき、新年には謡初式、稽古初め等の催しがあり御用が多いのであるが、私は足が悪いためかお許しを得て帰省させて貰っていた。

帰省の前には、必ず、大奥様（私達はみんなでこのようにお呼びしていた。第十四世喜多六平太先生夫人の喜多文子女史）の命令で年賀状に一枚一枚図柄をかえて絵をおかきしたのも思い出の一つである。

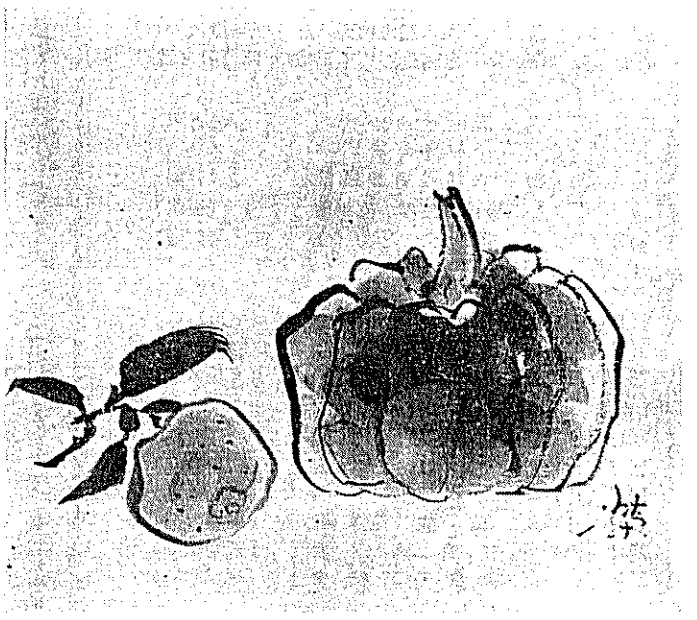
それで、帰郷するのは丁度、冬至の頃になる。

母はきまって冬至の日には、冬至・醤をつくってくれた。小豆がゆと、冬至用に保存していた、かぼちゃ、くるみあえ、野菜の炊き合わせであった。

風邪をひかぬよう、栄養のゆたかな野菜をたっぷり食べさせようとした母の愛情であったのであろう。

柚子湯に入ると長生きするといって、冬至がすぎても帰省中は毎晩柚子湯をたいてくれたのである。

（63・12・2記）



「催花賞」設定

選考基準など

能楽囃子方を顕彰する「催花賞」の設定にあたって、その要旨と選考基準は次のような内規で運営される。

①服部記念法政大学能楽振興基金に基づく事業の一つとして、功績の著しい能楽囃子方、または能楽囃子の研究や振興に貢献の大きい個人またはグループ・団体を顕彰する「催花賞」を設定する。

②催花賞の賞金は当分、法政大学能楽賞と同額（現行三〇万円）とする。

③受賞者選考の基準は次のとおりとする。

ア、囃子方の長老（70歳以上）で、すぐれた技能を発揮するのみならず、後継者の育成、流儀の維持・発展、地域能界の振興などに顕著な貢献をした人。

イ、囃子方の後継者養成に顕著な貢献をした人または団体。

ウ、能楽囃子の研究に顕著な業績をあげた研究者またはグループ。

エ、その他、能楽囃子の振興に顕著な貢献をした人またはグループ・団体。

④授賞は年一回、受賞者一名（または一グループ・一団体）を原則とする。

⑤受賞者の選考は、能楽研究所所員会議に一任する。

⑥授賞の時期は法政大学能楽賞と同時とし、授賞式も同時に行う。

〔備考〕受賞者選考にあたっては次の点に留意する。

＊すでに国家的な顕彰を受けている人は対象から除く。

＊観世寿夫記念法政大学能楽賞との重複授賞はなるべく避ける。

＊中央以外の地での地味な活動を重視する。

＊非公式な形で能界関係者の意見を聞くように努める。

観世流シテ方 河村鉦二氏逝去

11月22日 告別式執行

観世流シテ方、準職分河村鉦二氏は、十一月二十日午前四時三十分、心不全のため名古屋市昭和区前山町一―二三の自宅で逝去された。八十四歳。

通夜は二十一日午後七時から、葬儀、告別式は二十二日午前十一時から自宅で執り行われ、能楽協会名古屋支部はじめ各界から多数の会葬で故人の冥福を祈った。喪主は河村給一郎氏。法名は香雨院鉦覚吟龍居士。

故河村氏は、明治三十六年十一月三十日生れ。名古屋市中区出身。昭和二十七年能楽協会名古屋支部入会、昭和二十八年「乱」「望月」一謡会を主宰。昭和五十三年、社団法人日本能楽会から多年にわたり能楽界につくした功績により高齢者表彰を受彰。河村給一郎氏は石井流大鼓方、孫の大、真之介両氏も大鼓方として活躍している。

観能独語

楽しさいっぱい

九郎右衛門の「山姥」

ひゃくま山姥（久田徹二）とからむやりとりの進むにつれて、ゾッとするような恐怖感が次第にもりあがってくるところなどうまいもの。

茂山忠三郎・狂言の会

63年度芸術祭賞を受賞

名古屋 清韻会新春大会

一月十五日（成人の日）午前十時始

熱田神宮能楽殿

番組

素謡
トモ　佐藤尚雄
ツレ　松野雅三
督　飯島弥助
（クリ・サシ・クセを省く）　原博彦

仕舞
東羽敦　北クセ　杉浦則行
草子洗小町　衣キリ　青木朋子
賀茂　盛キリ　小津尚美
中根麗子
稲葉和エ

連吟
鶴亀　大谷とみ子
加藤千代子
内田詠子

素謡
東北　岩男照子
（クリ・サシ・クセを省く）　小林岩子

地謡
加藤千一
増谷和夫
鈴木二郎
小野明
加野昭
熊谷幸夫
川崎貞三

仕舞
胡蝶　船戸定子
杜若キリ　東美智子

連吟
丸　近藤守昌
山田正弘

素謡
忠度　平岩明
（クリ・サシを省く）　石崎博一

地謡
鈴木芳子
高木あき子
平岩昌子
田中泰子
柴田なみ
青山信江
樟本圭子
木野照子
堵方紀代子
御牧佐季子
古井貞子
富田とよ子
武山
浅野妙子
日下部芳子
戸谷文子
伊藤八重子
かず子
高木鶴子
足立美絵
立寿

独調
玉之段　田中壮
小島みゆき

仕舞
雲林院クセ　小野喜子
蝶丸　太田静江
巻絹クセ　須賀原淑子
放下僧小歌　川越糸子

連吟
隅田川　守部啓子
鬼頭貫代子

杜若　素謡　伊藤るり子
（クリ・サシ・クセを省く）　富田初子

地謡
今枝みつ子
岩田正子
浅野芳子
森志方つね子
阿部清子
山津春子
中村喜久子
田島富美子
吉田文子

仕舞
高砂之段　伊藤敏子
笹通小町　福間克彦
田村キリ　御牧紀代
山田欣也

独吟
砧　金丸洋子
鉢木　北原良一郎

舞囃子
難波　殿島博子
弱法師　古井佐季
菊慈童　小川記句子

素謡
藤戸　富士道周明
（クセから中入迄省く）　福間克彦
伊藤晏義

地謡
河村真之助
柳原富司
佐久間美
高田武雄
福間昌作
北原良一郎
浮貝欽一
山田

舞囃子
三輪　長島みつこ
班女　上田千代
天鼓　桑原信夫
バンシキ

附祝言　名古屋清韻会

〔御来場歓迎〕
主催　風韻会
水雲会
幸謡会
清風会

仕舞
三輪　小島照子
井筒　磯貝勝子
邯鄲　田中米子
梅枝キリ　川渕泰子
籠　村井邦子

舞囃子
白楽天　奥村久枝
桜川　石川晴子
玄象　佐藤アヤ子
五段替之型

連吟
雨之段　野村國子
馬場町子
千手　青井薫代
大橋広行
郷下総雄
村橋富士雄

舞囃子
三輪　筧鉦一郎
福井啓次郎
鹿取助川
希竜世
班女　筧鉦一郎
福井啓次郎
森本重一
鹿取助川
希竜世
天鼓　筧鉦一郎
福井啓次郎
鹿取助川
希竜世

観能独語

楽しさいっぱい
九郎右衛門の「山姥」

いや全くたのしかったです。片山九郎右衛門の「山姥」＝白頭。（十一月十三日観世会、熱田）今秋期待の一番でしたが期待以上でした。

「山姥」というと、素人にはおそろしい、すごいという先入観がありますが、九郎右衛門の山姥はおそろしいどころか、やさしい人間味豊かな山姥でした。原文には「山姥とは山に住む鬼女」とあり「髪にはおどろの雪を頂き眼の光は星の如し。さて面の色はさにぬりの軒の瓦の鬼の形」とものすごい形相を思わせますが、舞台の山姥は白髪ながら一向におそろしくありません。むしろあの面が童女のようにかわいいのです。もともと人間的に作られた「山姥」の面が、九郎右衛門の芸風にぴったりしてひときわ精彩を放ったものと思えます。

後シテの出「あら物凄の深谷やな」から、大乗仏教の哲理をちりばめた荘重華麗な名文を駆使した深山幽谷美の描写がつづきますが「山めぐりするぞくるしき」と杖音も高くリズミカルな立回りになるところなど、現代風にいえば鬼女というより妖精が興にのって山遊びか、山の観光旅行にうかれ出たという趣きです。

型も詞章の妙にまけぬ多彩さで有名な型どころ「金輪際に及べり」の足づかいのケレンがかった面の面白さも彼なればこそ、といえましょう。山姥の山めぐり観光を楽しむ風情に、ワキもツレもこわさを忘れて見所ともども酔心地になった感があります。

人間愛のあたたかさに満ちたクセ、立回りのあと「あら、御名残惜しや」は情味たっぷり、見所一同へのお別れのあいさつか。仕舞でおなじみのキリに至っては奔放自在、遠く近く去りゆく山姥の姿に妄執を離れたさわやかさがありました。

もっとも、前シテはすごかったですね。遠い遠い呼びかけから、山里の女らしい素朴な面と衣装、ワキの従者（西村欽也）と遊女、ひゃくま山姥（久田徹二）とからむやりとりの進むにつれて、ゾッとするような恐怖感が次第にもりあがってくるところなどうまいものです。

後シテでは、一転して山姥の本性、本質に徹し、彼女が語る哲理そのまま「色即是空」「煩悩即菩提」「仏あれば衆生あり衆生あれば山姥もあり」大自然と一体化してゆうゆう雪月花をたのしむ山姥、〝観光旅行〟にうかれる山姥が童女のようにかわいいのは、不思議ではありません。不思議どころか、これこそ山姥の本当の姿といえましょう。

この奇妙独特の魅力に満ちた一面。玄人筋は「異色の秀作」ていどのほめぶりですが、私は「異色」だけでは大いに不満です。作品も作品（作者は世阿弥説が有力ですが、確証はないようです）、演出も演出（これこそ洗練された伝統の美を、その都度舞台で演者を通じて味得するほかないでしょう）、思想と芸術の調和、見事に群をぬく傑作と絶賛したいのですが如何でしょう。とにかく、九郎右衛門の深い理解力と周到な表現力に脱帽します。

（M）

茂山忠三郎・狂言の会
63年度芸術祭賞を受賞

六十三年度の芸術祭賞が十二月二日、文化庁の芸術祭執行委員会（内村直也委員長）で決まり、個人二十一、団体六が選ばれた。

同賞は演劇、音楽、舞踊、演芸の四部門に分かれ、演劇部門で、茂山忠三郎・狂言の会＝「茂山忠三郎・狂言の会」の演技が受賞した。

授賞式は来年一月二十日、国立教育会館で行われ、賞金三十万円と賞状、賞牌が贈られる。

◆64年新春放送

◉NHK教育テレビ（午前九時～十時）

。一月一日（日）
新春能「草子洗小町」
―観世流　シテ観世左近

。一月二日（月）
新春狂言「佐渡狐」―大蔵流
茂山千五郎
「朝日奈」―和泉流
野村　万作

◉NHKラジオ

。一月一日（日）
番囃子「泰山府君」―金剛流
金剛　巌

。一月二日（月）
狂言「餅酒」―和泉流
和泉　元秀

。一月三日（火）
番囃子「隅田川」―宝生流
（再）　三川　泉

新春能「羽衣」―喜多流
友枝喜久夫

。一月三日（火）

63年12月・64年1月放送予定

〔12月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

18日（日）宝生流「邯鄲」渡辺三郎
25日（日）観世流「多度津の左衛門」大槻文蔵

〔64年1月〕NHK・FM能楽鑑賞（午前8時～9時）

8日（日）観世流「望月」観世元昭
15日（日）宝生流「当麻」佐野萌
22日（日）観世流「海士」片山九郎右衛門
29日（日）金春流「東北」桜間金太郎

◉NHK・教育テレビ（午前9時～10時）

1月15日（祝）　狂言語り　「奈須与市語」和泉元秀
狂言「庵の梅」（和泉流）（再）
三宅藤九郎

新春テレビ・ラジオ放送は⑧面掲載

随想

〝能〟〝松風〟考
アマチュアもここまでやれる

K生

十一月六日の風韻会能を見た。

汐汲みの段（破の二段）ツレへよしそれとても、シテへ女車、とそれはたとい汐を汲むだけの仕事ですが、かよわい女の引く汐汲車です。とてもとても、はかどらなくて…と、その心をあわれと地取りして謡は、地、上歌、へ寄せては帰るかたを波、声辺の田鶴こそは立ち騒げ、シテの面あつかいは佳品、一幅の絵画。月あかりの舞、声辺の田鶴を見、嵐の音をきき、更けゆく月を左に見るところ大好きだ（47・4能楽の友。二井師談）

私も同じように、たまらぬ情感を感じとった。私はいま、ふっと思い出した。〝六郎芸談〟葵上、の蛍のこと。扇をかざし蛍を下に見ると、父は、そこには居ない。少し上を見ると、そこにもとんで居ない、蛍は腹の中に居る、との一言。だから、わざとらしく見る必要はない。その気持が大事との由。

能は、一こま一こまが良い絵とも不出来ともなる。全くその通りだ。

地下歌へ影を汲むこそ心あれ、ここが、月の能といういわれ、汐を汲む風流心の型も大きく美しい出来ばえ。

破の三段、問答シテへしばらく、しっかりした発声が、きびしくしつらえた面をくぐって前に出た。あとの、カカルへ月の夜影、も下ノ中、崩シ、呂、と、むつかしい音階だが、実に正しい謡い力。次の、クドキへこの上は何をかさのみ、以下云々。さこそとうまい謡見所五〇〇客席はシーンと静まった。隅吟とはいえ、シテの謡い力の確かさ、アマの領分を超えている。

急の一段、シテへあら、嬉しやあれに行平のお立ちあるが…いで参ろう。ツレへ浅ましや、その御心故にこそ、突然、狂乱するシテ一曲の見どころ、作り物の松に突進する（三宅杭一氏、曲趣解釈）この時すかさず、ツレが引き止めに追う。シテは半歩一歩前進しすぎたか、はたまた数秒、ツレが出おくれたか微妙。が、私はこれで良い、シテがツレの引き止めを待っては緊迫が台無し。演技はシテの、劇内容の消化力、つまり内面性が重要。この場面は、ひょっとすると、師の深い読みの教えの型かとも私は見た。そう云わないとアマのかばい過ぎになる。さもあれ、うまい演技だった。しかし、見る人によっては一曲中問題提起の場面というかも知れぬ。つまりプロならもっとすんなりやってのけるはず。隅田川、塚の見えがくれする子を追うみたいに…。

破の舞、前のへ磯馴松のなつかしや、磯馴松は水面に枝を垂れ、渚に生えている。シテが恋慕の余り抱きかかえた袖に小枝がかすかにゆれる。その時、今まで無表情だった面がいきいきとした。その松の前を、なおも腰をかがめ、狂いたわむれて、ひと廻りしたところ絶品。小書、戯之舞の心をよく感じると同時にシテの乙女心のあわれなふるまいに私は何故かホッとして快く緊張がほぐれた。

こうして、能は一曲の見せどころ舞となる。長絹の袖はまことにあざやかに、小立烏帽子の上をかざった。たとえ、プロであってもいつもこうとは限らぬ。

さて、いわずともだが、〝熊野〟が花の能、〝松風〟を月の能という。はじめ、私はへ寄せては帰るかたを波、と、月あかりの渚、シテの出だしのところ、さし引く汐に歩みのうまさを見て、さこそこの能は見れる、と、直感した。たしかにその通りすばらしい。シテ一人で、はこびきった一時間四十分。見るべきほどは見つ、と、いっては不遜。が、アマもここまでやれる。よくぞと実感をとめに拙評を終わらせてもらう。

（63・11・17）

柳原冨司忠職分二十周年記念能

昭和六十四年一月二十九日（日）正午始
熱田神宮能楽殿

能　翁　片山九郎右衛門　福井良治　武田邦弘　福井啓次郎　後藤嘉津幸　地謡　藤田六郎兵衛　河村信重　山本順之　山本勝一　山本博通　鹿取希世　川村龍夫

舞囃子　高砂　観世暁夫　八段之舞　地謡　高橋暖一　河村信重　山本博通　久田徹二　真賀

舞囃子　屋島　泉嘉夫　梅田邦久　福井良久　吉田定男　野中正和　森本重一　地謡　須部甫　清沢一政　中川雅章　片山九郎右衛門　武田邦弘

一調　雲林院　放下僧　観世銕之丞　奥善助　後藤孝一郎

能　卒都婆小町　西村欽也　飯冨雅介　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

狂言　蝸牛　野村又三郎　野村信行　井上礼之助　後見　奥善助　片山九郎右衛門　地謡　清沢一政　祖父江修一　久田徹二　中川雅幸　武田邦弘　観世暁夫　山本順之

一調　笠之段　山本真賀　幸義太郎　山本博通　河村信重　山本順之　山本勝一

半能　石橋　大獅子　高安勝久　後見　泉中川雅章　武田嘉夫　邦弘　地謡　松山幸親　須部甫　中村和男　高橋暖一　河村大　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　鹿取希世　小島一英　奥善助　山本真賀　梅田邦久

入場券　指定席一万円、自由席六千円　学生席三千円
★会員券申込先　熱田神宮能楽殿・出演楽師
〒四四六　名古屋市昭和区山里町七四
八事パーク・マンション五一五
柳原冨司忠
（☎〇五二―八三二―一〇三一）

主催　冨　柳原冨司忠会

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ！
舞姿の勉強と記念に是非どうぞ！
当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きっとご満足いただける自信があります。
テレビ放送番組企画制作
テレビCM企画制作
記録ビデオ撮影
ビデオプロダクション　西川企画
名古屋営業所（〒451）名古屋市西区名駅2-20-3輪の内荘　小椋方　☎（052）571―5816
（〒500）岐阜市北野町20―2　TEL（0582）63―9869

医療衛生用品総合商社
八神商事株式会社
取締役社長　八神幸一
本社　〒460 名古屋市中区丸の内三丁目11ノ4
電話〈052〉971―8671番（代表）
営業所　西・熱田・名東・関東・静岡
沼津・浜松・岡崎・岐阜・津

観世寿夫記念 法政大学賞 受賞者の経歴

◦友枝喜久夫氏

喜多流シテ方。日本能楽会会員。明治四十一年、細川藩以前からの歴史を持つ熊本本座の当主友枝為城の長男として熊本で生れる。

父に師事し、初舞台は六歳で〈国栖〉の子方、初シテは十歳で〈経政〉を演ずる。中学を卒業後の昭和二年、父と共に上京して喜多宗家に入門し、喜多六平太能心喜多実に師事。二十五年〈道成寺〉を、以後〈望月〉〈鵜鷺小町〉〈卒都婆小町〉などを披く。三十二年にはパリ国際演劇祭参加の能楽団の一員として渡欧。四十三年に芸術祭賞、五十三年度芸術選奨文部大臣賞を受賞。

六十二年十一月には喜多流では百二十年ぶりの〈桧垣〉を演じ、老女物の神髄を示したと評され、本年の〈弱法師〉も世評が高い。能の地頭としての貢献も抜群である。

八十歳を越える今も、後継者で将来の大成が有望視されている長男昭世氏を「好敵手」と呼ぶ気力を持ち、常に工夫を怠らぬ意欲的な姿を見せて、後進の範となっている。

◦伊藤正義氏

大阪市立大学教授。昭和五年生れ。神戸市出身。京都大学大学院博士課程修了。神戸の松蔭女子学院を経て、四十五年に関西大学、四十八年に大阪市立大学に移り、五十一年より現職。

早くから中世文学とくに能楽の研究に志し、当初は金春禅竹の研究が中心で、『金春古伝書集成』（昭四十四、わんや書店。表章氏と共著）、『金春禅竹の研究』（昭四十五、赤尾照文堂）がその輝かしい成果である。その後、『伊勢物語』『日本紀』などの中世の古注釈の研究を開拓し、謡曲の出典研究に大きな飛躍をもたらした。

そうした成果を背景に氏が取り組んだのが新潮日本古典集成『謡曲集』全三冊で、上巻の出た五十八年当時から声価が高く、完成が待望されていたが、本年十月に下巻が刊行されて大業が成就した。

研究面の業績のみならず、大阪能楽観賞会の企画や大槻文蔵氏らの廃曲の復活上演の企画に関与するなど、能界に協力している功績も大きい。

◦守家金十郎氏

観世流大鼓方。日本能楽会会員。大鼓観世流宗家代理。明治二十六年生れ。岡山県出身。明治末年から観世流の謡を嗜んだが、大正三年に加藤幸直（明治期に活動した観世流大鼓方加藤八百作の芸事後継者）に入門して大鼓方の道を歩み、初舞台は大正七年の舞囃子〈田村〉。翌年〈石橋〉を披く。昭和十三年京城に移住し、朝鮮で謡・囃子の普及に尽力したが、終戦後岡山に引き揚げ、大鼓観世流のただ一人の継承者として、囃子方の手薄な中国地方で主として活動し、同地の能楽の普及・発展に貢献してきた。四十九年に岡山県無形文化財保持者の指定を受け、五十二年日本能楽会の会員となり、五十四年には山陽新聞賞（文化部門）を受賞した。

従来の宝生銀三郎派なる呼称を本来の流儀名たる観世流に改めることが、六十一年に能楽宗家会や能楽協会に承認され、氏が同流宗家代理に任じられた。子息守家敏治氏、嫡孫守屋紀之氏も観世流大鼓方として活動しており、同流の将来にも明るい展望が開けつつある。

〝能の音楽を楽しむ〟

1月23日、栄能楽舞台で 能楽友の会一周年特別例会

日本人の感性が育ててきた能・狂言を楽しみ、教養の場として研さんしていこうと「能楽友の会」が昭和社教センターを会場として発足してから一周年を迎え、この記念特別例会として、きたる一月二十三日（月）第一線で活躍する若い能楽師を招いて「能の音楽を楽しむ」つどいを栄能楽舞台で開催する。

出演者は、笛方藤田流・藤田六郎兵衛、小鼓方大倉流・大倉源次郎、大鼓方大倉流・大倉正之助、太鼓方金春流・上田悟の諸師。例会の開催は午後一時三十分から。

とくに今回は会員外の方々へも広くよびかけ参加を歓迎している。

参加費は、正会員千円、臨時会員は二千円。

申込みは、能楽友の会・田中（TELO五二—七三一—三五一二）木谷（TELO五二—七七二—二二〇三）なお能楽友の会は昨年一月に発足、毎月一回講師を招いて、能・狂言の解説、能・狂言に関係のある文学、音楽、その他のお話、世阿弥の伝書の購読、能・狂言鑑賞、能に関する展覧会見学演能の案内、チケットのあっせんを行っており、これまで各界の諸氏を招き講座を開催してきている。

正会員年会費二千円、ところ昭和社教センター（TEL八五二—一一四四）。東区大幸四—一九—二六、岩田はるみ方（TEL七二二—四〇〇〇番）

創作能「イエズスの洗礼」

ローマ、ベルギーで上演

観世流梅若猶彦師らによる、創作能「イエズスの洗礼」は十二月二十一日から二十八日まで、ローマを中心にベルギーで上演されるが、バチカンではローマ法王の前で上演される。

この創作能「イエズスの洗礼」は、日本の伝統的霊性とキリスト教との融合をはかろうとする上智大東洋宗教研究所の神父・門脇佳吉所長らにより創作、シテ役として猶彦師は洗礼者ヨハネを演ずる。

すでに昨年一月に上智大で、また夏には国立能楽堂で上演され好評を博している。

また一般公演では「煙々乱」（観世暁夫師）が上演される。

「久田徹二リサイタル」「梅猶会」「観世会」「宝生会」

竹尾邦太郎

「野宮」　人気（ひとけ）が無いとばかりに思い込み、独り秋恩に耽っていたシテ徹二に、突然、「如何なる人にてましますぞ」、と問い掛けるワキ欽也。その狼狽気味の態勢を立て直すかに一寸気色ばむシテがワキとの問答になってゆく辺り、幽邃境に一陽俗風が吹く感じが面白く、徐々に打ち解けてゆく機微がシテ・ワキぴたりと合って気持がよかった。しかし居クセに左膝落着かず、ワキにアシライ・直ス動作が不安だったのはどうしたことか。

後シテは白般若。早笛で一ノ松まで走り出ると、「止れとこそ」と負柴を裏勾欄に捨て、ずかりずかりと運ブなど粗野に充ちる。その荒さがまた魅力になり、熱演。面白かった。（1時間6分・10月29日・梅猶会）

「葛城・大和舞」　小書で作物は白の引廻。シテ鍵之丞は、白裲童折か白水衣の窓表を衝き絹の黒水衣で出た。それにしても雪の日に薄物は不可解。さて、面は寂しい面差しの深井。縫箔の茫（すすき）文様に合う。〈楚樹ゆふ葛城山に降る雪は、と、ふっと山伏の存在を忘れたように茫乎と目付柱の方を見詰め、我に返って松の枝を焚く辺の描写の微妙。

アイは噛んで含めるような語りがやや冗長。後シテは暦の色の薄い清純な感じの増。着付も古びのある白摺箔に替え、濃萌黄大口・楽器尽文様白舞衣童打。何がなし顔面蒼白の突き詰めた印象を受ける。白絹の木綿を付けた榊枝で舞う神楽。憑依の高揚。キリに左袖被きしみじみと遠くを見、〈月白く、とはらり袖を返す辺りの情緒。〈面はゆや、と左袖で面を隠し、その袖を榊枝に受けて身も世もあらぬ気に悶悶へ向う羞恥。息詰る羞恥から解放されて一ノ松に抜け遠くワキを見込むと三蔵の流シと笛のアシライで再び袖被き幕に入ってワキの合掌留。シテの感情の起伏がかっちりした構成力でまとめられた。（1時間30分）。

「山姥・白頭」　シテ九郎右衛門。深井（「葛城」）の重複を避け面は老女。装束も極く地味な無紅段唐織。ツレの歌舞にひどく執着しながら夕闇に急かれて帰る山姥の胸中。その中入が殊によかった。〈この山姥が一節を、とツレを向き、〈夜すがら謡ひ給はばそ・の時、と背を向けて運び出し、〈我が姿をも現はし、と左袖あしらって、〈衣の袖つぎて移り舞を舞ふべし、と捨て台詞を残して一ノ松へするすると抜け、立ち止って小さく廻ると、〈かき消すやうに失せにけり、の返シで静かに幕に入る。

後は白頭・白鱗箔・白地半切は金で龍目に宝輪文様・青地金立湧雲板波ノ丸文様の小袖（唐織の昼感が無い）を童折に着た。生木の枝を払い、無色紅緞を巻かない葉付鹿背杖がいかにも山霊たる鬼女の原始の畏怖を象徴し、眼目のクセは、床几から、〈谷深き、と下を見、〈下化衆生を表して、と拍子二つ踏み、〈金輪際に及べり、と腰を浮かして拍子踏むと前屈みに屈逆にぐっと下を差した。山気横溢の趣があった。（1時間52分・11月13日・観世会）

「橋弁慶」　シテ正宜。弁慶の気負いは後の装束（裂裟頭巾・紺地法被袖折込首で絞る・紺地半切）の物々しさに現われ、長刀捌きの軽快は所謂能の様式美を端的に見せた。子方の威勢もよく、そつのない舞台だった。（35分）

「昆布売」　横柄且つ単純な単細胞の大名を礼之助好演。太刀を奪られ、逆に昆布を売る破目の大名。「ヤイヤイ昆布買へ、昆布買へ」の大音声の売り声が蓋し圧巻。呼ばわった途端に昆布をがらっと投げ出す所も如何にも大名の駄々っ子ぶり。アド弘之の致っ辛い調子が旨くからんだ。（25分）

「三輪」　シテ孝。前は面深井。〈下樋の水音も、と僅かにクモラせて目付柱に向き、〈この山住ぞ淋しき、とワキにアシラウ辺り、そこはかとなく色気が滲む。衣は左手で受け、中入は衣をいとし気に抱き、思い入れたっぷりに作物に入る。

後シテは面増。金風折・緋大口・白長絹は金で扇面に下り藤がなだれる。金風折は流是かも知れぬが少々白拍子めき、それかあらぬか袖アシライ艶（なま）めき、また扇捌き・運びなど巧緻で却って興行を浅くする印象。しかし幣で舞う神楽の若々しさに切れのいい技を存分に見せつけた。（1時間32分）

「黒塚・白頭」　小書で藁屋が出た。引廻は「三輪」と同じ紫。前シテの面も深井である。館は重複を嫌うが、作が遊うとしても無頓着ではなかろうか……。シテ雅。女流名手の名に恥じず繊細な表現力。〈月に夜をや待ちぬらん、と上を見るところ、分ってはいても血に飢えた鬼女の底意が窺われ、〈泣き明かす、と枠棒輪やけに速く廻して双シオリするのもワキへのポーズを思わせる。しかし立って薪を取りに出、寝屋を覗かれるのを牽制する所は、「なうなう」と極く平静なのが却って怖い。アイ祐一・ワキの隙を窺って抜け出そうとする睡態三様が面白かった。

後は早笛。白頭・白般若に裳着胴。ワキとの闘争に祈り負かされ安座。その褄が気になるのは恥じらいの本能、それがふと女を垣間見せる。キリは走り込みで謡ドメ。（60分・11月20日・宝生会）

【訂正】本紙十一月号、「舞台から」九皐会「小督」の文中「明日を背に」とあるのは「明月を背に」の誤りでした。お詫びして訂正します。

御料理 あつた
蓬莱軒
本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686—8
神宮東門店　熱田区神宮一—一—一　電話（682）5598㈹

割烹・小料理 城
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路（中区栄3—10）
電話 241—0248

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話(052)1137